岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第387集

大向（おおむかい）Ⅱ遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸市安代線関連遺跡発掘調査

二戸地方振興局土木部
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

大向Ⅱ遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸市安代線関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私達県民に課せられた重大な責務であります。一方、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発も県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業の調和の取れた施策が今日の課題となっております。

当事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会生涯学習文化課の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、緊急地方道路整備事業に関連して、平成11年～12年度にかけて行われた大向Ⅱ遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。調査によって、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑以外に畝間状遺構、畠作耕地の復旧痕跡が確認されました。これらのことから、本遺跡が農耕地を備えた集落であったことが、分かりました。また、県内で初の事例になる外周溝を伴う竪穴住居跡、棚状の張り出しを持つ竪穴住居跡が確認されたことなど、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご協力とご支援を賜りました二戸地方振興局、二戸市教育委員会をはじめとする関係各位に心より感謝申しあげます。

平成14年１月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　村　上　勝　治

例　　言

1　本報告書は、二戸市似鳥字田中坪13－１ほかに所在する大向Ⅱ遺跡の発掘調査をまとめたものである。

2　本遺跡の調査は、主要地方道二戸安代線建設に伴う事前の緊急発掘調査である。

3　岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号および調査略号は以下の通りである。

遺跡番号ＪＦ18－1149　略号　ＯＭⅡ－99・ＯＭⅡ－00

4　発掘調査期間、調査担当者、調査面積は次の通りである。

平成11年６月15日～８月31日　菊池貴広・佐々木進悦　1,930㎡

平成12年４月13日～６月21日　菊池貴広・長村克稔　　2,100㎡

合計面積　　4,030㎡

5　室内整理

室内整理期間および室内整理担当者は次の通りである。

平成11年11月１日～１月31日　菊池貴広・佐々木進悦

平成12年11月１日～１月31日　菊池貴広・長村克稔

6　本報告書の執筆・編集は菊池貴広が担当した。

7　遺物の分析、鑑定、保存処理にあたっては次の方々に依頼した。(敬省略)

石質鑑定：花崗岩研究会

プラントオパール・花粉分析：パリノサーベイ

8　発掘・整理・本報告書の作成にあたっては次の方々にご指導、ご協力を得た（順不同・敬省略）

関　豊・門嶋知二・鈴木　聡（二戸市教委）・能登　健・関　俊明・小島敦子・坂口　一（群馬埋文）・宇部則保（八戸市教委）・中嶋友文・木村　高（青森埋文）

9　野外調査参加者は以下の通りである。(順不同)

田中すみ・古館礼子・上平恵子・上平久介・三浦一朗・川上良子・北口せつ・金田一堅・田畑サヨ・田畑サエ・田中舘　信一・田中舘ひで・木戸口コマ・佐藤カオル・中山梅子・田口キヨ・山屋ソワ・宮澤長栄・田口季治郎・佐藤キヌ・田中ノブ・田口マリ・川上妙子

10　室内整理作業員は以下の通りである。(順不同)

浅沼由美子・浅沼周子・伊藤信子・小沢達子・越場ミチエ・滝花益美・福士夕紀子・藤原由貴江・堀内多美子・三上智子・吉田真由美・三上ゆかり

11　調査成果はこれまでに、調査概要や調査略報に発表してきたが、本報告書の内容が優先するものである。

12　土層および土器の色調観察には『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所　色票監修1990）を参考にした。

13　本遺跡から出土した遺物および調査にかかわる資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序
例言
Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……1
　1．位置と環境……1
　2．地形と地質……1
　3．周辺の遺跡について……2
　4．基本層序……7
Ⅲ　野外調査と室内整理……11
　1．野外調査……11
　2．室内整理……11
Ⅳ　検出された遺構と出土遺物……15
　1．竪穴住居跡の調査の概要と経過……15
　2．竪穴住居跡……16
　3．住居状遺構……75
　4．掘立柱建物跡……75
　5．土坑……77
　6．畝間状遺構・畠作耕地の復旧痕跡……84
　7．柱穴状ピット群……97
Ⅴ　遺構外出土遺物……118
　1．土器……118
　2．古銭……119
　3．石器……119
Ⅵ　まとめ……127
　まとめ(1)遺構……127
　まとめ(2)遺物……148
　まとめ(3)総括……159
　1．古代集落の様相……159
　2．おわりに……162
分析鑑定……164

図版目次

第1図　岩手県全図……2
第2図　遺跡位置図……3
第3図　遺跡周辺地形図……4
第4図　周辺の遺跡……5
第5図　遺跡の基本層序……8

第６図　遺構配置図……９
第７図　遺構凡例……13
第８図　遺物凡例……14
第９図　１号竪穴住居跡(1)……17
第10図　１号竪穴住居跡(2)……18
第11図　２号竪穴住居跡(1)……20
第12図　２号竪穴住居跡(2)……21
第13図　２号竪穴住居跡(3)……22
第14図　３号竪穴住居跡……24
第15図　４号竪穴住居跡……26
第16図　５号竪穴住居跡(1)……28
第17図　５号竪穴住居跡(2)……29
第18図　５号竪穴住居跡(3)……30
第19図　６号竪穴住居跡(1)……32
第20図　６号竪穴住居跡(2)……33
第21図　６号竪穴住居跡(3)……34
第22図　７号竪穴住居跡(1)……36
第23図　７号竪穴住居跡(2)……37
第24図　８号竪穴住居跡(1)……40
第25図　８号竪穴住居跡(2)……41
第26図　９号竪穴住居跡(1)……42
第27図　９号竪穴住居跡(2)……43
第28図　９号竪穴住居跡(3)……44
第29図　10号竪穴住居跡……46
第30図　11号竪穴住居跡(1)……48
第31図　11号竪穴住居跡(2)……49
第32図　12号竪穴住居跡(1)……51
第33図　12号竪穴住居跡(2)……52
第34図　12号竪穴住居跡(3)……53
第35図　13号竪穴住居跡……55
第36図　14号竪穴住居跡(1)……57
第37図　14号竪穴住居跡(2)……59
第38図　14号竪穴住居跡(3)……60
第39図　14号竪穴住居跡(4)……61
第40図　14号竪穴住居跡(5)……62
第41図　15・16号竪穴住居跡……64
第42図　17号竪穴住居跡……66
第43図　18号竪穴住居跡(1)……68

第44図　18号竪穴住居跡(2) ……69
第45図　19号竪穴住居跡(1) ……71
第46図　19号竪穴住居跡(2) ……72
第47図　20・21号竪穴住居跡・1号住居状遺構……74
第48図　1号掘立柱建物跡……76
第49図　2・3号掘立柱建物跡……78
第50図　1～4号土坑……80
第51図　5～8号土坑……81
第52図　9～11号土坑……83
第53図　1～3号畠作耕地の復旧痕跡平面……85
第54図　1・2号畠作耕地の復旧痕跡断面……87
第55図　2・3号畠作耕地復旧痕跡断面……88
第56図　1号畝間状遺構・4号畠作耕地の復旧痕跡……90
第57図　5号畠作耕地の復旧痕跡平面……92
第58図　5号畠作耕地の復旧痕跡断面……93
第59図　5号畠作耕地の復旧痕跡断面……94
第60図　2・3号畝間状遺構・6・7畠作耕地の復旧痕跡平面……95
第61図　2・3号畝間状遺構・6・7畠作耕地の復旧痕跡断面……96
第62図　1号柱穴状ピット群(1) ……99
第63図　1号柱穴状ピット群(2) …… 100
第64図　2号柱穴状ピット群…… 101
第65図　1号竪穴住居跡出土遺物…… 102
第66図　2号竪穴住居跡出土遺物…… 103
第67図　3・4号竪穴住居跡出土遺物…… 104
第68図　5号竪穴住居跡出土遺物…… 105
第69図　6号竪穴住居跡出土遺物(1) …… 106
第70図　6号竪穴住居跡出土遺物(2) …… 107
第71図　8号竪穴住居跡出土遺物(1) …… 108
第72図　8(2)・9号竪穴住居跡出土遺物…… 109
第73図　11号竪穴住居跡出土遺物(1) …… 110
第74図　11(2)・12・13号竪穴住居跡出土遺物 …… 111
第75図　14号竪穴住居跡出土遺物(1) …… 112
第76図　14(2)・15号竪穴住居跡出土遺物 …… 113
第77図　16・17・18号竪穴住居跡出土遺物(1) …… 114
第78図　18(2)・19号竪穴住居跡出土遺物(1) …… 115
第79図　19(2)・21号竪穴住居跡出土遺物 …… 116
第80図　畠作耕地の復旧痕跡・土坑出土遺物…… 117
第81図　遺構外出土遺物(1) …… 120

第82図　遺構外出土遺物(2) …… 121
第83図　遺構外出土遺物(3) …… 122
第84図　床面・張り出し部面面積グラフ…… 128
第85図　壁高グラフ…… 129
第86図　カマド主軸方向分布図…… 131
第87図　煙道部Ⅱ群形態模式図…… 131
第88図　大向Ⅱ煙道部集成図…… 132
第89図　本遺跡周辺のⅠ群と類似する煙道部集成図…… 133
第90図　各住居Ｔｏ－ａ堆積模式図…… 137
第91図　14号住居上屋想定図平面…… 139
第92図　14号竪穴住居跡上屋想定図断面…… 140
第93図　14号竪穴住居跡Ｔｏ－ａ堆積・焼失過程想定模式図…… 142
第94図　本遺跡周辺の平安時代の焼土が伴う土坑集成図(1)・(2) …… 145
第95図　畠作耕地の復旧痕跡断面模式図…… 147
第96～98図　土器集成図…… 150
第99図　土師器坏法量分布図…… 153
第100図　土師器坏・甕法量分布図 …… 154
第101図　櫻田氏砂底土器模式図 …… 156
第102図　砂底土器 …… 157
第103図　集落想定図・畠作耕地の復旧痕跡範囲図 …… 161

写真図版目次

写真図版１　遺跡全景・遺構…… 175
写真図版２　14号竪穴住居跡…… 176
写真図版３　十和田ａ降下火山灰堆積状況…… 177
写真図版４　遺構…… 178
写真図版５　空中写真…… 179
写真図版６　空中写真…… 180
写真図版７　基本層序…… 181
写真図版８　調査前風景…… 182
写真図版９　１号竪穴住居跡(1) …… 183
写真図版10　１号竪穴住居跡(2)・２号竪穴住居跡(1) …… 184
写真図版11　２号竪穴住居跡(2) …… 185
写真図版12　２号竪穴住居跡(3)・３号竪穴住居跡 …… 186
写真図版13　４号竪穴住居跡…… 187
写真図版14　５号竪穴住居跡(1) …… 188
写真図版15　５号竪穴住居跡(2) ６号竪穴住居跡(1) …… 189
写真図版16　６号竪穴住居跡(2) …… 190

写真図版17　7号竪穴住居跡(1) …… 191
写真図版18　7号竪穴住居跡(2)・8号竪穴住居跡(1) …… 192
写真図版19　8号竪穴住居跡(2)・9号竪穴住居跡(1) …… 193
写真図版20　9号竪穴住居跡(2) …… 194
写真図版21　10号竪穴住居跡…… 195
写真図版22　11号竪穴住居跡…… 196
写真図版23　12号竪穴住居跡(1) …… 197
写真図版24　12号竪穴住居跡(2) …… 198
写真図版25　13号竪穴住居跡…… 199
写真図版26　14号竪穴住居跡(1) …… 200
写真図版27　14号竪穴住居跡(2) …… 201
写真図版28　14号竪穴住居跡(3)・15号竪穴住居跡(1) …… 202
写真図版29　15号竪穴住居跡(2)・16号竪穴住居跡 …… 203
写真図版30　17号竪穴住居跡…… 204
写真図版31　18号竪穴住居跡…… 205
写真図版32　19号竪穴住居跡(1) …… 206
写真図版33　19号竪穴住居跡(2)・20号竪穴住居跡 …… 207
写真図版34　18・19・21号竪穴住居跡…… 208
写真図版35　1号住居状遺構…… 209
写真図版36　1・2号掘立柱建物跡…… 210
写真図版37　土坑(1) …… 211
写真図版38　土坑(2) …… 212
写真図版39　土坑(3) …… 213
写真図版40　1～3号畠作耕地の復旧痕跡…… 214
写真図版41　1・2・5号畠作耕地の復旧痕跡…… 215
写真図版42　2号畝間状遺構・4～7号畠作耕地の復旧痕跡…… 216
写真図版43　1～3号畝間状遺構・6・7号畠作耕地の復旧痕跡…… 217
写真図版44　1号柱穴状ピット群…… 218
写真図版45　1・2号柱穴状ピット群…… 219
写真図版46　作業風景…… 220
写真図版47　出土遺物状況・プラントオパール…… 221
写真図版48　遺構内出土遺物(1) …… 222
写真図版49　遺構内出土遺物(2) …… 223
写真図版50　遺構内出土遺物(3) …… 224
写真図版51　遺構内出土遺物(4) …… 225
写真図版52　遺構内出土遺物(5) …… 226
写真図版53　遺構内出土遺物(6) …… 227
写真図版54　遺構内出土遺物(7) …… 228

写真図版55　遺構内出土遺物(8) …… 229
写真図版56　遺構内出土遺物(9) …… 230
写真図版57　遺構内出土遺物(10) …… 231
写真図版58　遺構内出土遺物(11) …… 232
写真図版59　遺構内出土遺物(12) …… 233
写真図版60　遺構内出土遺物(13) …… 234
写真図版61　遺構外出土遺物(1) …… 235
写真図版62　遺構外出土遺物(2) …… 236
写真図版63　石器…… 237

表 目 次

表1　周辺の遺跡一覧表…… 6
表2　1号柱穴状ピット群一覧表……98
表3　出土遺物観察表…… 123
表4　竪穴住居跡一覧表…… 143
表5　土器分類表…… 156

Ⅰ．調査に至る経過

大向Ⅱ遺跡は、「主要地方二戸市安代線緊急地方道路整備事業」工事に伴って、事業計画区間内に位置することから、発掘調査を行うことになった。

本線は二戸市と浄法寺町、安代町を結ぶ幹線道路であるが、特に似鳥地区は幅員が狭く、カーブが多い中、交通量が多いため車両のすれ違い等に支障をきたしている。また、歩道も無く、児童等の歩行者にも危険な状態である。其のような中、今回盛岡以北の新幹線開通予定に伴い、周辺市町村からの利用者が見込まれ、交通量の増大が考えられる。それに対応すべくアクセス道路としての性格から、交通の円滑化、安全確保のため、この時期に合わせて改築を行うものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、二戸市地方振興局土木部から、「平成９年11月21日付二地土第1294号」で「緊急地方道路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について」の文書で、岩手県教育委員会に分布調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成９年12月15日に試掘し、其の調査の結果を「平成９年12月18日付け教文第785号緊急地方道路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査に付いて（回答）」により、二戸地方振興局土木部に回答し、大向Ⅱ遺跡、桑木田遺跡の範囲内であることが付記された。

本発掘については平成10年度の予定であったが、外に川袋遺跡が確認されたことから、岩手県教育委員会と協議し、大向Ⅱ遺跡から川袋遺跡に変更した。残った分については翌年度との事で、平成11年度に発掘調査を行うことになった。大向Ⅱ遺跡の面積は4,030㎡である。

発掘調査開始に係る発掘調査承諾書については「平成11年２月17日付　二地土第1788号」で財団法人岩手県文化振興事業団に提出した。

（二戸地方振興局）

Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．位置と環境

本遺跡は、二戸市似鳥字田中坪13－１ほかに所在し、ＪＲ東北本線二戸駅から南西方向に約６㎞、天台寺から北東方向に約５㎞に位置し、遺跡の標高は約145ｍである。安比川との比高は約５～10ｍである。

本遺跡は、県道二戸―浄法寺線の沿線上にあるが、国道４号線のバイパス建設に伴って一連の発掘調査が行われた地域からはやや西側に外れている。遺跡は馬淵川支流である安比川の下流域にあたり、安比川右岸と相ノ山の山裾との間に立地する。

２．地形と地質

遺跡の立地する二戸市は、岩手県の北端部に位置して青森県に接し、北側は青森県名川町、同三戸町、西側は青森県田子町、岩手県浄法寺町、南側は一戸町、東側は九戸村、軽米町に隣接している。二戸市は東を北上山地、西を奥羽山脈に挟まれた馬淵川水系中流域に立地する内陸の市で、面積は238.17㎢、人口約３万人の岩手県で最も新しい市政都市である（1972年市政施行）。

遺跡の載る火山性丘陵地帯は、八幡平の東側に位置する安比岳南麓付近を源とし、馬淵川最大の支流である安比川によって南北に二分されている。遺跡のある安比川の右岸は稲庭岳（標高1078ｍ）を中心とした火山性の山麓丘陵（稲庭岳山麓丘陵）で、東に向かって次第に高度を下げ、東端縁は馬淵川西端に達している。また南側は、八幡平から北東に茶臼岳、大黒森山、前森山、七時雨山、西岳などの火山が並び、北側と同様

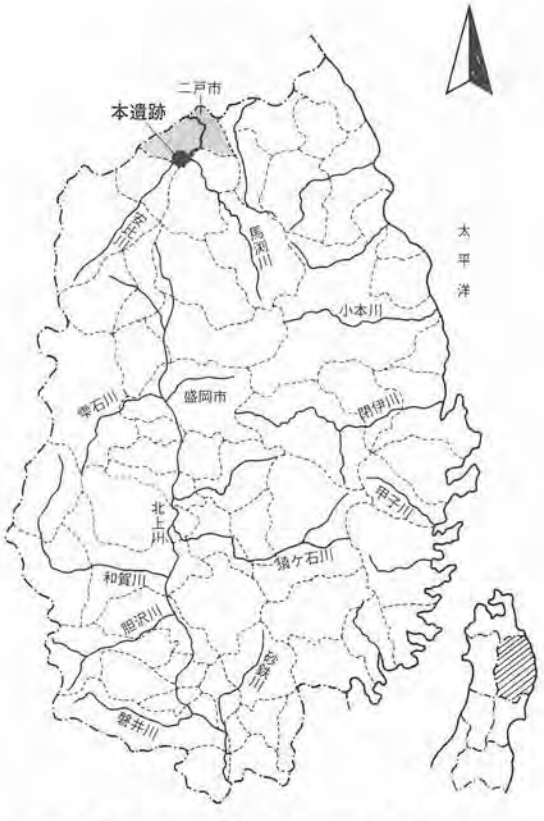
に火山性丘陵（七時雨山山麓丘陵）が広がっている。この七時雨山山麓丘陵もまた北側と同様にその東～北東端が馬淵川西端に達している。

以上の火山性丘陵は、安山岩質岩類を主な基盤岩としているが、丘陵の北東縁の馬淵川西岸付近には新第三紀の松山層や門の沢層と呼ばれる凝灰岩質角礫岩や砂礫などが分布し、その上を第四紀の火山噴出物などが覆っている。

二戸市の地形は以上の馬淵川以西の火山性丘陵地、馬淵川流域、馬淵川以東の非火山性山地（北上山地）の三つの地域に大別される。この地域の北上山地には古い隆起準平原が広く分布しており、最高点は折爪岳（標高852ｍ）である。北上山地は内陸部と沿岸部（三陸海岸地帯）との気象境界の位置も占めている。また、馬淵川流域には、数段の更新世・完新世の段丘が形成されている。

3．周辺の遺跡について

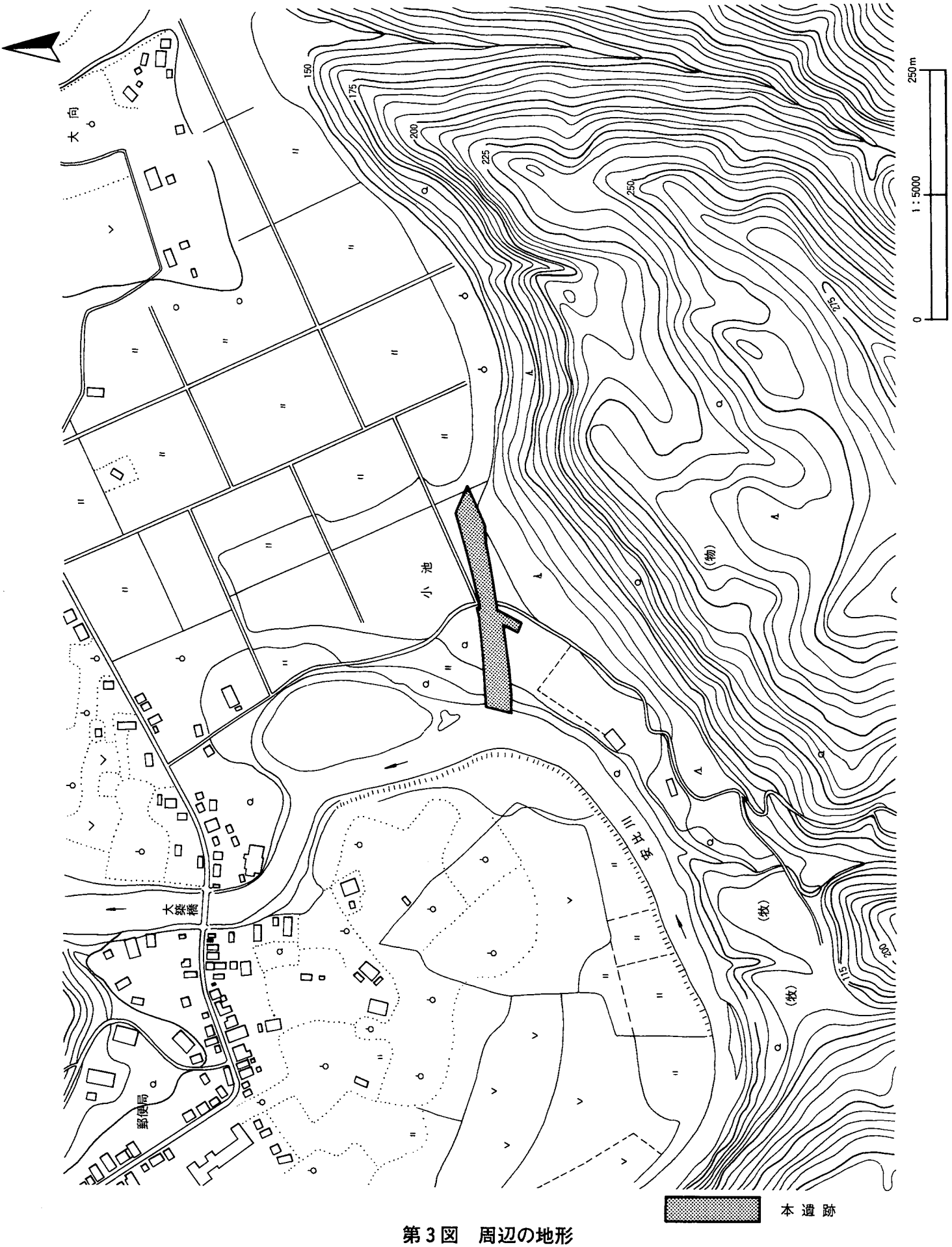
本遺跡周辺の遺跡を概観すると縄文時代の遺跡としては、川袋遺跡、浅石遺跡、沖野Ⅱ遺跡、合川遺跡、上村遺跡などがある。また、本遺跡と同じ時代に相当する遺跡としては、大向上平遺跡、河原田平(3)遺跡がある。近年発掘調査した事例を見ると、本遺跡から北東約１㎞に位置する。大向上平遺跡では、本遺跡で検出された同時代の竪穴住居跡・畠作耕地の復旧痕跡が確認されている。



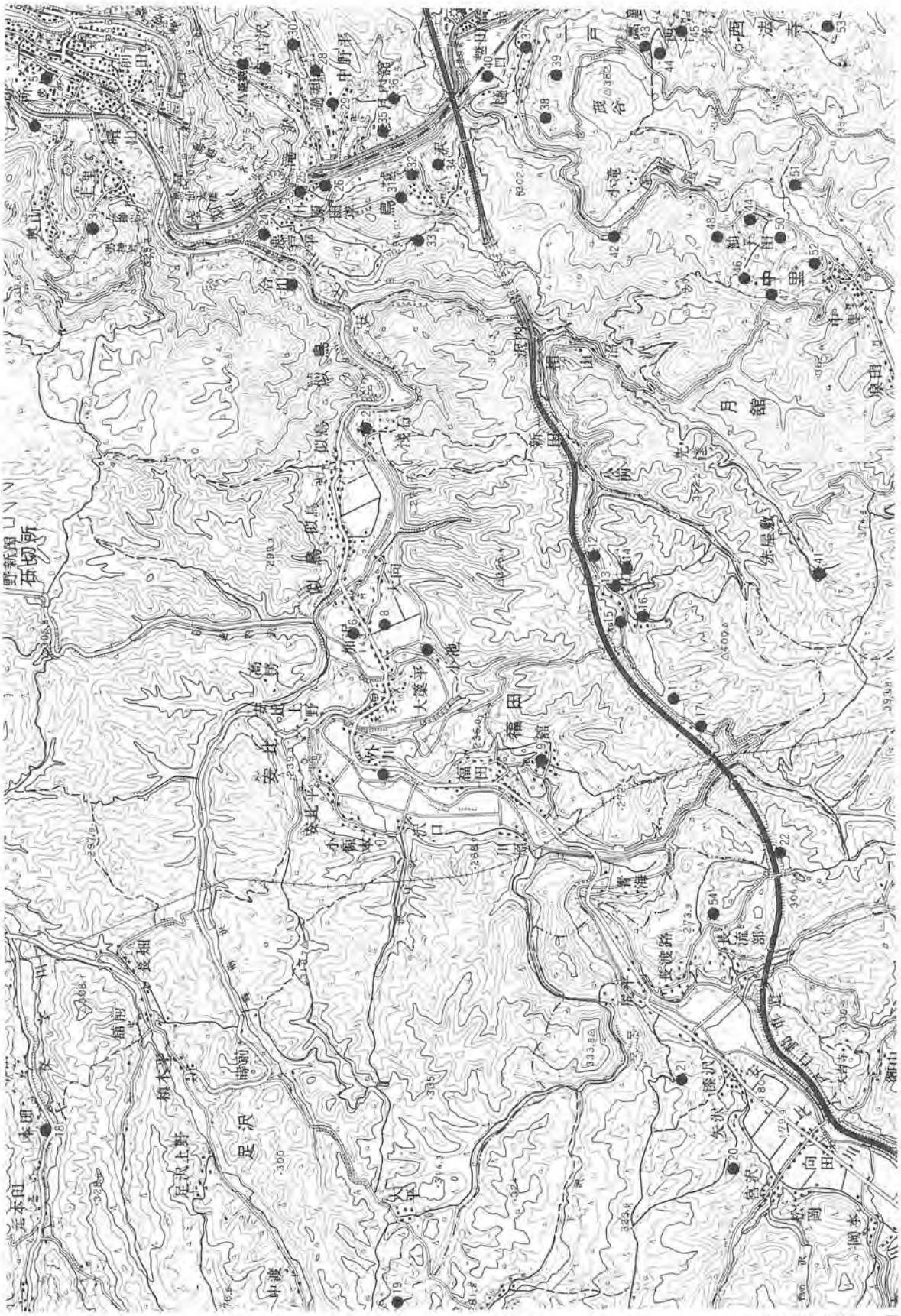
第１図　岩手県図に見る遺跡の位置

1：25,000　一戸

第２図　遺跡位置図


大向
小池
安比川
大築橋
郵便局
(物)
(牧)
(牧)
150
175
200
225
250
275
200
115
0
1:5000
250m
本遺跡

第3図　周辺の地形



第４図　周辺の遺跡

第1表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	遺構・遺物	所在地	種別
1	川袋	縄文	縄文土器	福田字川袋	散布地
2	浅石	縄文	縄文土器	似鳥字浅石	散布地
3	土川Ⅱ	縄文・古代	縄文土器・土師器		散布地
4	火行塚	縄文・弥生古代	住居跡、弥生包含層、弥生土器、玉類、土師器		集落跡
5	森合	縄文・古代	縄文土器、土師器	福岡	散布地
6	大向上平	縄文・平安	縄文土器（晩期）、土師器	似鳥字加沢	集落跡
7	大向Ⅱ	縄文・平安	縄文土器・土師器	似鳥字大向	散布地
8	大向	古代	土師器		集落跡
9	福田館	縄文・古代中世	縄文土器、土師器、空堀、平場	福田字館	城館跡散布地
10	合川	縄文・古代	縄文土器・土師器	似鳥字合川	散布地
11	仲口	縄文・古代	縄文土器・土師器		集落跡
12	大倉Ⅱ	縄文・古代	縄文土器、土師器		散布地
13	大倉A	縄文・古代	縄文土器、土師器		散布地
14	野場塚Ⅰ	縄文・古代	縄文土器、土師器		散布地
15	福田久保	縄文・古代	縄文土器、土師器		散布地
16	大倉B	縄文・古代	縄文土器、土師器		集落跡
17	大久保	縄文・古代	縄文土器、土師器		集落跡
18	本田	縄文	縄文土器		散布地
19	大平Ⅱ	縄文	縄文土器		散布地
20	宮沢	縄文・古代	縄文土器、土師器		散布地
21	上ノ山Ⅱ	縄文	縄文土器		散布地
22	檜沢	古代	土師器		散布地
23	首戸Ⅱ	縄文・平安	縄文土器（晩期）、土師器	鳥越字宮古沢	散布地
24	悪戸平Ⅰ	縄文・平安	縄文土器（後・晩期）、土師器	鳥越字悪戸平	集落跡
25	川原田平Ⅰ	奈良・平安	土師器	鳥越字川原田平	散布地
26	川原田平Ⅱ	平安	土師器	鳥越字川原田平	散布地
27	過利石	縄文・平安	縄文土器（後期）、土師器	鳥越字過利石	散布地
28	上ミ平	縄文・弥生平安	縄文土器（前・晩期）、弥生土器、土師器	鳥越字上ミ平	散布地
29	中野平	縄文・平安	縄文土器（後～晩期）、土師器	鳥越字中野平	集落跡
30	戸屋森	弥生・奈良	弥生土器、土師器	鳥越字戸屋森	散布地
31	八木沢Ⅰ	縄文・平安	縄文土器、土師器	鳥越字八木沢	散布地
32	八木沢館	縄文・平安中世	縄文土器（前・中期）、土師器、主郭、平場	鳥越字八木沢	散布地城館跡
33	和山	縄文・弥生奈良平安	縄文土器（後・晩期）、弥生土器、土師器	鳥越字和山	散布地
34	竹林Ⅱ	奈良・平安	土師器	鳥越字竹林	散布地
35	野月内館	中世	内館、外館、堀	鳥越字野月道ノ下	城館跡
36	野月道ノ下	縄文・弥生平安	縄文土器（後期）、弥生土器、土師器	鳥越字野月道ノ下	散布地
37	樋ノ口Ⅰ	縄文・弥生奈良平安	石匙、縄文土器（中・後・晩期）弥生土器、土師器	一戸字樋ノ口	散布地
38	樋ノ口Ⅲ	縄文・平安	縄文土器（中期）、土師器	一戸字樋ノ口	散布地
39	樋ノ口Ⅱ	縄文・弥生奈良平安	縄文土器（前～晩期）、弥生土器、土師器	一戸字樋ノ口	散布地
40	親久保Ⅰ	縄文・弥生	縄文土器（後期）、弥生土器	鳥越字親久保	集落跡
41	赤屋敷	縄文・平安	縄文土器（晩期）、土師器	月舘字赤屋敷	散布地
42	小滝Ⅱ	縄文・平安	縄文土器（後・晩期）、土師器	一戸字小滝	散布地
43	茂谷	縄文・平安	縄文土器、土師器	高善寺字茂谷	散布地
44	寺屋敷	縄文・平安	縄文土器、土師器	高善寺字寺屋敷	散布地
45	毘沙門堂	平安・鎌倉	塚	西法寺字西法寺	城館跡
46	袖子田Ⅲ	縄文・平安	縄文土器（中期）、土師器	中里字袖子田	散布地
47	馬場野Ⅱ	縄文・平安	縄文土器（後期）、土師器、須恵器	中里字馬場野	散布地
48	袖子田Ⅱ	縄文・弥生平安	縄文土器（早・前期）弥生土器、土師器	中里字袖子田	散布地
49	袖子田	縄文・平安	縄文土器（後・晩期）、土師器、須恵器、鉄滓	中里字袖子田	散布地
50	馬場野	縄文・平安	縄文土器（後期）、土師器、須恵器	中里字馬場野	散布地
51	小荒木	縄文・平安	縄文土器（後期）、土師器	中里字小荒木	散布地
52	袖越	縄文・弥生平安	縄文土器（前・後期）、弥生土器、土師器	中里字袖越	散布地
53	大平	縄文・弥生平安	縄文土器（中～後期）、弥生土器、土師器	西法寺字大平	集落跡
54	上野Ⅳ	縄文・古代	縄文土器・土師器		散布地

4．基本層序

本遺跡の土層はⅠ～Ⅷ層に区分される。Ⅰ層は黒褐色土の耕作土である。Ⅱ層は十和田ａ降下火山灰が確認される。Ⅱ層については十和田ａ降下火山灰は粒・斑状に確認されるが、竪穴住居跡等の遺構・窪地では数十㎝以上の層状の堆積として確認される。Ⅲ層は黒色土の黒ボク土で構成される。十和田ａ降下火山灰はほとんど認められない。Ⅳ層は褐色の十和田中掫浮石を含む砂質のシルトで構成されている。十和田中掫浮石再堆積層の可能性がある。Ⅴ層はにぶい黄褐色を呈する十和田中掫浮石の再堆積層である。移植ベラを刺しても、移植ベラが曲がるほど非常に固い。Ⅵ層は十和田中掫浮石が層状堆積する。Ⅴ・Ⅵ層は本遺跡で部分的に確認される。Ⅶ層十和田南部浮石を含む、黒色土からなる。Ⅷ層十和田八戸堆積物層で、上位は褐色の粘土質状の火山灰層からなる。下位は灰白色の砂状の浮石層である。調査区ＩＡ・ⅡＡ区においては、耕作時の削平もしくは洪水による流出によって、Ⅱ～Ⅶ層が存在せず、Ⅰ層を剝がすとⅧ層が露出する。調査区ＩＣ～ＩＧ・ⅡＣ～ⅡＤグリッドにかけてはⅥ・Ⅴ層が部分的に存在する。詳細については以下の通りである。

Ⅰ層10ＹＲ　3／2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（耕作土）
層厚25～70㎝

Ⅱ層10ＹＲ　2／1　黒　シルト　粘性弱　しまりやや密（十和田ａ降下火山灰を粒状・ブロック状に堆積する）層厚30～40㎝

Ⅲ層10ＹＲ　2／1　黒　シルト　粘性弱　しまりやや密　　層厚　10～30㎝

Ⅳ層10ＹＲ　4／4　褐色　砂質シルト　粘性弱　しまりやや密（十和田中掫浮石再堆積層？十和田中掫浮石を含む）　層厚20～40㎝

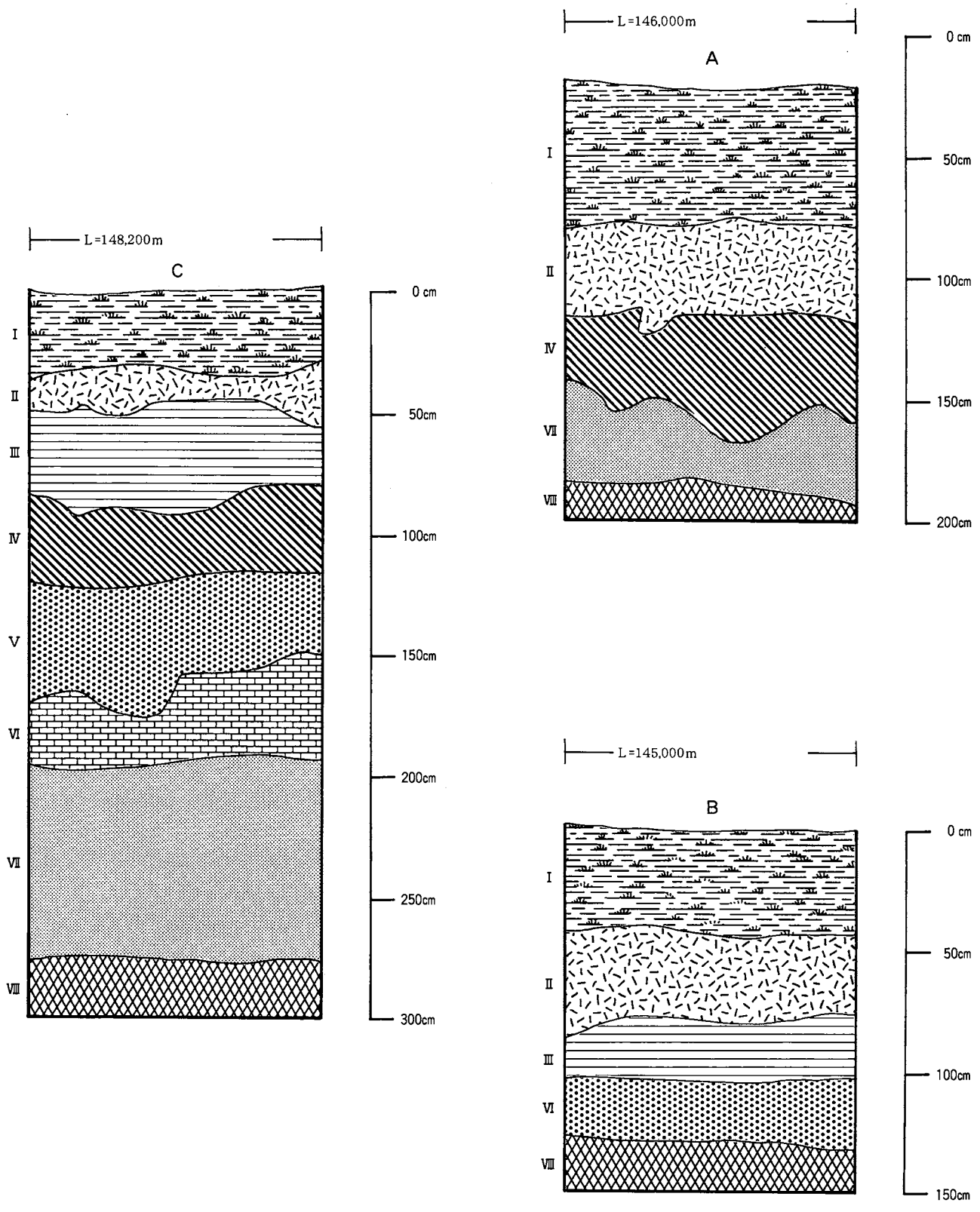
Ⅴ層10ＹＲ　5／4　にぶい黄褐色　粘性弱　しまり密（十和田中掫降下浮石の再堆積層）　層厚30～60㎝

Ⅵ層十和田中掫降下浮石　層厚20～50㎝

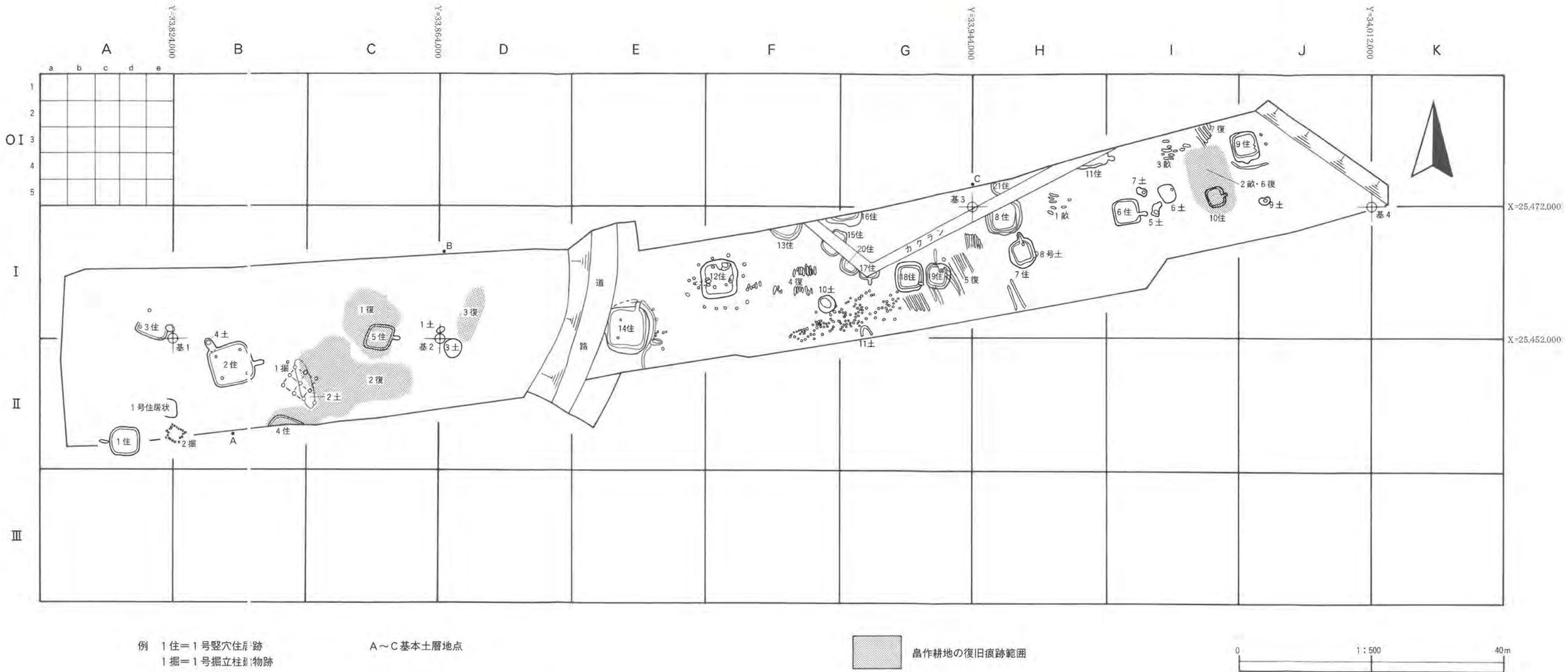
Ⅶ層10ＹＲ　2／1　黒　シルト　粘性中　しまりやや密（十和田南部浮石をパミス状に含む）　層厚　50～80㎝

Ⅷ層10ＹＲ　4／6　褐色　粘性強　しまり密（八戸火砕流堆積物）　　層厚不明

前記した火山灰を遺構等の記述・注記の記載においては、下記の略語を使用する。
十和田ａ降下火山灰（西暦915年）＝Ｔｏ－ａ・十和田中掫浮石（5,000～5,500年前）＝Ｔｏ－ｃｕ
十和田南部浮石（8,600年前）＝Ｔｏ－ＮＢ・十和田八戸火砕流堆積物（12,000～13,000年前）＝Ｔｏ－Ｈ
＊降下年代・略号は「火山灰アトラス」（町田・新井1992）から引用。


L=146,000m
A
I
II
IV
VII
VIII
0 cm
50cm
100cm
150cm
200cm
L=148,200m
C
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
0 cm
50cm
100cm
150cm
200cm
250cm
300cm
L=145,000m
B
I
II
III
VI
VIII
0 cm
50cm
100cm
150cm

第５図　遺跡の基本層序



第6図　大向Ⅱ遺跡遺構配置図

Ⅲ．野外調査と室内整理

1．野外調査

(1) グリッドの設定

平成11・12年度のグリッドの設定にあたっては、平面直角座標の第Ｘ系に合わせた基準点を用いて、調査区の区割りを行った。グリッドは、20ｍ×20ｍのメッシュの北西端を基準に南北方向の北から０Ⅰ・Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ……の番号を付し、東西の方向の西からＡ・Ｂ・Ｃ……のアルファベットを44等分の大グリッドとした。更にこの大グリッドを４×４ｍの小区画に細分し、南北方向の北から数字の１～５、東西方向の西からアルファベットのａ～ｅを付し、大グリッドを25等分の小グリッドに区画した。なお各基準点の平面直角座標第Ｘ系による成果は次の通りである。

基準点１	Ｘ＝25,452.000	Ｙ＝33,824.000	Ｈ＝144.679ｍ
基準点２	Ｘ＝25,452.000	Ｙ＝33,864.000	Ｈ＝145.485ｍ
基準点３	Ｘ＝25,472.000	Ｙ＝33,944.000	Ｈ＝149.139ｍ
基準点４	Ｘ＝25,472.000	Ｙ＝34,012.000	Ｈ＝148.743ｍ

(2) 粗掘と遺構検出

本遺跡の現況は畑地である。調査を始めるにあたって、径約４×４ｍ又は２×２ｍのテストピットもしくは、幅約1.5ｍ、長さ約７～10ｍの試掘溝を設定し、遺構・遺物の有無・検出面の確認を行った。その後、十和田ａ降下火山灰が確認できる面まで、重機による粗掘りを行った後、鋤簾・両刃鎌等を用いて検出を行った。

(3) 遺構の精査と実測

検出された遺構は、竪穴住居跡・住居状遺構は４分法・土坑類については２分法で精査し、必要に応じて使い分けた。調査期間が終了間近には、竪穴住居跡の場合カマドを除いて平板を用いて実測図作成を行った。原則として、竪穴住居跡・土坑・柱穴状ピットの作図は平面図・断面図共に20分の１で実測し、カマド・煙道部については10分の１、畠作耕地の復旧痕跡は、平成11年度は写真測量で行い。平成12年度は平板を用いて50分の１の縮尺で実測した。

(4) 遺構名の付け方

検出された遺構の名付け方については、野外調査中に通し番号で検出順に１号竪穴住居跡・２号土坑等と付し、野外調査・室内整理において、遺構の特徴・性格から名前または通し番号を変更した。

遺構内の出土遺物については、埋土上位・中位・下位・床面（底面）に分けて取り上げた。遺構外の出土遺物については、調査区に設定したグリッド別に層位を記して取り上げた。

(5) 写真撮影について

写真撮影は、適宜調査前の調査区、遺構の完掘状況、遺構の断面、遺構の埋土、遺物の出土状況等遠近距離からの撮影を行なった。写真撮影は35㎜モノクロームとカラースライド各１台、さらに６×７版のモノクローム１台を使用した。また、調査終了間近に小型飛行機による空中撮影を実施した。

2．室内整理

(1) 遺物の処理

遺物は水洗・接合を行った後、接合・復元作業を行った。これらの作業終了後、遺物の登録を行い、遺物の登録後、掲載遺物の登録を行った。掲載遺物登録後、実測・拓本・トレース・図版作成の順に行った。

(2) 遺構図面

遺構図面については、野外調査で作成した図面の中で、平面図・断面図・セクション・平面図・断面図等が正確なものについては、第2原図を作成せず、野外調査で作成した図面にトレースを行った。誤差があるものでつじつまが合わないものについては、修正を加えたが、多少の誤差については、修正を加えずトレースを行った。

(3) 図版について

遺物図版については、遺構内・遺構外に分けて、遺構内は遺構名の通し番号順に、遺構外の土器については、時代時期別・文様・調整・器種等によって掲載した。遺物の縮尺は、土器・石製品については、3分の1・石器・古銭・鉄製品については2分の1の縮尺で掲載した。

遺構図版については、竪穴住居跡・土坑・柱穴状ピット群は50分の1を基本としたが、原則として竪穴住居跡のカマド・煙道部・柱穴・外周溝・壁溝等の断面は25分の1で掲載した。畠作耕地の復旧痕跡については、平面図100分1・150分の1、断面図40分の1の縮尺で掲載した。なお、それぞれの図版にはスケールを付している。

(4) 遺物の写真図版ついて

遺物の写真図版の縮尺は土器・鉄製品・石製品については、約3分の1・石器約2分の1・古銭は原寸で掲載した。

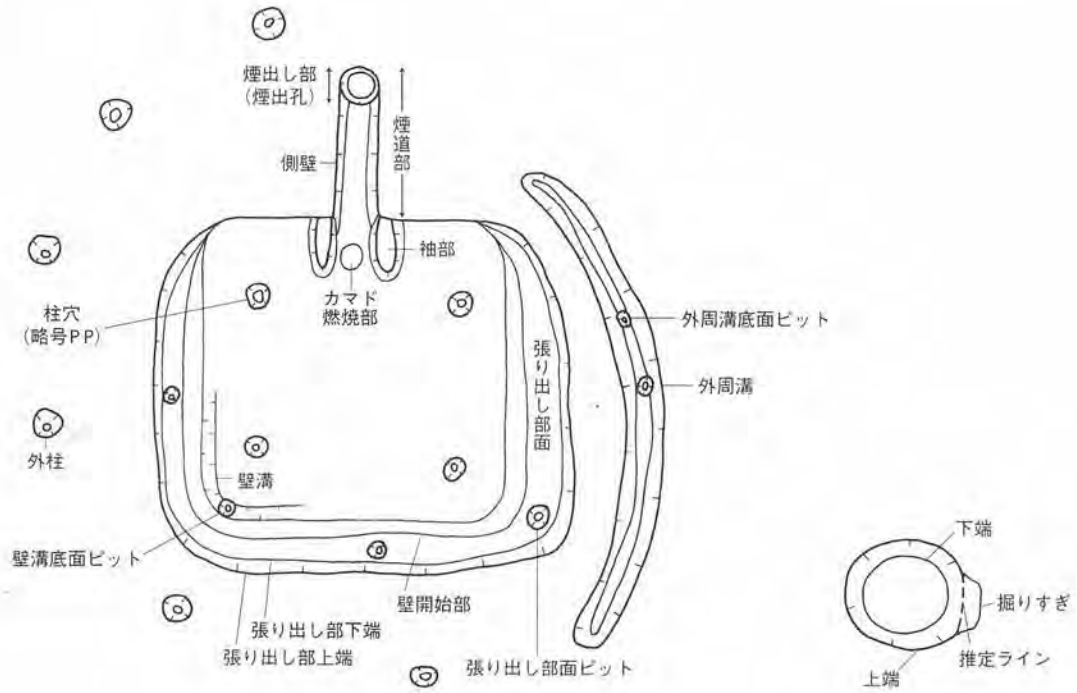
(5) 遺構の掲載順番について

竪穴住居跡については、検出した順番で通し番号で遺構名を付したことから、遺構番号順に、畝間状遺構・畠作耕地の復旧痕跡については、原則として調査区の西側から東側にかけて、土坑については、縄文時代から平安時代の順に掲載した。

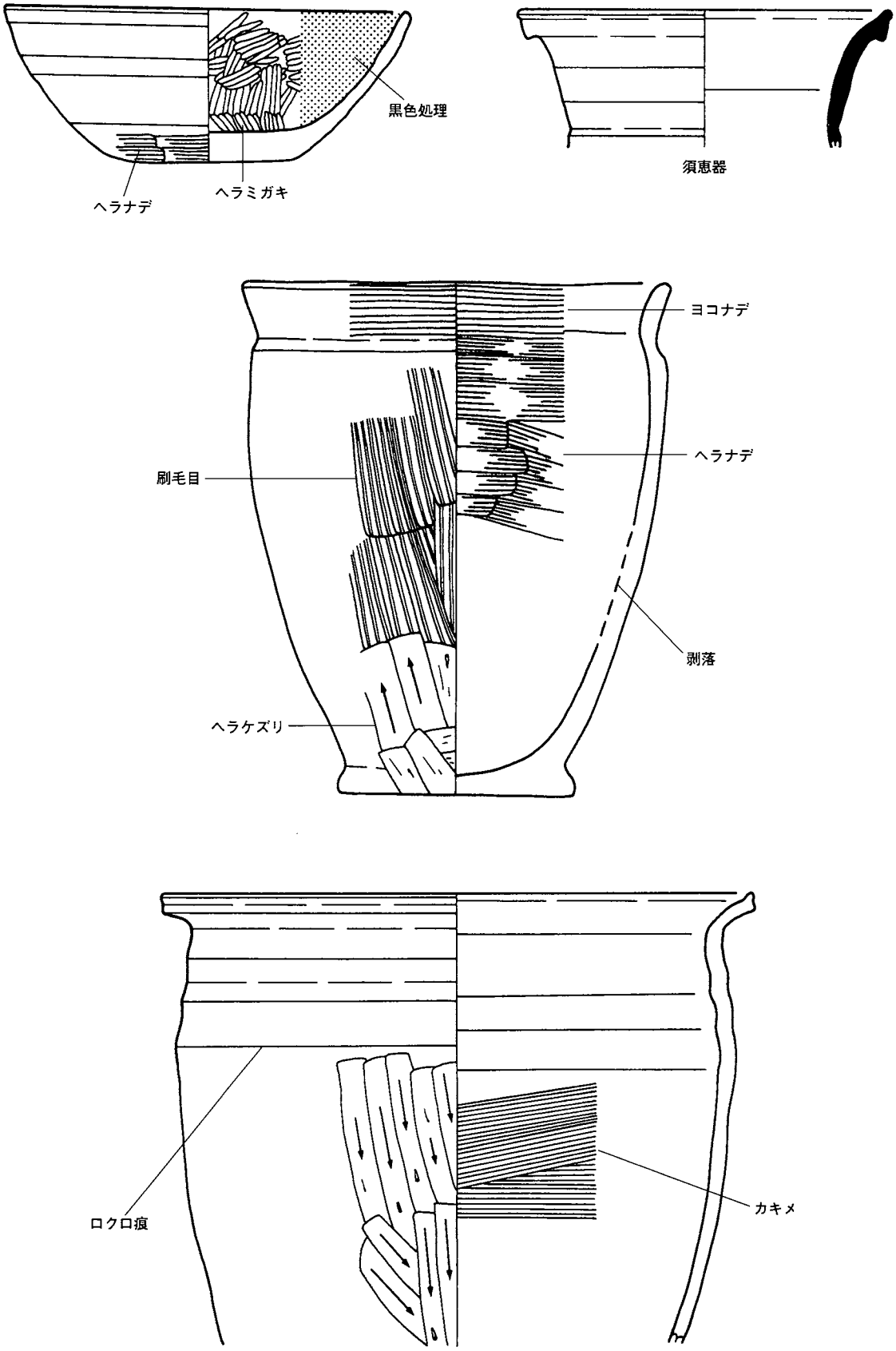
(6) 遺物の掲載順番について

遺構内の土器については、遺構ごとに、更に遺構から出土した遺物を原則として、坏・非ロクロ甕・ロクロ甕・須恵器・鉄製品・石製品の順に、更に器種の中で床面・カマド・埋土下位の順に遺構の時代に伴うものを先に掲載した。遺構外の遺物については、遺構内の出土遺物で、遺構と明らかに時代が異なるものは、遺構外として掲載し、時代時期・文様等で掲載順番を決めた。

遺構・遺物図版の凡例については、第7・8図を参照


煙出し部
(煙出孔)
煙道部
側壁
袖部
カマド
燃焼部
柱穴
(略号PP)
外柱
壁溝
壁溝底面ピット
壁開始部
張り出し部下端
張り出し部上端
張り出し部面ピット
張り出し部面
外周溝底面ピット
外周溝
下端
掘りすぎ
推定ライン
上端
A
A′
平面セクション
断面セクション
掘りすぎ
推定ライン
トレンチ(試掘溝)
畠作耕作の復旧痕跡範囲
礫
焼土
炭化材

第7図　遺構凡例



第8図　遺 物 凡 例

Ⅳ．検出された遺構と出土遺物

１．竪穴住居跡の調査の概要と経過

平成11年度の調査では、テストピット設定後、十和田ａ降下火山灰が確認される面（Ⅱ層）で重機による粗掘りを行った。粗掘り終了後、鋤簾・両刃鎌等を用いて検出作業を行った。粗掘り・検出作業の結果、調査区西側（ＡⅠ・ＡⅡグリッド）は、安比川の氾濫・浸食又は耕作土の造成時によると思われる削平が著しく、Ⅰ層を剝ぐと八戸火砕流堆積物層が露出する状態であった。１・３号竪穴住居跡・１号住居状遺構については、比較的明瞭にプランを把握する事ができた。

Ⅱ層面の検出状況は黒色土中に十和田ａ降下火山灰が斑状に散在して見られた。黒色土と比較しながら十和田ａ降下火山灰を頼りに検出面に十和田ａ降下火山灰が集中する部分・十和田ａ降下火山灰と黒色土の混合土が集中する部分などが遺構になると考え、遺構の検出を行った。

竪穴住居跡についても、前記した十和田ａ降下火山灰が集中するプランで確認し、２号竪穴住居跡を４分法で掘り下げを進めていった。掘り下げる過程で、十和田中掫降下軽石を含む黒色土層（Ⅳ層）に達した時点で、プランの想定を誤認した事に気が付いた（掘りすぎ）。

このことから平成12年度調査では、竪穴住居跡を検出した際、２号竪穴住居跡の様な誤認がないように、想定したプランより、小さく４分法で掘り下げ、床面を確認した後、床面を頼りに壁を確認していった。壁は八戸火砕流堆積物・十和田南部浮石を含む黒褐色土・十和田中掫降下浮石層を壁とする部分は比較的明瞭に壁を認識できたが、Ⅱ・Ⅲ層面については埋土と似通っていることから、明瞭に確認できた壁の傾きでⅡ・Ⅲ層面は立ち上げた。

このような方法で、調査を進めていくと竪穴住居跡のプランを誤認、掘り過ぎを防止する事が出来ると考えていたが、７・８号竪穴住居跡精査時に、執筆者が想定したプランより、規模が小さくなる事に疑問を感じていた。この疑問が解決されたのが、11・13号竪穴住居跡の焼失時における焼土塊が張り出し部面に検出されたことと、14号竪穴住居跡の十和田ａ降下火山灰の層状堆積が張り出し部面を覆って確認されたことである（写真図版第２参照）。

14号竪穴住居跡を確認してから、精査終了とした他の竪穴住居跡も棚状の張り出し部を有すると考え再度張り出し部の有無を確認した。この結果21棟の竪穴住居跡を検出したうち、10棟が棚状の張り出し部を有することがわかった（なお、２号竪穴住居跡については、張り出し部をもつ可能性がある）。

（遺構の名称と原稿の記載について）

本遺跡の竪穴住居跡の特徴は、棚状の段を有し、竪穴住居跡外に柱穴・溝をもつ。これらを棚状の段を張り出し部、竪穴住居跡外にある柱穴を外柱穴・溝を外周溝と称することとする。外柱穴・外周溝については、柱穴状ピット・溝跡として、単独に記載するべきかと考えたが、位置・検出状況から、竪穴住居跡に伴うものと考え、竪穴住居跡の項に記載した。また、竪穴住居跡に伴うものと判断はできなかった。ピット類についても、伴なう可能性を加味して竪穴住居跡の項に図示して、規模を表として示してある。

2．竪穴住居跡

今回の調査で奈良・平安時代の竪穴住居跡が21棟検出された。この21棟中、奈良時代の竪穴住居跡は、1号・13号の2棟である。

1号竪穴住居跡

遺構（第9・10図・写真図版9・10）

（位置）　ⅡＡ4ｅ・4ｄグリッドに位置する。

（検出・精査状況）　削平により、Ⅰ層を除去すると、Ⅷ層が露出している状態で、Ⅷ層面で検出した。壁に一部撹乱を受けている。

（平面形・規模・面積）　平面形は隅丸方形を呈すると思われる。南壁は調査区外に延びる。調査区内で確認した規模は東壁（4.56）m、西壁（4.17）m、北壁4.1mを測る。床面積は約18.9㎡である。＊（　）は推定値

（埋土）　黒色土を主体とする。自然堆積と思われる。

（壁）　ほぼ垂直に立ち上がる。壁高の残存状況は12～20cmである。

（柱穴）　4基確認された。規模はＰＰ1が径40×32cm、深さ13cm、ＰＰ2が径51×50cm、深さ5cm、ＰＰ3が径32×20cm、深さ6cm、ＰＰ4が径49×38cm、深さ12cmである。埋土は黒褐色を主体とし柱穴痕跡は認められなかった。

（土坑）　床面中央部やや西側寄りで検出された。平面形は楕円形を呈し、断面形は筒状を呈する。規模は径81×71cm、深さ42cmである。埋土は人為堆積と思われる。出土遺物はないが、底面から加熱を受けた礫を確認した。

（床）　Ⅷ層を床とし、ほぼ平坦でかたく締まる。ほぼ全面に貼り床が施される。

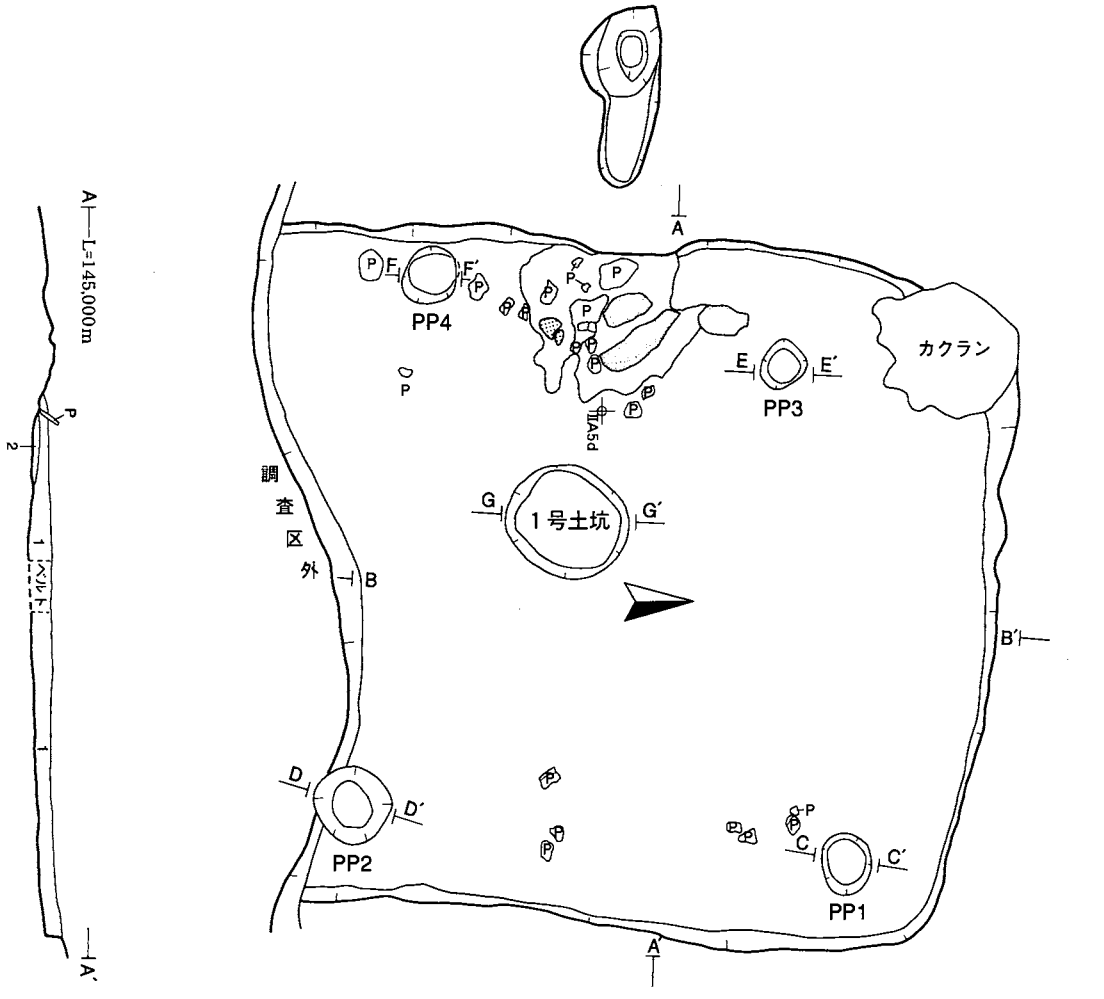
（カマド）　西壁ほぼ中央部に構築されている。カマド本体は、暗褐色土・黒褐色土の粘土質土が主体で、芯材として礫・土器を覆って構築されている。削平が著しかったため、詳細は不明であるが天井石と思われる縦長の長さ50cm、幅17cmの礫がカマド本体上部で確認された。燃焼部は今となっては、カマド天井部崩落土と誤認して、燃焼部を掘り過ぎたたため、確認出来なかった。

（煙道部・煙出部）　刳り貫き式と思われる。主軸方向は、Ｎ－80°－Ｗである。煙道部の長さは1.56m、煙出孔径56×33cm、検出面から煙出孔底面の深さは39cmを測る。

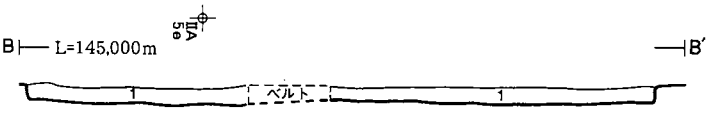
遺物（第65図・写真図版48）

遺物の出土状況は埋土・カマド周辺・床面から散在して出土した。出土量は土師器の甕が中コンテナ約1箱、坏が1点のみである。1は土師器の坏で内面は黒色処理でミガキの調整が施され、外面は口縁部ヨコナデ体部中から下はミガキによる調整が施されている。体部には沈線状の溝と底面に高台状のつくりを有す。2は土師器の甕もしくは甑と思われる。頸部付近に沈線状の溝を有す。3～5は土師器の甕でそれぞれ頸部に明瞭な段を有し、口縁部にヨコナデが施されている。3は内外面ともにナデによる調整。4は外面にすすが付着し摩滅がしているが、ナデ調整後にミガキの調整が施される。5は内面はほぼナデによる調整であるが、部分的にハケメの調整が施され、外面はケズリによる調整が施される。6は土師器の球胴甕で外面はほとんどがミガキによる調整で体部下端はナデによる調整が施される。

時期　出土遺物から8世紀代の遺構と考えられる。Ⅰ群に属す。

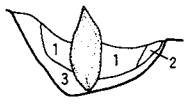


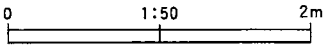
A－A′ B－B′
1. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性強 しまりやや疎
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性強 しまり密
（黄褐色土粒を含）



PP1
C L=144,800m C'

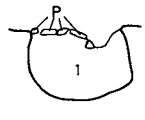
PP2
D L=144,800m D'





PP3
E L=144,700m E'

PP4
F L=144,700m F'



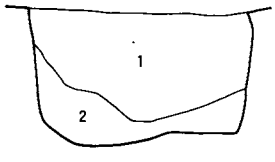
PP1 C－C′
1. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり密
2. 10YR4/4 褐色 シルト 粘性強 しまり中（To-H・黒褐色土粒含）

PP2 D－D′
1. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり密（To-Hをごく少量含）
2. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり密（To-H含）
3. 10YR4/6 褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり中（To-Hに黒褐色土含）

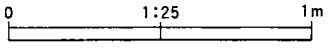
PP3 E－E′
1. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり密
（To-H粒をごく少量含）
2. 10YR4/4 褐色 シルト 粘性強 しまり中
（To-H・黒褐色土粒含）

PP4 F－F′
1. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中

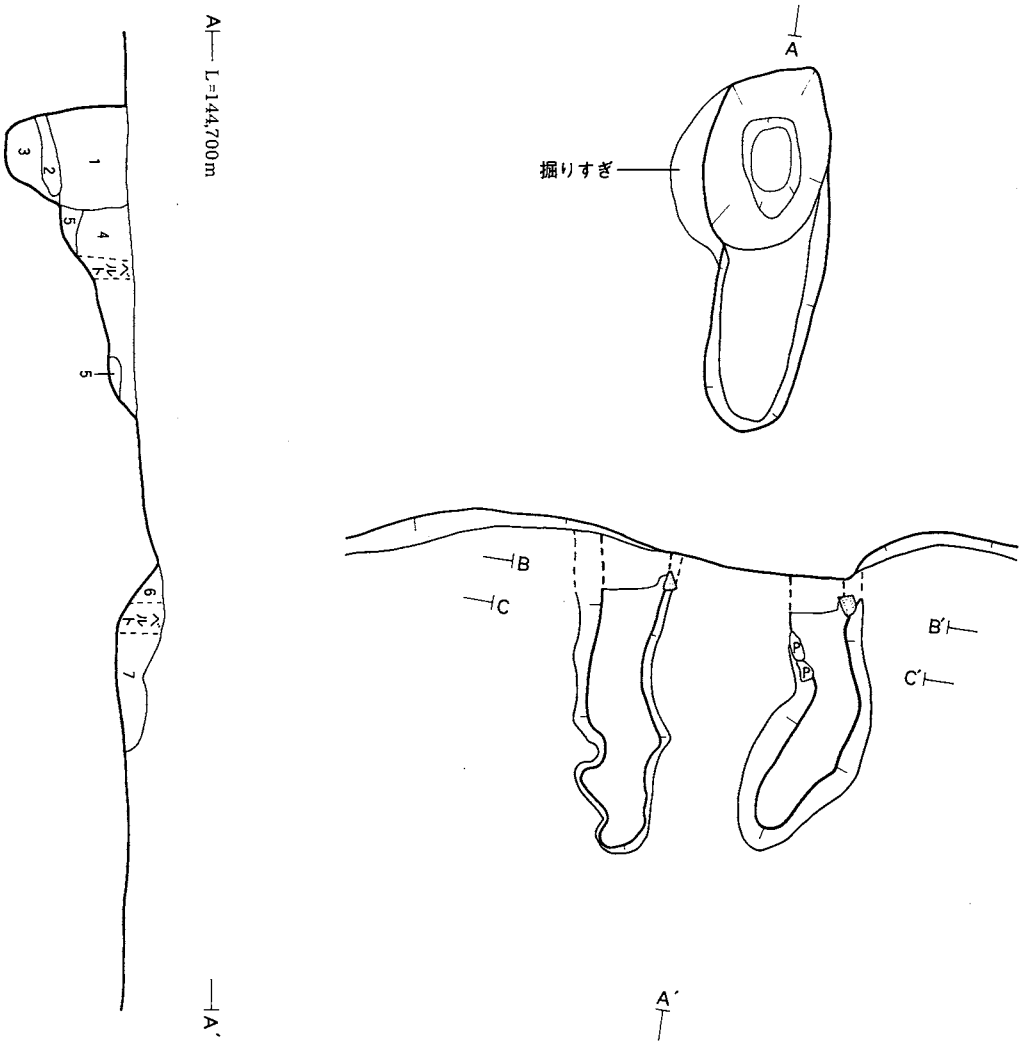
1号土坑
G L=144,800m G'



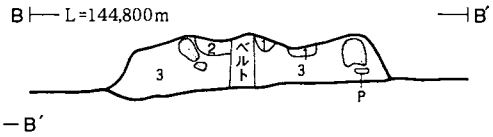
1号土坑 G－G′
1. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性やや強 しまり密（To-H粒・ブロックを多量に含）
2. 10YR2/1 黒 シルト 粘性やや弱 しまり密（To-Hをブロック状に多量に含）
1・2共に人為堆積と思われる。



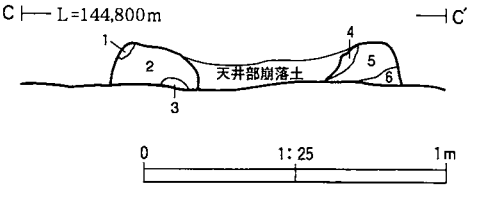
第9図 1号竪穴住居跡(1)



A－A′
1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり中（To-H粒を含）
2．10YR1.7/1 黒　　シルト　粘性やや弱　しまり疎（炭化物を少量含）
3．10YR4/4　褐色　　シルト　粘性中　　しまりやや密（黒色土粒を多く含）
4．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中　　しまりやや密
5．10YR4/6　褐色
6．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　　しまり密（褐色土粒To-H？を少量含）
7．5YR4/8　赤褐色（黒色土粒含・カマド天井部崩落土か？）



B－B′
1．5YR4/8　赤褐色　シルト　粘性弱　　しまり密（焼土）
2．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性やや弱　しまり密（焼土粒を多く含）
3．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性やや弱　しまり密（褐色土が芯材付近を覆う。）



C－C′
1．10YR4/6　褐色　　シルト　粘性弱　　しまり密
2．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり密
（褐色土粒を少量、白色のパミスを含）
3．10YR3/1　黒褐　　シルト　粘性弱　　しまり密
4．5YR5/8　明赤褐色　シルト　粘性弱　　しまり疎（焼土）
5．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり密
（焼土粒を含）
6．10YR1.7/1　黒色　　シルト　粘性やや弱　しまり密
（褐色土粒を少量含）

第10図　1号竪穴住居跡(2)

2号竪穴住居跡

遺構（第11～13図・写真図版10～12）

（位置）　ⅡＢ１ｂ・ｃ・ｄ・ⅡＢ２ｂ・ｃ・ｄグリッドに位置する。

（検出・精査状況）　Ⅱ層上面で検出中に十和田ａ降下火山灰がブロック状に集中する区域と礫で構成されている煙道部を確認した。竪穴住居跡のプランを明確に確認ができなかったが、十和田ａ降下火山灰がブロック状に集中する区域と煙道部を頼りに竪穴住居跡のプランを想定し、ベルトを設定し４つの区画に分けて掘り下げた。掘り下げ段階で第11図断面図の２層と４層を境で平面プランを確認した。検出面はⅣ層である。

（重複関係）　４号土坑と重複する。新旧関係は、４号土坑が本遺構を截る。

（平面形・規模・床面積）　平面形は隅丸方形を呈する。規模は東壁5.8ｍ、西壁5.79ｍ、南壁5.45ｍ、北壁5.56ｍを測る。床面積は約35.9㎡である。

（埋土）　２層に大別される。埋土上位は、黒褐色土と十和田ａ降下火山灰のブロックで構成されている。埋土下位は黒褐色土が主体となる。自然堆積と思われる。

（壁）　Ⅳ層を壁とする。壁高の残存値は17～24㎝である。直立ぎみに外傾する。棚状の張り出し部を有する遺構の可能性が考えられる。

（柱穴）　床面から４基検出された。規模はＰＰ１が開口部径70×60㎝、深さ21㎝、ＰＰ２が開口部径53×46㎝、深さ32㎝、ＰＰ３が開口部径54×45㎝、深さ26㎝、ＰＰ４が開口部径48×47㎝、深さ41㎝である。４基それぞれに柱穴痕跡が認められる。柱穴痕跡の幅は15～18㎝である。

（床）　Ⅶ層を床とし、ほぼ平坦で固くしまる。カマド周辺を中心に部分的に貼り床が施されている。

（カマド）　東壁やや南寄りに構築されている。カマド本体は、芯材となる礫を用いて粘土を覆って構築されている。燃焼部は径64×46㎝、厚さ約13㎝で焼成は良好である。カマド底面は貼り床となっていることから、カマド構築前に貼り床が施されたと考えられる。

（煙道部・煙出部）　掘り込み式である。主軸方向はＮ－82°－Ｅである。煙道部は側壁に厚さ３～14㎝、高さ26～31㎝に平たい礫を立てに埋め込んで構築されている。２枚重ねで補強して構築されている部分もある。側壁の礫はほぼ原位置をとどめている。煙道部内の礫は最大で径44×14㎝、最小で７×６㎝の大小数十個の礫が確認された。原位置をとどめていなかったが、天井石として機能していたものと推測される。礫はすべて加熱を受けている。

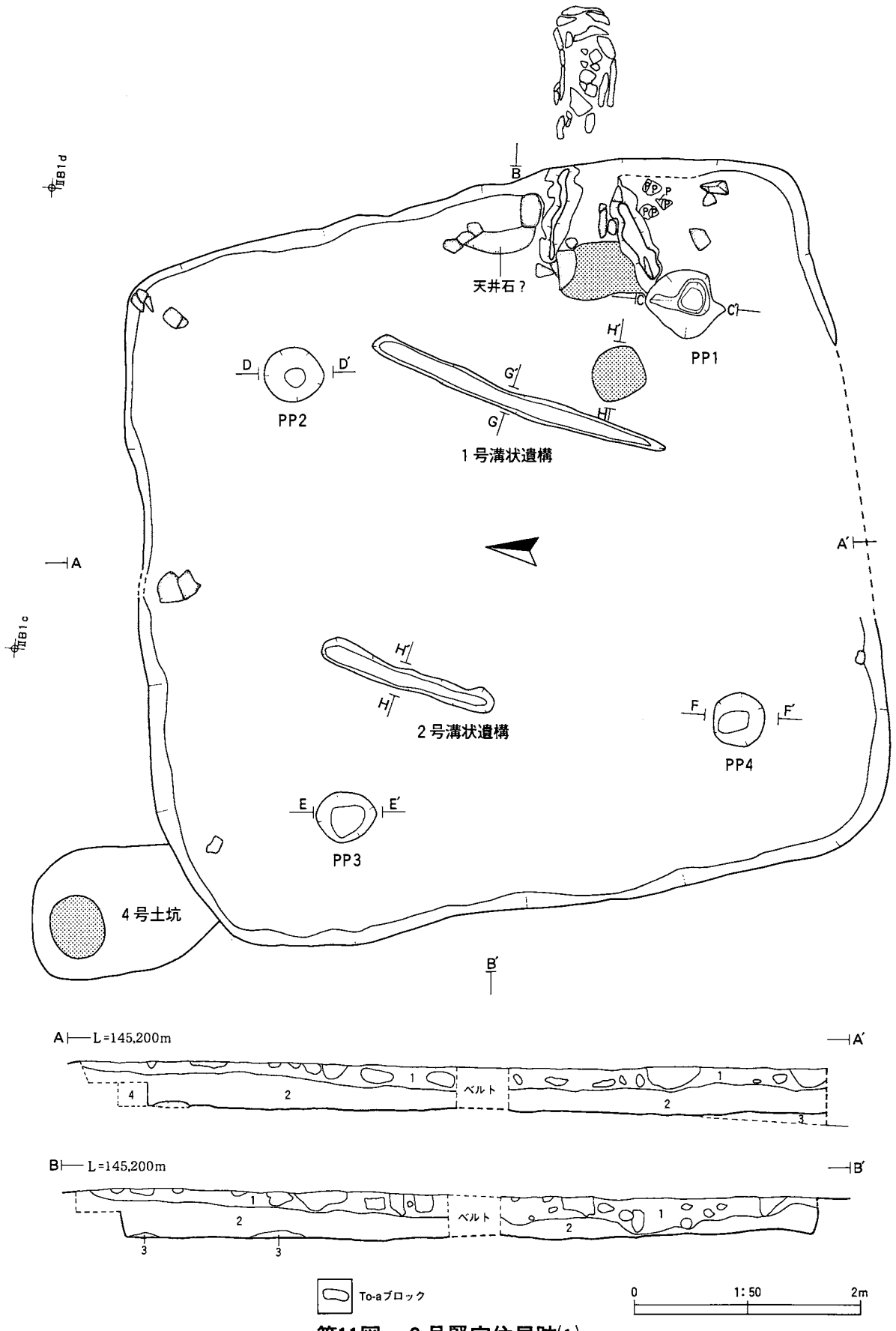
煙道部底面は焼土が形成されていた。底面は燃焼部から煙出部かけて緩やかに上がる。煙道部の長さは約1.2ｍ、煙道部の幅は約0.4ｍである。

（焼土）　１基検出された。カマドからやや西側に位置する。規模は径48×47㎝、厚さは約８㎝で形成され、焼成はほぼ良好である。

（溝状遺構）　床面検出時に２基検出された。１・２号溝状遺構と呼ぶ。埋土は共に黒褐色土の単層からなる。１号溝状遺構は長さ2.75ｍ、幅14～20㎝、深さ８㎝である。２号溝状遺構は長さ1.58ｍ、幅11～23㎝、深さ６㎝である。本遺構に伴わない陥し穴の可能性も考えられるが、性格については不明である。

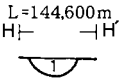
遺物（第66図・写真図版48・49）

出土状況は、カマド本体・周辺からの出土が大半である。出土量は、土師器坏・甕・須恵器甕合わせて小コンテナ約１箱弱である。７～10はロクロ成形の土師器の坏である。７・８は内面は非黒色処理で、内面にミガキが施される。７の体部下端・底面はナデによる再調整が施される。また、外面に籾痕が認められる。８は外面体部に二次加熱による摩滅が確認される。９・10は内面に黒色処理が施される。10の底面に墨書が

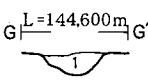


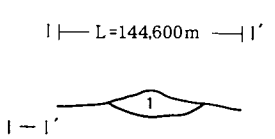
第11図　2号竪穴住居跡(1)

A－A′ B－B′
1．10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密（To-aをブロック、粒状に多量に含）
2．10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密（To-a粒含）
3．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり密（褐色土粒を含）
4．10YR2/1 黒褐色 シルト 粘性やや弱 しまりやや密（住居壁面）



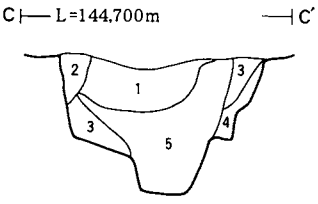
H－H′ G－G′
1．10YR2/1 黒色 シルト 粘性やや弱 しまり密



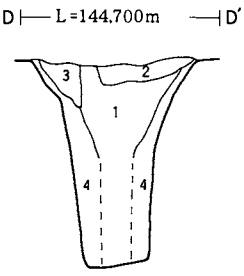


I－I′
1．5YR4/8 赤褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密

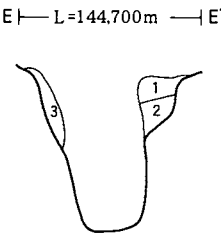
PP1



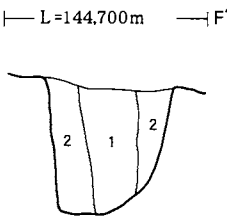
PP2



PP3



PP4

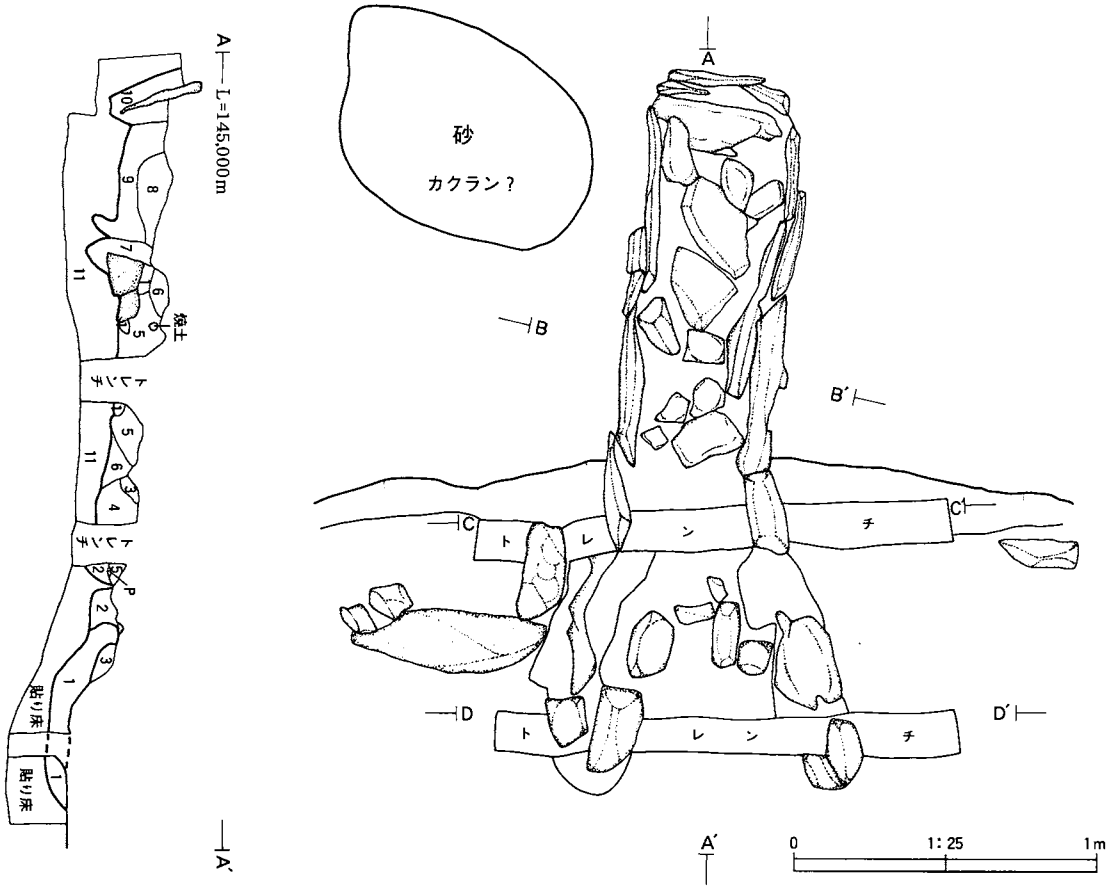


PP1 C－C′
1．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり疎（To-H粒、To-aを含）
2．10YR2/1 黒色 シルト 粘性中 しまりやや密（To-H粒、To-aを含）
3．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまりやや密（焼土粒、To-H粒含）
4．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性やや強 しまりやや疎（To-H粒含）
5．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまりやや密（To-Hを含）

PP2 D－D′
1．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり密（To-Hをブロック状に含）
2．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中
3．10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中 しまり中（To-Hを含）
4．10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中 しまり中（To-Hを含）

PP3 E－E′
1．10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり疎
2．10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり疎（To-Hを多く含）
3．10YR4/6 褐色 シルト 粘性強 しまり密（To-H）

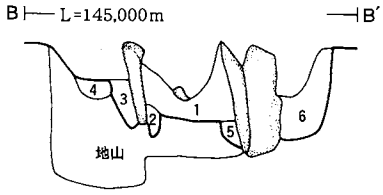
PP4 F－F′
1．10YR2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり疎（柱穴痕跡）
2．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性やや強 しまり中（To-Hをブロック、粒状に多く含）

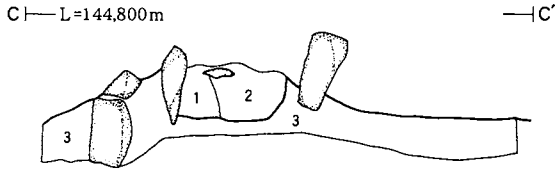


第12図　2号竪穴住居跡(2)

A－A′

1.	5YR5/8	明赤褐色	シルト	粘性やや弱	しまり密（焼土）
2.	5YR5/8	明赤褐色	シルト	粘性やや弱	しまり密（黒色土、灰白色土を含）
3.	10YR2/1	黒色	シルト	粘性弱	しまり密（焼土粒を含）
4.	7.5YR5/8	明褐色	シルト	粘性弱	しまり密（暗褐色粒を含）
5.	10YR2/3	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり密
6.	10YR2/3	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり密（焼土ブロックを含）
7.	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性やや弱	しまり密（焼土粒を含）（石を補強するために覆った土と思われる。）
8.	10YR2/3	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり密（黒色土、焼土粒を含）
9.	5YR5/8	明赤褐色	シルト	粘性弱	しまり密（黒色土、暗褐色土粒を含）（To-aをごく少量粒状に含）
10.	10YR3/2	黒褐色	シルト	粘性やや弱	しまり密（石を補強して覆った土と思われる。）
11.	10YR2/2	黒褐色	シルト	粘性やや弱	しまり密（地山）



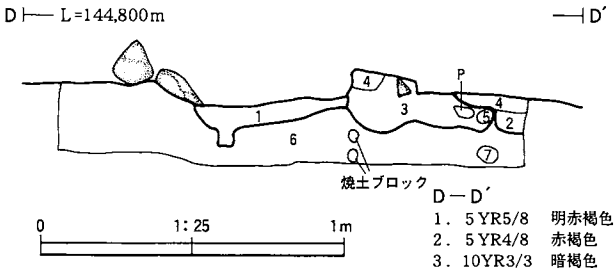


B－B′

1.	10YR3/2	黒褐色	シルト	粘性やや弱	しまりやや密（焼土粒を含）
2.	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性やや弱	しまりやや密（掘り方跡）
3.	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性やや弱	しまりやや密（To-cuを含）
4.	To-cu				
5.	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性やや弱	しまりやや密（褐色土粒をごく少量含）
6.	10YR2/1	黒褐色	シルト	粘性やや弱	しまりやや密（褐色土粒をごく少量含）

C－C′

1.	10YR2/3	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり密（黒色土、焼土粒を含）
2.	5YR5/8	明赤褐色	シルト	粘性弱	しまり密（黒色土、暗褐色土粒を含）（To-aをごく少量粒状に含）
3.	10YR2/1	黒褐色	シルト	粘性やや弱	しまりやや密（褐色土粒をごく少量含、貼り床）



D－D′

1.	5YR5/8	明赤褐色	シルト	粘性弱	しまり密（焼土）
2.	5YR4/8	赤褐色	シルト	粘性弱	しまり密（炭化物を含）
3.	10YR3/3	暗褐色	シルト	粘性弱	しまり密（焼土粒を含）
4.	7.5YR7/6	橙色	シルト	粘性弱	しまり密（焼土）
5.	7.5YR6/8	橙色	シルト	粘性弱	しまり密（焼土）
6.	10YR3/3	暗褐色	シルト	粘性中	しまり密（貼り床、焼土粒をごく少量上層に含）
7.	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	粘性強	しまり密

第13図　2号竪穴住居跡(3)

確認されるが、不鮮明で肉眼で文字を解読することはできなかった。

11～13は非ロクロ成形の土師器の甕である。それぞれ口縁部ヨコナデ・内外面共にナデによる調整が施されている。13は前記した甕の中で胎土が粗い。15・16はロクロ成形の土師器の甕である。15は器面内外面にカキメ痕が認められた。口唇部が直立して立ち上がる。16の内面は不鮮明で図示出来なかったが、ロクロ成形後内面にナデによる調整が施された感がある。17・18は須恵器の壺・甕である。17は本遺構の床面から出土しているが、4号竪穴住居跡の埋土中位付近から出土した遺物と接合した。

時期　Ⅳ群に属す。

3号竪穴住居跡

遺構（第14図・写真図版12）

（位置）　ⅡＡ５ｅグリッドに位置する。

（検出・精査状況）　Ⅶ層で検出した。Ⅰ層を除去するとⅧ層が露出する状況であった。検出中に加熱を受けた礫・カマド本体を確認した。

（埋土）　若干の埋土を残す。黒色土が主体である。

（平面形・規模）　平面形は北側壁部分が、削平が著しいことから詳細は不明である。東西軸は5.0ｍを測る。

（壁）　削平が著しいことから詳細は不明である。壁高の残存状況は約５㎝である。

（柱穴）　２基検出された。規模はＰＰ１が36×25㎝、深さ25㎝、ＰＰ２が36×29㎝深さ34㎝である。埋土は単層で柱穴痕跡は認められなかった。

（床）　Ⅷ層を床としている。貼り床の有無は判然としなかった。

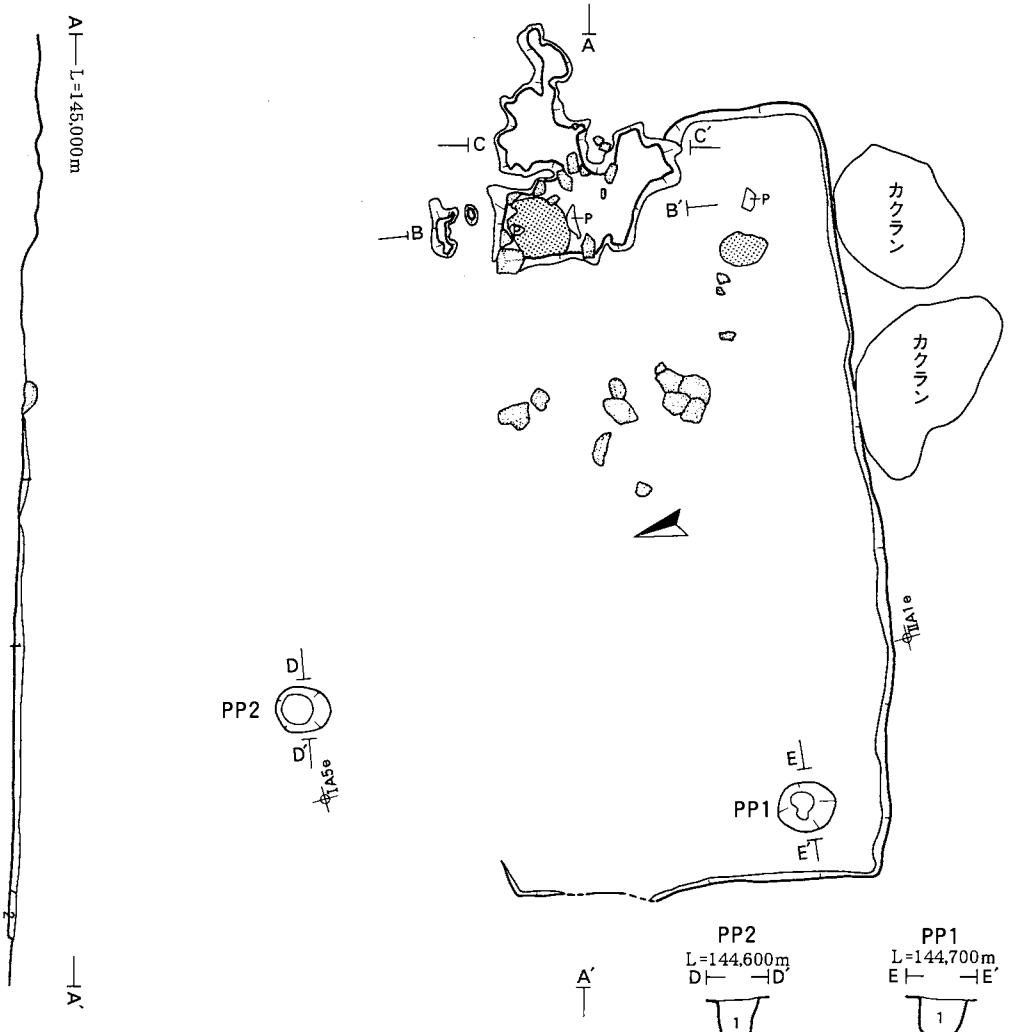
（カマド）東壁中央部南寄りに位置していたと推測される。主軸方向Ｎ－105°－Ｅである。カマド本体は、残存状態が不良で詳細は不明であるが、芯材となる礫を黒褐色土の粘土質土で覆って構築されていたと思われる。燃焼部は径50×36㎝、厚さ８㎝を測る。焼成は良好である。

（煙道部・煙出部）　削平が著しいことから詳細は不明である。

遺物（第67図・写真図版49）

出土状況はカマドからの出土である。土師器の甕３点出土。19・20は非ロクロ成形の土師器の甕である。19は口縁部ヨコナデ・内面ナデ・外面ケズリの調整が施されている。口縁部は底面とほぼ水平に外反すると思われる。20は底面に木葉痕が確認される。

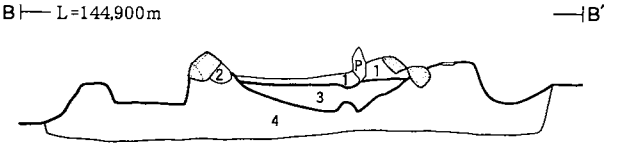
時期　平安時代に属す。



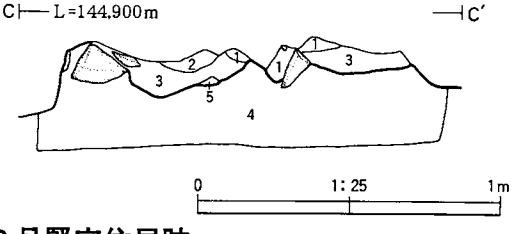
A－A′
1．10YR2/1　黒色　　シルト　粘性やや弱　しまり密（白色のパミスを多く含）
2．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり密

PP1　E－E′　PP2　D－D′
1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性やや強　しまりやや密
（To-H粒を含）

B－B′
1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密
（上部に焼土を含）
2．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり密
（焼土を含）
3．5YR6/8　橙色　　シルト　粘性弱　しまり密（焼土）
4．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中　しまりやや密
（白色パミスを粒状に含）



C－C′
1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　　しまりやや密
（上部に焼土粒を含）
2．5YR6/8　橙色　　シルト　粘性弱　　しまり密（焼土）
3．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密
（To-Hを含）
4．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中　　しまりやや密
（白色パミスを粒状に含）



第14図　3号竪穴住居跡

4号竪穴住居跡

遺構（第15図・写真図版13）

（位置）　ⅡＢ４ｅグリッドに位置する。

（検出・精査状況）　１号畠作耕地の復旧痕跡を精査後、Ⅱ層下面で検出した。

（埋土）　上位は１号畠作耕地の復旧痕跡である。埋土は黒褐色土が主体となる。Ｔｏ－ａは含まれない。自然堆積と思われる。

（平面形・規模）　調査区境界付近で検出したため、詳細については不明であるが、方形を呈すると思われる。計測可能な部分で東西軸4.55ｍを測る。

（壁）　やや外傾する。壁高は29～36㎝を測る。

（柱穴）　検出されなかった。

（床）Ⅷ層を床としている。ほぼ平坦でかたく締まる。貼り床は確認されなかった。

（カマド・煙道部・煙出部）　調査区外に存するため不明。

遺物（第67図・写真図版49）

出土状況は、床面からの出土はなく。埋土中からの出土である。埋土上位面から出土した土器の中で、１号畠作耕地の復旧痕跡から出土した遺物と接合したものがある（25）。出土量は土師器・須恵器の坏・甕合わせて小コンテナ約１箱弱である。21～26はロクロ成形の土師器の坏である。埋土下位から出土した21～23は内面が黒色処理されず、調整はロクロ痕のみである。21は底面に「玉」と記された墨書土器である。埋土上位から出土した24～26は内面に黒色処理が施される。25は体部下端にロクロ成形後ナデによる再調整が施されている。26の底面に墨書が記されているが、不明瞭で肉眼では解読できなかった。27・28は非ロクロ成形の土師器の甕で27は口縁部ヨコナデ・内外面ハケメによる調整が施されている。29はロクロ成形の土師器の甕でロクロ成形後、外面にナデ調整が施されている。内面も不鮮明であるが、ロクロ成形後、ナデ調整が施された感がある。30は須恵器の坏である。本遺跡では１点のみの出土である。

時期　遺物番号17が２号竪穴住居跡の床面から出土した破片と本遺構の埋土中位付近から出土した破片が接合した。このことから、２号竪穴住居跡廃絶直前に４号竪穴住居跡はすでに廃絶され、埋土が埋まりかかっていたことと思われる。このことから、２号竪穴住居跡より４号竪穴住居跡が時間的に先行すると推測される。Ⅱ群に属す。

5号竪穴住居跡

遺構（第16～18図・写真図版１・14・15）

（位置）　ＩＣ５ｃ・ⅡC１ｃグリッドに位置する。

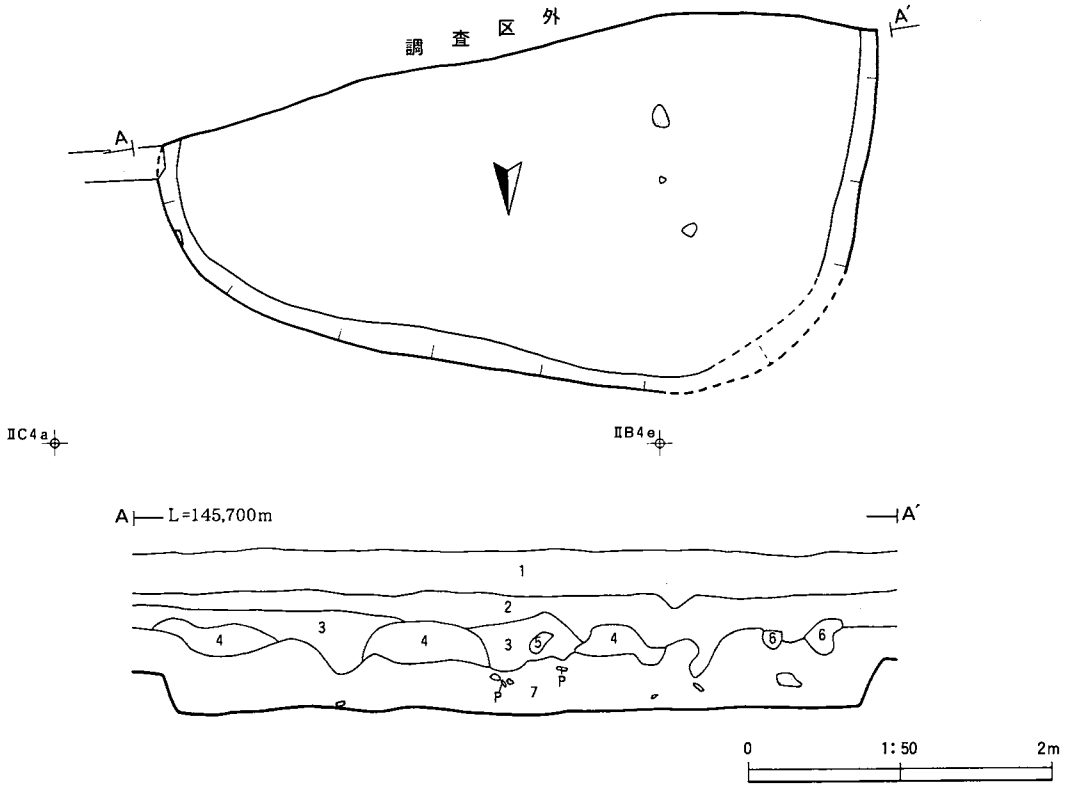
（検出・精査状況）　２号畠作耕地の復旧痕跡を精査後、Ⅴ層上面で検出した。

（平面形・規模・床面積）　平面形は方形を呈する。東壁約4.5ｍ、西壁約4.4ｍ、南壁約4.15ｍ、北壁4.１ｍである。床面積は約18.2㎡である。

（埋土）　黒色土を主体とし、ごく微量の十和田ａ降下火山灰粒を含む。自然堆積と思われる。

（壁）　直立ぎみに外傾するが、北壁は強く外傾する。壁高は21～26㎝である。

（柱穴）　５基検出された。規模はＰＰ１が径29×28㎝、深さ19㎝、ＰＰ２が径65×43㎝、深さ38㎝、ＰＰ３が径43×25㎝、深さ28㎝、ＰＰ４が径25×23㎝、深さ49㎝、ＰＰ５が径34×25㎝、深さ32㎝、ＰＰ６が70×62㎝、深さ39㎝である。埋土は黒色土・黒褐色土を主体とし、柱穴痕跡は認められなかった。



A－A´
1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（耕作土）
2．10YR2/1　黒　　シルト　粘性やや弱　しまりやや密
3．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり密（To-a粒を少量含・・畠復旧痕跡）
4．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり密（To-aをブロック状に多量に含・畠復旧痕跡）
5．To-a（黒色土少量含）
6．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり中（To-aブロック状に含・畠復旧痕跡）
7．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中　　しまり中（10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト含）

第15図　4号竪穴住居跡

（土坑）　4基検出された。規模は1号土坑が68×（61）㎝、深さ38㎝、2号土坑が75×67㎝、深さ34㎝、3号土坑長軸95㎝、深さ10㎝、4号土坑91×88㎝、深さ9㎝である。2号・3号土坑が重複するが新旧は不明である。

（土坑と柱穴）　ＰＰ3・5と3・4号土坑については、3・4号土坑は床面からの深さが約10㎝弱と浅く、共に底面にはＰＰ3・5が確認された。柱穴と土坑はセットの様相を呈していることから、4・5号土坑は柱穴に伴う遺構の可能性が考えられる。

（床）　Ⅴ層を床とする。ほぼ平坦で、かたく締まる。ほぼ全面に貼り床が施される。

（出入り口）　カマドの南側に位置する。ＰＰ2とＰＰ6間にスロープ状の傾斜を持つ。ＰＰ2とＰＰ6間は約1.1ｍを測る。

（カマド）　東壁中央部からやや北よりに構築されている。袖部は径61×16㎝（南側）と径50×13㎝（北側）の数個の縦長の礫を床面に設置し、褐灰色の粘土質土で覆って構築されている。燃焼部は径52×42㎝、焼土の厚さは約10㎝を測る。焼成は良好である。燃焼部上面に位置する礫はカマドの天井石が崩落したものと思われる。

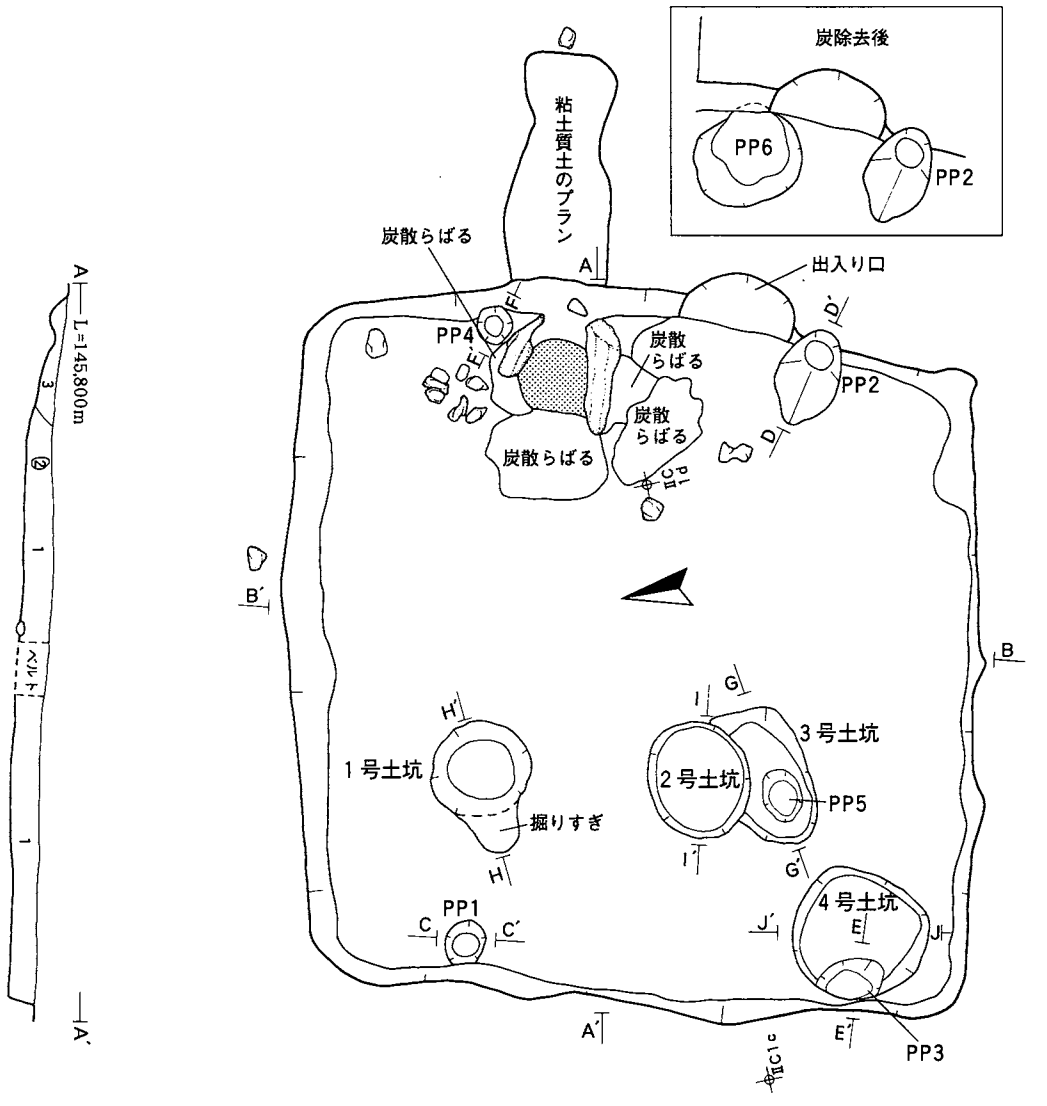
（煙道部・煙出部）　掘り込み式である。主軸方向はＮ－105°－Ｅである。煙道部は31～54㎝の平たい礫を縦にし、側壁を2枚重ねした礫と礫の間、もしくは礫頂部に、にぶい黄褐色粘土質土と黒褐色土で覆い構築されている。煙出部付近では径40×38㎝、厚さ5㎝の天井石が原位置をとどめていた。他の煙道部内にある礫は天井石が崩れたものと考えられる。残存していた天井石を除去すると、煙出部底面で土師器甕が出土した（遺物番号37・38）、これらの土器は煙道部から煙出部ピットへ煙を導く機能をしていたと思われる。

煙道部の長さは約1.6ｍ、幅は49～62㎝である。底面は、燃焼部から煙出部にかけて緩やかに上がり、煙道開始部から煙出部ピットまでほぼ平坦で煙出部付近で傾斜する。

遺物（第68図・写真図版50）

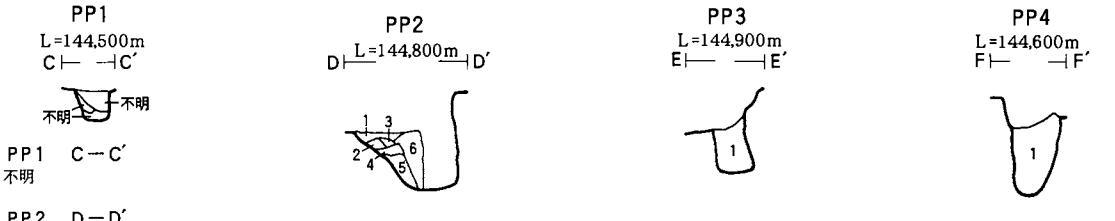
出土状況は、カマド本体・周辺・出入り口付近からまとまって出土した。出土量は土師器坏・甕・須恵器蓋？合わせて中コンテナ約1箱分である。31はロクロ成形の土師器の坏である。内面は非内面黒色処理で、ミガキによる調整が施されている。外面はロクロ痕のみで、回転糸切り後再調整は施されていない。32は須恵器の蓋もしくは皿と思われる。皿とした場合口唇部（基部）が逆「く」の字状に内側に屈曲する。
蓋とした場合ツマミがなく、回転糸切り痕が認められるのみである。蓋として掲載した。33～38は非ロクロ成形の土師器の甕である。口縁部はヨコナデ・内面はハケメ・ナデ・ケズリのそれぞれの調整が施されている。外面はケズリ・ナデそれぞれの調整が施されている。33・36については頸部に明瞭ではないが段を有する。37・38は煙道部天井石除去後、煙道内部から出土した遺物である。本遺構の他の土器と比較して、すすの付着が際立つ。

時期　Ⅳ群に属す。



A－A′
1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり中（白色のパミスを含）
2．To-a（粒状堆積）
3．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり中（10YR5/4にぶい黄褐色粒を多く含）

B－B′
1．10YR2/1　黒色　シルト　粘性やや弱　しまり中
2．10YR2/1　黒色　シルト　粘性やや弱　しまり中
（10YR5/4にぶい黄褐色のブロックを多く含）



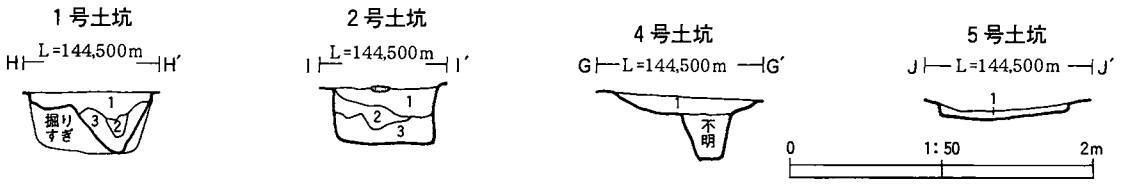
PP1　C－C′
不明

PP2　D－D′
1．10YR2/1　黒色　シルト　粘性強　しまり疎（To-cuをブロックで含）
2．10YR2/1　黒色　シルト　粘性強　しまり疎
（10YR5/4にぶい黄褐色土をブロックで含）
3．10YR2/1　黒色　シルト　粘性強　しまり疎
（10YR5/4にぶい黄褐色土をブロックで2より多く含）
4．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり疎（3に同じ。）
5．10YR2/1　黒色　砂質シルト　粘性弱　しまり疎
6．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性強　しまり疎

PP3　E－E′
1．10YR2/1　黒色　シルト　粘性やや弱　しまりやや疎

PP4　F－F′
1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性強　しまり疎（To-cuを含）

第16図　5号竪穴住居跡(1)

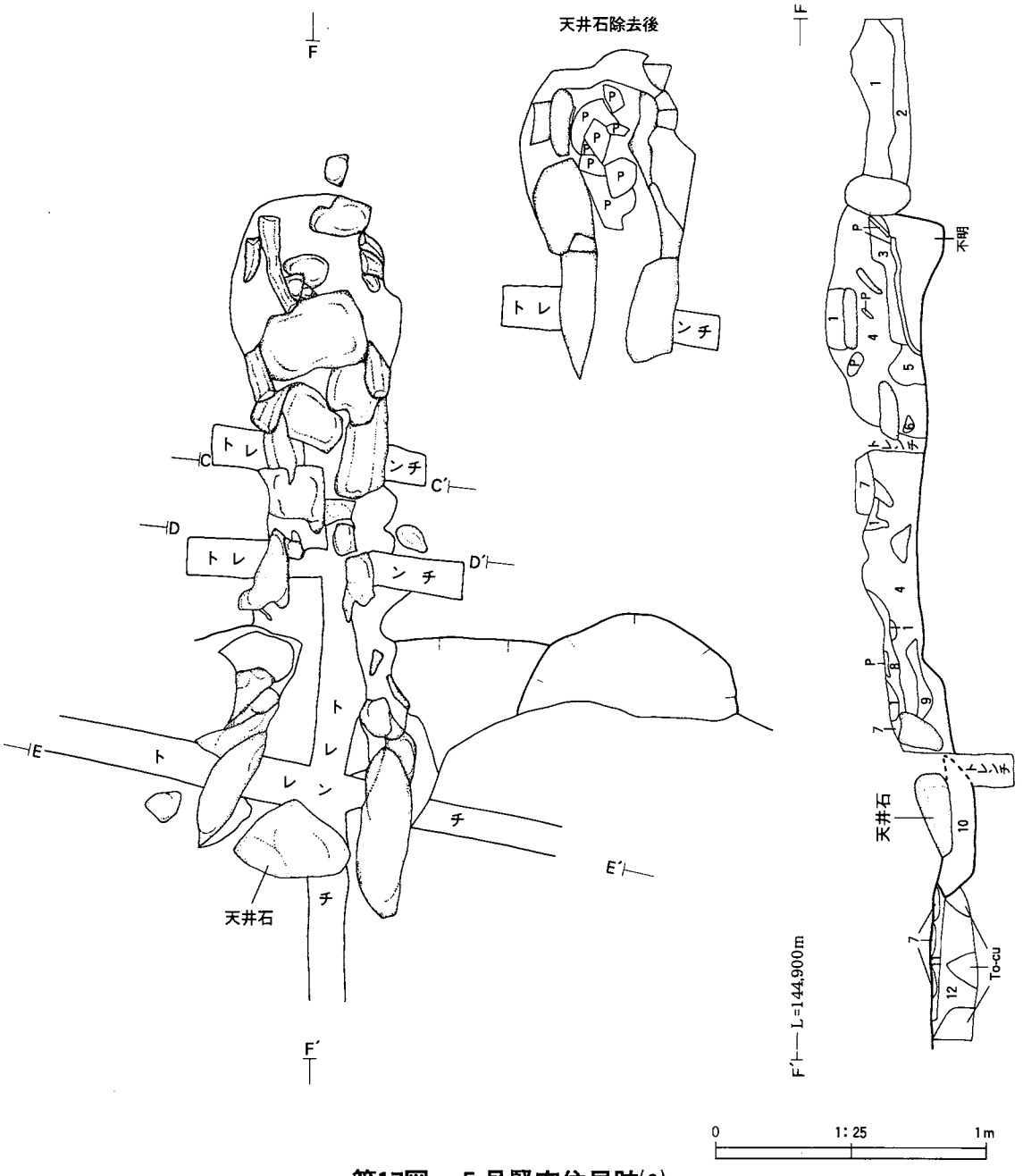


1号土坑　H－H′
1．10YR2/1　黒色　シルト　粘性中　しまり疎（10YR5/4にぶい黄褐色土を含）
2．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性強　しまり疎（To-cuを粒状に含）
3．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性強　しまり疎（上層にTo-cu、下層にTo-Hを含）

4号土坑　G－G′
1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや疎（To-cuブロック含）

2号土坑　I－I′
1．10YR2/1　黒色　シルト　粘性強　しまり疎（10YR5/4にぶい黄褐色土を含）
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性強　しまり疎（To-cuを多く含）
3．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性強　しまり疎（下層にTo-Hを含）

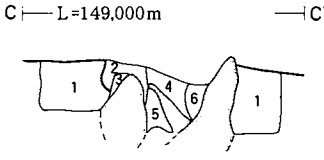
5号土坑　J－J′
1．10YR2/1　黒　シルト



第17図　5号竪穴住居跡(2)

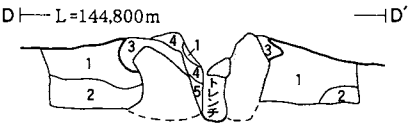
F′－F

1．10YR2/1　黒色　シルト　粘性やや弱　しまり中
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密
3．5YR5/8　明赤褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや疎（焼土）（黒褐色土を含）
4．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや疎
5．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや疎（褐灰色土含）
6．5YR4/8　赤褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや疎（焼土）
7．10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性強　しまり密（黒褐色土粒を含）
8．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまりやや密（焼土粒を含）（にぶい黄褐色土を8より多く含）
9．10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性弱　しまり密（焼土を含）
10．5YR7/8　橙色　砂質シルト　粘性弱　しまり密（焼土）
11．10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性中　しまりやや疎（炭化物を多量に含）
12．10YR2/1　黒色　シルト　粘性中　しまりやや疎（10をブロック状に含）



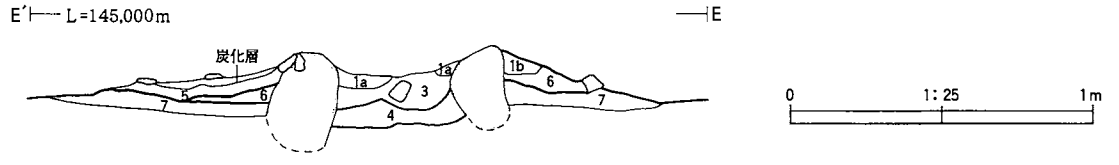
C－C′

1．10YR2/1　黒色　シルト　粘性中　しまり中（To-cu含）
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中
3．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性やや強　しまり中
4．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中（To-cuを少量含）
5．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性やや強　しまりやや疎（10YR5/4にぶい黄褐色土を下層に含）
6．10YR2/1　黒色　シルト　粘性強　しまり疎（4を少量含）



D－D′

1．10YR2/1　黒色　シルト　粘性やや弱　しまりやや疎
2．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（10YR5/4にぶい黄褐色で砂質シルトの粒を含Ⅳ層）
3．10YR5/2　灰黄褐色　粘土質シルト　粘性強　しまり密（黒色土を含）
4．5YR4/8　赤褐色　シルト　粘性弱　しまり密（焼土、暗褐色土粒を含）
5．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（焼土粒を含）



E－E′

1a．5YR4/8　赤褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（焼土）
1b．色調は1aと同じだが、崩落土と思われる。
2．5YR4/8　赤褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（焼土）
3．10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性やや弱　しまりやや疎（炭化物を多量に含　焼土をごく少量含）
4．10YR5/8　明赤褐色　砂質シルト　粘性やや弱　しまり密（燃焼部）
5．10YR4/8　赤褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（黒褐色土を含）
6．10YR4/1　褐灰色　シルト　粘性やや強　しまりやや密
7．10YR4/1　褐灰色　シルト　粘性やや強　しまりやや密（10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトのブロックを含　貼り床）

第18図　5号竪穴住居跡(3)

6号竪穴住居跡

遺構（第19～21図・写真図版15・16）

（位置）　0ⅡⅠ5a・5bグリッドに位置する。

（検出状況）　削平によりⅠ～Ⅲ層は存在していなかったため、Ⅳ層上面で検出した。プランは黒褐色土とTo－aブロックのまとまりとして確認した。

（平面形・規模・面積）　平面形は方形を呈する。東壁3.49m、西壁3.35m、南壁3.4m、北壁3.0m、床面積は約10.1㎡である。

（埋土）　概ね黒褐色土の2層からなる。検出面から床面までTo－aブロックを多量に含む。自然堆積か人為堆積か判然としなかった。

（壁）　やや直立ぎみに外傾する。壁高は、東壁は南北方向から31.2～50.6cm、西壁は南北方向から32.2～45.5cm、南壁は東西方向から50.6～31.2cm、北壁は25cmを測る。

なお、南東壁側に棚状の段が残存していることから、削平されたと考えると、四壁に棚状の張り出しが存在した可能性が考えられる。

（柱穴）　9基検出された。規模はPP1が径35×40cm、深さ26.8cm、PP2が径29×32cm、深さ25.6cm、PP3が径25×29cm、深さ14.4cm、PP4が径26×28cm、深さ60.9cm、PP5が径52×69cm、深さ38.2cm、PP6が径37×46cm、深さ55cm、PP7が径21×46cm、深さ9.5cm、PP8が径31×32cm、深さ23cmである。

埋土は、To－aを含むものと含まれないものに大別される。To－aを埋土に含む柱穴は、PP4・P

Ｐ７・ＰＰ８・ＰＰ９である。いずれの柱穴にも柱穴痕跡は認められなかった。ＰＰ１が棚状の張り出し部に位置する。ＰＰ２・ＰＰ４が壁柱穴である。他の柱穴は住居の外側に位置する。本遺構北東側は何度かにわたって検出を行ったが、柱穴は検出されなかった。

（床）　Ⅷ層を床とする。ほぼ平坦でかたく締まる。カマド周辺を中心に貼り床が施されている。

（カマド）　東壁中央部からやや南寄りに構築されている。残存状況は袖部が若干確認出来る。カマド北側袖部は、土師器甕片を芯材として黒褐色土を主体に覆って構築されていたものと思われる。南側袖部については、残存状況が良好ではなく詳細は不明である。

カマドの燃焼部については、支脚が設置されていた。支脚は上下２つの支脚で構築されている。上部にあるものを１号支脚・下部にあるものを２号支脚と呼ぶこととする。２号支脚設置後、土を覆って、その上に１号支脚を乗せる構築方法がとられる。燃焼部は径61×60㎝、厚さは29㎝を測る。焼成は良好である。

（煙道部・煙出部）　刳り貫き式と思われる。主軸方向はＮ－100°－Ｗである。天井部は削平により消失しているため不明である。平面形は煙道開始部から煙出部にかけてくびれ、煙出部で広がる。煙出部径は0.77×0.95ｍ、煙道部の長さは約0.6ｍを測る。検出面から煙道部底面の深さは0.64ｍを測る。煙道部底面は、燃焼部から煙出孔底面まで緩やかに下る。煙出部下部に径45×29㎝の加熱を受けた礫が確認された。

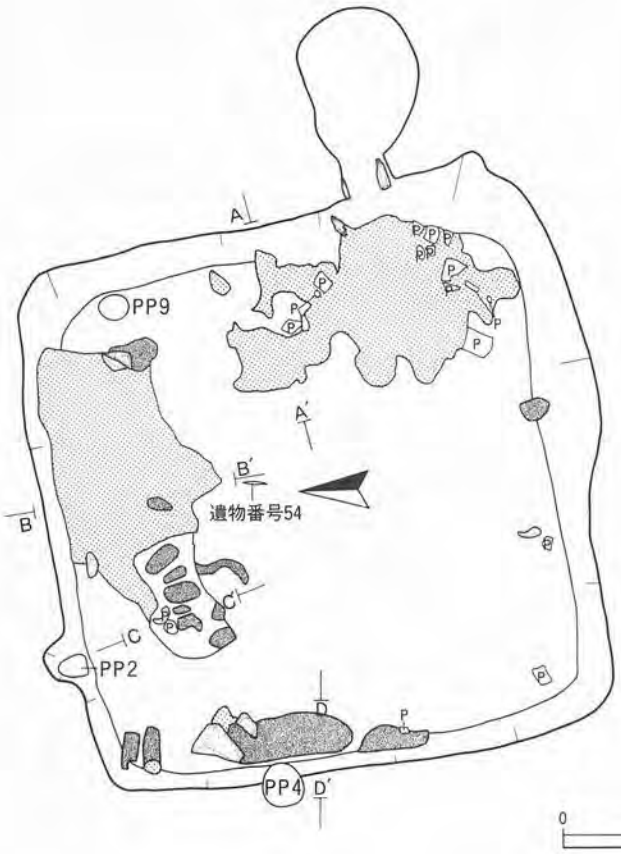
（焼失）　炭化材・焼土塊が、カマド・北壁側を中心に西壁に散在して検出された。セクションＡ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'付近の焼土塊は４～11㎝の厚さで、炭化材・炭化物を覆っている。焼土塊上面にＴｏ－ａが散在して見られる。炭化材・炭化物の下は炭化物を多量に含む黒色土が形成され、黒色土中にはＴｏ－ａが粒状・ブロック状に含まれる。セクションＣ－Ｃ'付近は、上面に炭化材が確認される。炭化材の幅は５～14㎝である。炭化材下は炭化物を多く含む黒色土で形成され、黒色土中に厚さ２～12㎝の焼土塊が認められる。また、Ｔｏ－ａ粒・ブロックが多量に含まれる。住居西壁側の炭化材は床面直上に散在してみられ、太い材は28㎝を測る。炭化材の樹種はスギ・ナラ・クリ・ケヤキである。

遺物（第69・70図・写真図版50・51・52）

出土状況は　焼土塊・炭化材上面・カマド周辺を中心にまとまって出土している。カマド上面に焼失による焼土塊面の土器と床面の土器が接合した（40・51）。出土量は、土師器の坏・甕・須恵器甕片合わせて、中コンテナ約１箱分・鉄製品１点である。坏は埋土上位から２点・下位から１点出土しているが、39を実測掲載し、他の２点は小破片のため割愛した。

39は埋土上位からの出土で、ロクロ成形の土師器の坏で内外面の調整はロクロ痕のみで、黒色処理は施されていない。40～44は非ロクロ成形の土師器の甕である。　口縁部については40・41と比較して、42・43は口縁部の幅が１～2㎝と短く、わずかに外反する。40は一見ロクロ成形を施したと思われる程口縁部から胴部付近まで横方向のナデ調整が均一である。40以外の非ロクロ成形の土師器の甕は、40と比較すると雑な調整が施されている。42はカマドの袖を構成するものである。口縁部内面はハケメによる調整が施されている。45は１号支脚である。46は２号支脚である。46は底面に砂底を持つ。47～52はロクロ成形の土師器の甕である。口縁部から胴部上半部までロクロ成形後、外面は胴部上半部から下半部までケズリによる調整が施されている。内面は頸部付近から胴部上半部までロクロ成形後ナデ調整が施されている。須恵器は床面とカマドから２点出土している。53は外面にタタキ・内面に放射状の当て具痕が認められる。54は埋土下位面から出土した鉄製品である。

時期　Ⅴ群に属する。



0　1:50　2m

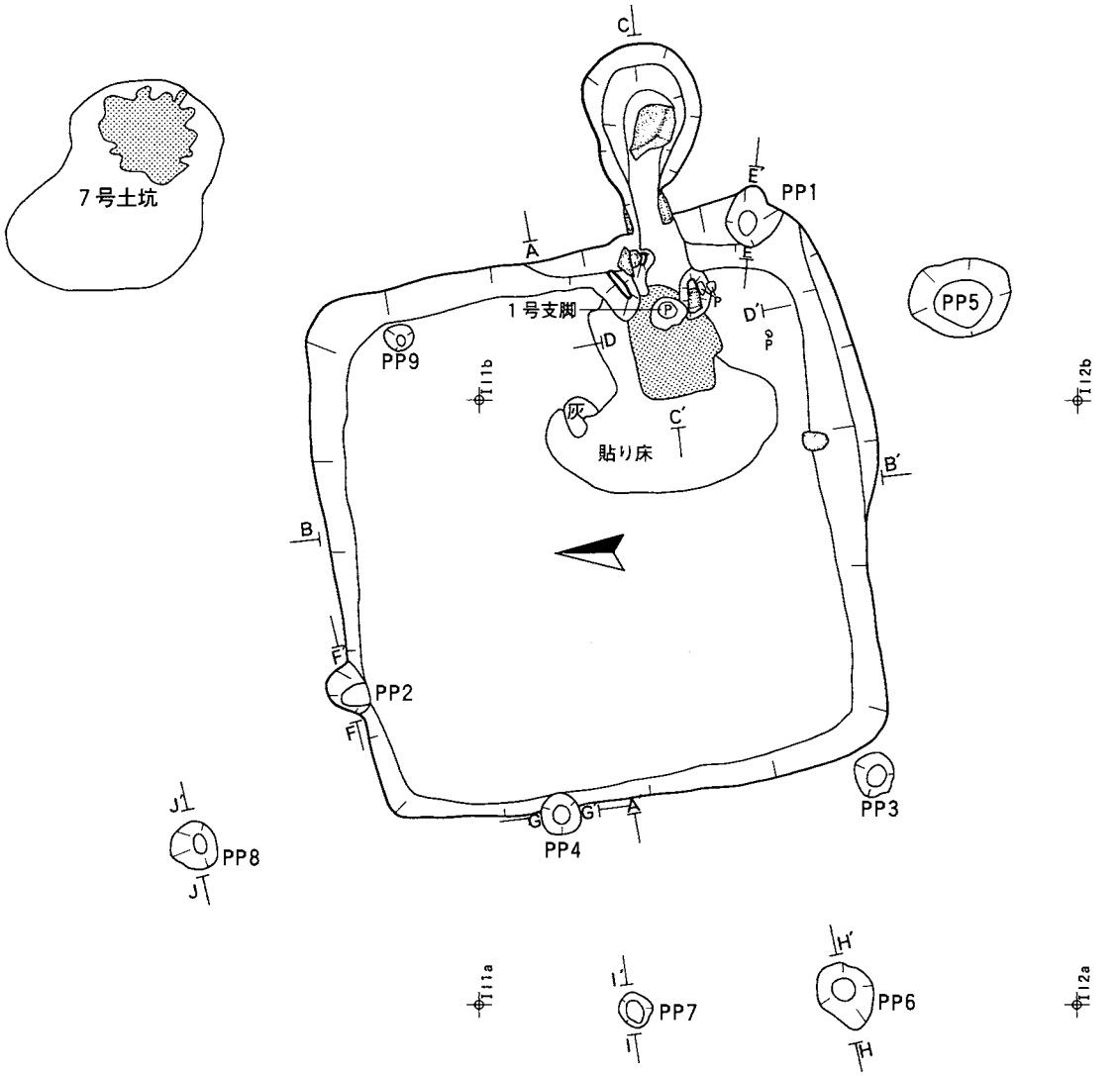
A－A′ B－B′
1．7.5YR5/6　明褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（焼土）
2．10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性弱　しまりやや密（炭化物多量に含）

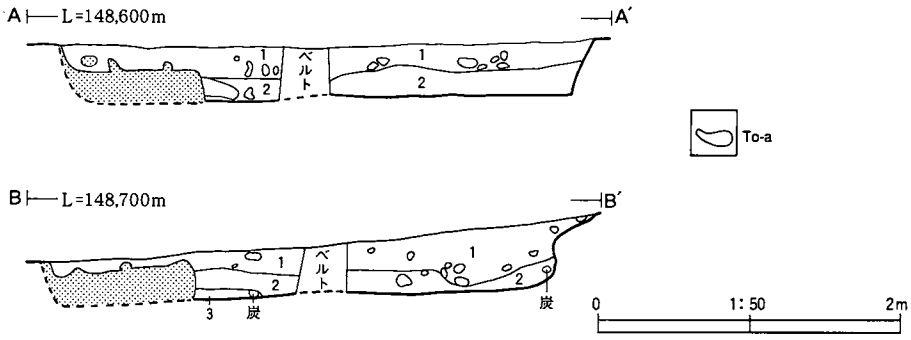
C－C′
1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密
2．7.5YR5/6　明褐色　シルト　粘性弱　しまり中（焼土・炭化物・To-a含）

D－D′
1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（炭化物多量に含）

0　1:25　1m

第19図　6号竪穴住居跡(1)

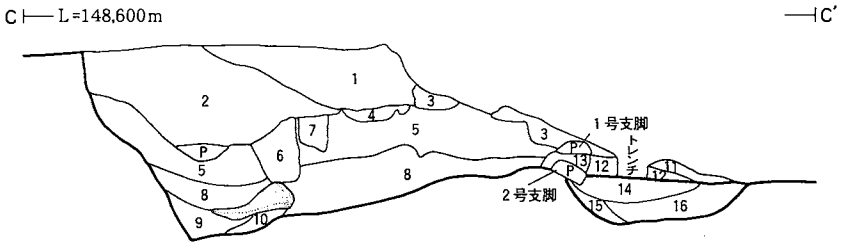

7号土坑
PP1
PP2
PP3
PP4
PP5
PP6
PP7
PP8
PP9
1号支脚
貼り床
灰
P
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
H
H′
I
I′
J
J′
Ⅱ11a
Ⅱ11b
Ⅱ12a
Ⅱ12b



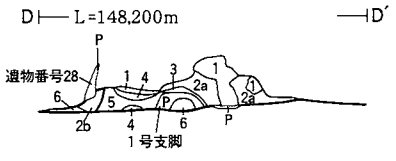
A－A′ B－B′

1．10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密（To-a粒・ブロック多量に含。焼土粒・炭化物を含）
2．10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密（To-a粒・ブロック含。焼土粒・炭化物を含）
3．10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり疎（炭化物を多量に含）

第20図　6号竪穴住居跡(2)

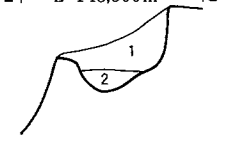


C－C′
1．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎
2．10YR2/1　黒　シルト　粘性弱　しまりやや疎
3．10YR4/4　褐色　シルト　粘性中　しまり密（焼土粒・To-a粒含）
4．5YR4/8　赤褐色　シルト　粘性弱　しまり密（焼土）
5．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（焼土粒・To-a粒・サンド含）
6．焼土粒・To-aブロック混合層
7．To-cu（崩落）
8．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（To-aブロック含）
9．不明
10．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり疎
11．焼土（焼失焼土塊）
12．不明
13．焼土（焼成良好）
14．10YR7/3　にぶい黄橙色　シルト　粘性弱　しまり中（燃焼部・灰）
15．5YR4/4　褐色　シルト　To-H面（燃焼部・パミス含）
16．2.5YR5/8　明赤褐色　シルト　粘性弱　しまり密（燃焼部）



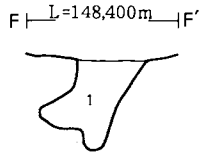
D－D′
1．5YR5/8　明赤褐色　シルト　粘性弱　しまり密（ブロック状の堆積・黒色土少量含・焼失時における燃焼と思われる。）
2．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a粒・焼土粒含）
3．5YR4/8　赤褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（焼成非常に良好）
4．10YR7/6　明黄褐色　砂質シルト　粘性弱　しまり疎（灰と思われる）
5．10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（炭化物を含）
6．7.5YR5/8　明褐色　シルト　粘性弱　しまり密

PP1



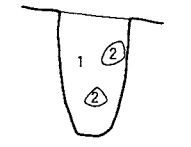
PP1　E－E′
1．10YR2/1　黒　シルト　粘性弱　しまり中
2．10YR6/8　明黄橙色　To-cu（掘りすぎ）

PP2



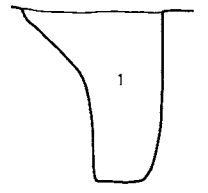
PP2　F－F′
1．10YR2/1　黒　シルト　粘性弱　しまり中

PP4



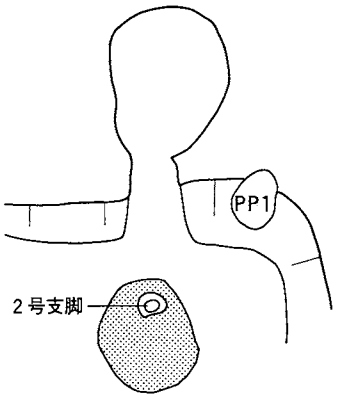
PP4　G－G′
1．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中　しまりやや疎（To-a粒含）
2．To-aブロック

PP6

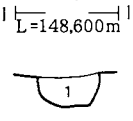


PP6　H－H′
1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密

1号支脚除去後

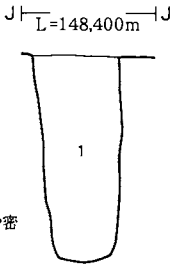


PP7

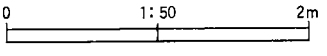


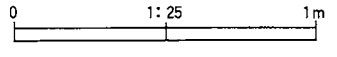
PP7　I－I′
1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a粒ごく少量）

PP8



PP8　J－J′
1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-aブロック状多量に含）





第21図　6号竪穴住居跡(3)

７号竪穴住居跡

遺構（第22・23図・写真図版17・18）

（位置）　ＩＨ２ｂ・ｃグリッドに位置する。

（検出状況）　削平によりⅢ層上面で検出した。Ｔｏ－ａが集中するプランとして確認した。

（重複関係）　８号土坑と重複する。新旧関係は本遺構が截られる。

（平面形・規模・床面積）　形状は方形を呈する。北壁2.98ｍ、南壁2.7ｍ、北壁3.5ｍ、西壁3.3ｍである。床面積は約6.8㎡である。

（埋土）　層は３つに大別される。上位はＴｏ－ａの層状堆積である。中位は黒褐色土・下位は黒色土からなる。中位・下位ともにＴｏ－ＮＢが少量混入している。

（壁）　壁面は、四壁ともに上半部に張り出し部を持つ。この張り出し部の規模は、検出面から張り出し部底面の深さは北壁30㎝、南壁9.5～14.5㎝、東壁8.8～27.0㎝、西壁11.5～26.1㎝、幅は北側26㎝、南側25～60㎝、東側31㎝、西側16～63㎝を測る。底面はⅣ層で、壁開始部から張り出し部壁まで緩やかに立ち上がる。

壁開始部から床面までの壁高は、北壁38㎝、東壁65㎝、南壁64㎝、西壁64.9㎝を測る。直立ぎみにやや外傾する。

（柱穴）　７基検出された。規模はＰＰ１径35×36㎝、深さ29㎝、ＰＰ２径33×31㎝、深さ20㎝、ＰＰ３53×33㎝、深さ10㎝、ＰＰ４径50×47㎝、深さ８㎝、ＰＰ５径16×16㎝、深さ９㎝、ＰＰ６径20×20㎝、深さ27.1㎝、ＰＰ７径21×20㎝、深さ14.3㎝を測る。

埋土はＰＰ１を除いて、暗褐色土の単層からなり、柱穴痕跡は確認されなかった。柱穴痕跡は、Ｖ字状を呈する。柱穴痕跡上面で幅20㎝を測ることから、幅約20㎝の柱材の先端を尖らせて、上屋を構築した可能性が窺える。

（床面）　Ⅷ層を床とする。ほぼ平坦でかたく締まる。ほぼ全面に貼り床が施されている。

（カマド）　北壁中央部からやや東寄りに位置する。カマドは燃焼部を残すのみでカマド本体は残存していなかった。燃焼部は径53×47㎝、厚さ６㎝を測る。焼成は良好である。

（煙道部・煙出部）　削平により天井部は確認されなかった。刳り貫き式と思われる。主軸方向はＮ－348°－Ｅである。検出時に煙出孔部に大きい礫で30×15㎝、小さい礫で10×５㎝の大小数十個の加熱を受けた礫を確認した。礫を除去した後、円状の焼土を確認した。

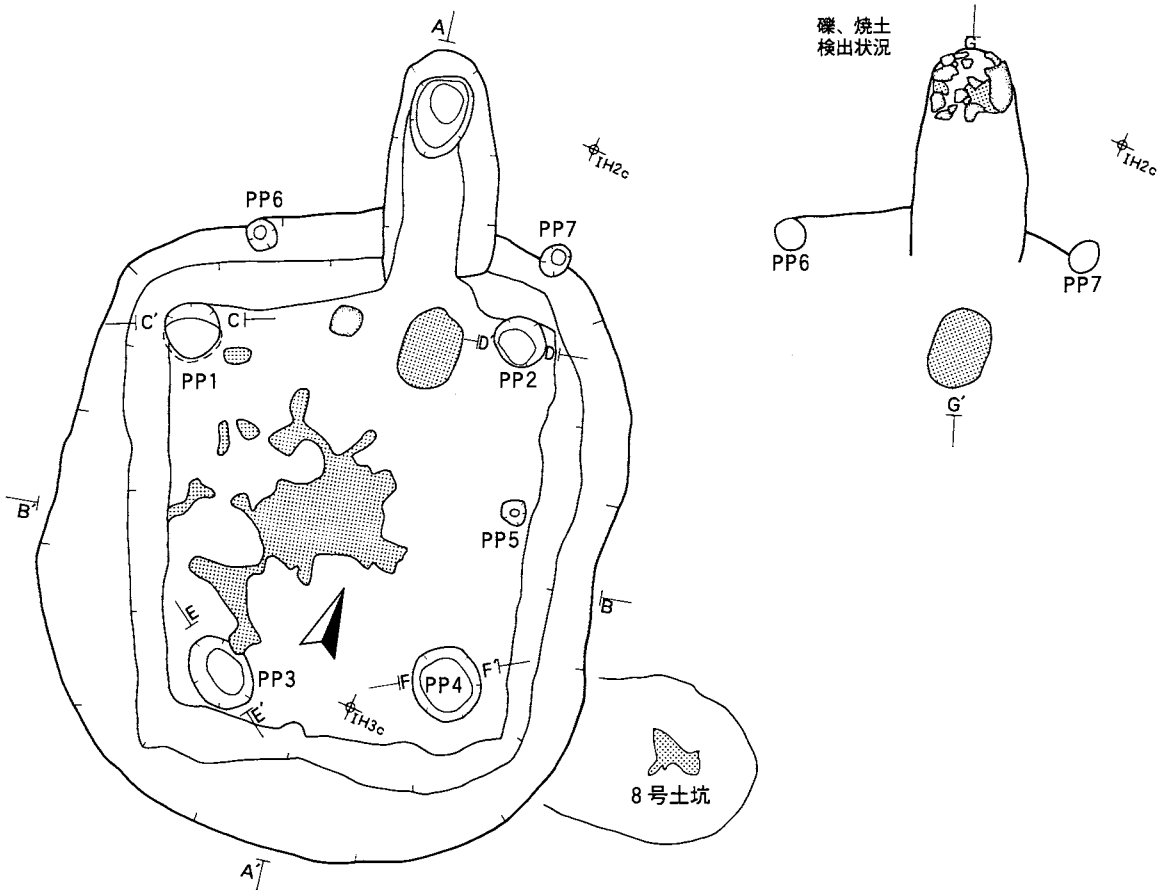
底面は燃焼部から煙出孔にかけて緩やかに下り煙出孔底面で強く傾斜する。規模は煙道開始部から煙出孔までの長さ約1.6ｍ、検出面から煙出部底面の深さ0.82ｍを測る。

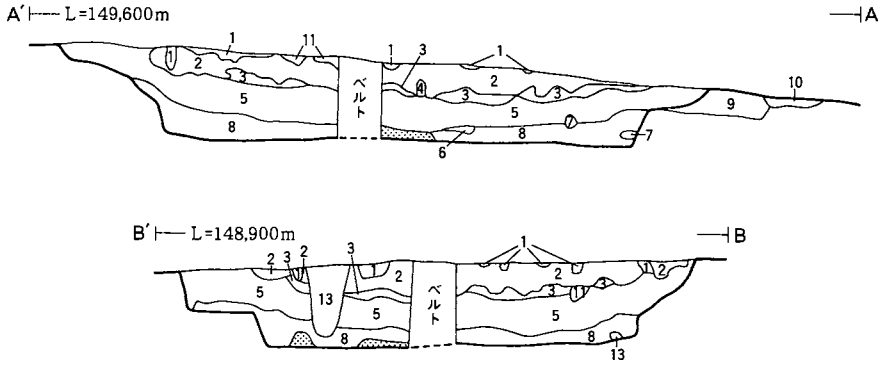
（焼土塊）　床面に焼土塊がアメーバー状に３～14㎝の厚さで形成されていた。上面に明赤褐色の焼土が形成され、その下は、黒褐色土に焼土粒を含む土層が形成されていた。焼土の焼成は６・14号竪穴住居跡焼失焼土塊と比較して良好ではない。炭化材は検出されなかった。

遺物

遺物は床面から土師器甕の胴部小片が１点と煙道埋土から縄文晩期の土器片１点である。土師器は小破片のため割愛した。

時期　Ⅱ群に属す。



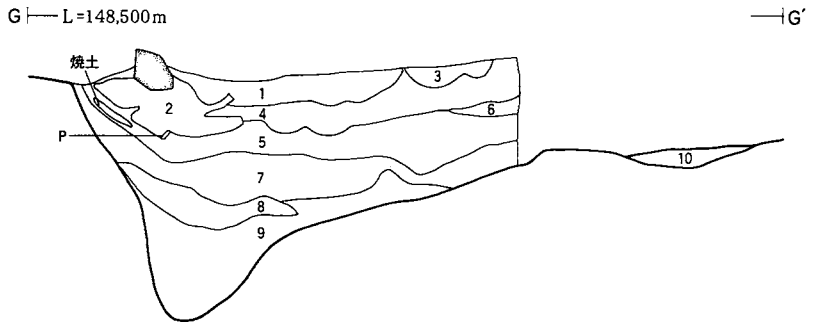


A'—A　B'—B

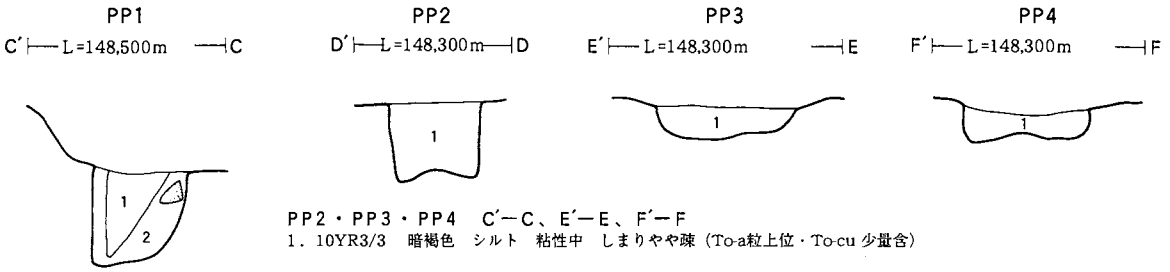
1. 10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a粒状に含）
2. To-a
3. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a粒を少量含）
4. 木の撹乱？
5. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-NB パミス少量含）
6. 10YR2/1　黒（炭化物）
7. To-aブロック
8. 10YR2/1　黒　シルト　粘性弱　しまりやや疎（To-NB パミス少量含）
9. 10YR2/1　黒　シルト　粘性弱　しまりやや密
10. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中（To-a粒少量含）
11. 10YR2/2　黒褐色（To-a多量に含）
12. 崩落土
13. 10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（To-a粒状・ブロック状に含・ピット）

0　1:50　2m

第22図　7号竪穴住居跡(1)

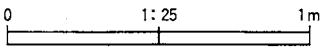


G－G′
1．10YR1.7/1 黒色土 シルト 粘性やや弱 しまりやや密
2．10YR4/6 褐色 シルト 粘性中 しまり中（焼土）
3．10YR5/8 黄褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密（焼土）
4．10YR6/2 灰黄褐色
5．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密（焼土ブロックを含）
6．10YR2/1 黒 シルト 粘性中 しまり中
7．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎（To-cu を微量に含）
8．10YR4/6 褐色 シルト 粘性中 しまり中（To-cu 多量に含）
9．10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎（To-cu を微量に含）
10．5YR5/8 明赤褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり密（燃焼部）



PP2・PP3・PP4 C′－C、E′－E、F′－F
1．10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中 しまりやや疎（To-a粒上位・To-cu 少量含）

PP1 D′－D
1．10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎
2．10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中 しまりやや密（To-NB パミス含）



第23図　7号竪穴住居跡(2)

8号竪穴住居跡

遺構（第24・25図・写真図版18・19）

（位置）　ＩＨ１ｂグリッドに位置する。

（検出状況）　Ⅱ層上面で検出した。Ｔｏ－ａが集中するプランとして確認した。

（平面形・規模・床面積）　排水パイプ設置時の撹乱により、壁が破壊されているため詳細については不明である。平面形は、方形を呈すると思われる。南壁4.05ｍ、東西軸5.36ｍを測る。床面積約（11.3）㎡である。＊（　）は推定値

（埋土）　Ｔｏ－ａ粒・ブロックを含む黒褐色土を主体とする。

（壁）　前記した撹乱により、壁が破壊されているが、４壁ともに壁上半部が棚状に張り出すと推測される。

この張り出し部の規模は、検出面から張り出し部底面の深さは、東壁は11.6～20.7㎝、南壁は7.7～15.8㎝、西壁は13.6㎝、幅は、東壁40～50㎝、西壁30～40㎝、南壁約30㎝を測る。底面はⅣ層で、壁開始部から張り出し部壁まで緩やかにち上がる。

壁開始部から床面までの壁高は、東壁34㎝、南壁39.4㎝、西壁39.2㎝を測る。壁は直立ぎみにやや外傾する。

（床面）　Ⅵ層を床とする。ほぼ平坦で固く締まる。ほぼ全面に貼り床が施される。床面・貼り床内にはＴｏ－ａが散在して確認された。

（柱穴）　23基検出した。埋土は黒色土及び黒褐色土の単層からなり、柱穴痕跡は確認されなかった。柱穴の深さは８～18cmが主である。規模については、第24図に表にして示した（本遺構に伴なわない柱穴の可能性も否めない）。

（カマド）　北壁やや東寄りに構築されている。残存状況は良好ではない。カマド本体は、礫を芯材として黄褐色の粘土質土で覆って構築されている。黄褐色の粘土質土の下面には、Ｔｏ－ａ粒を含む黒褐色土が構成される。カマドを構築する以前に、カマド底面に貼り床が施される。Ｔｏ－ａ降下後に構築されたものと思われる。　燃焼部は径50×50cm、厚さ18cmを測る。焼成は良好である。

（煙道部・煙出部）　前述した撹乱により、消失しているため不明である。

（焼土塊）　竪穴住居跡のプランを確定後、掘り下げる段階で床面より約10cm高い面で加熱を受けた礫・焼土・土器片を確認した。大きい礫で径45×28cm、小さい礫で13×10cmの礫が大小30数個確認された。礫・焼土は、住居北東側に集中し、カマド本体を覆っている。礫と土器を除去後、径141×101cmの焼土塊が確認された。焼土は約６cmの厚さで形成されていた。焼成は良好ではない。

遺物（第71・72図・写真図版52・53）

出土状況は、焼土塊・カマド中心に出土した。出土量は土師器の坏３点・甕合わせて中コンテナ約１箱分弱である。55～57はロクロ成形の土師器の坏及び高台付坏である。55はカマドから出土した。内面黒色処理が施されているが、部分的に黒色処理が消失している。焼土塊形成時・カマド使用時による二次加熱によるものと思われる。回転糸切り後、体部下付近にナデ調整が施されている。56・57は、埋土上位～中位で出土した。56は回転糸切り後の再調整は施されていない。57は高台付坏の高台である。58・59は非ロクロ成形の土師器の甕である。59に比して58は内面ハケメによる調整で、全体に丁寧な調整が施されている。60～64は、ロクロ成形の土師器の甕である。口縁部から胴部上半付近まで、ロクロ成形後、内面は頸部から胴部上半までナデ調整、外面は胴部上半部付近をケズリによる調整が施されている。胴部下半部は内面ナデ・外面ケズリによる調整が施されている。

時期　Ⅳ群に属す。

９号竪穴住居跡

遺構（第26～28図・写真図版19・20）

（位置）　０ＩＪ３ａグリッドに位置する。

（検出状況）　Ⅱ層上面で検出した。周辺と比較して土器片（土師器）が集中している範囲に、幅約15cm、長さ５～８ｍ、深さ10～20cmのトレンチを６ケ所設定後、壁を確認した。土器片が集中する部分にベルトを設定し、掘り下げを進めたところ竪穴住居跡の床面を確認した。床面確認後、床面を頼りに壁面を確認した。

（平面形・規模・床面積）平面形は方形を呈する。東壁4.0ｍ、西壁4.7ｍ、北壁3.25ｍ、南壁3.7ｍ、床面積は約9.3㎡である。

（埋土）　黒褐色土にＴｏ－ａをブロック状に含む。黒褐色土の色調・Ｔｏ－ａ含有量で、５層に細分される。自然堆積と思われる。

（壁）　壁面は、三壁の上部に張り出し部を持つ。張り出し部の検出は張り出し部に埋まったＴｏ－ａの含有量が本遺構周辺のⅡ層面のＴｏ－ａ含有量と比較すると本遺構が多いことから、Ｔｏ－ａの含有量を比較しながら精査を行った。黒色土が壁となることから、明瞭に壁を確認できた部分（北壁）と若干不明瞭な部分（南・西壁）がある。東壁については張り出し部が存在する可能性があったが、明確に形状を把握するこ

とが出来ず、恣意的な精査になると考え、明確に確認できる部分で平面図を作成した。東壁にも張り出し部を持つ可能性があったと思われる。

この張り出し部の規模は、検出面から底面までの深さは、北壁4.7～10.0cm、南壁9.2～11.5cm、西壁10.0～14.8cm、幅は北壁29cm、西壁18～35cm、南壁40～74cmを測る。底面はⅢ層で、緩やかに上がり壁部で直立ぎみに立ち上がる。

壁開始部から床面までの壁高は、北壁67.6～76.6cm、東壁70.3cm、南壁82.0～104.0cm、西壁79.2～91.8cmを測り東壁は外傾する。他の壁はほぼ直立ぎみに立ち上がる。

2号カマド煙道部底面を2号カマド使用時の床面と想定すると、2号カマド使用時の検出面から床面の壁高は約60cmと考えられる。

（床面）　2号カマドを廃棄して、1号カマド構築する際To－Hまで掘り込み、約20cmの厚さで全面に貼り床を施している。貼り床は黒褐色土を主体とし、明黄褐色土の粘土質ブロック（To－H）を多量に含み、その中にTo－aの小ブロックが混在する。本遺跡の竪穴住居跡の中で貼り床の厚さが1番厚い。床面は南側が若干低くなる。2号カマド煙道開始部底面から床面の比高を考えると、2号カマド使用時の床面の高さは、1号カマド使用時の床面より、約15cm高かったことが考えられる。2号カマド廃棄後・1号カマド構築前に床面を約30～40cm掘り下げ貼り床を施し、1号カマドを構築したものと推測される。

（柱穴・ピット）　貼り床を剝がした面で10基検出した。規則性がなく、埋土はTo－a・To－Hを含む黒褐色土で、柱穴痕跡は認められなかった。また、煙道部付近・To－H面とTo－a面境界面で合わせて3基検出した。本遺構に伴うか判断できなかった。第28図に規模を表にして示した。

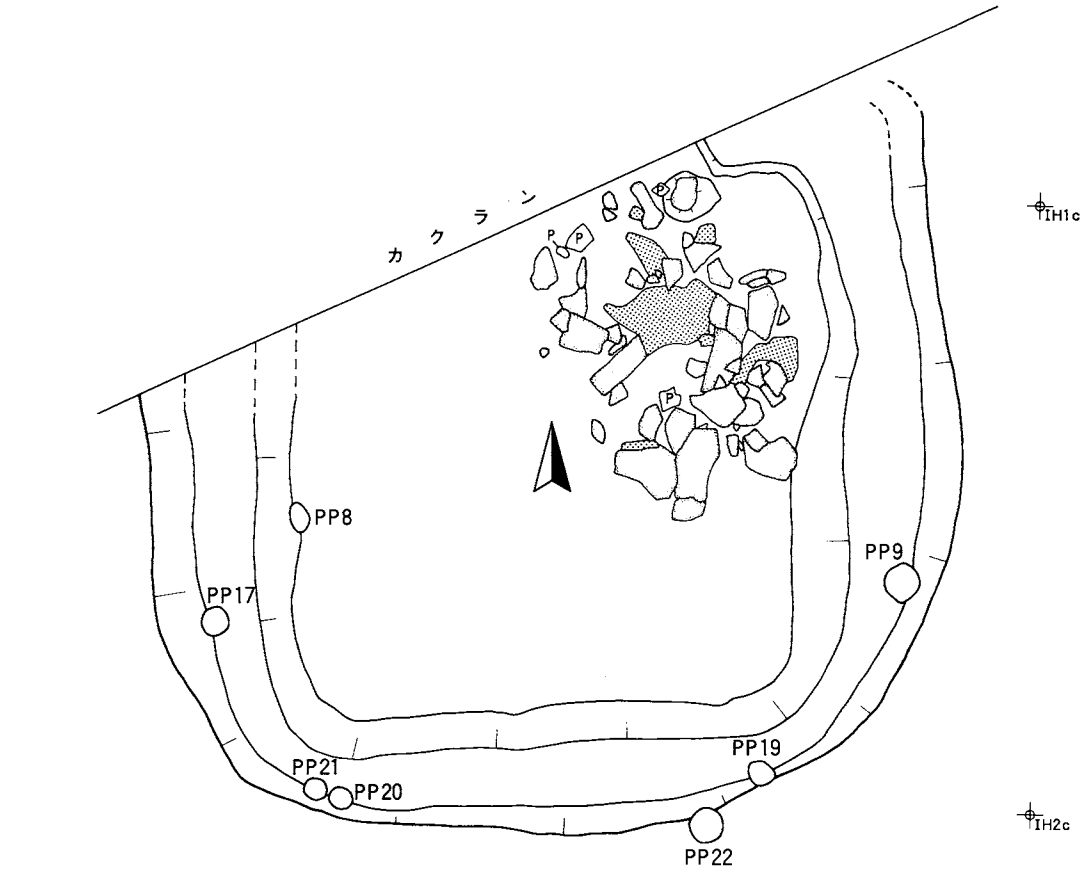
（カマド）　新旧2基検出された。新しいカマドを1号カマド・古いカマドを2号カマドと称す。1号カマドは、東壁やや南寄りに位置する。カマドの残存状況は良好である。袖部は褐色の粘土質土で床面より、高く盛り上げ構築されている。燃焼部側の袖部はえぐれた状態で、その部分にTo－aを含む黒褐色土が混入していた。カマドの天井部が土圧によってつぶれたと思われる。

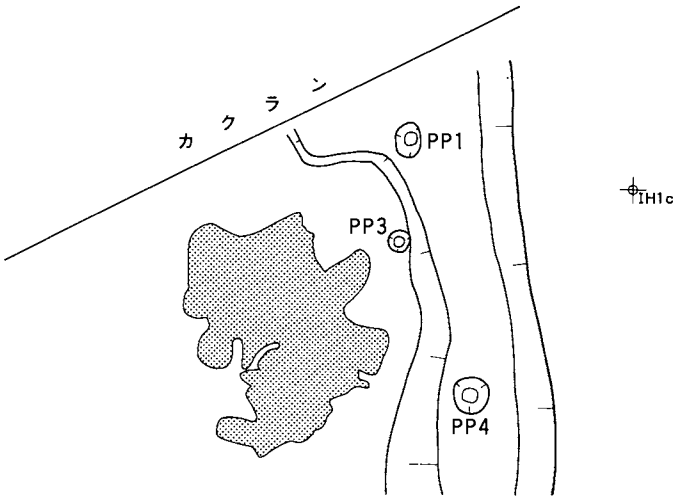
煙道開始部付近には、径14×12cm、厚さ4cmの四角形状の礫が原位置をとどめていた。この礫はカマドが機能する一部分と考えられるが、どのような機能をもつか判断は出来なかった。燃焼部の規模は、68×45cm、厚さ約8cmである。焼成は良好である。2号カマドは、燃焼部・袖部等のカマドに伴う構築部は検出されなかった。

（煙道部・煙出部）　2基ともに刳り貫き式である。1号カマド煙道部の主軸方向は、N－75°－Eである。底面は燃焼部から煙出部底面にかけて緩やかに下る。煙出部の長さは1.42m、煙出孔径は30×28cm、煙出孔検出面から煙出孔底面までの深さは約1.2mである。

2号カマド煙道部の主軸方向は、N－73°－Eである。煙道開始部から煙出孔までの長さは1.0mである。底面は煙道開始部から煙出孔まで緩やかに下る。煙出孔径は29×24cm、煙出孔検出面から、煙出孔底面までの深さは約0.8mである。煙道開始部底面から床面の比高は15cmである。また、Ⅲ層面で柱穴を検出中に1号煙出孔部周辺にTo－aが集中するプランが確認され、その範囲を掘り進めた結果、径1.05×0.92mまで広がった。これは、1号カマドの煙出孔の本来の形状か、または、天井部が崩落したか、両者の可能性が考えられるが、判別する事は出来なかった。

（外周溝）　本遺構の周辺の地形は南から北に下る地形をし、本遺構の南東側が高い地形であった。その地形の立地条件からなのか、外周溝は本遺構の南側に位置する。規模は長さ約5.5m、上端幅10～20cm、深さ東西方向から3.0～16.9cmで、東側が浅く、西側に向かって深くなる。埋土はTo－aの水成堆積である。



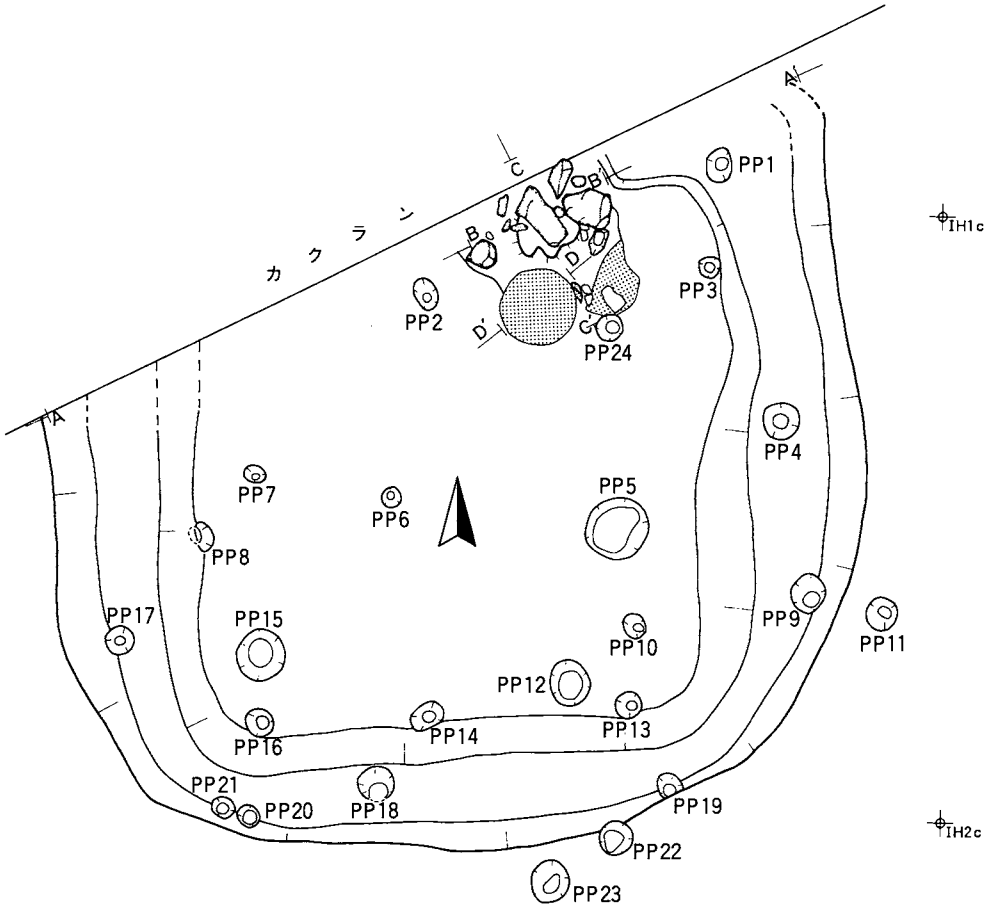


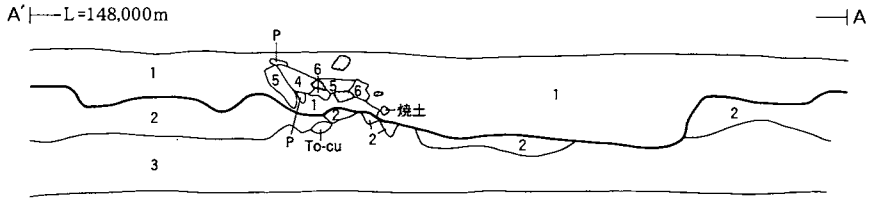
8号住柱穴

柱穴・ピット番号	開口部径(cm)	深さ(cm)
PP1	23×17	8.0
PP2	22×16	8.2
PP3	14×13	18.0
PP4	24×24	19.3
PP5	43×40	10.4
PP6	14×14	3.6
PP7	15×10	6.5
PP8	18×13	18.2
PP9	27×24	13.8
PP10	16×13	8.6
PP11	21×20	27.6
PP12	29×26	15.5
PP13	18×17	32.7
PP14	24×17	20.2
PP15	34×31	8.3
PP16	19×18	18.1
PP17	19×18	8.8
PP18	25×25	44.1
PP19	17×15	19.1
PP20	14×14	9.0
PP21	15×14	10.1
PP22	23×23	17.7
PP23	27×26	25.0
PP24	8×8	6.2

0 1:50 2m

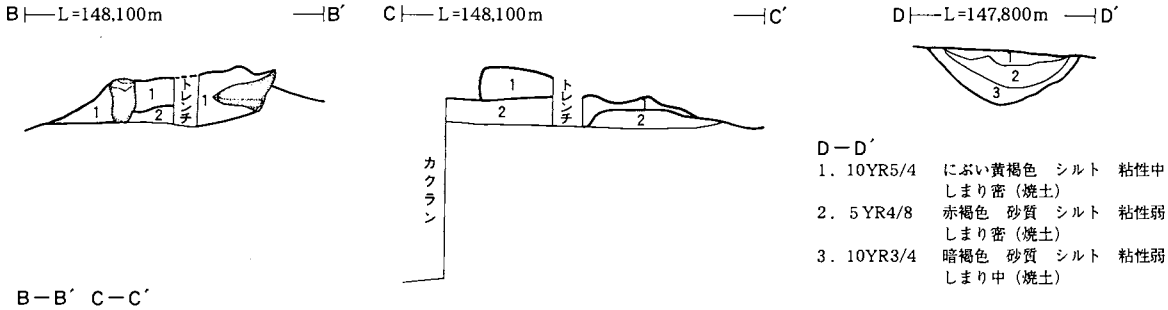
第24図　8号竪穴住居跡(1)





A'－A
1．10YR2/1　黒　シルト　粘性弱　しまりやや密（TO-a粒・小ブロック含）
2．10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱　しまり密（To-cu 多く含）
3．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-NB 含）
4．10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（焼土粒含・灰層？）
5．7.5YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（焼土？）
6．焼土粒

0　1:50　2m

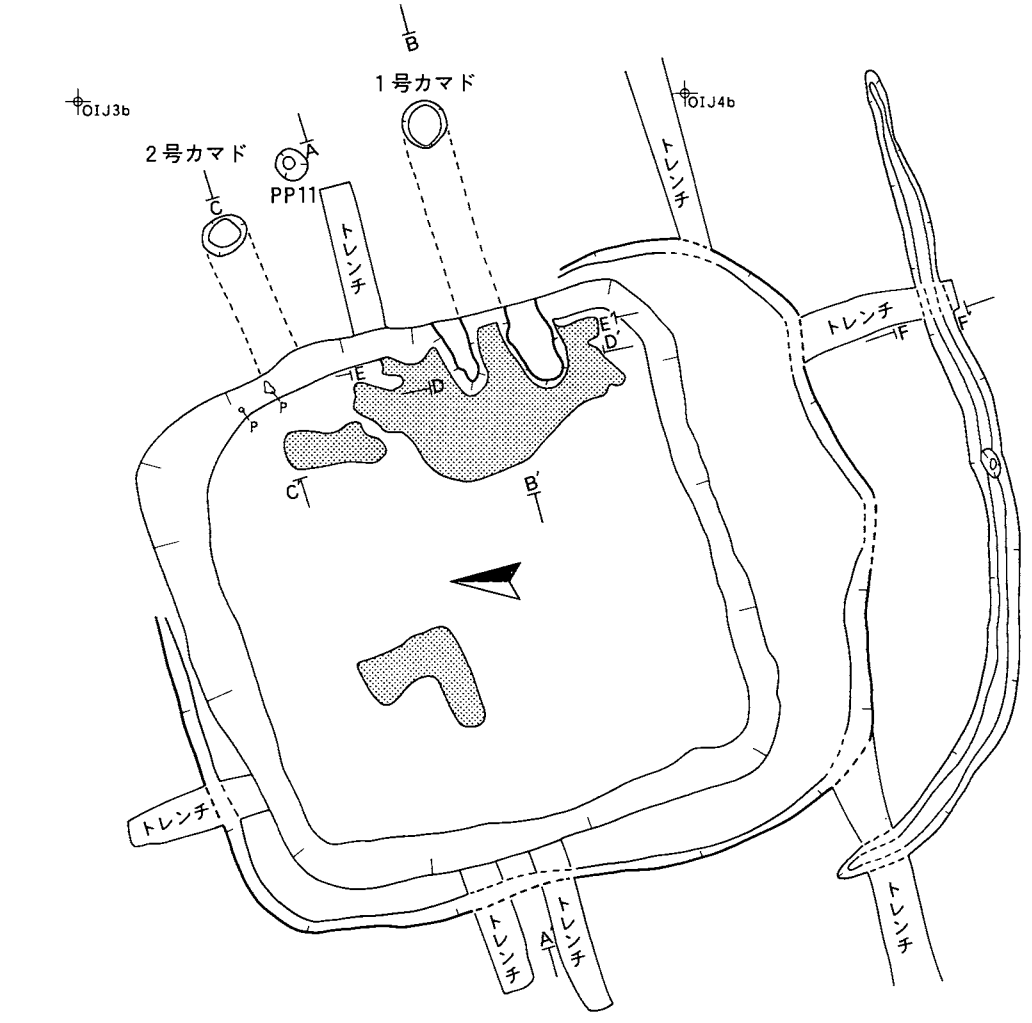


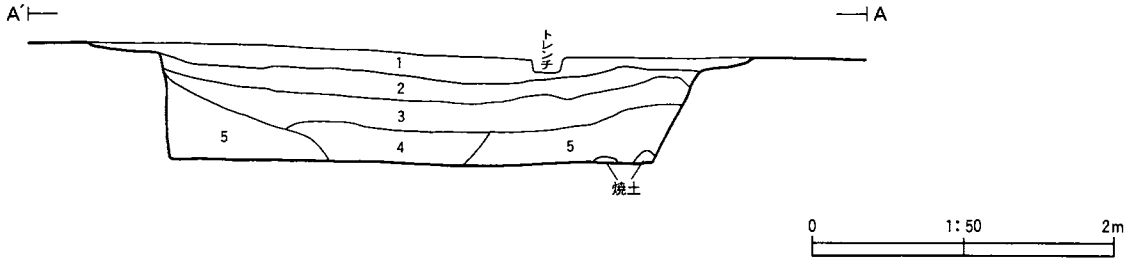
B－B'　C－C'
1．10YR5/8　黄褐色　粘土質土（To-H？）
2．10YR3/1　黒褐色　シルト（To-a・To-cu 含・貼り床）

D－D'
1．10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　粘性中　しまり密（焼土）
2．5YR4/8　赤褐色　砂質　シルト　粘性弱　しまり密（焼土）
3．10YR3/4　暗褐色　砂質　シルト　粘性弱　しまり中（焼土）

0　1:25　1m

第25図　8号竪穴住居跡(2)

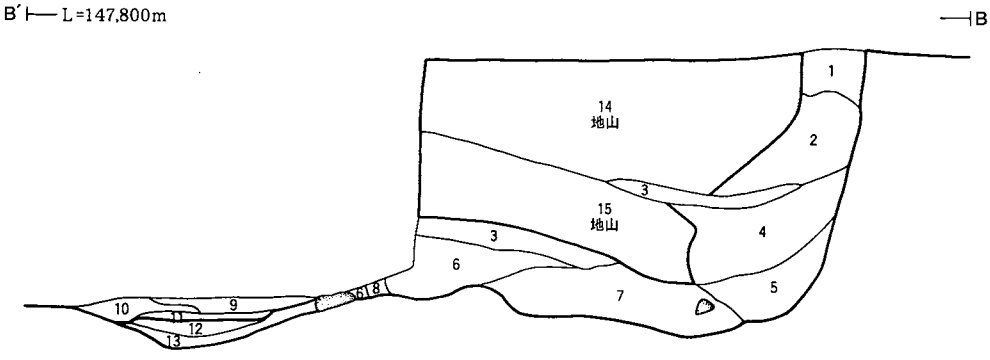




A'－A

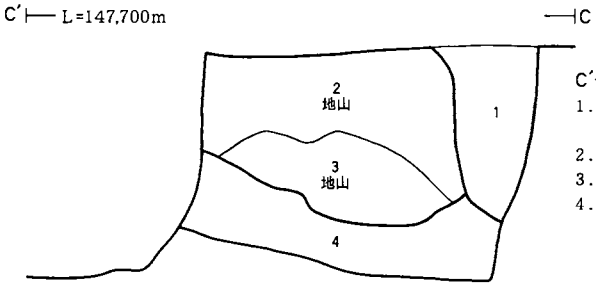
1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a粒含）
2．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a粒含）
3．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-aブロック多量に含）
4．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-aブロック多量・To-NB 少量含）
5．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a少量・To-NB 少量含）

第26図　9号竪穴住居跡(1)



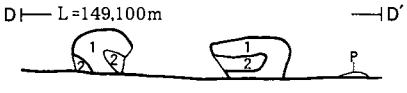
B′－B

1.	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり中
2.	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり疎（To-a小ブロック混入）
3.	10YR3/2	黒褐色	シルト	粘性やや弱	しまり疎（灰層混入）
4.	10YR4/4	褐色	シルト	粘性弱	しまり疎（焼土ブロック混入）
5.	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり疎（To-aブロック含）
6.	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり中（焼土ブロック混入）
7.	10YR3/2	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり中（To-cu 含）
8.	2.5YR4/4	赤褐色	シルト	粘性弱	しまり中（焼土ブロック）
9.	10YR5/6	黄褐色	シルト	粘性弱	しまり疎（焼土混入）
10.	10YR2/3	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり疎（焼土混入）
11.	10YR2/3	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり疎
12.	10YR6/4	黄褐色	シルト	粘性弱	しまり疎（灰層）
13.	7.5YR5/6	明赤褐色	シルト	粘性強	しまり中（焼土・燃焼部）
14.	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性強	しまり中（To-cu 含）
15.	10YR4/6	褐色	シルト	粘性強	しまり密（To-cu 層）



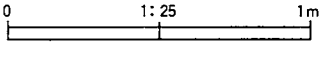
C′－C

1.	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性中	しまりやや疎（下部にTo-cu粒微量に含）
2.	10YR2/1	黒	シルト	粘性やや中	しまり中
3.	10YR4/6	褐色	シルト	粘性中	しまり密
4.	10YR3/4	褐色	シルト	粘性強	しまりやや疎（To-cu 微量含）

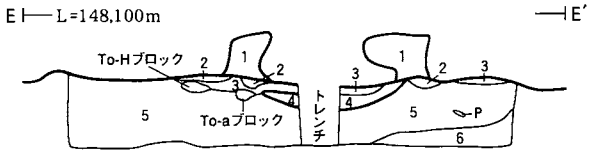


D－D′

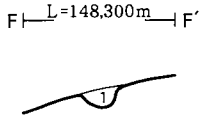
1. 7.5YR4/4　粘土質土　褐色土　粘性強　しまり密（袖部）
2. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎



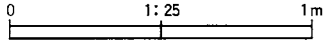
第27図　9号竪穴住居跡(2)



E－E′
1．7.5YR4/4　粘土質土　褐色土　粘性強　しまり密（袖部）
2．10YR4/6　褐色　シルト　粘性強　しまり密
3．10YR7/8　黄橙色　シルト　粘性弱　しまり密
4．5YR4/8　赤褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（燃焼部）
5．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性強　しまり中（To-a小ブロック・明黄褐色土（To-Hブロックを含　貼り床）
6．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性強　しまり中（To-cu ごく微量に含）貼り床

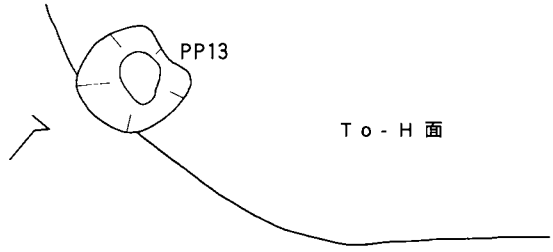


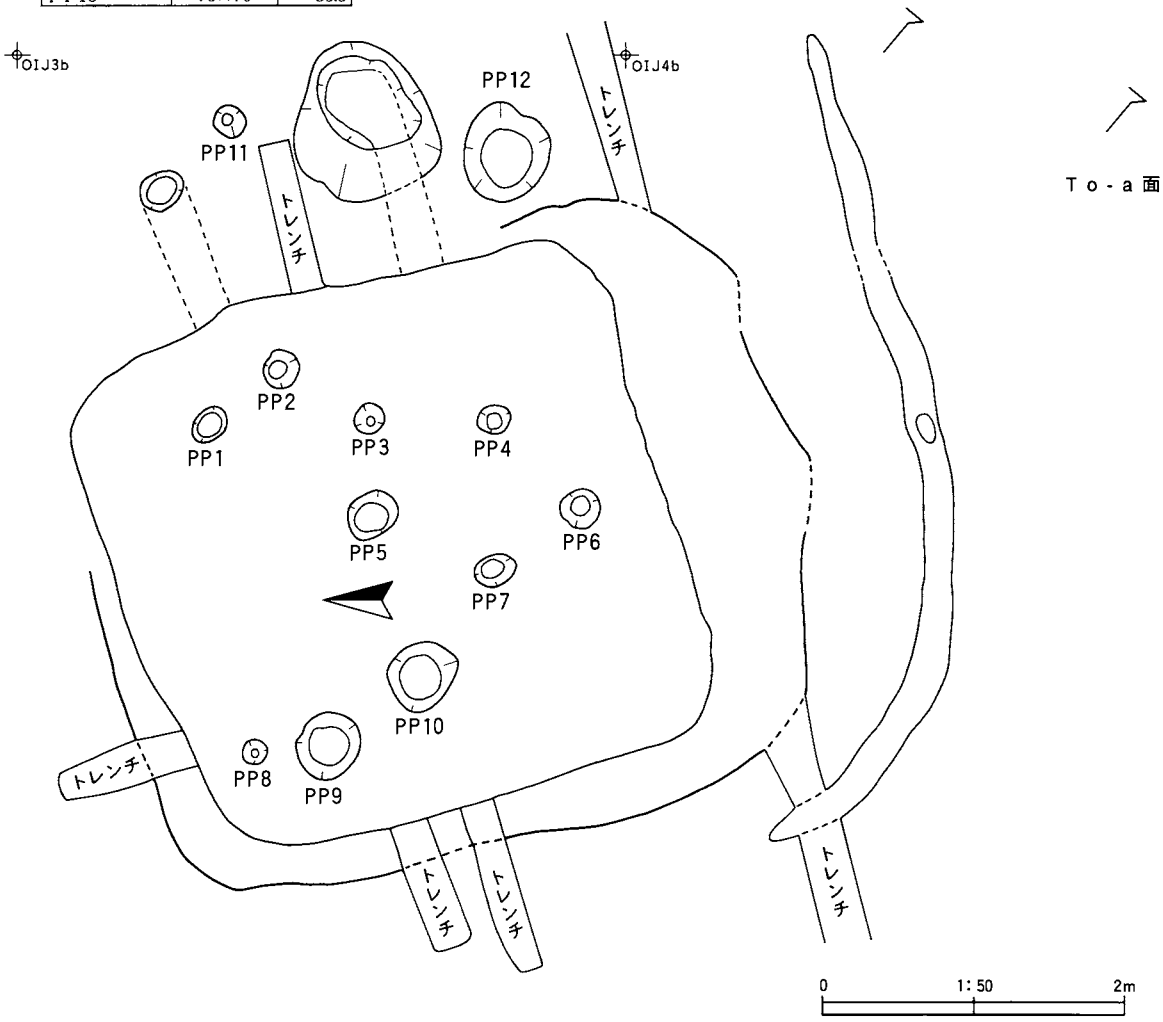
F－F′
1．To-a



9号住柱穴

柱穴・ピット番号	開口部径(cm)	深さ(cm)
ＰＰ1	26×19	5.1
ＰＰ2	26×25	15.2
ＰＰ3	21×20	8.9
ＰＰ4	22×19	4.8
ＰＰ5	36×30	11.5
ＰＰ6	27×27	13.9
ＰＰ7	28×21	11.6
ＰＰ8	17×17	13.4
ＰＰ9	45×43	22.4
ＰＰ10	47×44	25.2
ＰＰ11	22×21	65.3
ＰＰ12	66×57	29.6
ＰＰ13	76×70	33.3





第28図　9号竪穴住居跡(3)

断面形は碗状を呈する。住居の埋土と異なることから、２号カマド使用時に伴う可能性が考えられる。

（焼土）　床面より約10㎝高い位置で、径70×64㎝、径61×21㎝、厚さ約４㎝の燈色の焼土塊が形成されていた。焼土下面に約７㎝の厚さでＴｏ－ａを少量含む黒褐色土が形成されていた。

遺物（第72図・写真図版53）

出土状況は、埋土上位・床面・貼り床内から散在して出土した。出土量は、埋土上位から土師器の甕・坏の小破片数十点と床面・貼り床から土師器の坏・甕が合わせて約小コンテナで１箱弱である。65はロクロ成形による土師器の坏で、内面黒色処理が施されている。66～71は非ロクロ成形の土師器の甕で66～68は口縁部ヨコナデ後、内外面共にナデ調整が施されている。口縁部の幅は1.0～1.8㎝と極端に短く、66はやや内湾し、68は深鉢状にほぼ直線的に立ち上がる。71は内面が黒色処理され、ミガキが施されている。

時期　Ⅴ群に属す。

10号竪穴住居跡

遺構（第29図・写真図版３・21）

（位置）　０Ｉｉ５ｄ・ｅグリッドに位置する。

（検出状況）　本遺構の上面に２号畝間状遺構・６・７号畠作耕地の復旧痕跡が検出され、これらの遺構の断面観察を行うために、幅約15㎝、長さ約８～10ｍの断面観察用のトレンチを設定したところ、厚さ約30㎝のＴｏ－ａの水成堆積を確認した。このＴｏ－ａの水成堆積を竪穴住居跡の埋土と想定し、本遺構上面の遺構を精査後Ⅲ層上面で検出した。

（平面形・規模・床面積）　平面形は方形を呈する。東壁1.97ｍ、西壁2.45ｍ、北壁2.1ｍ、南壁2.1ｍ、床面積は約5.2㎡である。本遺跡から検出された竪穴住居跡の中で規模が最も小さい。

（埋土）　Ｔｏ－ａの水成堆積である。水成堆積は３層に大別される。それぞれ層の上部に黄色のＴｏ－ａ層が形成されている。この黄色のＴｏ－ａ層はＴｏ－ａが水成堆積した後、上部が外気に触れて酸化したものと思われる。最下層のＴｏ－ａの水成堆積は、直接床面を覆っている。６～８の堆積層間に他の堆積物が存在しないことから、短期間のうちに堆積したものと思われる。本遺構上部の黒褐色土とＴｏ－ａブロックは、６・７号畠作耕地の復旧痕跡である。

（壁）　Ⅲ層を壁とし、やや外傾しながら立ち上がる。壁高は、東壁で28㎝、西壁で26㎝、南壁で31.8㎝、北壁で20㎝を測る。

（床面）　Ⅲ層を床とする。ほぼ平坦で固くしまる。貼り床は施されていない。

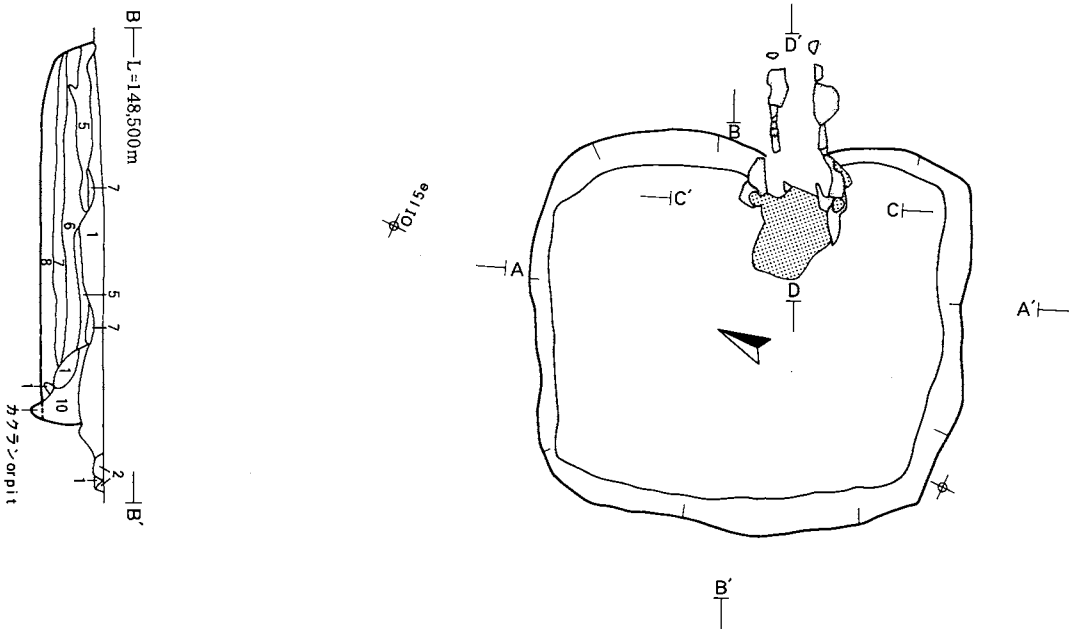
（柱穴）　検出されなかった。

（カマド）　東壁やや南寄りに構築されている。径30×30㎝・厚さ10～15㎝の平たい礫を縦にし袖部としている。燃焼部は径59×48㎝、厚さ約４㎝を測る。焼成は良好である。

（煙道部・煙出部）　掘り込み式である。主軸方向はＮ－68°－Ｅである。煙道側壁部に平たい礫を縦に埋め込み、礫と礫の間には粘土質土を覆って構築している。底面は、燃焼部から煙出部かけて緩やかに上がる。煙出部の長さは0.65ｍを測る。

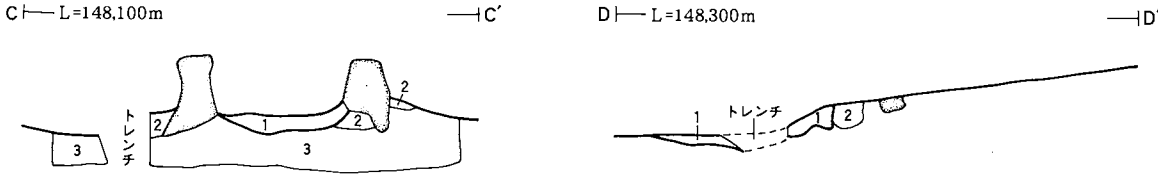
遺物　なし。

時期　Ⅲ群に属す。



A－A′ B－B′

1. 10YR3/2 黒褐色 粘性弱 しまり密（To-a粒・ブロックを多量に含）
2. 10YR2/2 黒褐色 粘性弱 しまりやや密
3. To-aブロック（黒褐色土ごく少量含）
4. To-a軽石（大湯浮石？）
5. 10YR3/2 黒褐色 粘性弱 しまり密（To-aブロック・大湯浮石？含）
6. 10YR8/2 灰白色 To-a水成堆積 粘性弱 しまり密（上位粘土質［黄色］）
7. 10YR7/6 橙色 To-a水成堆積 粘性弱 しまり密（上位粘土質［黄色］）
8. 10YR7/6 橙色 To-a水成堆積 粘性弱 しまり密
9. 10YR2/1 黒 粘性弱 しまり疎（壁崩落土？）
10. 10YR3/2 黒褐色 粘性弱 しまりやや密（To-aブロック状に多量に含復旧痕跡or Pitか）
11. 10YR2/1 黒 粘性弱 しまりやや密（To-a粒含・Ⅱ層）



B－B′

1. 5YR5/8 明赤褐色 粘性弱 しまり中（焼土）
2. 10YR2/1 黒 シルト 粘性弱 しまり中（To-aブロック・褐色土含）
3. 10YR2/1 黒 シルト 粘性弱 しまりやや密（Ⅲ層）

C－C′

1. 5YR5/8 明赤褐色 粘性弱 しまり中（焼土）
2. 10YR6/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり密（To-a微量に含）

0 1:25 1m

第29図 10号竪穴住居跡

11号竪穴住居跡

遺構（第30・31図・写真図版22）

（位置）　０ＩＨ４ｅグリッドに位置する。

（検出状況）　Ⅱ層上面で検出した。Ｔｏ－ａが集中するプランとして確認した。

（平面形・規模・床面積）　調査区境界面に接するため、詳細については不明であるが、方形を呈すると思われる。南壁3.6ｍを測る。床面積は不明である。

（埋土）　概ね２層に大別される。上層はＴｏ－ａ粒を含む黒色土、下層はＴｏ－ａ粒を含まない黒褐色土からなる。

（壁）　壁上半部に張り出し部を持つ。張り出し部の規模は、検出面から張り出し部底面の深さ約30㎝、幅約30㎝を測る。張り出し部底面はⅥ層面で、ほぼ平坦で直立ぎみに立ち上がる。

壁開始部から床面の壁高は36.5～54㎝である。やや外傾する。

（床面）　Ⅷ層を床とする。ほぼ平坦で固く締まる。貼り床は確認されなかった。

（床面に貼った粘土と礫）　床面に平たい角礫が数個検出された。これらの礫の隙間に粘土質土が確認された。礫を除去すると床面から約５㎝の高さに人工的に貼ったと思われる粘土質土が確認された。礫はこの粘土質土の上に設置されていたことから、流れ込みによって住居内に入ってきたものでなく、人工的に設置されていたものと推測される。性格については不明である。

（柱穴）　検出されなかった。

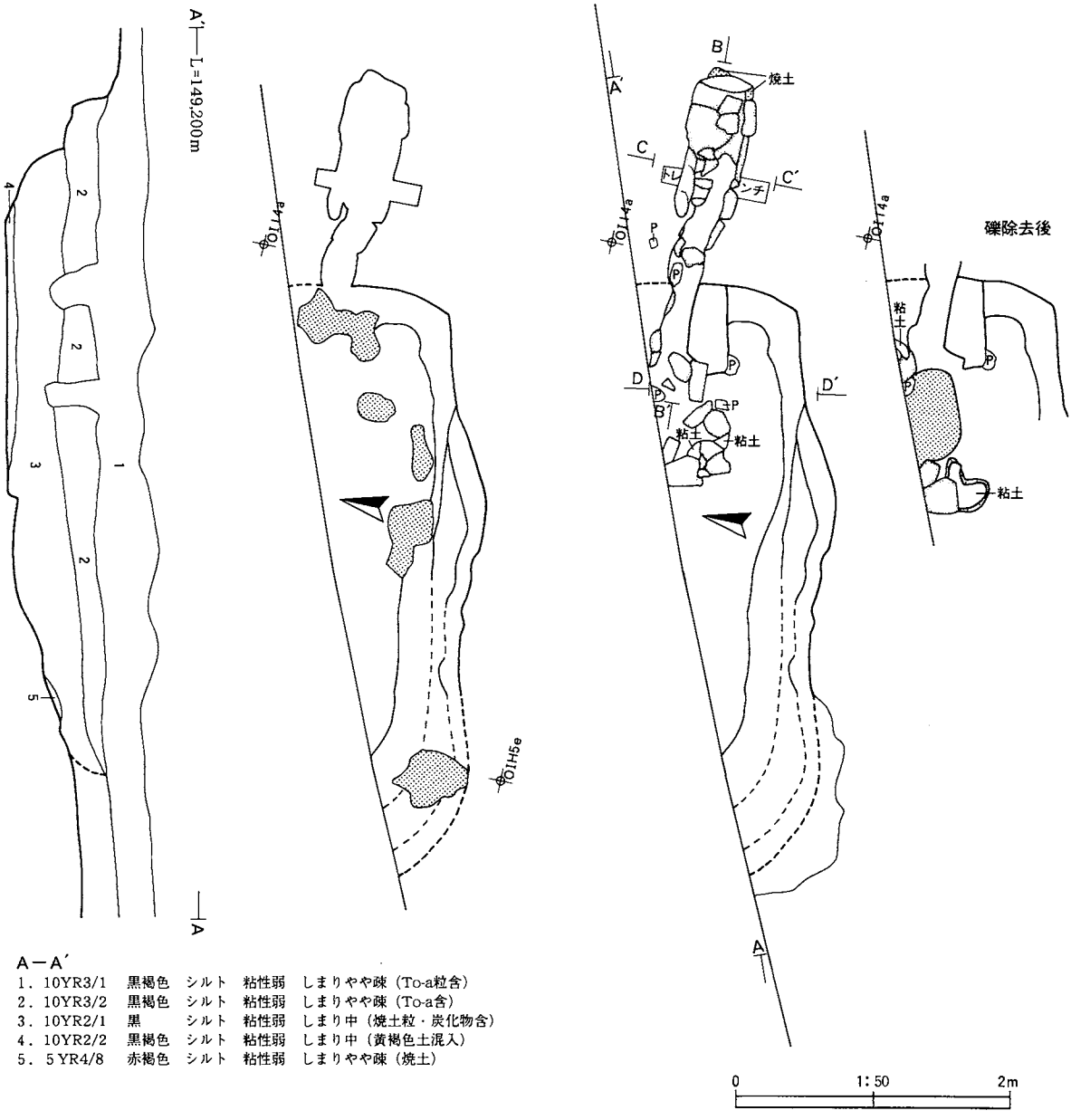
（カマド）　東壁南寄りに構築されている。調査区境界に接するため、全容は明らかでないが、袖部と燃焼部を確認した。袖部は角礫の上部に褐色土・黒褐色土で覆われ構築されている。燃焼部は厚さ23㎝で、焼成は良好である。燃焼部上面に坏をふせて支脚としている。支脚の下には径13×8㎝の丸みのある礫が確認された。この礫はカマド構築する際、支脚を安定させるために設置された様相を呈していた。

（煙道部・煙出部）　掘り込み式である。主軸方向はＮ－95°－Ｅである。煙道部は側壁に厚さ４～13㎝、高さ36㎝（大きいもので）、長さ20～23㎝大小数個の平たい礫を側壁に縦にし、礫と礫の隙間に粘土質土を覆って構築されていた。側壁の礫は原位置をとどめている。煙道部内の礫は天井石と思われる。煙出部付近の天井石については原位置をとどめていた、天井石は径38×37㎝の大きさで加熱を受け、風化が著しい。煙道部底面は煙道開始部から煙出部にかけて緩やかに上がる。煙出部の長さは1.55ｍ、煙道部の幅は30～50㎝である。

（焼土塊）　本遺構精査時（掘り下げ時）にカマド周辺・張り出し部面に径55×42㎝及び23×20㎝の焼土塊が数カ所検出された。

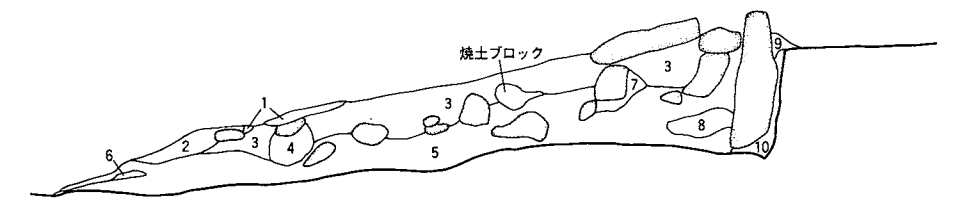
遺物（第73・74図・写真図版54）

出土状況は、カマドを中心に焼土塊上面・張り出し部面・床面から散在して出土した。出土量は、土師器の坏・甕・須恵器の甕片合わせて小コンテナで約１箱分である。72～75はロクロ成形の内面にミガキと黒色処理が施された土師器の坏である。72は支脚として使用された。燃焼部前方（東側）にふせた状態で確認された。内外面は剝落・摩滅が著しい。カマド使用時による二次加熱によると思われる。73はロクロ成形後、体部下端にナデによる再調整が施されている。底面は二次加熱によるものと思われるが剝落・摩滅が著しく、内面は黒色処理が消失している。74は二次加熱によるものか、体部から底面まで剝落・摩滅が著しく、ロクロ回転糸切り痕、体部の再調整は不明瞭である。75は体部にナデによる再調整が施されている。76～79は非ロクロ成形の土師器の甕である。77は本遺構から出土した他の非ロクロ成形の土師器の甕に比して、丁寧に



A－A'

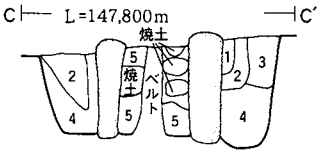
1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（To-a粒含）
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（To-a含）
3．10YR2/1　黒　シルト　粘性弱　しまり中（焼土粒・炭化物含）
4．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中（黄褐色土混入）
5．5YR4/8　赤褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（焼土）



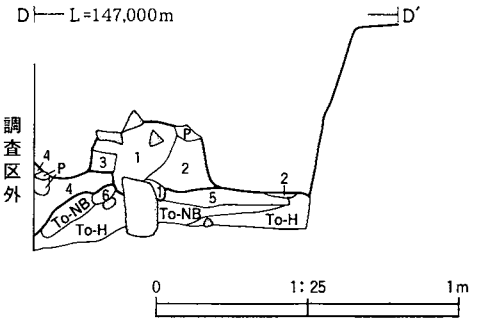
B'－B

1．5YR6/8　橙色　シルト　粘性弱　しまり疎
2．10YR5/6　黄褐色　シルト　粘性弱　しまり中
3．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（焼土粒・炭化物含）
4．2.5Y4/6　赤褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎
5．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　しまり疎（炭化物・焼土粒含）
6．2.5Y4/8　赤褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（焼土）
7．5YR5/6　明赤褐色　シルト　粘性強　しまりやや疎（焼土）
8．5YR4/4　にぶい赤褐色　シルト　粘性弱　しまり中（焼土）
9．7.5YR4/6　褐色　粘土　粘性強　しまり密（礫を支えるために補強された土と思われる）
10．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性やや強　しまり密（煙道掘り方）

第30図　11号竪穴住居跡(1)



C－C′
1．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中　しまりやや疎
2．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中　しまり密（To-cu 微量に含）
3．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中
4．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中
5．不明



D－D′
1．10YR4/6　褐色　粘土質シルト　粘性強　しまり密（袖部・To-H？）
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（褐色土粒・焼土粒ごく少量含）
3．5YR5/6　明赤褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（黒褐色土粒含）
4．5YR4/8　赤褐色　粘性強　しまり密（燃焼部・To-H面）
5．10YR5/8　黄褐色　粘土質シルト　粘性強　しまり密（貼り床）
6．10YR6/4　にぶい黄橙色　シルト　粘性弱　しまり疎（灰層）

第31図　11号竪穴住居跡(2)

調整が施されている。76・79は共に口縁部ヨコナデ・内外面ナデによる調整が施されている。78は底面に砂底をもつ。80はロクロ成形の土師器の甕である。ロクロ成形後、外面は胴部上半部ケズリ、内面は頸部付近にナデ調整が施されている。81～83は須恵器の甕もしくは壷と思われる。81は高台を持ちロクロ成形後、外面はタタキ・内面はナデによる調整が施される。82はロクロ成形後、外面にケズリによる調整が施される。83は外面タタキ・内面に放射状の当て具痕が認められる。

時期　Ⅳ群に属す。

12号竪穴住居跡

遺構（第32～34図・写真図版３・４・23･24）

（位置）　ＩＦ３ａ・ｂグリッドに位置する。

（検出状況）　削平によりⅡ層が存在せず、Ⅲ層上面で検出した。灰白色のＴｏ－ａが集中するプランとして確認した。

（平面形・規模・床面積）　平面形は方形状を呈する。東壁4.7ｍ、西壁5.0ｍ、北壁4.5ｍ、南壁4.6ｍ、床面積は約18.2㎡である。

（埋土）　埋土の主体は、Ｔｏ－ａの層状堆積である。埋土上部は暗褐色土・黒褐色土にＴｏ－ａの小ブロックが混入する。Ｔｏ－ａの層状堆積は、最深部で77㎝の厚さを測る。煙道部底面・壁・床面に黒色土が約10％覆ってから、Ｔｏ－ａが一次堆積（降下堆積）した。Ｔｏ－ａの一次堆積層の下部は、層厚１～５㎝の灰白色の微量な浮石が確認された。上部については、質感はザラザラし灰黄褐色を呈する。

４ａ～４ｄの堆積は、Ｔｏ－ａの水成堆積である。４ａ～４ｄそれぞれの上部に黄色のＴｏ－ａ層が形成されている。この黄色のＴｏ－ａ層はおそらく、度重なる水成堆積の間隙の中で、上部が外気に触れて酸化し黄色に変色したものと思われる。４ａ～４ｄ及び５の堆積層間に他の堆積物が存在しないことから、短期間のうちに堆積したものと思われる。

（柱穴）　床面で９基検出した。主柱穴は、規模、深さからＰＰ１～ＰＰ３と思われる。ＰＰ１・２は北壁に接し出入り口を挟んで検出された。ＰＰ３は東壁に接する。

（外柱穴）　15基検出された。本竪穴住居跡の検出面で検出を行ったが、プランを明瞭に把握することができなかったため、プランを明瞭に把握できるⅣ層上面で検出した。

埋土は黒褐色土の単層からなり、柱穴痕跡は確認されなかった。検出面から底面までの深さは平均すると約42cmを測る。

（壁）　Ⅲ・Ⅶ・Ⅷ層を壁とする。壁はやや外傾する。壁高は、東壁が83.4～102.4cm、西壁が85.1～94.8cm、南壁が92.6～102.9cm、北壁が79.3～93.6cmを測る。

（壁溝）　南壁と西壁で検出された。長さは南壁約3.3m・西壁約1.5m、幅5～20cm、深さ1.4～1.7cm、ＰＰ3に接する付近で11cmを測る。

（床面）　Ⅷ層を床とする。カマド周辺・出入り口・ＰＰ2付近を中心に部分的に貼り床が施されている。出入り口部については、厚さ5～8.5cm程の貼り床が施されている。

（カマド）　西壁ほぼ中央部に位置する。平たい礫を立て明黄褐色土で覆って、構築されている。カマド基部付近には、径12×10cm、厚さ3cmの四角形状の礫が確認された。この礫は9・14号竪穴住居跡と類する形状をしている。カマドを機能させる一部分と考えられるが、どのような機能をするか判断は出来なかった。カマド構築以前に貼り床を施した後、カマドを構築したものと推測される。

燃焼部径は67×45cm、厚さは14cmを測る。焼成は良好で焼土上面に灰層が形成されていた。

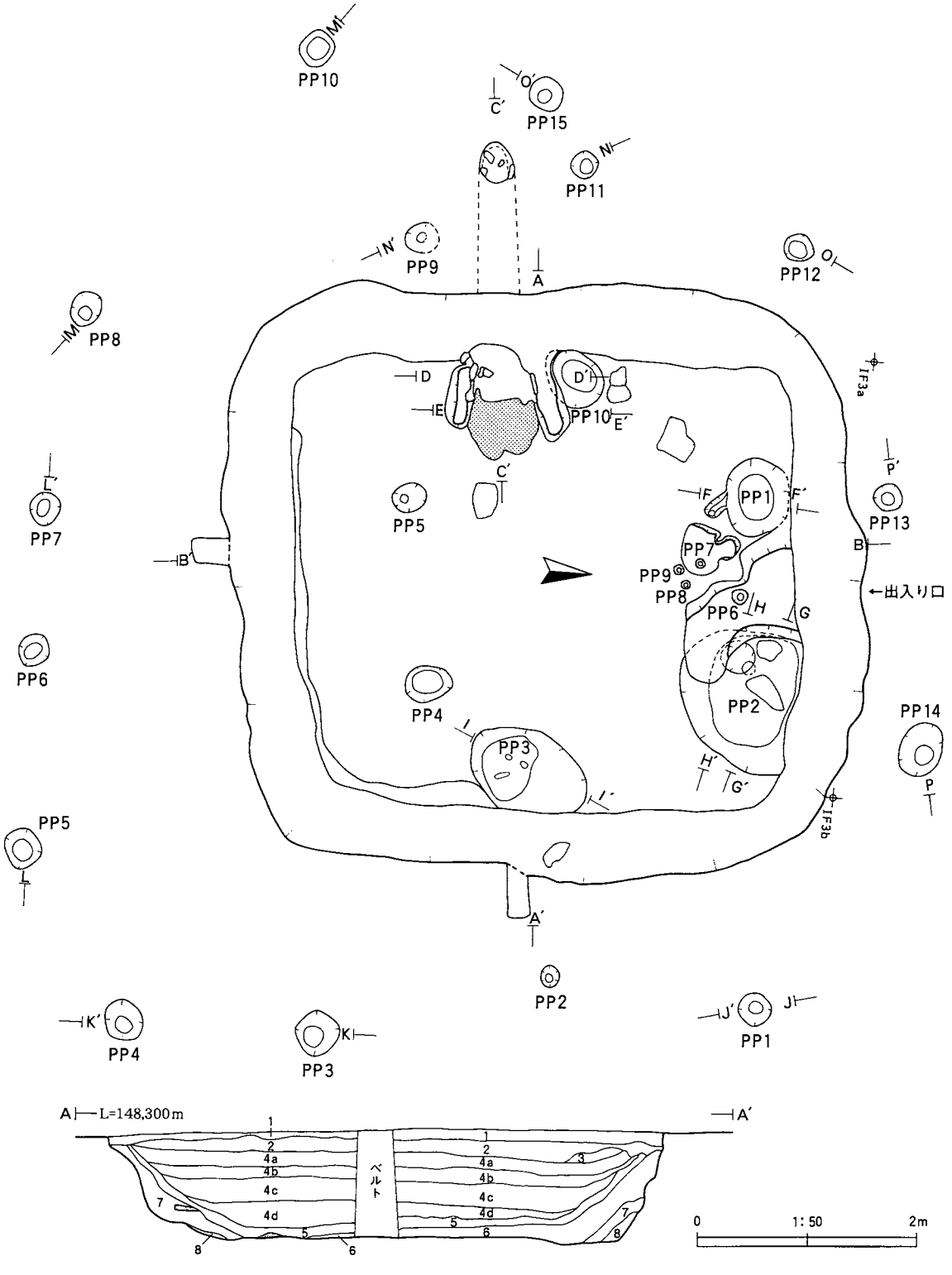
（煙道部・煙出部）　刳り貫き式である。主軸方向は、Ｎ－95°－Ｗである。煙出底面は、燃焼部から煙出孔底面まで緩やかに下る。煙道部の長さは1.85m、煙出孔径は37×30cm、煙出孔検出面から底面までの深さは約1.2mを測る。煙出孔埋土上部ににＴｏ－ａと礫が密集していた。礫は人為的に煙出孔内に廃棄した様相を呈している。

（出入り口）　北壁ほぼ中央部、ＰＰ1・2間に位置する。床面より5～8.5cm、黄褐色土で高く盛り上げ、固く締まる。小ピット（ＰＰ6～9）を伴う。

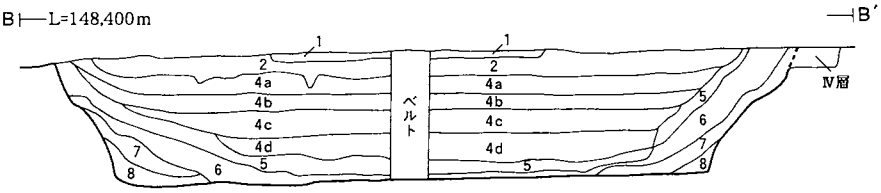
（炭化材）　埋土下位で、炭化材が確認された。部分的に床面より高い位置で確認された。図示はしなかった。炭化材は樹種はスギである。

遺物（第74図・写真図版54・55）

出土状況は、カマド・床面・埋土下位・煙道部埋土から散在して出土した。出土量は、土師器の坏・甕・須恵器の壷合わせて小コンテナ約0.5箱分である。85・86はロクロ成形の土師器の坏である。85は内面に黒色処理が施されている。86は内面は剝落しているが、胎土から非内面黒色処理の坏と思われる。87・88非ロクロ成形の土師器の甕である。87は内面に横方向のハケメ調整後、縦のナデ調整が施されている。88は内面頸部付近にナデ調整、頸部付近下はハケメによる調整が施されている。口縁部は本遺跡の口縁部が弱く外反する土器に比して、やや強く外反する。89～91は土師器の甕の底部である。89・90は共に外面ケズリ・内面ナデ調整が施され、底面に木葉痕が確認される。91はＴｏ－ａレンズ上面の埋土から出土した、棒状の工具で底面に調整が施されたと思われる。92は須恵器の壷である。

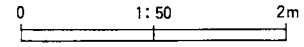


第32図　12号竪穴住居跡(1)

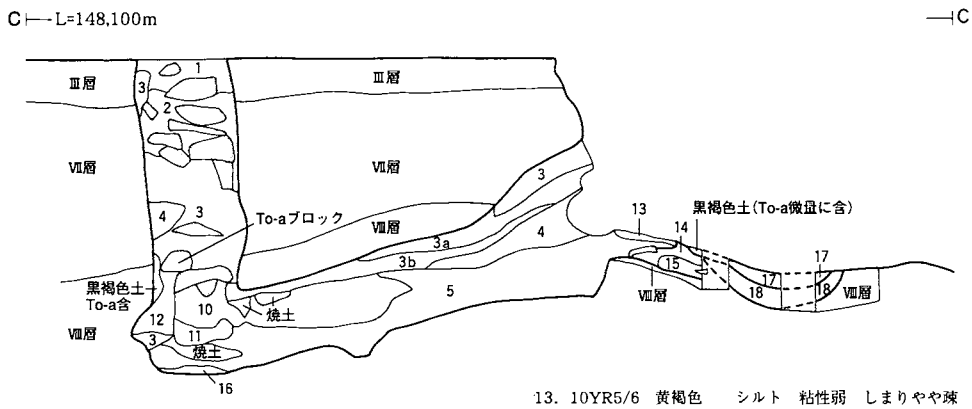


A－A′ B－B′

1．10YR2/2 黒褐色 粘性無 しまりやや疎（To-aブロック混入文化課トレンチ撹乱層）
2．10YR3/4 暗褐色 粘性無 しまり中 （To-a小ブロック混入）
3．To-aブロック
4．a~d10YR7/1灰白色~7/6明黄褐色 粘性無 しまり密To-a 水成堆積（上位は粘土質［黄色］下位は粗い砂質［大湯浮石］）

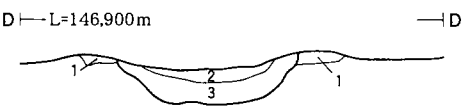


5．10YR5/2 灰黄褐色 粘性無 しまり密（一次堆積）
6．10YR3/1 黒褐色 粘性やや弱 しまり中（To-cu20~30%混入）
7．10YR2/1 黒 粘性無 しまりやや弱（To-cuまばらに混入）
8．10YR3/1 黒褐色 粘性無 しまりやや弱（浮石粒5~6%混入）



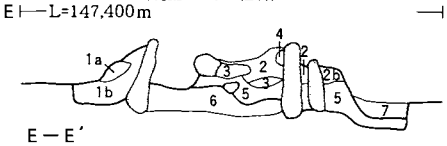
C－C′

1． 7.5YR3/4 暗褐色 シルト 粘性弱 しまり密（焼土粒・To-a混入）
2． 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性弱 しまり疎（To-a・黒色土混入）
3． To-a （10YR6/2 灰黄褐色 粘性弱 しまり密）
3a．To-a （10YR6/4 にぶい黄褐色 粘性弱 しまり密・水成堆積）
3b．To-a （10YR6/2 灰白色 粘性弱 しまり密・水成堆積）
4． 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎（To-a小ブロック混入）
5． 7.5YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎（焼土混入）
6． 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎（焼土ブロック・黄褐色土混入）
7． 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎（焼土混入）
8． 7.5YR2/3 極暗褐色土 シルト 粘性弱 しまりやや疎（焼土混入）
9． 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中（焼土混入）
10． 10YR5/6 黄褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎（黄褐色土ブロック）
11． 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎（炭化物・焼土混入）
12． 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密（To-aブロック混入）
13． 10YR5/6 黄褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎（To-aブロック混入）
14． 10YR2/1 黒 シルト 粘性弱 しまり疎（炭化物混入）
15． 7.5YR 橙色 シルト 粘性弱 しまり疎（下層に焼土が形成されている）
16． 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎（炭化物混入）
17． 7.5YR6/8 橙色 シルト 粘性弱 しまりやや疎（To-a粒・炭化物微量に含・灰）
18． 5YR5/8 明赤褐色 粘性弱 しまりやや疎（焼土・To-H軽石）



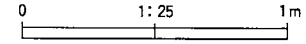
D－D′

1．10YR6/8 明黄橙色 粘土 粘性やや強 しまりやや密（To-a微量に含）
2．7.5YR6/8 橙色 シルト 粘性弱 しまりやや疎（To-a粒・炭化物微量に含・灰）
3．5YR5/8 明赤褐色 粘性弱 しまりやや密（焼土・To-H軽石）

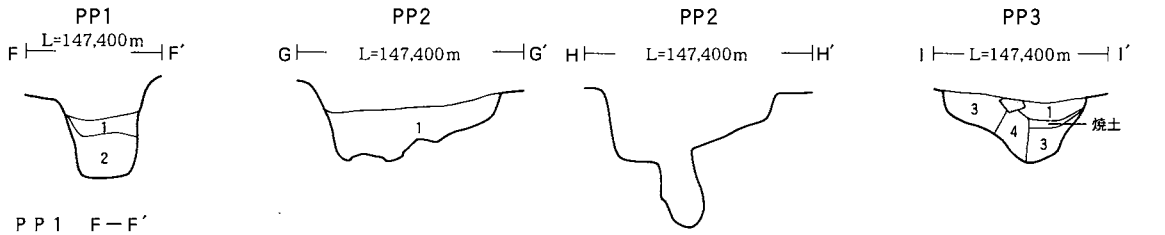


E－E′

1a．10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性弱 しまり密（炭化物粒含）
1b．7.5YR6/8 明褐色土 粘性弱 しまり密（炭化物微量に含・カマド袖部）
2． 7.5YR5/8 明褐色土 粘性中 しまりやや密（To-a・炭化物微量に含・カマド天上部崩落土か）
3． To-aと黄褐色土の混合土（天上部崩落土か）
4． 10YR3/2 黒褐色 粘性弱 しまりやや密
5． 7.5YR5/6 黄褐色土 粘性弱 しまり密（カマド袖部）
6． 7.5YR5/6 明褐色土 粘性弱 しまり密（黒色土含 貼り床）
7． 10YR2/1 黒 シルト 粘性やや強 しまり疎



第33図 12号竪穴住居跡(2)



ＰＰ１　Ｆ－Ｆ′

1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性強　しまりやや疎
（焼土ブロック・To-a小ブロック含）

2．10YR4/6　褐色　　シルト　粘性無　しまり疎

ＰＰ２　Ｇ－Ｇ′ Ｈ－Ｈ′

1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまりやや疎
（焼土ブロック・To-a微量に含）

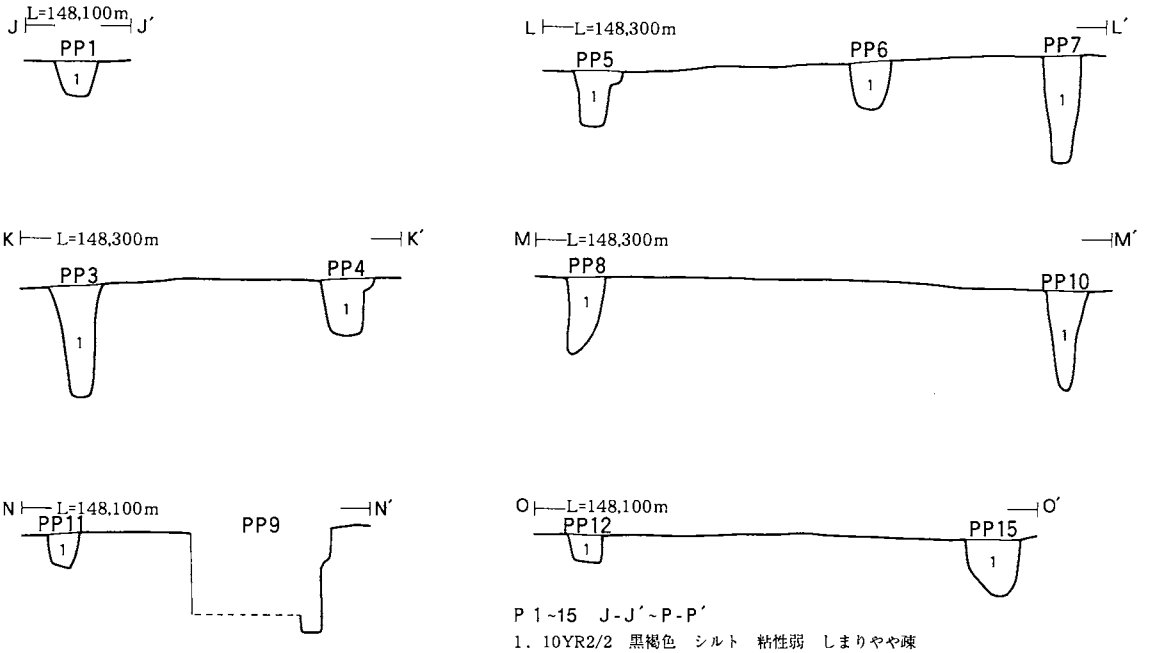
ＰＰ３　Ｉ－Ｉ′

1．10YR2/1　黒　　シルト　粘性弱　しまり疎（To-a微量に含）

2．5YR5/8　明赤褐色（焼土）

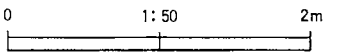
3．7.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり疎

4．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり密（To-aブロック状に含）



Ｐ１~15　Ｊ-Ｊ′~Ｐ-Ｐ′

1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎



12号竪穴住居跡床面

柱穴・ピット番号	開口部径（cm）	深さ（cm）
ＰＰ1	69×57	63
ＰＰ2	123×103	87
ＰＰ3	114×76	47.7
ＰＰ4	43×31	13.6
ＰＰ5	32×24	23.4
ＰＰ6	14×14	15.6
ＰＰ7	8×8	8.6
ＰＰ8	8×7	8.0
ＰＰ9	8×8	8.5
ＰＰ10	50×51	22.6

12号竪穴住居跡外柱

柱穴・ピット番号	開口部径（cm）	深さ（cm）
ＰＰ1	30×30	22.7
ＰＰ2	20×17	18.7
ＰＰ3	41×41	75
ＰＰ4	39×35	36.8
ＰＰ5	37×33	35.9
ＰＰ6	31×26	32
ＰＰ7	30×27	69.3
ＰＰ8	33×27	50
ＰＰ9	(33)×26	69.3
ＰＰ10	33×33	64.4
ＰＰ11	25×24	20.4
ＰＰ12	28×25	18.2
ＰＰ13	27×24	35.4
ＰＰ14	50×40	53.2
ＰＰ15	33×33	36.0

第34図　12号竪穴住居跡(3)

13号竪穴住居跡

遺構（第35図・写真図版25）

（位置）　ＩＦ２ｃグリッド位置する。

（検出状況）　Ⅱ層上面で検出した。Ｔｏ－ａの集中するまとまりとして確認した。

（平面形・規模・床面積）　調査区境界に接するため、詳細については不明である。平面形は方形を呈すると推測される。南壁約3.7ｍ、東壁約（2.5）ｍを測る。床面積は不明。＊（　　）は推定値

（埋土）　埋土上位はＴｏ－ａブロック・粒を含む黒褐色土からなる。埋土中位～下位にかけては、Ｔｏ－ａを含まない黒褐色土からなる。色調や炭化物・焼土粒の含有量で10層に細分される。自然堆積と思われる。

（壁）　Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ層を壁とする。壁面は上半部に張り出し部を持つ。この張り出し部の規模は検出面から底面までの深さは、17.2～28.3㎝、幅は18～38㎝を測る。底面はⅣ面で、ほぼ平坦で直立ぎみに立ち上がる。壁開始部から床面までの壁高は、41.4～60.0㎝を測る。壁はやや外傾する。

（床面）　Ⅷ層を床とする。ほぼ平坦で固く締まる。ほぼ全面に貼り床が施されている。

（カマド・煙道部）　調査区外に存在するため不明。

（焼土塊）　幅15～55㎝、長さ約（1.5）ｍ、厚さ７～10㎝焼土塊が床面から張り出し部面にかけて検出された。床面・床面直上に炭化物が散在して見られた。＊（　　）推定値

遺物　（第74図・写真図版55）

出土状況は床面直上から球胴甕１個体と焼土下面から鉄製品１点が出土している。93は口縁部ヨコナデ・内外面ナデによる調整が施される。本遺構の平安時代とした遺物と比較して、調整が丁寧である。８世紀代の遺物と思われる。94は鉄製品のヤリガンナである。

時期　Ⅰ群に属す。

14号竪穴住居跡

遺構（第36～40図・写真図版２・26～28）

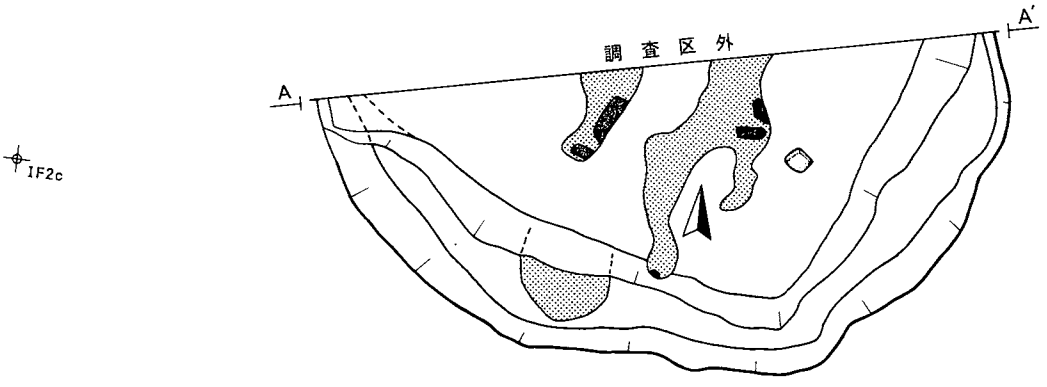
（位置）　ＩＥ４ａ～ｄ・ⅡＥ１ａ～ｄグリッド位置する。

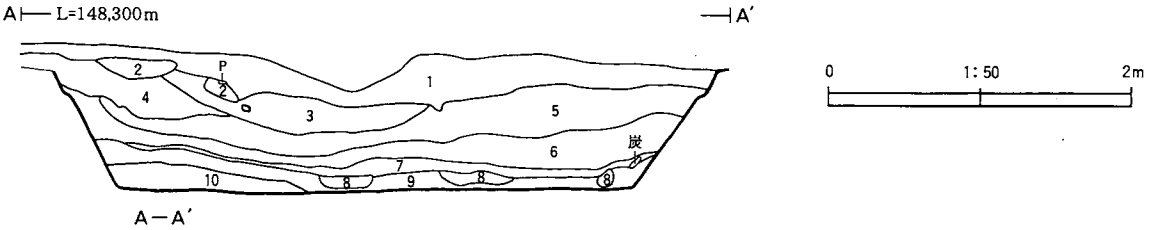
（検出状況）　削平によりⅡ層が存在せす、Ⅲ層上面で検出した。Ｔｏ－ａが集中するプランとして確認した。

（平面形・規模・床面積）　調査区外に接するため全容は明らかでないが平面形は方形を呈する。東壁5.85ｍ、西壁5.5ｍ（壁開始部）、北壁4.84ｍ、南壁5.5ｍ、床面積は約26.8㎡である。

（埋土）　最上部はＴｏ－ａの小ブロック・黒色土が混在する。その下にＴｏ－ａの層状堆積が形成されている。このＴｏ－ａの層状堆積は２層に細分される。下位は一次堆積（降下堆積）、上位は二次堆積（水成堆積）からなる。Ｔｏ－ａの層状堆積下位から焼土上面間の埋土は炭化物・焼土粒を含む黒褐色土からなる。層厚25～30㎝である。床面直上部は、焼失による焼土塊・炭化材の密度が濃く、Ｔｏ－ａ小ブロック・炭化物・焼土を含む暗褐色土からなる。

（壁）　Ⅳ・Ⅶ・Ⅷ層を壁とする。壁は、四壁ともに上部に張り出し部を持つ。西側については、調査区境界面に接するため不明である。この張り出し部の規模は、検出面から底面までの深さは、東壁5.5～15.5㎝、南壁11.3～22.2㎝、北壁５～18㎝、幅は東側約25～60㎝、南側は約15～60㎝、北側25～40㎝を測る。壁中央部で広がりコーナー部分に接するつれて狭くなる特徴を持つ。Ⅳ層を底面として、若干緩やかに上がり壁部で直立ぎみに立ち上がる。





A－A′

1.	10YR2/2	黒褐色	シルト	粘性弱	しまりやや疎（To-a小ブロック含）
2.	10YR7/2	にぶい黄橙色	シルト	粘性弱	しまりやや疎（To-aブロック水成堆積）
3.	10YR3/3	暗褐色	シルト	粘性弱	しまりやや疎（炭化物・焼土粒含）
4.	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性弱	しまりやや疎（To-a粒ごく少量含）
5.	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり中（炭化物・To-cu ・少量含）
6.	10YR2/1	黒	シルト	粘性弱	しまり疎（炭化物・To-cu ・微量含）
7.	10YR1.7/1	黒	シルト	粘性弱	しまりやや疎（焼土ブロック）
8.	2.5YR4/6	赤褐色	シルト	粘性弱	しまり中（焼土）
9.	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり中（褐色土ブロック含）
10.	10YR2/2	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり中（褐色土少量含）

第35図　13号竪穴住居跡

壁開始部から床面までの壁高は、北壁41.1～59.3cm、東壁42.2～45.7cm、南壁48.6～59.6cm、西壁52.8～56.0mを測る。直立ぎみにやや外傾する。

（柱穴）　床面で3基（ＰＰ1～3）・張り出し部上端から外周溝間に9基（ＰＰ4～12）・外周溝外で26基（ＰＰ13～38）検出された。柱穴痕跡認められたものはＰＰ2のみである。柱穴痕跡幅は約25cmを測る。

また、外周溝に沿う様に、10基（ＰＰ14・19・20～30）検出された。上屋構造を示唆するものと思われる。柱穴の規模については、表にして示した（第36図）。

（土坑）　1基検出された。外周溝と接する。1号土坑と呼称する。1号土坑の形状は平面形は長方形を呈し、断面形は皿状を呈する。規模は上端164×74cm、下端133×48cm、検出面からの深さ38.2cmを測る。土坑精査時、埋土上面で焼土を検出した。焼土は土坑ほぼ全面に広がっていた。厚さは約5cmを測る。焼土下面には炭化材が確認された。炭化材は板状を呈し、径は138×37cm、厚さ約5cmを測る。樹種は、ケヤキ・クリである。焼土が上面に位置し、炭化材が下面に位置することから、本竪穴住居跡の床面の焼失状況と類似する。

（床面）　Ⅷ層を床とする。ほぼ平坦で固く締まる。カマド周辺・壁付近を中心に部分的に貼り床が施されている。

（カマド）　北壁中央部から東寄りに位置する。カマド検出時に床面より若干高く盛り上がった袖部と加熱を受けた数個の礫を確認した。カマドを構築する前に貼り床を施し、その後礫を芯材に用いて黄褐色土の粘

土質土で覆って構築したものと推測される。燃焼部は径75×63㎝、厚さ約13㎝を測る。焼成は良好である。

（煙道部）　刳り貫き式である。主軸方向Ｎ－25°－Ｅである。煙出孔は側壁に筒状に礫を縦に埋め込んで、構築されている。底面は、燃焼部から約20度～30度の下り勾配で、煙出孔底面に近づくにつれて傾斜がややきつくなる。煙道部の長さは、約1.1ｍ、煙出孔径は78×69㎝、煙出孔検出面から底面の深さは、約1.0ｍを測る。煙出孔側壁の礫については、原位置をとどめている。煙道部内で確認された礫は人為的に廃棄された様相を呈している。

（壁溝）　カマド周辺を除いて全周する。埋土は黒褐色土を主体とするが、南西壁溝埋土上部にＴｏ－ａの水成堆積が認められる。断面の形状はＶ字状を呈する。幅は概ね10～15㎝、広い部分で20㎝を測る。床面から底面の深さは東壁南北方向から8.2～4.4㎝、南壁東西方向から13～29.2㎝、西壁南北方向から13.4～17.2㎝、北壁側9.6㎝である。壁溝底面には小ピットが伴う。小ピットは21基検出された。小ピットの規模は小さいもので直径５～８㎝、大きいもので直径13～21㎝を測る。床面から小ピット底面の深さは9.6～19.2㎝である。最も浅いもので3㎝、最も深いもので31.5㎝を測る。

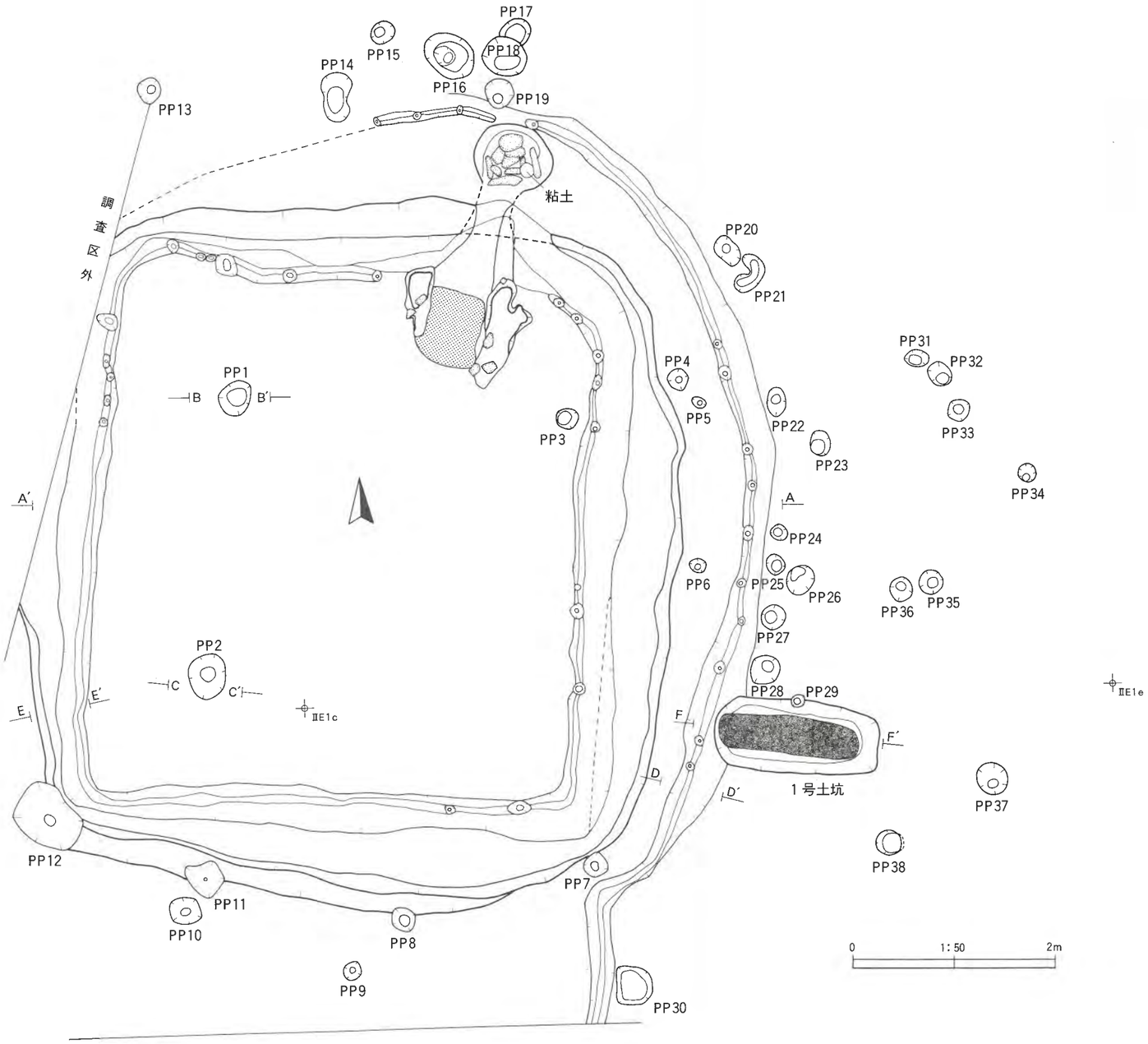
（外周溝）　本遺構の北・東壁を囲うようにめぐる。南・西壁側は調査区外に存在するため、全容は明らかでない。埋土はＴｏ－ａの水成堆積、位置によってＴｏ－ａをブロックに含む黒褐色土からなる。断面形はＵ字状を呈する。規模は、上端幅は25～40㎝、下端幅は２～５㎝を測る。底面には直径９～20㎝の小ピットが伴う。Ｔｏ－ａが堆積していることから、廃絶時に外周溝は開口していたと思われる。

（焼失）　焼土塊・炭化材が床面ほぼ全面に広がる。部分的に壁の一部に、壁によりかかるように検出された。焼土塊は約３～10㎝の厚さで形成されていた。焼土塊を除去後、炭化材を検出した。炭化材は光沢があり、残存状況は良好であった。炭化材Ａ・Ｄ・Ｆは壁によりかかるように検出された。Ｄ・Ｆ・Ｈについては、形状から柱材を窺わせる。Ｅは平面形は方形で、板状を呈する。Ｃは検出された炭化材の中で径が大きい。炭化材の樹種・規模については、第38図に表にして示した。

遺物（第75・76図・写真図版55・56）

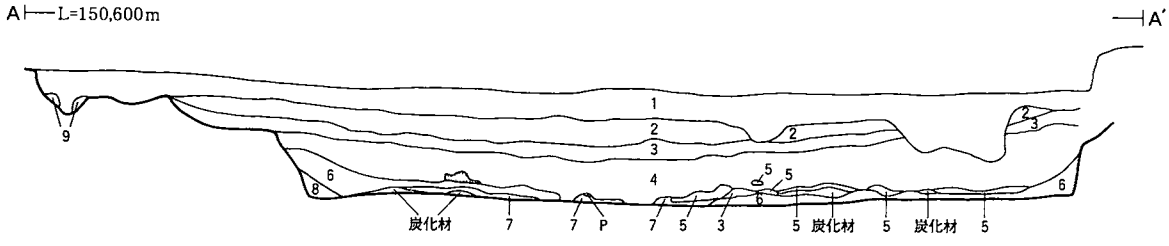
出土状況は、Ｔｏ－ａの層状堆積下の埋土・焼失焼土塊上面・床面・カマドから散在して出土した。出土量は、土師器坏・甕・須恵器合わせて中コンテナ約１箱強である。95～100はロクロ成形の土師器の坏である。95・106は床面と焼失焼土塊上面でそれぞれ出土した遺物が接合した。95～99は内面に黒色処理が施される。98は外面にも黒色処理が施される。95・97・99はロクロ成形後に体部・体部下端にナデ調整が施される。100は内外面非黒色処理で、回転糸切り後再調整は施されていない。95・98は焼失時による二次加熱なのか、黒色処理が消失した痕跡、外面に剝落が認められる。101は鍋と思われる。102～108は非ロクロ成形の土師器の甕である。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・ケズリの調整が施される。105･106は口縁部から底部まで残存する。外面は胴部上半はナデ・下半はケズリの調整が施される。104は１号土坑から出土した土器である。107は底径が6.0㎝で本遺跡甕の底部径の中で比較的小さく、底部から胴部下半からやや強く外反する。調整は本遺跡で出土した平安時代に属する土師器甕と比較して丁寧であることから、奈良時代の遺物と推測される。流れ込みであろう。108は底面に砂底をもつ。109は内外面ロクロ痕のみの甕である。110は須恵器の甕もしくは壷と思われる。内外面共にロクロ成形である。111は鉄製品で器種は不明である。

時期　Ⅱ群に属す。



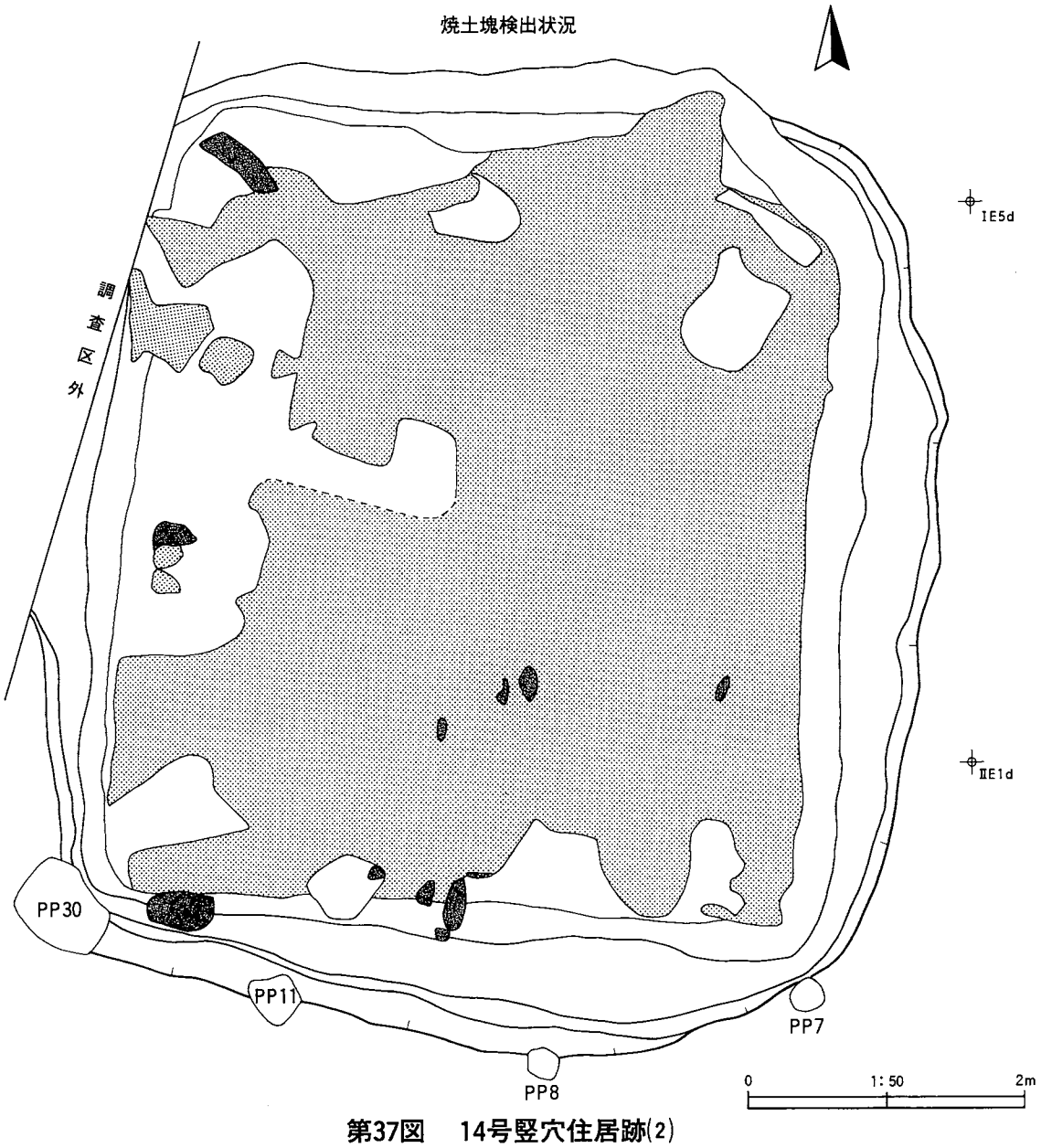
柱穴・ピット番号	開口部径（cm）	深さ（cm）	備　考
ＰＰ1	37×33	29.8	
ＰＰ2	45×37	42.2	柱穴痕跡有
ＰＰ3	23×20	12.8	
ＰＰ4	21×20	22.5	
ＰＰ5	14× 8	18.0	
ＰＰ6	17×15	18.2	
ＰＰ7	23×23	14.8	
ＰＰ8	25×23	40.7	
ＰＰ9	20×16	8.3	
ＰＰ10	31×27	24.4	
ＰＰ11	40×33	17.3	
ＰＰ12	68×55	34.6	
ＰＰ13	25×24	16.1	
ＰＰ14	52×23	17.8	重複新旧不明
ＰＰ15	24×20	27.6	
ＰＰ16	52×42	24.1	
ＰＰ17	直径25	6.5	
ＰＰ18	44×36	17.3	
ＰＰ19	29×29	28.0	
ＰＰ20	30×18	19.5	
ＰＰ21	36×14	14.9	重複？
ＰＰ22	30×17	24.1	
ＰＰ23	23×20	29.5	
ＰＰ24	18×15	11.6	
ＰＰ25	20×17	18.6	
ＰＰ26	31×26	12.5	
ＰＰ27	24×23	24.0	
ＰＰ28	31×29	17.2	
ＰＰ29	13×13	30.7	
ＰＰ30	38×34	15.1	
ＰＰ31	24×17	18.9	
ＰＰ32	35×20	17.9	
ＰＰ33	24×23	23.9	
ＰＰ34	18×17	36.5	
ＰＰ35	24×23	17.5	
ＰＰ36	24×22	20.4	
ＰＰ37	32×29	22.7	
ＰＰ38	24×24	18.0	

第36図　14号竪穴住居跡(1)



A－A´

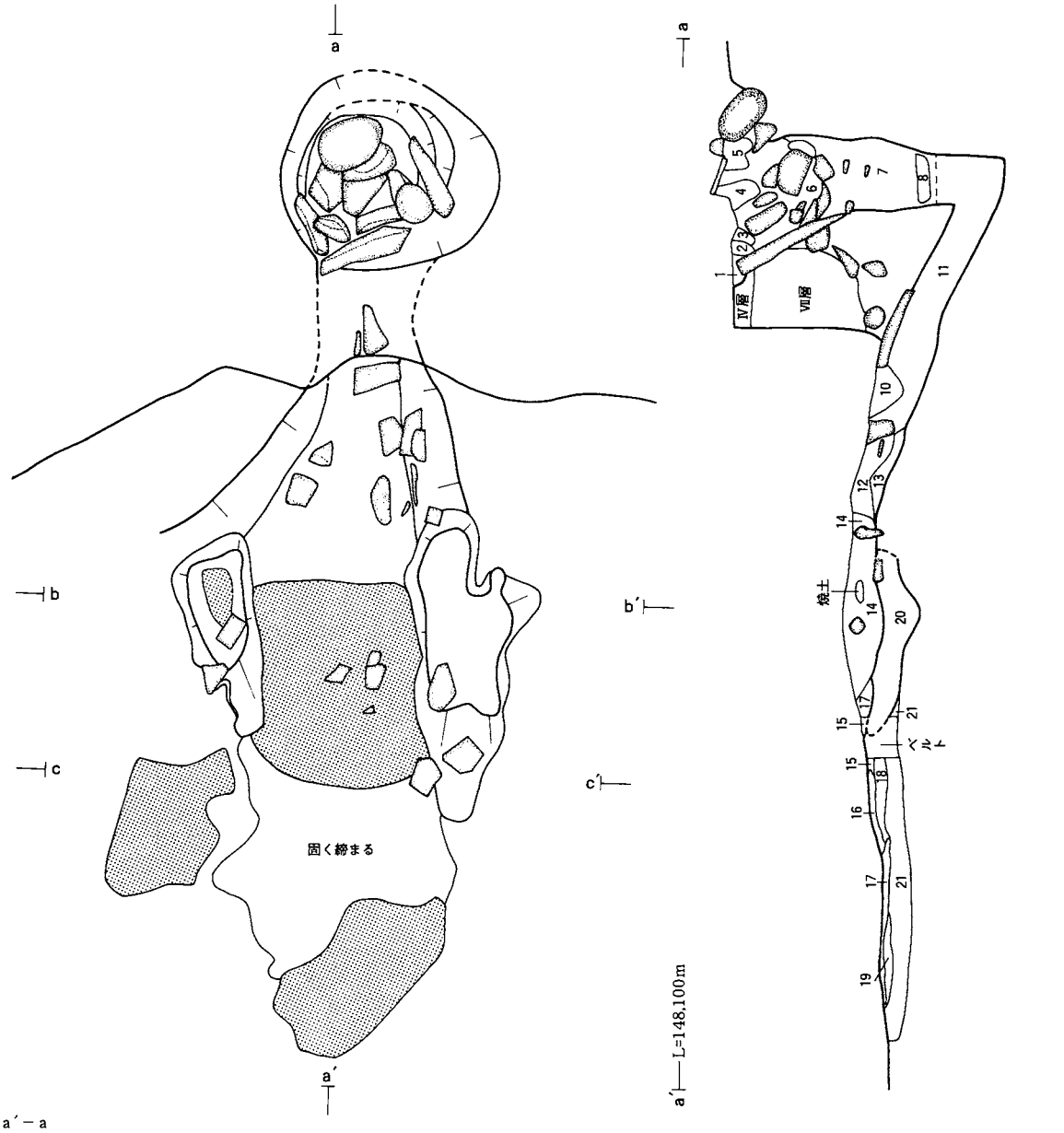
1．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a小ブロック・黒色土含）
2．To-a水成堆積　(2.5Y　6/3　にぶい黄褐色　粘性弱　しまり密)
3．To-a一次堆積　(2.5Y　6/2　灰白色　粘性弱　しまり密・To-a大湯浮石含？)
4．10YR3/1　黒褐色　粘性やや弱　しまり密（To-cu・炭化物・焼土含）
5．2.5YR6/8　明赤褐色　粘性弱　しまりやや密（焼土ブロック）
6．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中（To-cu・To-a小ブロック含）
7．2.5YR6/8　明赤褐色　シルト　粘性弱　しまり密（消失焼土）
8．2.5YR5/8　明赤褐色　シルト　粘性弱　しまり密（焼土・炭化物含）
9．To-a小ブロック（10YR　7/1　灰白色　シルト　粘性弱　しまり密）



第37図　14号竪穴住居跡(2)

炭化材名	規模（cm）	炭化材の厚（cm）	炭化材の樹種
A	76×31	5.1cm	クリ
B	131×44	5.1cm	クリ
C	138×80	6.8cm	ケヤキ（カヤ）
D	74×14	14.3cm	クリ
E	114×44	11.6cm	ケヤキ
F	49×10	5.6cm	ケヤキ
G	74×38	5.6cm	ケヤキ
H	33×8	2.4cm	ケヤキ
I	42×21	3.5cm	ケヤキ

第38図　14号竪穴住居跡(3)

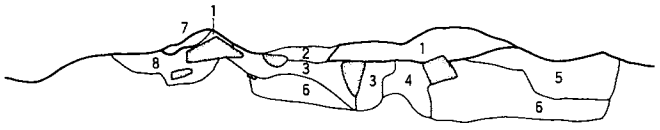


a′－a

1. 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり密（煙道構築時の掘り方）
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり密
3. 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性やや弱 しまり密（To-a粒状に含）
4. 10YR4/6 褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり密（粘土）
5. 10YR4/6 褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり密（粘土）
6. 10YR4/6 褐色 シルト 粘性強 しまり密（To-H？ブロック状に含）
7. 10YR5/6 黄褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎（焼土・炭化物粒含）
8. 5YR5/6 明赤褐色 シルト 粘土質シルト 粘性やや強 しまり密（焼土）
9. 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり密（煙道開始部焼土粒多く含）
10. 10YR2/3 黒褐色 シルト粘性 やや強 しまりやや密（粘土質の黄褐色土ブロック含）
11. 10YR2/1 黒 シルト 粘性弱 しまり密
12. 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎（焼土ブロック多量に含）
13. 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎
14. 10YR4/6 褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり密（焼土粒・To-H？ブロック・黒褐色土粒含・カマド天上部の崩落土か）
15. 2.5YR5/8 明赤褐色（焼土ブロック）
16. 10YR4/4 褐色 シルト 粘性弱 しまり密（カマド構成土）
17. 2.5YR5/8 明赤褐色 シルト 粘性弱 しまり中（焼土）
18. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 しまりやや密（炭化物・焼土含・灰層）
19. 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや密（炭化物含）
20. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 しまり密（燃焼部）
21. 10YR5/8 黄褐色 To-Hに黒色土ブロック含・貼り床）

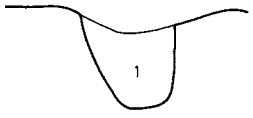
第39図　14号竪穴住居跡(4)

b ⊢—L=147,700m —⊣ b′

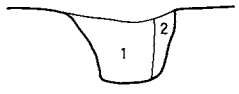


b－b′
1．10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　粘性強　しまり密（黒褐色土粒・焼土少量含・カマド袖部）
2．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（炭化物含・天井部？崩壊土）
3．10YR4/4　褐色　シルト　粘性中　しまり中（焼土粒・黒褐色土粒含）
4．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（黄褐色土ブロック含）
5．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（貼り床）
6．10YR5/6　黄褐色　シルト　粘性中　しまり密（黒褐色土のブロック多量に含・貼り床）
7．5YR4/8　赤褐色　シルト　粘性弱　しまり密（カマド袖部に加熱）
8．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（焼土粒・炭化物含・貼り床）

PP1
B ⊢—L=147,500m —⊣ B′



PP2
C ⊢—L=147,500m —⊣ C′

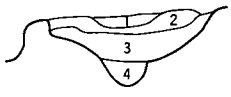


PP1．2　B－B′ C－C′
1．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中
（上部にTo-H粒・焼土粒含・柱穴痕跡）
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性やや強　しまり密

c ⊢—L=147,800m —⊣ c′

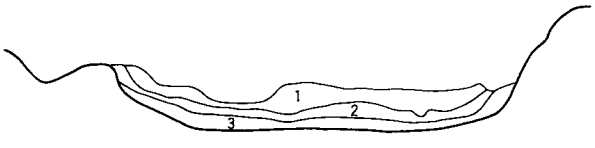
C－C′
1．10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　粘性強　しまり密（カマド袖部）
2．5YR5/6　明赤褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（焼土・黒色土粒ごく少量含）
3．10YR4/6　褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（焼土ブロック多量に含）
4．10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（黄褐色土粒・灰を含・カマド天井崩落土か）
5．5YR5/8　明赤褐色　砂質シルト（To-H軽石）粘性強　しまり密（燃焼部）
6．10YR6/8　明黄橙色　砂質シルト　粘性弱　しまり密（黒褐色土ブロック含・貼り床）
7．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（黄褐色ブロックごく少量含（To-Hと思われる）

D ⊢—L=148,600m —⊣ D′



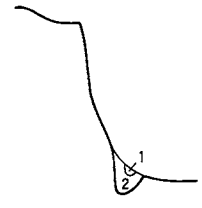
D－D′
1．10YR7/6　明黄褐色　粘性無　しまり密
2．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性無　しまり
（To-aの混合土）
3．To-a水成堆積
4．10YR2/1　黒　シルト　粘性弱　しまり密（To-a含・To-cu 微量に含）

F ⊢—L=148,400m —⊣ F′

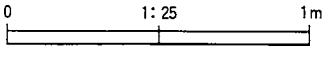


F－F′
1．7.5YR6/8　橙色　粘性弱　しまりやや疎（焼土）
2．炭化材　（光沢ある）
3．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中（炭化物含）

E ⊢—L=148,400m —⊣ E′



E－E′
1．To-a
2．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎
（To-H粒含）



第40図　14号竪穴住居跡(5)

15号竪穴住居跡

遺構（第41図・写真図版28・29）

（位置）　ＩＧ１ａグリッドに位置する。

（検出状況）　Ⅱ層上面で検出した。Ｔｏ－ａが集中するプランとして確認した。

（平面形・規模・床面積）　前記した撹乱により、詳細については不明であるが、平面は歪な方形を呈する。北東壁2.0ｍ、南西壁2.53ｍ、北西壁（3.25ｍ）、南東壁（3.17ｍ）、床面積は約（7.5㎡）である。

＊（　）は推定値

（埋土）　Ｔｏ－ａブロックを多量に含む黒褐色土の単層からなる。自然堆積か人為堆積か判然としなかった。

（壁）　直立ぎみに外傾する。

（床）　Ⅳ層を床とする。ほぼ平坦な部分も認められるが、凹凸がある。貼り床は施されず、しまりはない。

（柱穴）検出されなかった。

（カマド・煙道部）　撹乱のため不明。

遺物　（第76図・写真図版57）

埋土上位から土師器甕片２点のみ出土した。112は土師器底部で内外面にナデ調整が施される。

16号竪穴住居跡

遺構（第41図・写真図版29）

（位置）　ＩＦ５ａ・ＩＧｌａグリッド位置する。

（検出状況）　Ⅱ層上面で検出した。Ｔｏ－ａの集中するまとまりとして確認した。

（平面形・規模・床面積）　調査区境界に接するため、詳細については不明である。平面形は方形を呈すると思われる。南壁4.7ｍを測る。床面積は不明。

（埋土）　Ｔｏ－ａブロックを多量に含む黒褐色土からなる。Ｔｏ－ａ含有量と黒褐色土の色調により、５層に細分される。自然堆積か人為堆積か判然としなかった。

（壁）　Ｖ層を壁とする。壁面は、棚状の張り出し部を持つ。この張り出し部の規模は、検出面から底面までの深さは11.6～27.8㎝、幅は20～90㎝を測る。底面はＶ層面で、ほぼ平坦な部分と、緩やかに上がる部分がある。張り出し部壁はやや外傾する。壁開始部から床面までの壁高は、25.5～33.3㎝を測る。壁はやや外傾する。

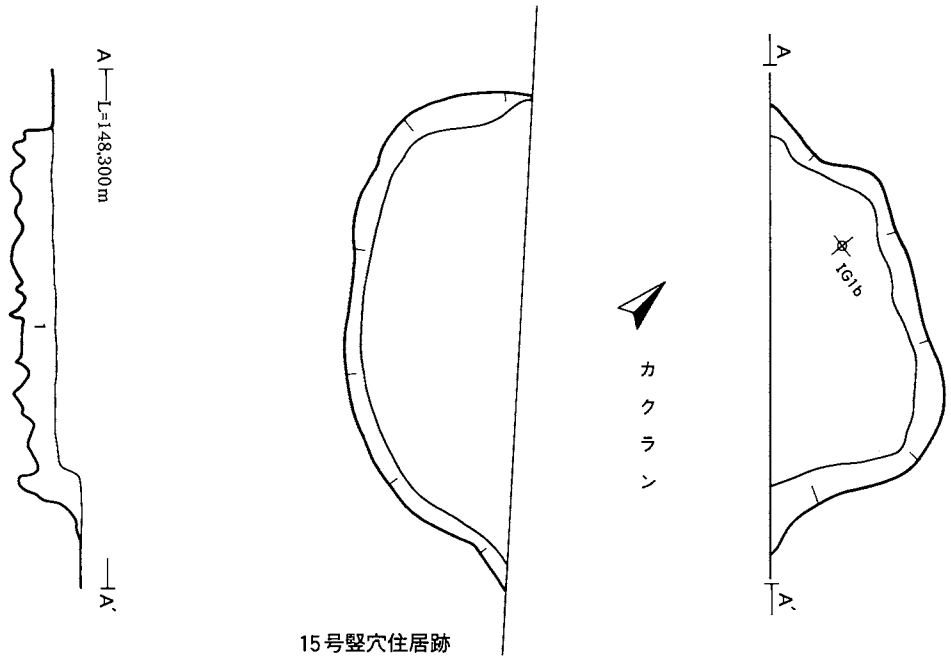
（床面）　Ｖ層を床とし、全面に貼り床が施されている。床面はＴｏ－ａブロック・黒褐色土ブロックが散在して見られる。図示しなかったが、西側床面に径約30×30㎝の焼土塊・灰が検出された。

（柱穴）　床面・張り出し部面・住居外に６基検出した。埋土には柱穴痕跡は確認されず、Ｔｏ－ａ小ブロック・粒を含む黒褐色土からなる。検出面から底面の深さは23.1～39.1㎝の範囲に入る。なお、ＰＰ５底面に扁平な礫が確認された。

（カマド・煙道部）　調査区域外に存在するため不明である。

遺物（第77図・写真図版57）

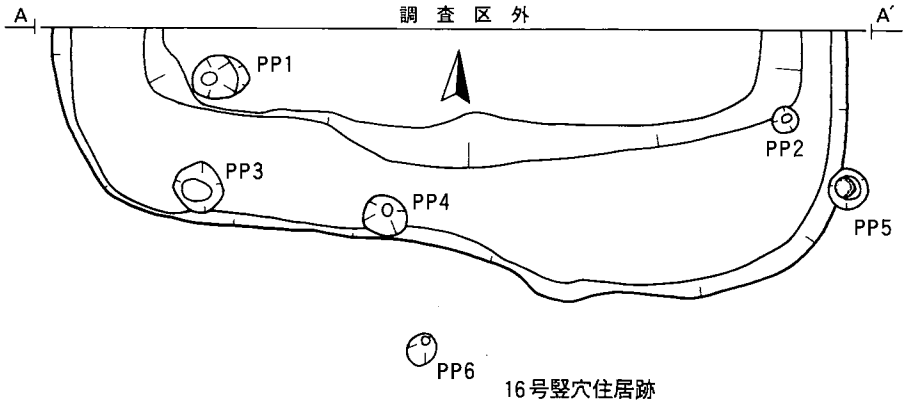
出土状況は、床面からの出土はなく、埋土上位から数十点出土した。113は頸部に段を持ち、口唇部は沈線状の溝を有する。内面ナデ・外面はハケメの調整が施される。本遺跡の平安時代に属する土器と比較して、器形・調整から奈良時代の遺物と思われる。流れ込みであろう。



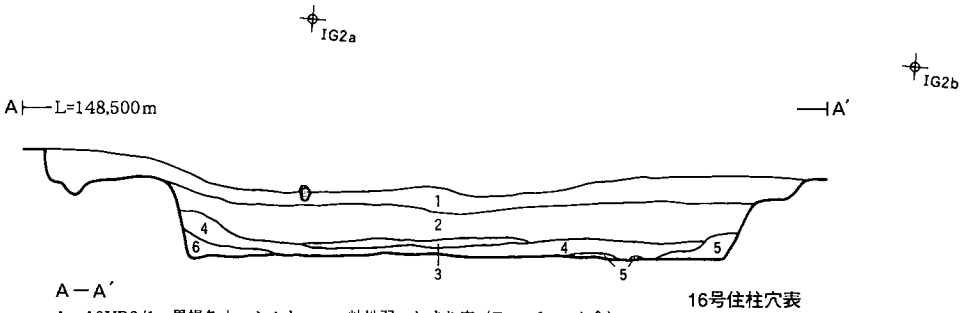
15号竪穴住居跡

15号竪穴住居跡埋土

1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり中（To-a粒・ブロック含）



16号竪穴住居跡



A－A′

1．10YR3/1　黒褐色土　シルト　粘性弱　しまり密（To-aブロック含）
2．10YR3/2　黒褐色土　シルト　粘性中　しまり中（To-aブロック多量に含）
3．10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中　しまり疎（To-a少量含・焼土・炭化物含）
4．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（To-a・焼土粒少量含）
5．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中
6．10YR4/1　褐灰色　シルト　粘性弱　しまり疎（焼土を多量に含）

16号住柱穴表

柱穴・ピット番号	径（cm）	深さ(cm)	備　考
ＰＰ１	37×28	36	
ＰＰ２	18×18	23.1	
ＰＰ３	32×32	37.9	
ＰＰ４	28×26	39.1	
ＰＰ５	26×26	23.2	礫上面まで16cm
ＰＰ６	23×19	不明	

0　1:50　2m

第41図　15・16号竪穴住居跡

時期　Ⅴ群に属す。

17号竪穴住居跡

遺構（第42図・写真図版30）

（位置）　ＩＧ３ｂグリッド位置する。

（検出状況）　Ⅲ層面で煙道部を検出後、若干の壁・床・袖部を検出した。

（平面形・規模・床面積）　遺構本体が排水パイプ設置時に著しく撹乱を受けているため、詳細については不明である。平面形は方形を呈すると思われる。南壁2.6ｍを測る。床面積は不明。

（埋土）　Ｔｏ－ａ小ブロック・粒を含む黒褐色土を主体とする。

（柱穴）　本遺構床面西側で３基検出した。規模はＰＰ１が径24×23㎝、深さ20.8㎝、ＰＰ２が径24×14㎝、深さ24.4㎝、ＰＰ３が径18×14㎝、深さ17.4㎝を測る。埋土はＴｏ－ａを含む黒褐色土の単層からなる。柱穴痕跡は認められなかった。

（壁）　Ⅴ層を壁とする。壁高15.4～20.8㎝を測る。直立ぎみにやや外傾する。

（床）　Ⅴ層を床とする。部分的に貼り床が施されている。ほぼ平坦で固く締まる。

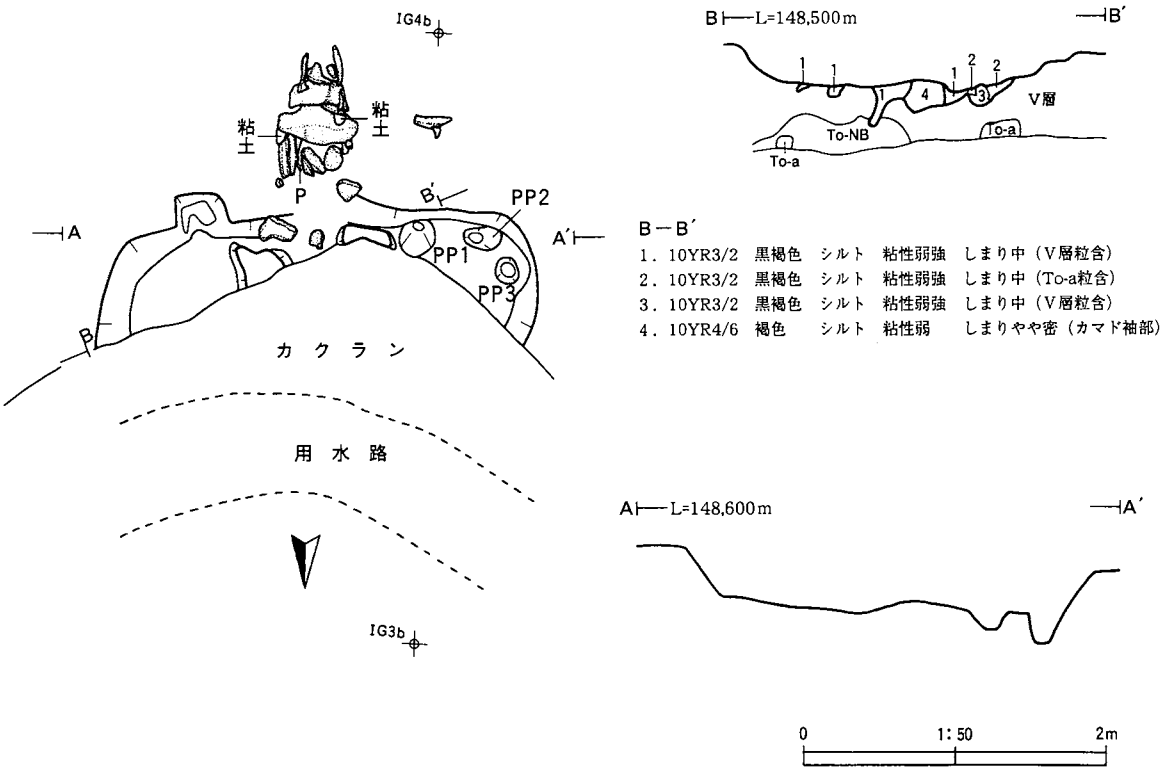
（カマド）　南壁ほぼ中央部に位置する。前記した撹乱により残存状況は良好ではなく、若干の袖部が確認される。燃焼部は撹乱により、消失していた。

（煙道部・煙出部）　掘り込み式である。主軸方向はＮ－185°－Ｓ（時計回り）である。煙道部側壁に直径15～34㎝、厚さ３～14㎝の角礫・平たい円礫を縦に埋め込んで構築され、原位置をとどめている。側壁上部には径33×15㎝・53×23㎝、厚さ６～10㎝の平たい礫が２枚天井石として原位置をとどめていた。煙道部の長さは約1.0ｍ、幅は20～25㎝を測る。煙道部底面はほぼ平坦である。煙は天井部をくぐり抜け、煙出部先端に導かれるものと思われる。煙道部底面下位にＴｏ－ａを含む層が確認された。Ｔｏ－ａ降下以降に構築したのか、Ⅴ層面まで掘り込んで、煙道部底面を貼り床状に構築したのか、判然としなかった。

遺物（第77図・写真図版57）

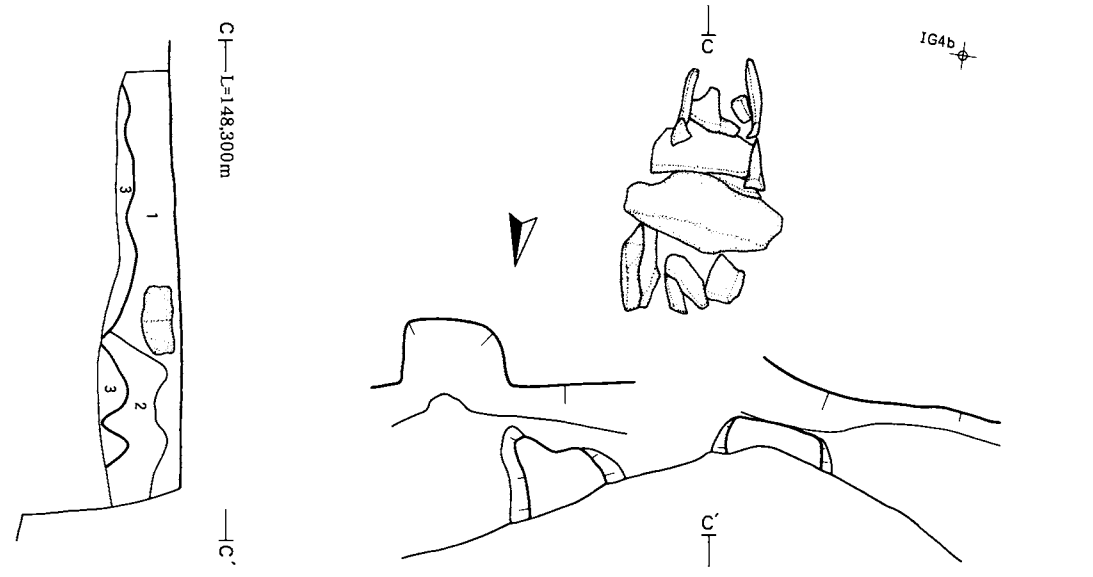
出土状況は、煙道部内から土師器甕片が３点出土した。114は口縁部ヨコナデ・内外面はナデの調整が施される。

時期　Ⅴ群に属す。



B—B′

1．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱強　しまり中（V層粒含）
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱強　しまり中（To-a粒含）
3．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱強　しまり中（V層粒含）
4．10YR4/6　褐色　　シルト　粘性弱　　しまりやや密（カマド袖部）



C—C′

1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（To-a粒ごく少量含）
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中（To-a粒・V層粒ごく少量含）
3．V層

第42図　17号竪穴住居跡

18号竪穴住居跡

遺構（第43・44図・写真図版31・34）

（位置）　ＩＧ３ｃグリッドに位置する。

（検出・精査状況）　５号畠作耕地の復旧痕跡を精査後、Ⅲ層上面で検出した。

（平面形・規模・床面積）　平面形はほぼ方形状を呈する。東壁3.5ｍ、南壁3.55ｍ、西壁3,65ｍ、北壁3.5ｍ、床面積約15.9㎡を測る。

（埋土）　褐灰色のＴｏ－ａと黒色土の混合土を主体とし、Ｔｏ－ａ含有量・色調により７層に細分される。自然堆積の様相を呈する。

（壁）　Ｖ層を壁とする。壁面は、四壁ともに上半部に張り出し部を持つ。この張り出し部の規模は検出面から張り出し部底面までの深さは、北壁8.1～14㎝、南壁18.8～25.8㎝、西壁16～24.1㎝、幅は北側20～60㎝、南壁20～55㎝、西側20～25㎝を測る。底面はＶ層を底面とし、緩やかに上がり、張り出し部壁で直立ぎみに立ち上がる。

壁開始部から床面までの壁高は、北壁26.5～38.9㎝、東壁27.9～38.6㎝、南壁28.0～35.8㎝、西壁26.8～35.2㎝、直立ぎみにやや外傾する。

（柱穴）　床面・張り出し部面・住居外に合わせて、29基検出された。ＰＰ29を除いては、埋土は本遺構の埋土と類似するものがほとんどである。いずれの柱穴にも柱穴痕跡は認められなかった。規模は第43図に表として示した。

（床面）　Ｖ層を床とする。ほぼ平坦で固く締まる。東壁と出入り口部に貼り床が施されている。Ｔｏ－ａが散在して認められた。

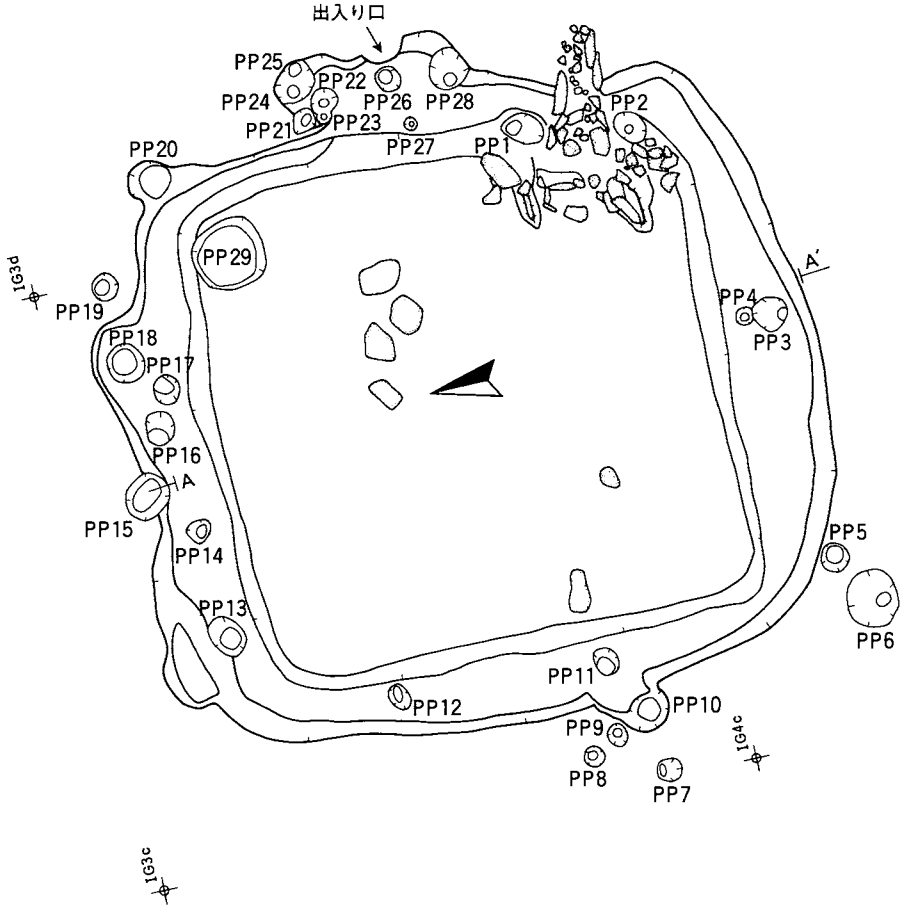
（カマド）　東壁南寄りに位置する。残存状況は良好ではない。天井部はＴｏ－ａ粒・ブロックが黄褐色土の混合土と共に燃焼部・袖部に崩落していた。袖部北側は、土師器甕の胴部から底部破片（遺物番号121）を芯材とし、明黄褐色土で覆って構築されていたと思われる。袖部南側は、縦長の数個の芯材と思われる礫が検出時に露出していた。燃焼部は径53×39㎝、厚さ７㎝を測る。焼成は良好である。燃焼部面に土師器甕底部を支脚としている。

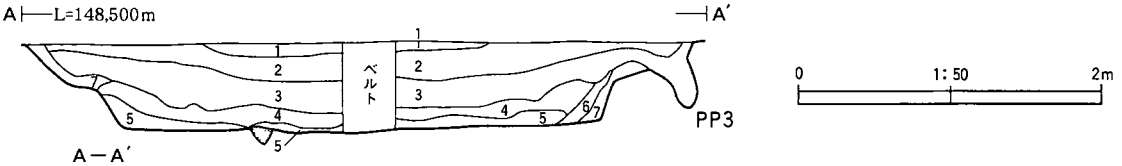
（煙道部）　掘り込み式である。主軸方向Ｎ－105°－Ｅである。径約30×20㎝、厚さ約６～８㎝の平たい角礫を煙道開始部付近に埋め込んで構築されている。検出時に煙道開始部から先端部まで褐色の焼土塊が広がり、直径５～20㎝の加熱を受けた角礫が数十個散在して見られた。煙道部を構成する礫と推測されるが、原位置をとどめていない。底面は燃焼部から煙出先端部にかけて上がり勾配である。煙道部の長さは約1.1ｍである。

（出入り口）　東壁張り出し部下の床面に貼り床が施され、周辺の床面より固く締まる。出入り口部の規模は120×52㎝、検出面から出入り口部底面までの深さ13.5～17.4㎝を測る。ＰＰ21～ＰＰ28の内いずれかは出入り口に伴う柱穴の可能性が考えられる。

遺物（第77・78図・写真図版57・58）

出土状況は、カマド・カマド周辺の床面から主に出土した。出土量は、土師器坏・甕合わせて中コンテナ約１箱分である。115はロクロ成形の土師器の坏である。内面は黒色処理が施され、外面は回転糸切り後、体部下にナデによる調整が施される。116～121は非ロクロ成形の土師器の甕である。口縁部ヨコナデ・内面ナデ・外面はナデ・ケズリ等の調整が施される。120は外面ナタ状の工具による調整と思われる。底面に砂底を持ち、支脚として使用された。121はカマドの袖部の芯材として使用されたと思われる。122はロクロ成





A－A′

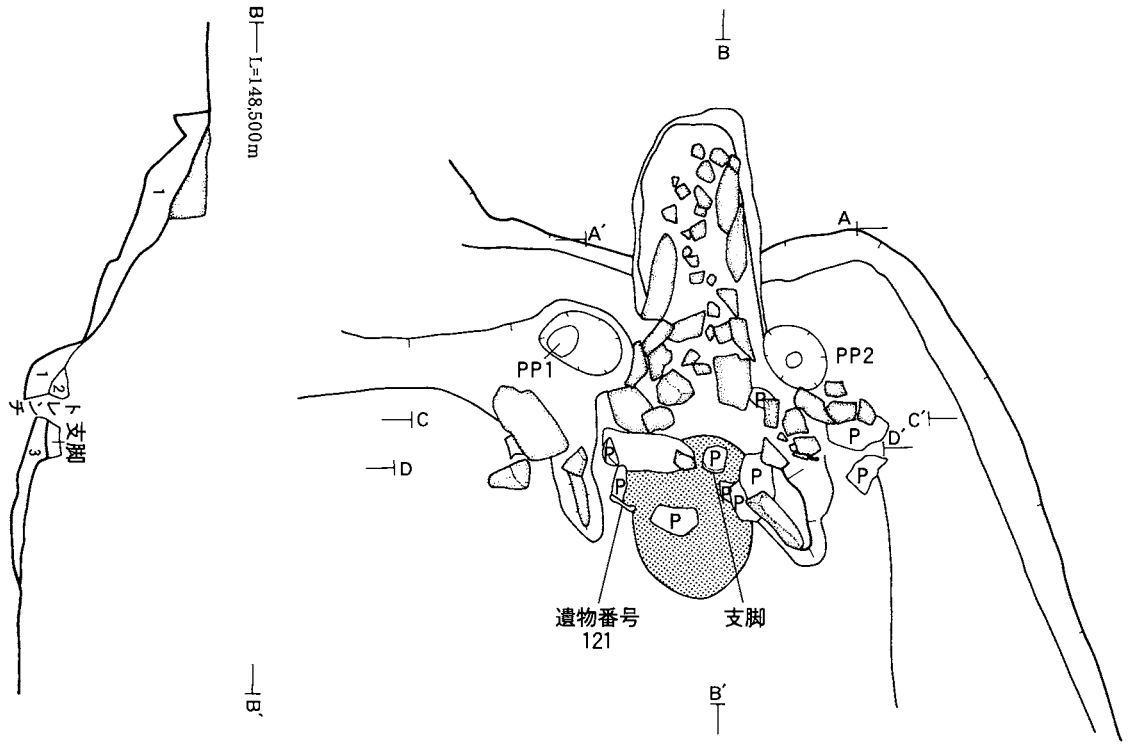
1．7.5YR4/1　灰褐色　シルト　粘性弱　しまり密（To-aブロック多量に含）
2．7.5YR4/1　灰褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（To-a粒含）
3．7.5YR4/1　灰褐色　シルト　粘性弱　しまり密（To-a粒含・V層粒を多量に含）
4．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（To-aブロック・粒・V層粒ブロック含）
5．10YR2/1　黒　　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a粒ごく少量含・To-Hごく少量含）
6．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（壁崩落土）
7．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中（To-a粒・To-H粒少量含）

18号竪穴住居跡柱穴表

柱穴・ピット番号	径（cm）	深さ（cm）	備　考
ＰＰ1	28×18	31.2	
ＰＰ2	24×18	11.6	
ＰＰ3	24×23	26.6	
ＰＰ4	11×10	5.3	
ＰＰ5	19×18	15.1	
ＰＰ6	38×33	31.3	
ＰＰ7	16×15	11.9	
ＰＰ8	15×13	8.6	
ＰＰ9	15×13	6.1	
ＰＰ10	33×24	21.2	
ＰＰ11	17×16	24.5	
ＰＰ12	18×14	11.9	
ＰＰ13	28×20	9.3	
ＰＰ14	15×13	8.3	

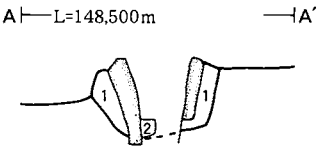
柱穴・ピット番号	径（cm）	深さ（cm）	備　考
ＰＰ15	32×27	19	
ＰＰ16	22×18	37.7	
ＰＰ17	20×18	22.1	
ＰＰ18	25×24	7.8	
ＰＰ19	18×16	10.8	
ＰＰ20	28×27	9.8	
ＰＰ21	18×15	7.7	
ＰＰ22	18×(17)	16.2	重複
ＰＰ23	10×(8)	11.9	重複
ＰＰ24	30×23	23.9	重複
ＰＰ25	30×23	26.4	重複
ＰＰ26	18×15	10.4	
ＰＰ27	9×8	5.8	
ＰＰ28	28×25	11.9	
ＰＰ29	48×45	14	

第43図　18号竪穴住居跡(1)



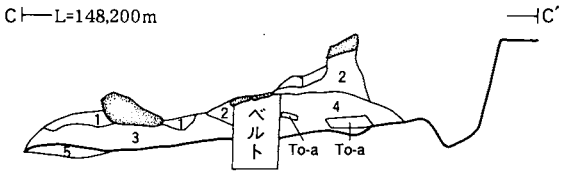
B－B′

1．10YR2/1　黒　シルト　粘性弱　しまりやや密（上位にTo-a粒・褐色土粒含）
2．10YR6/4　褐色　粘土質シルト　粘性強　しまり密（To-a粒含）
3．7.5YR7/4　にぶい橙色　砂質シルト　粘性弱　しまり密（To-a粒ごく少量含）



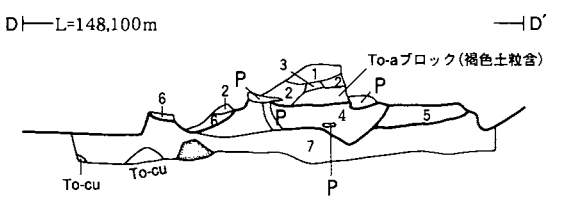
A－A′

1．10YR3/1　黒褐色　粘性弱　しまり密
（褐色土粒・黄褐色土粒含・掘り方）
2．10YR5/8　黄褐色　粘土質シルト　粘性強　しまり密
（粘土で補強した部分）



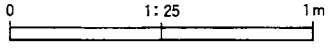
C－C′

1．10YR4/3　にぶい黄褐色　粘性中　しまり密
（カマド袖部の構成土か・To-H？）
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎
（To-a粒ごく少量含・焼土粒・炭化物含）
3．10YR4/1　褐灰色　シルト　粘性弱　しまり密
（To-a多量に含）
4．10YR4/6　褐色　シルト　粘性やや強　しまり中
（黒褐色土粒・焼土粒含）
5．10YR5/4　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱　しまり密
（V層住居床面）



D－D′

1．10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり密
（To-a粒・褐色土粒ごく少量含）
2．10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密
（To-a粒・焼土粒を含）
3．10YR5/8　黄褐色　粘土質シルト　粘性強　しまり密（To-H？）
4．7.5YR7/4　橙色　砂質シルト　粘性弱　しまり密（燃焼部）
5．7.5YR5/6　明黄褐色土　粘土質シルト　粘性弱　しまり密
（To-a粒ごく少量含・カマド袖部・八戸火山灰か）
6．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密
（To-a粒を多く含）
7．10YR2/1　黒　シルト　粘性弱　しまり密
（To-a粒・V層ブロック含）

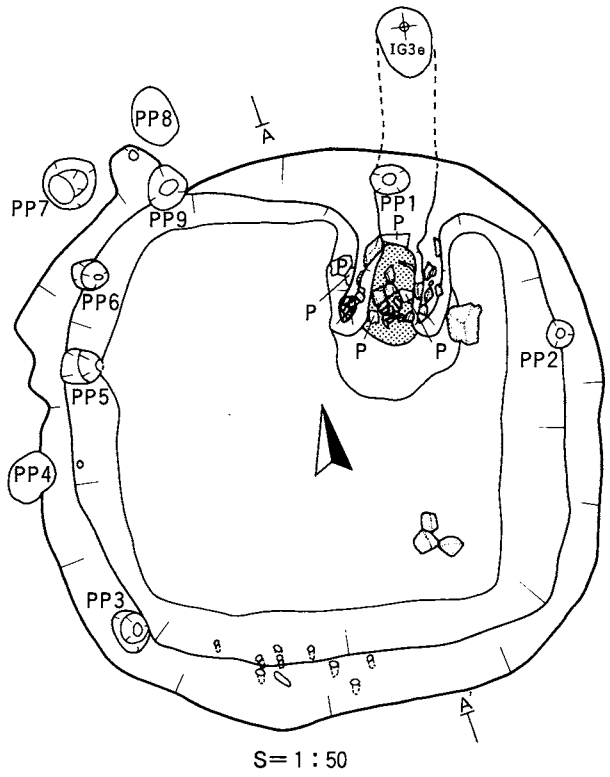


第44図　18号竪穴住居跡(2)

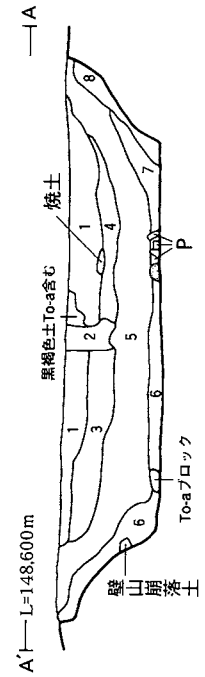
形の土師器の甕である。ロクロ成形後、外面胴部上部付近からケズリが施され、内面は口縁部より下はナデによる調整が施される。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、器形は深鉢状を呈する。
時期　Ⅴ群に属す。

19号竪穴住居跡

遺構（第45・46図・写真図版32・33・34）
（位置）　ＩＧ３ｄグリッドに位置する。
（検出・精査状況）　５号畠作耕地の復旧痕跡精査後、Ⅲ層上面で検出した。
（平面形・規模・床面積）　平面形は方形を呈する。東壁2.85ｍ、南壁2.8ｍ、西壁2.55ｍ、北壁3.1ｍ、床面積約6.2㎡を測る。
（埋土）　上位はＴｏ－ａブロックを多量に含む黒色土、中位はＴｏ－ａ粒・ブロック、Ⅴ層粒・ブロックを含む灰褐色土と黒褐色土、下位はＴｏ－ａ粒・Ⅴ層粒を含む黒色土からなる。Ｔｏ－ａの含有量は埋土上位の方が埋土中～下位より比較的多い。
（壁）　Ⅴ層を壁とする。四壁ともに上半部に張り出し部を持つ、この張り出し部の規模は、検出面から底面までの深さは、東壁約10㎝、南壁約14～20㎝、西壁7.5㎝、幅は東側18～23㎝、南側30～40㎝、西側18～30㎝、北側25～30㎝を測る。張り出し部底面はⅢ層を底面とし、ほぼ平坦な部分とゆるやかに立ち上がる部分がある。
壁開始部から床面までの壁高は、北壁39.2～63.7㎝、東壁46.2～50.8㎝、南壁32.4～53.0㎝、西壁40.9～48.1㎝を測る。直立ぎみにやや外傾する。
（柱穴）　張り出し部面・住居外・壁際に合わせて９基検出された。埋土は黒褐色土からなる。いずれの柱穴にも柱穴痕跡は認められなかった。規模は第45図に表にして示した。
（床面）　Ⅴ層を床とする。ほぼ平坦で固く締まる。ほぼ全面に貼り床が施されている。Ｔｏ－ａが散在して見られる。
（カマド）　北壁やや東寄りに位置する。残存状況は比較的良好である。加熱を受けた数個の角礫がカマド本体を覆っていた。カマドを構成する礫と推測される。カマド本体は、角礫・土器を芯材として、にぶい黄褐色土に覆われて構築されている。燃焼部の規模は径63×27㎝、厚さ11㎝を測る。焼成は良好である。
（煙道部・煙出部）　刳り貫き式である。主軸方向Ｎ－15°－Ｅである。煙出底面は、燃焼部から煙道開始部付近で上がり、煙道部から煙出孔底面までほぼ平坦である。煙道部の長さは約1.3ｍ、煙出孔径は46×33㎝、煙出孔検出面から底面までの深さは0.57ｍを測る。
遺物（第78・79図・写真図版58・59）
出土状況は、カマド本体及びカマド周辺の床面から主に出土した。出土量は、土師器の坏・甕・小型土器合わせて中コンテナ約１箱分である。123～126はロクロ成形の土師器の坏で内面黒色処理が施されている。123は外面体部下にナデによる再調整が施され、底面は棒状の工具による調整が施されている。123・126については二次加熱により、内面の黒色処理が消失している部分が見られる。123・124は体部下端に若干のナデによる再調整が施される。125は122・123・126と比較して、体部下端にケズリの再調整がしっかりと施されている。
127～130は非ロクロ成形の土師器の甕である。口縁部ヨコナデ・内面ナデ・外面ナデ・ケズリ等の調整が施されている。132・133は小型土器で、132は底面に砂底を持つ。135は小破片で器種は判然としないが、口

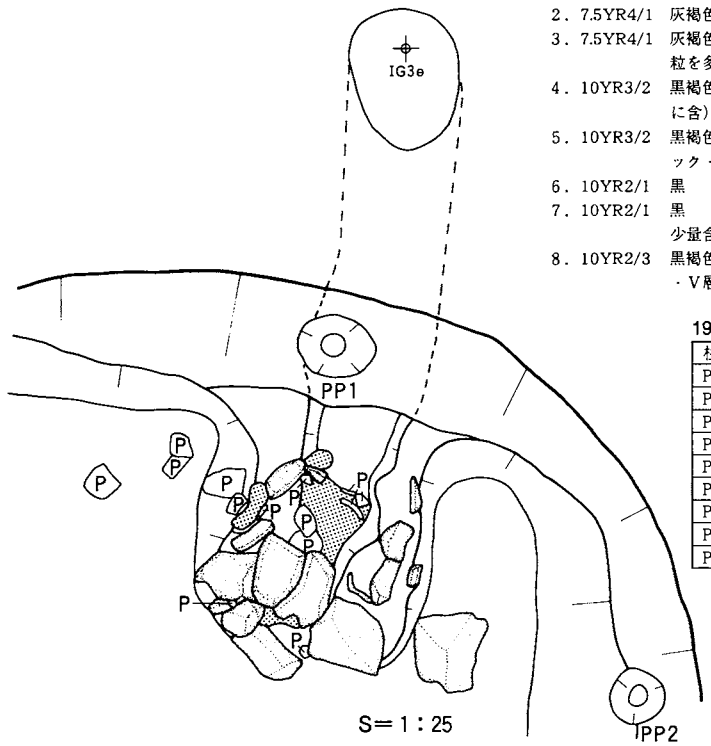


S＝1：50



A´－A

1．10YR2/1　黒　　シルト　粘性弱　しまり密（To-aブロック多量）
2．7.5YR4/1　灰褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（To-a粒含）
3．7.5YR4/1　灰褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a粒・Ⅴ層粒を多量に含）
4．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-aごく微量に含）
5．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（To-a粒・ブロック・Ⅴ層粒・ブロック）
6．10YR2/1　黒　　シルト　粘性弱　しまり密
7．10YR2/1　黒　　シルト　粘性弱　しまりやや疎（To-a粒・ごく少量含）
8．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（To-a粒・黒色土粒・Ⅴ層粒含）



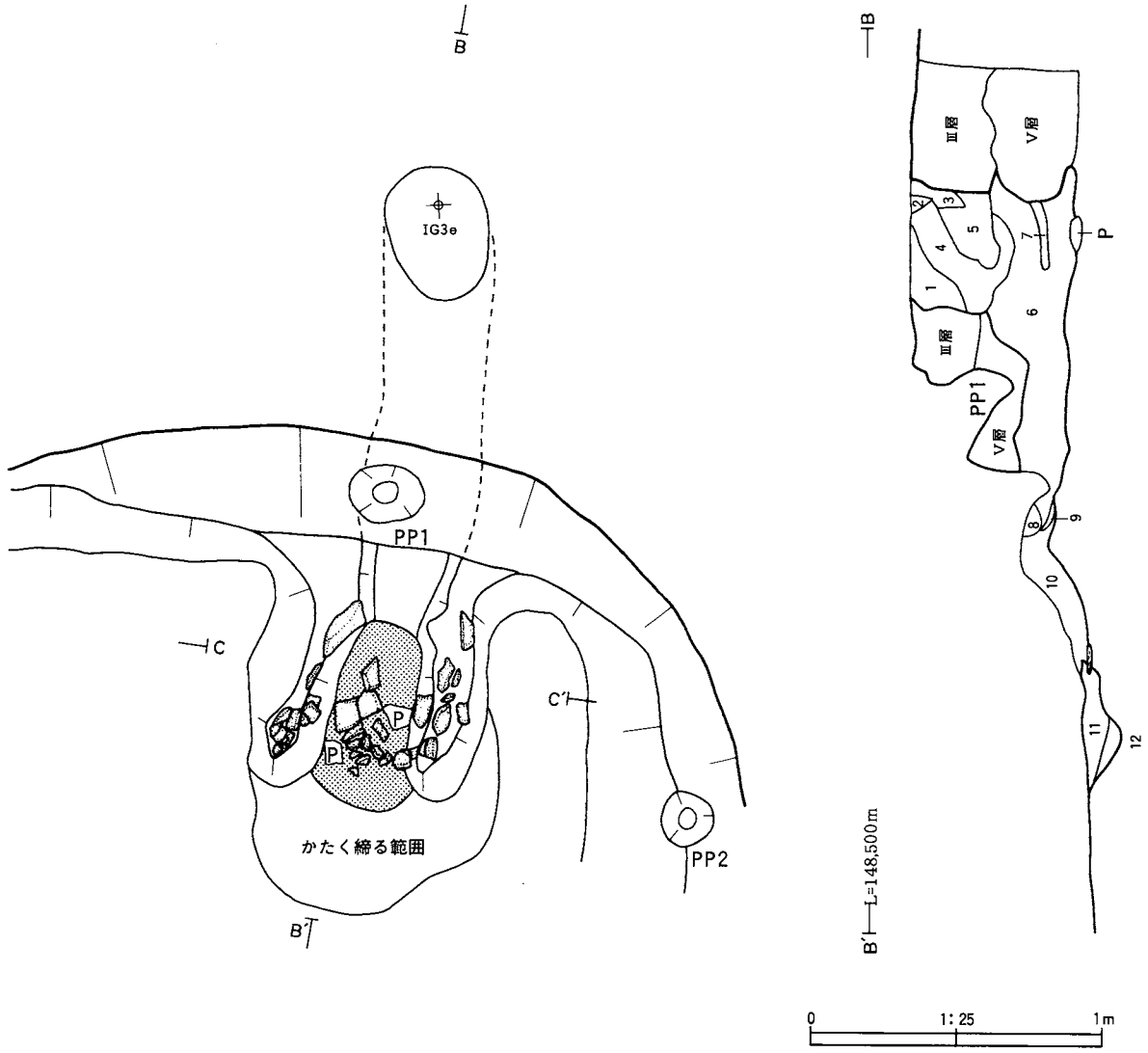
S＝1：25

19号竪穴住居跡

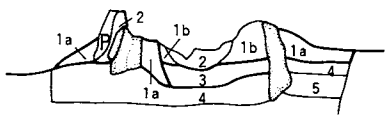
柱穴・ピット番号	開口部径（cm）	深さ（cm）	備　考
ＰＰ1	26×18	12.1	
ＰＰ2	18×18	12.1	
ＰＰ3	27×23	17.5	
ＰＰ4	34×26	2.2	
ＰＰ5	28×23	49.4	
ＰＰ6	24×19	17.8	
ＰＰ7	36×34	31.2	
ＰＰ8	37×30	12.5	
ＰＰ9	29×27	21.2	

0　1：50　2m

第45図　19号竪穴住居跡(1)



C—L=149,800m —C'



C－C'

1a. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性中 しまり密（カマド）
1b. 天井部崩落土と思われる。
2．7.5YR6/8 橙色 シルト 粘性弱 しまり中（焼土）
3．5YR6/8 明赤褐色（燃焼部）
4．10YR2/1 黒 シルト 粘性弱 しまり中
（To-aブロック含・貼り床）
5．10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり密
（To-cu ・Ⅴ層ブロック含・貼り床）

B'－B

1．7.5YR4/2 灰褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎
（To-aと黒色土の混合土・焼土粒ごく少量含）
2．10YR2/1 黒 シルト 粘性弱 しまりやや疎
3．10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり密
4．10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり密
（To-H？）
5．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまりやや疎
6．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎
（Ⅴ層ブロック含・To-cu ごく少量含）
7．Ⅴ層崩落土
8．10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性強 しまり中
9．10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎
10．10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり疎
（焼土ブロック含）
11．7.5YR7/6 橙色 （燃焼部・灰含）
12．5YR6/8 赤褐色 （燃焼部）

第46図　19号竪穴住居跡(2)

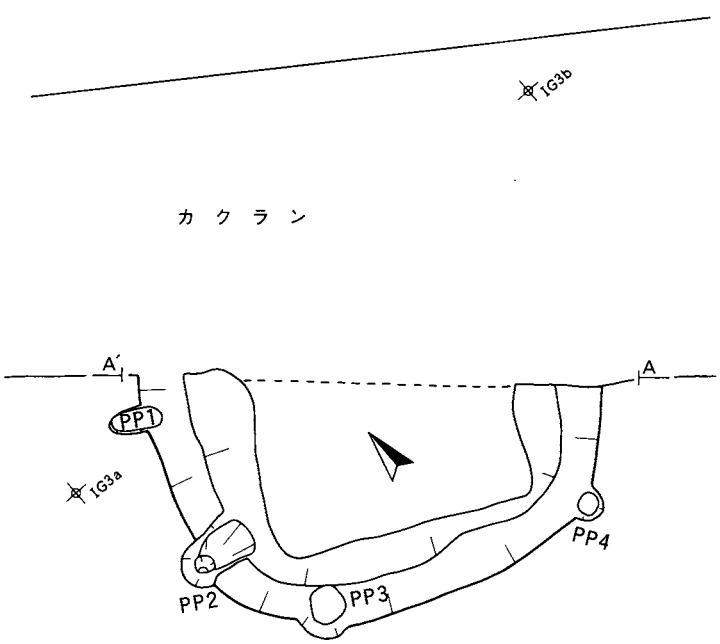
縁部は深鉢状を呈し、ほぼ真っ直ぐ立ち上がると思われる。内外面に棒状の工具で調整が施される。136はロクロ成形の土師器の甕である。口縁部はロクロ成形後、内面は剝落のため不明瞭だが、ナデ調整が施された感がある。外面はロクロ後成形後、胴部にケズリの調整が施されている。
時期　Ⅴ群に属す。

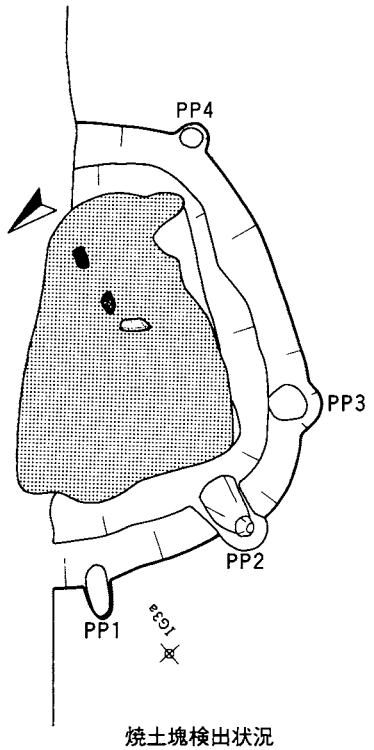
20号竪穴住居跡

遺構（第47図・写真図版33）
（位置）　ＩＧ３ａグリッドに位置し、15・17号竪穴住居跡に隣接する。
（検出状況）　15・17号竪穴住居跡を確認した後、近隣に遺構の有無を確認するため、排水パイプ撹乱土を除去し、断面観察から本遺構を確認した。検出面はⅡ層上面である。
（平面形・規模・床面積）　前記した撹乱により詳細については不明である。残存している形状から平面形は方形を呈すると推測される。南西壁2.56ｍを測る。床面積は不明。
（埋土）　黒褐色土を主体とし、上部はＴｏ－ａ小ブロックを含む黒褐色土からなる。
（壁）　Ⅲ・Ⅶ層を壁とする。壁面は上部に張り出し部を持つ。この張り出し部の規模は検出面から張り出し部底面までの深さ20～27.2㎝、幅は21～26㎝を測る。底面はⅢ層を底面とし、外傾して立ち上がる。
壁開始部から床面までの壁高は、53.8～54.9㎝測り、直立ぎみにやや外傾する。
（柱穴）　張り出し部壁際に４基検出された。埋土は黒褐色土の単層からなる。柱穴痕跡は認められなかった。
（床面）　Ⅶ層を床とする。ほぼ平坦でかたく締まる。ほぼ全面に貼り床が施されている。
（カマド・煙道部）　前記した撹乱のため不明である。
（焼土塊・炭化物）　厚さ10～15㎝の焼土塊が床面全面を覆う。焼土塊の下には、約５㎝の厚さで黒土化した炭化物・炭化材が検出された。
遺物　なし。
時期　Ⅱ群に属す。

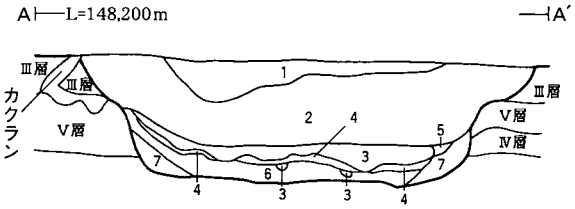
21号竪穴住居跡

遺構（第47図・写真図版34）
（位置）　ＩＨ５ａ・５ｂグリッドに位置する。
（検出・精査状況）　Ⅳ層面で黒色土のプランとして確認した。
（平面形・規模・床面積）　調査区境界面・排水パイプ撹乱により、全容は不明である。
（埋土）　土層図の作成は調査中に怠ってしまったため、詳細は不明であるが、黒褐色土が主体と思われる。
（壁）　Ⅳ層を壁とする。壁高は6.2～18.6㎝を測る。壁は直立ぎみに立ち上がる。
（土坑）　１基確認された。規模は65×51㎝、深さ14.7㎝を測る。
（床面）　Ⅳ層を床とする。ほぼ平坦である。貼り床は施されていない。
（カマド・煙道部）　撹乱により不明。
遺物（第79図・写真図版59）
土坑から土師器甕片が２点出土した。137は口縁部ヨコナデ後、内面ハケメ・外面はナデ調整が施される。





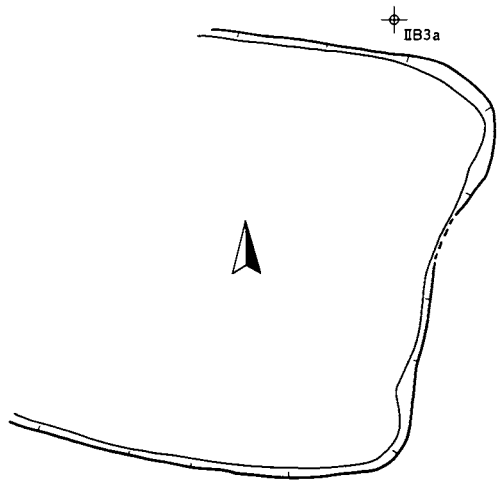
焼土塊検出状況

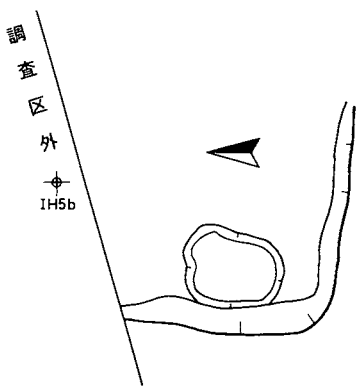


A－A′

1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中（To-a小ブロック含）
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎（To-cu ブロック多量に含）
3．7.5YR4/6　褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（焼土塊）
4．10YR2/1　黒　シルト　粘性弱　しまりやや疎（炭化物・炭化材多量に含）
5．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（黄褐色土粒含）
6．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり疎
7．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（To-cu 少量含）

20号竪穴住居跡





21号竪穴住居跡

1号住居状遺構

0　1:50　2m

第47図　20・21号竪穴住居跡・1号住居状遺構

3．住居状遺構

今回の発掘調査で１棟を検出した。

１号住居状遺構（第47図・写真図版35）

（位置）　Ⅱａ３ｅグリットに位置する。

（検出・精査状況）　削平により、Ⅷ層で、方形の窪地を確認した。削平により残存状況は不良で、壁を確認するのみであった。

（平面形・規模）　平面形は方形を呈すると思われる。南北軸は2.89ｍである。

（壁）　壁高の残存状況は４㎝である。

（床）　ほぼ平坦で固く締まる。部分的に貼り床が施される。

（柱穴・土坑）　検出されなかった。

（出土遺物）　なし。

時期　周辺の遺構群と考え合わせると古代と推測される。

4．掘立柱建物跡

今回の調査で３棟検出された。時代時期については、それぞれ異なる。

１号掘立柱建物跡（第48図・写真図版36）

（位置）　ⅡＢ２ｅ・３ｅ、ⅡＣ２ａ・３ａグリットに位置する。

（検出状況）　Ⅲ層上面で検出した。

（重複関係）　２号土坑と重複する。新旧関係は本遺構が截る。

（規模・方位）　規模は、梁行き約3.5ｍ、桁行約5.35ｍ（計測可能な部分）である。方位はＥ－32°－Ｎである。

（柱間規模）　桁行約1.7ｍ、梁行約1.7ｍである。

（埋土）　黒色土の単層からなり、柱穴痕跡は確認されなかった。

（出土遺物）　ＰＰ10埋土から土師器の甕片が出土。

（時代時期）　出土遺物から古代に属すると考えられるが、判然としなかった。

２号掘立柱建物跡柱（第49図・写真図版36）

（位置）　ⅡＢ４ａグリッドに位置する。

（検出状況）　縄文時代の遺構を確認するため、掘り下げを層位毎に順次進めていく過程で、Ⅷ層で検出した。

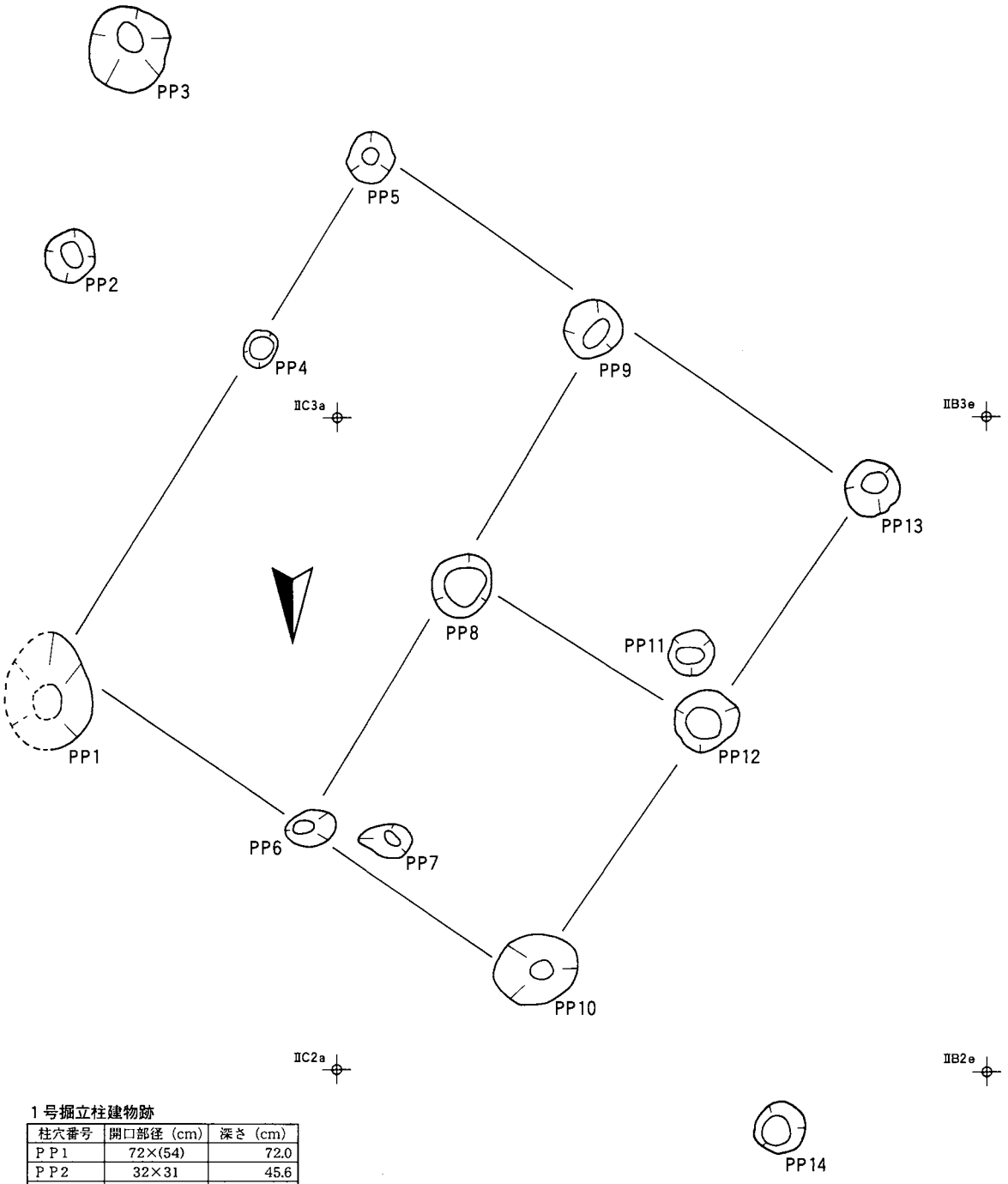
（規模・方位）規模は、梁行約2.5ｍ、桁行北東側約2.8ｍ、南西側約2.5ｍである。方位はＮ－52°－Ｗである。

（柱間規模）　桁行10～32㎝、梁行４～18㎝と均等ではない。

（埋土）　Ｔｏ－Ｈ粒・ブロックを含む暗褐色土を主体とする。柱穴痕跡は確認されなかった。

（出入り口？）　北西側梁行のＰＰ18と19の柱間が68㎝と他の柱間より比較して広い。出入り口の可能性が考えられる。

（出土遺物）　なし。



1号掘立柱建物跡

柱穴番号	開口部径（cm）	深さ（cm）
ＰＰ1	72×(54)	72.0
ＰＰ2	32×31	45.6
ＰＰ3	54×54	42.4
ＰＰ4	24×21	1.7
ＰＰ5	32×30	55.2
ＰＰ6	32×23	56.9
ＰＰ7	34×20	16.5
ＰＰ8	41×36	54.4
ＰＰ9	38×36	33.6
ＰＰ10	52×44	75.6
ＰＰ11	29×26	38.4
ＰＰ12	42×36	44.4
ＰＰ13	35×31	52.0
ＰＰ14	33×32	39.2

第48図　1号掘立柱建物跡

（時代時期）　出土遺物がないため不明。

3号掘立柱建物跡（第49図・写真図版44・45）

（位置）　ＩＧ４ａグリッドに位置する。

（検出・精査状況）　Ⅱ層中で検出可能であったが、Ｔｏ－ａが散在して、プランを明確に把握することに時間を要すると考え、明確に遺構が確認できるⅢ層上面で検出した。柱穴状ピットが134基（１号柱穴状ピット群）検出され、野外調査時に掘立柱建物跡を構成するものと判断したが、掘立柱建物跡を明確に想定する事ができず、室内整理において写真・図面から判断した。

（規模・方位）　規模は、桁行約3.1ｍ、梁行約2.1ｍである。方位は、Ｎ－28°－Ｗである。

（柱間規模）　桁行はＰＰ76・92間約2.05ｍ、ＰＰ92･98間約0.4ｍ、ＰＰ98・ＰＰ103間約0.55ｍ、ＰＰ56・ＰＰ71間約2.0ｍ、ＰＰ71・74間約0.3ｍ、ＰＰ74・78間約0.7ｍを測る。梁行はＰＰ78・ＰＰ104間約1.85ｍ、ＰＰ56・73間約1.85ｍ、ＰＰ73・76間約0.3ｍを測る。

（埋土）　１号柱穴状ピット群と同様で7.5ＹＲ４／１灰褐色で、黒色土とＴｏ－ａの混合土である。柱穴痕跡は確認されなかった。

（出土遺物）なし。

（時代時期）　検出面・埋土にＴｏ－ａを含むことから平安時代と考えられる。

５．土坑

今回の発掘調査で、11基検出された。１・２号を除く、９基の土坑については、平安時代に属する遺構である。

1号土坑（第50図・写真図版37）

ＩＣ５ｅグリッドに位置する。検出面はⅦ層上面である。開口部径1.08×0.64ｍ、底部径0.91×0.42ｍ、深さ62㎝、平面形は小判状、断面形は筒状を呈する。埋土は、砂質のにぶい黄褐色土（Ｔｏ－ｃｕ再堆積層？）を主体とする。自然堆積と思われる。底面はⅧ層でほぼ平坦である。出土遺物はない。

時期　検出面から縄文時代と考えられる（Ｔｏ－ｃｕ降下以降か）。

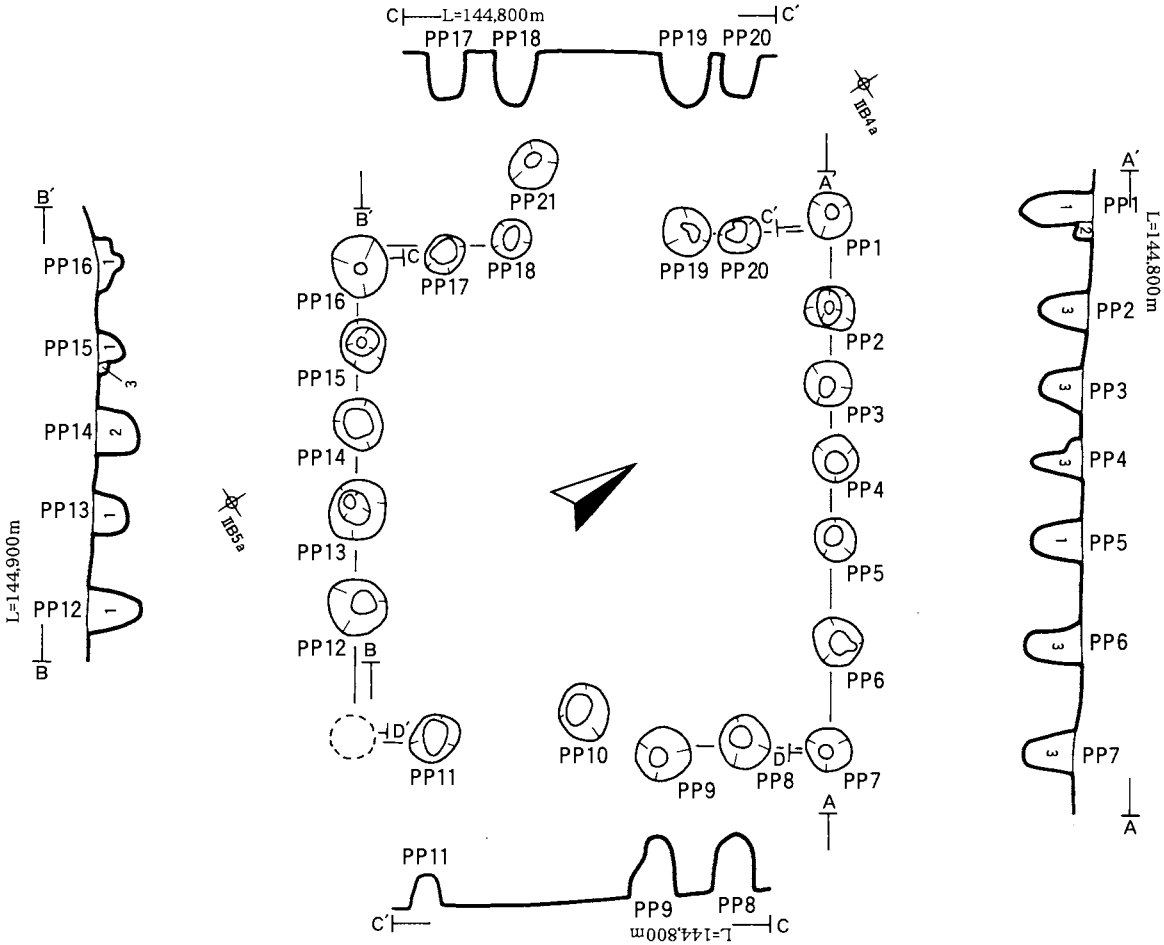
2号土坑（第50図・写真図版37）

ⅡＢ２ｅグリッドに位置する。検出面は２号畠作耕地の復旧痕跡精査後、Ⅳ層上面で検出した。１号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は本遺構が古。開口部径6.7×1.42ｍ、底部径6.46×0.56ｍ、深さ46㎝、平面形は不整な帯状、断面径は碗状を呈する。埋土は黒色土が主体となる。自然堆積と思われる。底面はⅦ層で若干の凹凸がある。出土遺物はない。

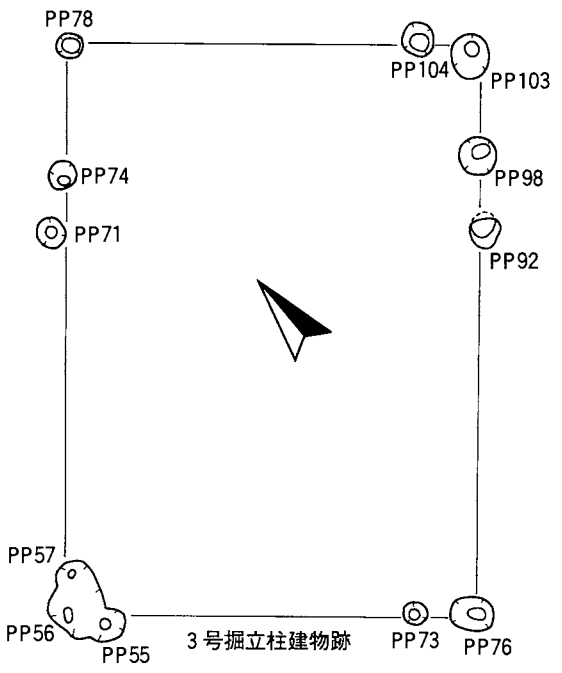
時期　出土遺物がなく不明である。

3号土坑（第50図・写真図版37）

ⅡＣ１ａグリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。開口部径は2.33×2.29ｍ、底部径は2.22×2.13ｍ、検出面からの深さ約24㎝、平面形はほぼ円形、断面形は皿状を呈する。埋土は、上位がＴｏ－ａブロック、下位が黒褐色土からなる。自然堆積と思われる。底面はⅡ層下位でほぼ平坦である。出土遺物は土師器甕・



2号掘立柱建物跡



3号掘立柱建物跡

ＰＰ１～７　A′－A

1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中　　しまりやや密
　　(To-H粒状に含む。)
2．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性やや弱　しまり密
3．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中　　しまりやや密
　　(To-Hをブロック状に含む)

ＰＰ12～16　B－B′

1．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密
　　(To-Hブロック状に含む。)(白色パ
　　ミスを粒状に含む。)
2．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中　　しまりやや疎
　　(To-H粒状に含む。)
3．10YR4/4　褐色　　シルト　粘性やや弱　しまりやや密

0　1:40　2m

第49図　2・3号掘立柱建物跡

坏の小片が数点出土。

遺物（第80図・写真図版60）

140はロクロ成形の土師器の甕である。外面にナデ調整が施される。

時期　検出面・埋土・出土遺物から平安時代と考えられる。

4号土坑（第50図・写真図版37・38）

ⅡＢ１ｂグリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。２号竪穴住居跡と重複する。新旧関係は本遺構が新しい。開口部径は1.71×1.05ｍ、底部径は1.65×0.98ｍ、検出面からの深さ22㎝、平面形は舌状、断面形は皿状を呈する。埋土は、Ｔｏ－ａが縞状に含む黒色土からなる。自然堆積と思われる。底面はⅢ層でほぼ平坦である。焼土が底面北寄りに形成されていた。焼土の規模は径68×58㎝、厚さ約５㎝を測る。焼成は良好で焼土中央部で炭化材が検出された。

時期　検出面・埋土から平安時代と考えられる。

5号土坑（第51図・写真図版38）

ＩＩ１ｂグリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。開口部径は2.3×1.24ｍ、検出面からの深さは９㎝、平面形は不整、断面形は皿形を呈する。埋土は、Ｔｏ－ａ粒を含む黒色土を主体とする。底面はⅡ層下面で、ほぼ平坦で礫が散在して見られ、底面南側に焼土と灰が検出された。焼土の規模は、径94×72㎝、厚さ４㎝を測る。焼成はほぼ良好である。出土遺物は土師器の甕片・須恵器片が出土。

遺物（第80図・写真図版60）

141は非ロクロ成形の土師器の甕である。口縁部ヨコナデ後、内面ナデ・外面ケズリの調整が施される。

142は須恵器の壷もしくは甕と思われる。ロクロ成形後、内面ナデ・外面ケズリの調整が若干認められる。

時期　出土遺物・検出面・埋土から平安時代の遺構と考えられる。

6号土坑（第51図・写真図版38）

０ＩＩ５ｃグリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。開口部径は2.44×2.2ｍ、検出面からの深さ18㎝、平面形は方形、断面形は皿形を呈する。埋土は上位は黒褐色土、下位は黒色土からなる。自然堆積と思われる。底面は焼土を検出した時点でＴｏ－ａが散在して確認されたことから、埋土と判断して掘り下げたが、今となっては掘り過ぎたと考えている。底面は焼土上面Ⅱ層下面と思われ、ほぼ平坦で礫が散在して確認された。底面北東側で、焼土検出された。焼土の規模は、径54×43㎝、厚さ５㎝を測る。焼成はほぼ良好である。須恵器１点が出土した（143）。

遺物（第80図・写真図版60）

143は須恵器の壷もしくは甕と思われる。ロクロ成形後、内面ナデ・外面ケズリの調整が施される。

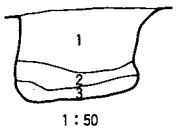
時期　出土遺物はないが、検出面・埋土から平安時代と思われる。

7号土坑（第51図・写真図版38）

０Ｉ５ｂグリッドに位置し、６号竪穴住居跡と隣接する。検出面はⅡ層下面である。平面形は、ひょうたん状を呈する。底面を掘りすぎたため、検出面の深さは確実ではないが、約５㎝と思われる。埋土はＴｏ－ａを含む黒褐色土からなる。底面はⅡ層でＴｏ－ａが散在して見られる。底面南東側に焼土が検出された。

1号土坑

A—L=144,500m—A′

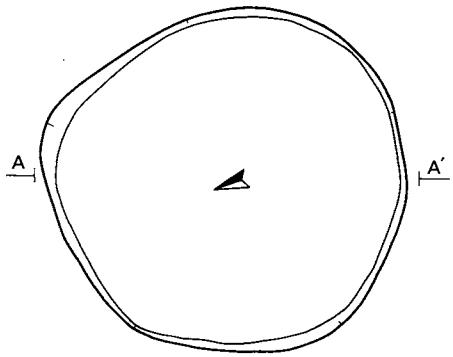


1：50

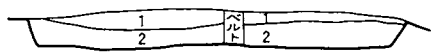
1号土坑A－A′

1．10YR5/4　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱　しまり密
　　(To-cu 上層に堆積している)
2．10YR5/4　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱　しまり密
　　(黒色土粒を含む。)(壁面の崩れたもの)
3．10YR5/4　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱　しまり密
　　(黒色土を縞状に含む。)

3号土坑



A—L=145,300m—A′

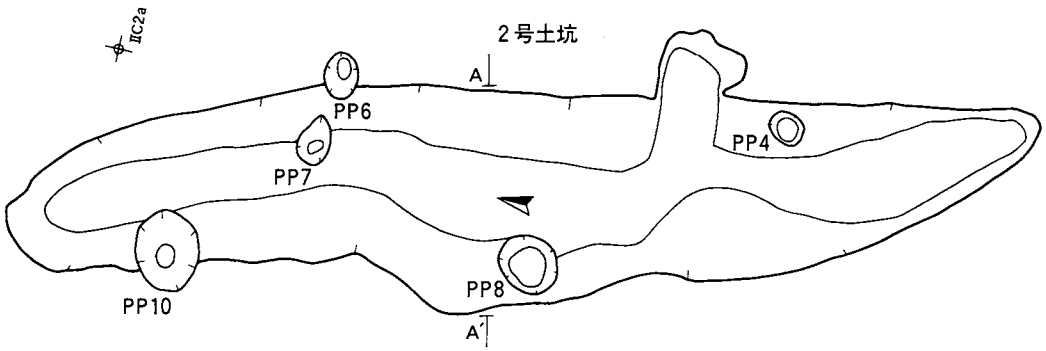


1：50

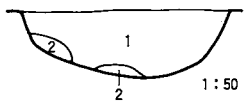
3号土坑A－A′

1．To-a (黒色土粒含)
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎 (To-a粒状に含)

2号土坑



A—L=145,000m—A′



1：50

2号土坑A－A′

1．10YR2/1　黒　　シルト　粘性やや強　しまり中
2．10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性無　しまり密 (壁崩落土)
　　To-cu？

B—L=144,900m—B′

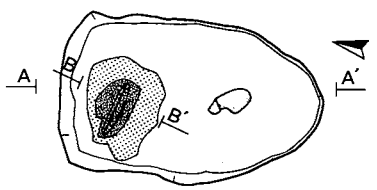
1：25

4号土坑焼土B－B′

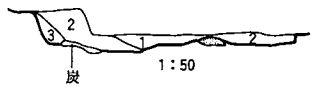
1．10YR1.7/1　黒　　シルト　炭化材
2．5YR5/8　　明赤褐色　粘性無　しまり密
3．5YR4/8　　赤褐色　　粘性無　しまり密

0　1：25　1m

4号土坑



A—L=144,500m—A′



1：50

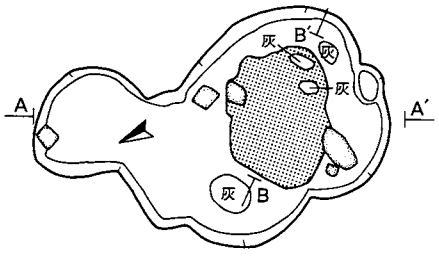
4号土坑A－A′

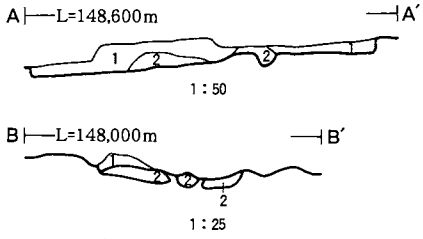
1．10YR2/1　黒色　　シルト　粘性やや弱　しまりやや疎
　　(To-aを縞状に含。)
2．10YR2/1　黒色　　シルト　粘性弱　　しまりやや疎
　　(To-cu をまばらに含。)
3．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　　しまりやや疎
　　(To-cu、炭化物を含。)

0　1：50　2m

第50図　1～4号土坑

5号土坑





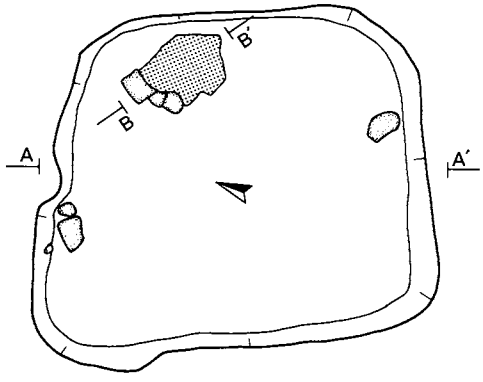
5号土坑A－A′

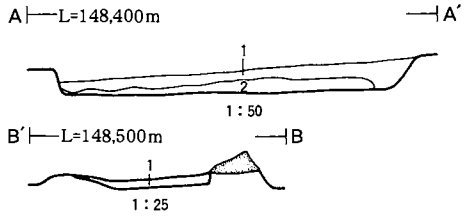
1．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（To-a粒多量含）
2．10YR2/1　黒　　シルト　粘性中　しまりやや疎（To-a焼土粒少量含）

5号土坑焼土B－B′

1．10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　粘性やや弱　しまり疎（灰）
2．7.5YR5/8　明褐色　　シルト　粘性弱　　しまり密（焼土）

6号土坑





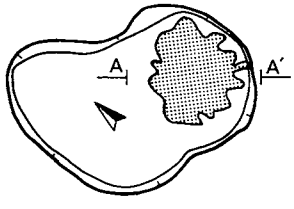
6号土坑A－A′

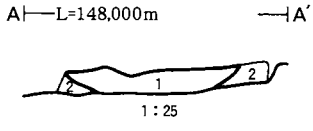
1．10YR2/1　黒　　シルト　粘性中　　しまり疎（To-a粒多量に含）
2．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり疎（To-cu 含）

6号土坑焼土B－B′

1．7.5YR5/8　明褐色　シルト　粘性弱　　しまり密（焼土）

7号土坑

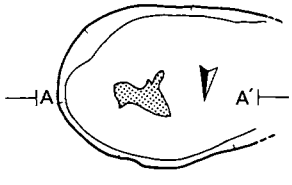


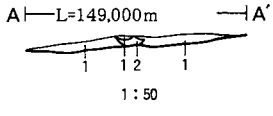


7号土坑焼土A－A′

1．5YR5/8　明赤褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（焼土・焼成良好）
2．10YR2/2　黒褐色　　シルト　粘性弱　しまり中（To-aをごく少量含）

8号土坑





8号土坑焼土A－A′

1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（To-a粒含）
2．7.5YR6/6　橙色　　シルト　粘性弱　しまり密（焼土）

第51図　5～8号土坑

焼土の規模は、径70×55cm、厚さ８cmを測る。焼成は良好である。

時期　出土遺物はないが、検出面・形態・埋土から平安時代と思われる。

８号土坑（第51図・写真図版39）

ＩＨ２ｃグリッドに位置し、７号竪穴住居跡と接する。検出面はⅡ層中である。７号竪穴住居跡と重複する。截り合い関係は本遺構が截る。開口部径1.45×1.09m、検出面からの深さ９cm、平面形は小判形で、断面形はⅢ形を呈する。埋土はＴｏ－ａを含む黒褐色土からなる。自然堆積と思われる。底面はⅣ層で、若干の凹凸がある。底面中央部付近に焼土が検出された。焼土の規模は、径35×19cm、厚さ2.5cmを測る。焼成は４～８号土坑の焼土と比較して良好ではない。

時期　出土遺物はないが、検出面・形態・埋土から平安時代と思われる。

９号土坑（第52図・写真図版39）

０ＩＪ５ｂグリッドに位置する。検出面はⅡ層中である。検出時に掘りすぎたため、壁は焼失してしまった。Ｔｏ－ａが散在して見られたことから、７・８号土坑と類似する底面と考え、Ｔｏ－ａが確認できる部分を土坑の範囲として図示した。範囲径1.2×0.93m、底面はⅡ層中で、ほぼ平坦である。土坑範囲東側に焼土が形成されていた。焼土の規模は61×55cm、厚さは８cmを測る。焼成は良好である。

時期　出土遺物はないが、検出面・形態・埋土から平安時代と思われる。

10号土坑（第52図・写真図版39）

ＩＦ４ｅグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面である。開口部径2.53×2.5m、底面径1.46×1.4m、検出面からの深さ75cm、平面形ほぼ円形で、断面形は碗状を呈する。埋土はＴｏ－ａを含む黒褐色土が主体で、Ｔｏ－ａ含有量・色調から５層に細分される。自然堆積と思われる。底面はⅦ層でほぼ平坦である。埋土上位で完形の土師器甕が出土した。

遺物（第80図・写真図版60）

145・146は非ロクロ成形の土師器の甕である。145は完形品で口縁部ヨコナデ後、内外面ナデ調整が施される。底部は木葉痕である。底部下半に木葉痕が認められる。146も145同様で外面下半に木葉痕が認められる。

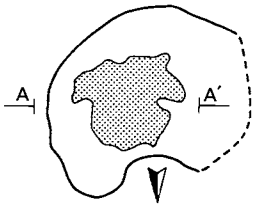
時期　出土遺物・埋土から平安時代と思われる（10世紀後半代か）。

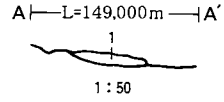
11号土坑（第52図・写真図版39）

ＩＧ５ｂグリッドに位置し、調査区境界面に接する。検出面はⅡ層中である。東西軸1.33m、深さ13cm、平面形は調査区境界面に接するため不明。断面形はⅢ状を呈する。埋土はＴｏ－ａ小ブロックを含む暗褐色土の単層である。自然堆積と思われる。底面はⅣ層で若干の凹凸があるが、ほぼ平坦である。

時期　出土遺物はないが、埋土から平安時代の遺構と思われる。

9号土坑

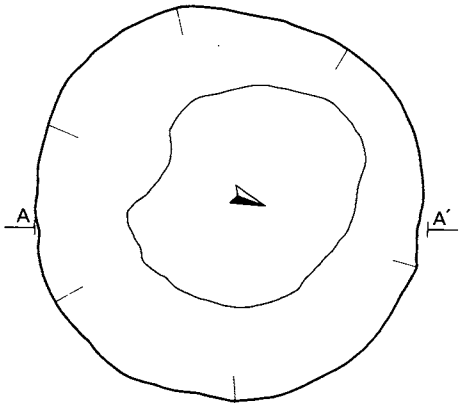


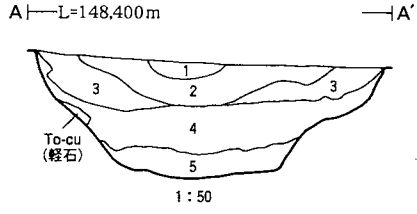


9号土坑焼土A－A′

1．5YR4/8　赤褐色　シルト　粘性弱　しまり密（焼土）

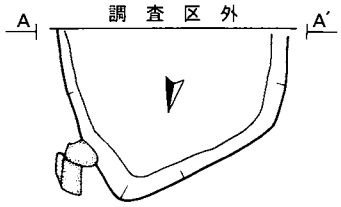
10号土坑



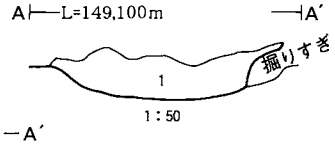


10号土坑A－A′

1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a粒含）
2．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a粒1より少量）
3．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-a粒1より多量）
4．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-aブロック・To-cu含）
5．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密（To-NB 含）

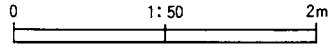


11号土坑



11号土坑A－A′

1．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり疎　（To-a小ブロック多量に含・下位に炭化物少量含）



第52図　9～11号土坑

6．畝間状遺構・畠作耕地の復旧痕跡

（畝間状遺構・畠作耕地の復旧痕跡遺構の調査の概要と経過）

今回の発掘調査で、畝間状遺構及び畠作耕地の復旧痕跡が10ケ所で合計約450㎡の範囲で検出された。平成11年度に検出された１～３号「畠作耕地の復旧痕跡」としての調査は、検出時にＴｏ－ａブロックの帯状のプランが何十条にも南北方向に延びるいわゆる「畝間状遺構」として認識していた。それぞれに試掘溝を設定し、断面を頼りに基本的にＴｏ－ａを掘り上げる方針を立て、地山と同じ黒色土が主体であってもＴｏ－ａが粒状・ブロック状に入っているものは、溝として掘り上げていった。前記した方針で掘り上げ作業を行っていく段階で、想定していたいわゆる「畝間状遺構」の形状とは、異なる極めて歪な溝状のプランになっていくことから、形状が歪になるものには、Ｔｏ－ａが含まれる黒色土でも掘り上げを中断したり、また、Ｔｏ－ａの帯がとぎれる黒色土の地山部分も掘り上げていったところもあった。すなわち、今となっては溝として掘り上げた形状は極めて恣意的なものになる部分があった。また、調査段階で畝間状遺構を畠の畝間と考えた場合、畝間と畝間の間隔が狭く、作付けが不可能ではないかとも思われた。この畝間の間隔と前記したあるがままに掘り上げた形状と考え合わせると、いわゆる「畝間状遺構」として、機能する遺構なのか疑問が出てきた。そこで、１～３号「畝間状遺構」とした遺構について再検証した（紀要ＸＩＸ2000　能登健・中村　直美・菊池　貴広）。検証の結果、火山災害による畠作耕地の復旧痕跡と考えた（このように考えた理由については、後述する遺構の項とまとめの項で述べる）。

平成12年度調査では、Ｔｏ－ａの溝状プランを確認した後、試掘溝を設定し土層断面観察後、畝間状遺構と判断したものについては、掘り上げ、前記した復旧痕跡と考えたものは、平板を用いて、復旧範囲と土層断面図を作成し、掘り上げは行わなかった。なお、平成11・12年度共にプラントオパール分析を実施している。

（遺構の事実記載・図版について）

遺構の事実記載は、畝間状遺構と畠作耕地の復旧痕跡を分けて、記載するべきであったが、畝間状遺構と畠作耕地の復旧痕跡が同一面・同一区域から検出されており、しかも調査時では「畝間状遺構」として一括していたこともあり、両者を原則として、調査区西側から東側にかけて、区域事に掲載・記載した。

１・２・３号畠作耕地の復旧痕跡（第53～55図・写真図版40・41）

（位置）　ＩＣ・ＩＤ・ⅡＣグリッドに位置する。

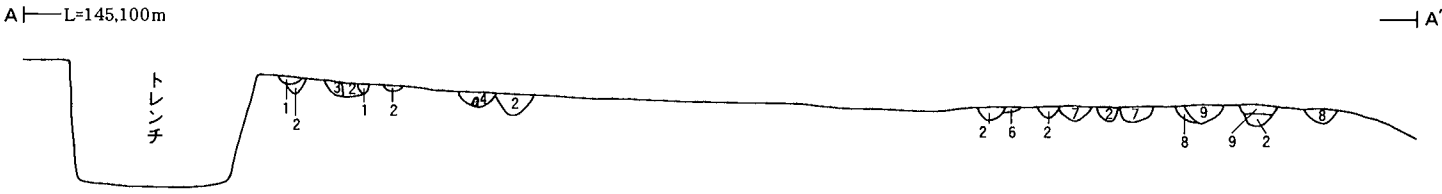
（検出・精査状況）　Ⅱ層上面で検出した。図は写真測量により図化した。

（名称について）　１・２・３号畠作耕地の復旧痕跡と呼称する。１号と２号については、方向がややずれること、埋土の雰囲気が異なることから、群としての分離をした。３号については１・２号がほぼ同一レベルで検出されるのに対して、３号はやや傾斜した高いレベルで検出されていることから分離した。

（規模・埋土・性格等）　規模は１号が幅約10～55㎝、約10～20㎝、２号が幅約20～30㎝、深さ10～20㎝を測る。断面は１・２・３号共に黒褐色土を主体にＴｏ－ａが粒状・ブロック状に含まれるもの、Ｔｏ－ａブロックを主体に黒色土粒が含まれるもの、Ｔｏ－ａ水成堆積の３つに大別される。１・２号比較すると２号が１号よりＴｏ－ａの含有量が多い。性格については、Ｔｏ－ａの溝状プランは溝としての機能ではなく、Ｔｏ－ａブロックの帯の連続である。埋土は水成堆積の水平なユニットが不揃いに傾いていたり、水成堆積によって固結したと思われるＴｏ－ａが地山と思われる黒色土と混合していることから、人為的に動かされたものと考えられる。Ｔｏ－ａブロックが地山の黒色土の中に天地返し状に入り込んでいる状態である。

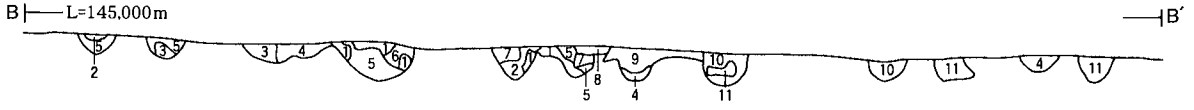
この火山灰ブロックの帯の性格については、このことを理解できる土層断面図が第95図（Ｐ147）である。これによると、下位にある火山灰ブロックは、人為的に動かされたもの（埋め込まれたもの）が帯状に見ら

第53図　1号～3号畠作耕地の復旧痕跡平面



1号畠作耕地の復旧痕跡

A－A′
1．10YR2/1　黒　　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（To-aをブロック状に含）
2．To-a（ブロック状に堆積。黒色土粒を含）
3．To-a（粒状に堆積。黒色土粒を含）
4．To-a（水性堆積。黒色土粒ごく少量を含）
5．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（To-aをごく少量含）
6．To-a（ブロック状に堆積。黒色土粒を含）
7．To-a十和田a降下火山灰（黒色土レンズ状に堆積）
8．十和田a降下火山灰
9．10YR2/1　黒　　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（十和田a降下火山灰粒状に含）

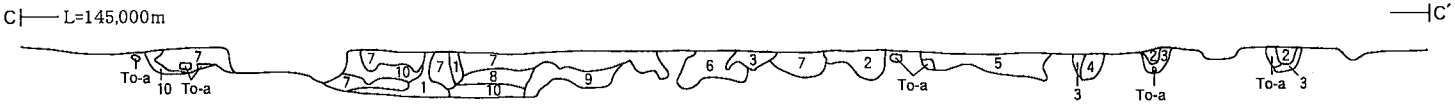


2号畠作耕地の復旧痕跡

B－B′
1．To-a（黒色土粒を少量含）
2．10YR2/1　黒　　シルト　粘性やや弱　しまりやや密
3．To-a（水性堆積）
4．10YR2/1　黒　　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（To-aブロック状に含）
5．10YR2/1　黒　　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（To-aごく少量含）
6．10YR2/1　黒　　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（To-aを5より多く含）
7．10YR2/1　黒　　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（To-aブロック状に多く含）
8．To-a
9．To-a（下層は水性堆積）
10．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密
11．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（To-a粒を多く含）

0　1:40　2m

第54図　1・2号畠作耕地の復旧痕跡断面

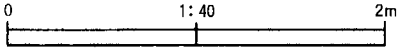


C－C′

1．10YR2/1　黒　　シルト　粘性やや弱　しまりやや密
2．To-a（サラサラし、黒色土粒を少量含）
3．10YR2/1　黒　　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（To-a粒状に含）
4．10YR2/1　黒　　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（十和田a降下火山灰をブロック状に含　撹拌か。）
5．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり密（To-a帯状・粒状に含）
6．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり密（To-a粒・黒色土粒を含）
7．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（To-a下層に粒状に堆積）
8．To-a（黒色土粒を含　撹拌か。）
9．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまりやや密（To-a粒・黒褐色土粒を多く含）
10．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱　しまり密（To-a粒を多く含）

D－D′

1．10YR2/1　黒　シルト　粘性やや弱　しまり密
2．To-a水成堆積
3．10YR2/1　黒　シルト　粘性やや弱　しまり密（To-a粒含）



第55図　2・3号畠作耕地の復旧痕跡断面

れるものであり、上位の畠の畝は細かく砕かれた火山灰によって灰色がかっており、断面はカマボコ状を呈している。これらのことから①・①'畠作耕地を覆った火山灰を鋤き込んで耕地を復旧した後に、②再び畠作耕地の復旧が行われていたことを理解することが出来た。

（道）　１号と２号畠作耕地の復旧痕跡の間にある帯状は道の可能性が考えられる。

（遺物出土状況）　検出面から土師器坏・甕の小破片が数点出土。

（時代時期）　Ｔｏ－ａ降下以降と考えられる。

遺物（第80図・写真図版60）

土師器の坏・甕小破片が数十点出土した。いずれも摩滅が著しく、掲載可能な138を掲載した。ロクロ成形の土師器の坏である。内面は摩滅のため黒色処理・ミガキ等の調整の有無は判別できなかった。

４号畠作耕地の復旧痕跡（第56図・写真図版42）

（位置）　ⅡＦ３ｃ・３ｄグリッドに位置する。

（検出・精査状況）　Ⅱ層中で検出した。Ｔｏ－ａが何十条にも南北方向に延びる溝状のプランとして確認した。確認後、写真撮影を行い、トレンチを２ケ所設定した。トレンチ設定後、土層断面を確認後、復旧痕跡と判断し、プランの範囲のみを平板を用いて実測した。

（規模・埋土・性格）　規模は、幅13～30㎝、検出面から埋土下面の深さ３～18㎝を測る。埋土は黒色土を含むＴｏ－ａブロックを主体とするものと、Ｔｏ－ａを含む黒褐色土に大別される。

（時代時期）　Ｔｏ－ａ降下以降の遺構と考えられる。

１号畝間状遺構（第56図・写真図版43）

（位置）　０ＩＨ５ｃグリッドに位置する。

（検出・精査状況）　Ⅱ層上面で検出した。Ｔｏ－ａと黒色土の混合土が溝状のプランとして確認した。プラン確認後、トレンチを設定し、土層断面を観察した。

（規模・埋土・性格等）　方向はほぼ東西方向に延びる。規模は長さ63～160㎝、幅18～30㎝、畝間と畝間の間は、31～64㎝、深さ10～20㎝を測る。埋土はＴｏ－ａを含む黒褐色土からなる。本遺構は掘り方が認められ、平面形は溝状となった。溝と溝の間が等間隔な部分もある。形態が畠作耕地の復旧痕跡とは異なる事から、畝間状遺構と考えた。

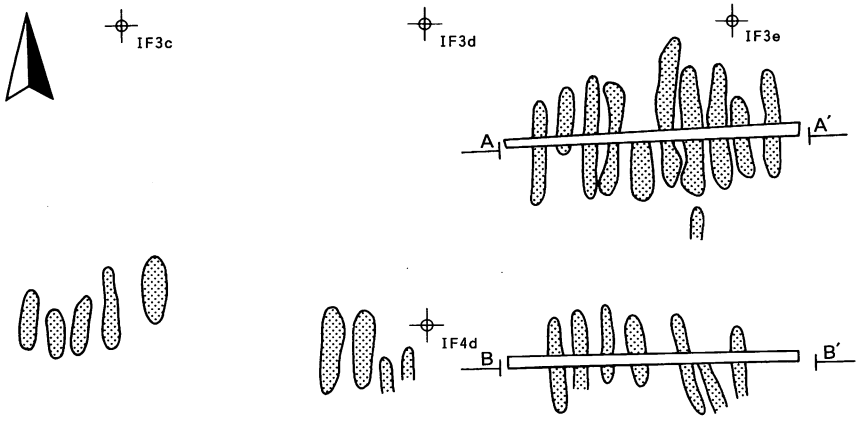
（時代時期）　Ｔｏ－ａ降下以降と考えられる。

５号畠作耕地の復旧痕跡（第57～59図・写真図版４・41・42）

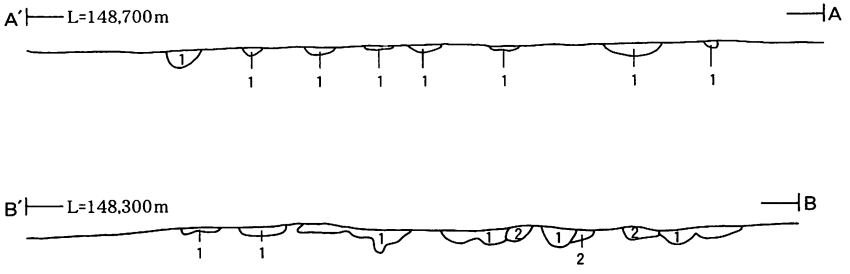
（位置）　ＩＧ・ＩＨグリッドに位置する。

（検出・精査状況）　Ⅱ層上面で検出した。Ｔｏ－ａが何十条にも南北方向に延びる溝状のプランとして確認した。、写真撮影を行い、トレンチを３ケ所設定した。トレンチ設定後、土層断面を確認後、復旧痕跡と考え、プランの範囲のみを平板を用いて実測した。

（規模・埋土・性格）　規模は幅15～50㎝、検出面から埋土下面までの深さは、３～15㎝を測る。埋土は黒色土を含むＴｏ－ａブロックを主体とするものと、Ｔｏ－ａを含む黒褐色土に大別される。Ｔｏ－ａのプランと断面観察から、１～３号畠作耕地の復旧痕跡と比べ、Ｔｏ－ａの含有量は少なく、プランは概ねＴｏ－ａと黒色土の混合土として確認された。

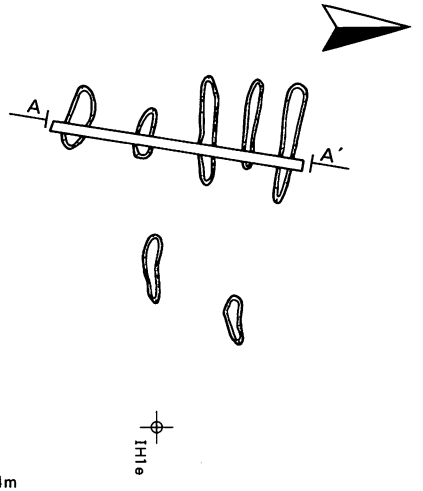


4号畠作耕地の復旧痕跡平面

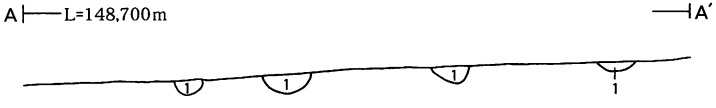


2000調査区13号住隣接A′－A　B′－B
1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密（To-a小ブロック含）
2．To-aブロック

4号畠作耕地の復旧痕跡断面

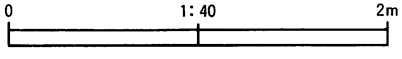


1号畝間状遺構平面



2000調査区7・8号住居東側A－A′
1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（To-a粒含）

1号畝間状遺構断面



（遺物出土状況）　Ｔｏ－ａブロック内で１点出土。

遺物（第80図・写真図版60）

139はロクロ成形の土師器の甕である。ロクロ成形後、回転糸切り処理されている。

（時代時期）　Ｔｏ－ａ降下以降と考えられる。

２号畝間状遺構・６号畠作耕地の復旧痕跡（第60・61図・写真図版42・43）

（位置）　０ＩＩグリッドに位置する。

（検出・精査状況）　Ⅱ層上面で何十条にも南北方向に延びる溝状の、Ｔｏ－ａプラン・黒色土のプラン・黒色土とＴｏ－ａの混合土プランを確認した。確認した時点で写真撮影を行った後、東西方向に２本のトレンチをを設定し、３つのプランの関係を判断する事を試みた。その後、平板による平面図作成を行うため、明瞭なプランを確認するため、何度か検出を行った結果、畝間の埋土部分が削られたため、最初に確認したプランよりも不明瞭になってしまった。平板図作成時には、この時点で確認できるものを図示し、不明瞭なものについては、図示しなかった。

（規模・埋土・性格）　断面観察から①黒色土のプラン②Ｔｏ－ａブロックプラン③黒色土とＴｏ－ａの混合土プランの３つのプラン認められた。①プランの幅13～30㎝、深さ３～14㎝を測る。畝間状遺構の可能性が考えられる。土層断面図１に相当する。②・③プランは３～６に相当する。Ｔｏ－ａと黒色土混合土又は黒色土を含むＴｏ－ａブロックとＴｏ－ａ水成堆積からなる、復旧痕跡と考えられる。両者のプランの新旧関係は判別出来なかったが、①と比較すると①より②・③は下位にあることから、②・③の復旧後①が形成されたものと思われる。

（時代時期）　２号畝間状遺構は、10号竪穴住居跡・復旧痕跡の上面に形成されていたことから、前記した遺構より新しいと考えられる。Ｔｏ－ａ降下以降と考えられる。

７号畠作耕地の復旧痕跡（第60・61図・写真図版42・43）

（位置）０ＩＩグリッドに位置する。

（検出・精査状況）　Ⅱ層上面で検出した。Ｔｏ－ａの帯として確認した。プラン確認後、トレンチを設定し、土層断面を観察した。

（規模・埋土・性格等）　方向はほぼ南北方向に延びる。規模は幅13～25㎝、深さは５～10㎝を測る。埋土はＴｏ－ａが粒状・ブロック状からなるもの。Ｔｏ－ａが水成堆積によるものからなる。

（時代時期）　Ｔｏ－ａ降下以降と考えられる。

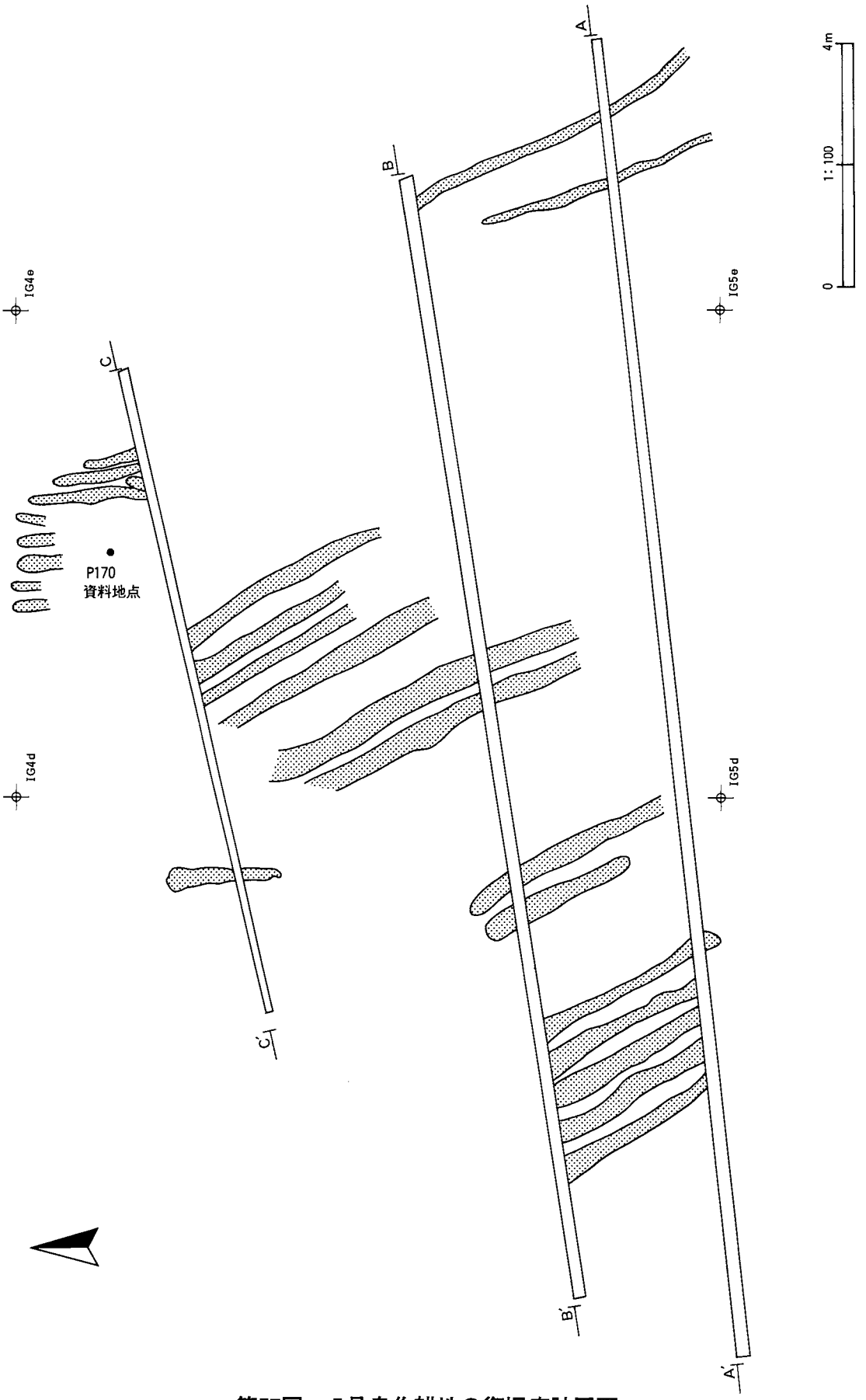
３号畝間状遺構（第60・61図・写真図版43）

（位置）　０ＩＩグリッドに位置する。

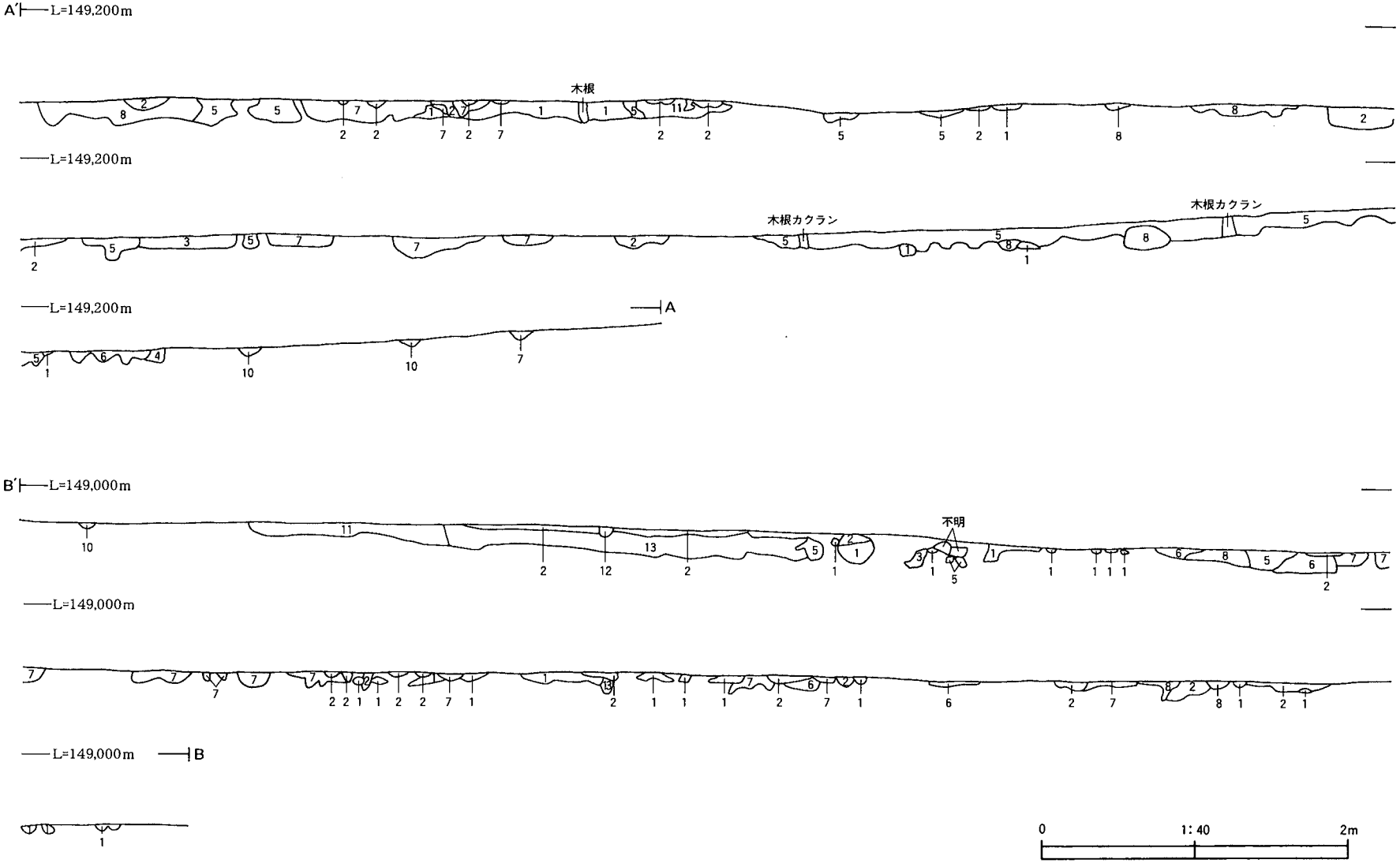
（検出・精査状況）　Ⅱ層上面で検出した。Ｔｏ－ａと黒色土の混合土が帯状のプランとして確認した。プラン確認後、トレンチを設定し、土層断面を観察した。

（規模・埋土・性格等）　方向はほぼ東西方向に延びる。規模は長さ50～160㎝、幅13～26㎝、畝間と畝間の間は、20～30㎝、深さ６～10㎝を測る。埋土はＴｏ－ａを含む黒褐色土からなる。本遺構は明瞭ではないが若干の掘り方が認められ、平面形は溝状となる。畝間と畝間の間が等間隔な部分もある。

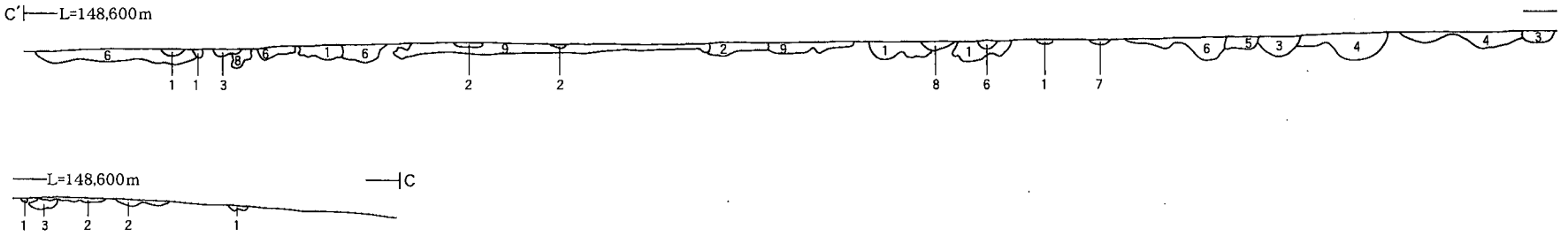
（時代時期）　Ｔｏ－ａ降下以降と考えられる。



第57図　5号畠作耕地の復旧痕跡平面



第58図　5号畠作耕地の復旧痕跡断面

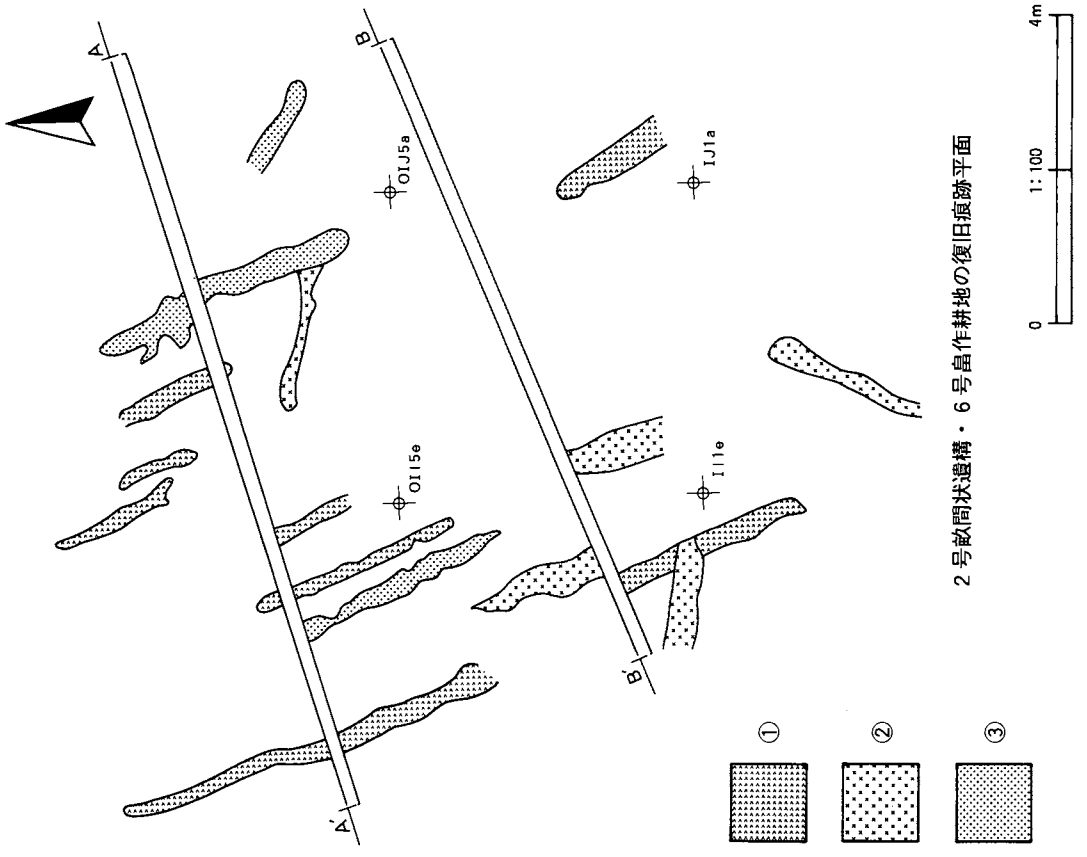


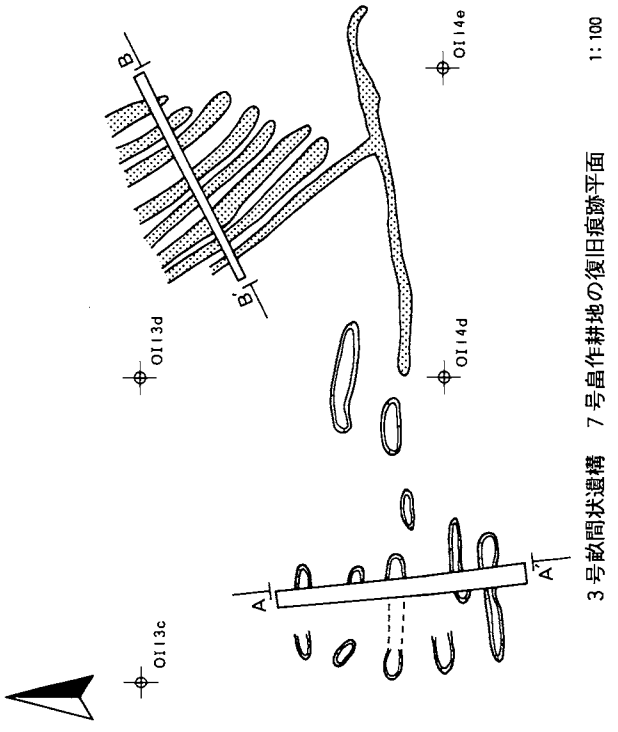
第59図　5号畠作耕地の復旧痕跡断面

A′－A　B′－B　C′－C

1．To-aブロック（黒色土粒含）
2．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密　（To-aブロック混入）
3．To-aブロック（黒色土1より少量含）
4．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密　（To-aと黒色土の混合土）
5．To-aブロック（黒褐色土を多く含）
6．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密　（To-a粒含）
7．To-a粒
8．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密　（To-aブロック含）
9．To-aブロック
10．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　（To-a粒含）
11．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　（To-aブック含）
12．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中
13．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり密　（To-aブロック多量に含）

0　1:40　2m

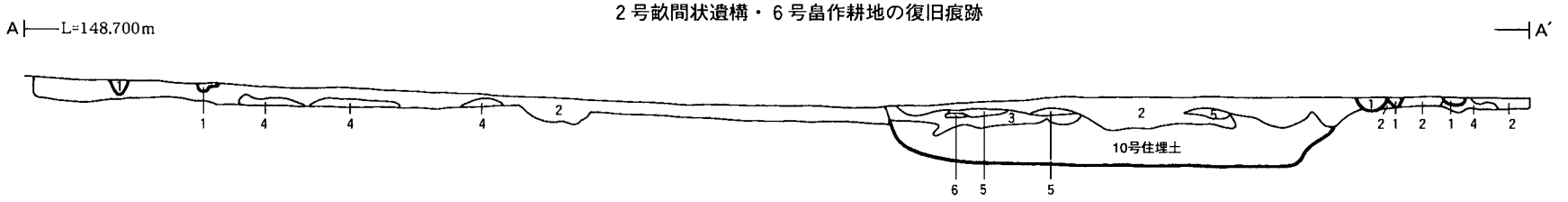


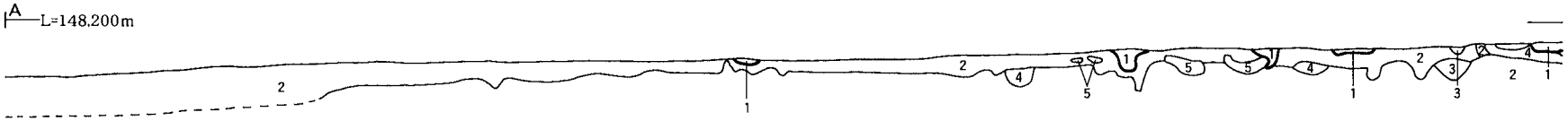


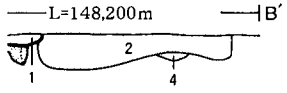
第60図　2・3号畝間状遺跡・6・7号畠作耕作地の復旧痕跡平面

第61図　2・3号畝間状遺跡・6・7号畠作耕作地の復旧痕跡断面

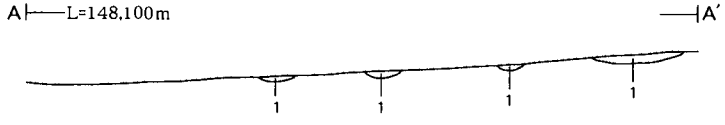
2号畝間状遺構・6号畠作耕地の復旧痕跡



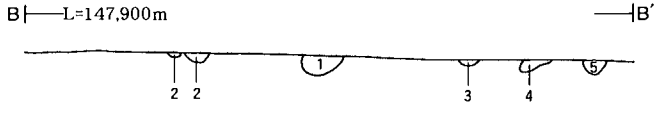




3号畝間状遺構断面



7号畠作耕地復旧痕跡断面

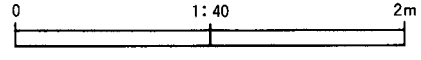


1号畝間状遺構・復旧痕跡　A－A′　B－B′

1．10YR2/1　黒　シルト　粘性弱　しまり密（畝間）　4．To-a（黒色土粒含）
2．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや密　5．To-a（水成堆積）
3．サンド（To-aか）　6．To-a（焼土含）

2号畝間状遺構・復旧痕跡　A－A′　B－B′

1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり疎（To-a粒含）



7．柱穴状ピット群

150基検出された（3号掘立柱建物跡を含む）。区域事に1号柱穴状ピット群・2号柱穴状ピット群として記載する。

1号柱穴状ピット群（第62・63図・写真図版44・45）

（位置）　ⅡＦグリッド北東側・ＩＧグリッド南側に位置する。

（検出状況）　Ⅱ層中で検出可能であったが、Ｔｏ－ａが散在して、プランを明確に把握することに時間を要すると考え、古代の遺構のプランが明確に確認できるＴｏ－ａが存在しないⅢ層上面で137基を検出した（3号掘立柱建物跡を含む）。

（形状・埋土）　平面形はほぼ円形もしくは楕円形を呈する。埋土は7.5ＹＲ4／1灰褐色土で、黒色土とＴｏ－ａの混合土からなる。柱穴痕跡は確認されなかった。

（性格）　野外調査時に掘立柱建物跡・柱穴列の構成を考えたが、明確に判断が出来ず、室内において再度検討した。掲載した掘立柱建物跡は3号掘立柱建物跡のみで、他に掘立柱建物跡・柱穴列等が存在する可能性を想定されたが、桁・梁行・柱間の規模等が規則性がなく、掲載しても恣意的なものになると考えた。調査区外に接することもあって、性格については不明であるが、前述した遺構が構成されるものもあると思われる。

（出土遺物）　なし。

（時代時期）　検出面・埋土から平安時代と考えられる（Ｔｏ－ａ降下以降と思われる）。

2号柱穴状ピット群（第64図・写真図版44）

（位置）　ＩＦ1ｄ・2ｄグリッドに位置する。

（検出・重複状況）　Ⅱ層上面で検出した。13号竪穴住居跡と重複する。13号竪穴住居跡を截る。

（形状・埋土）　平面形はほぼ円形もしくは楕円形を呈する。埋土は7.5ＹＲ4／1灰褐色土で、黒色土とＴｏ－ａの混合土からなる。1号柱穴状ピット群と類似する。柱穴痕跡は確認されなかった。

（性格）　規則性がなく、不明である。

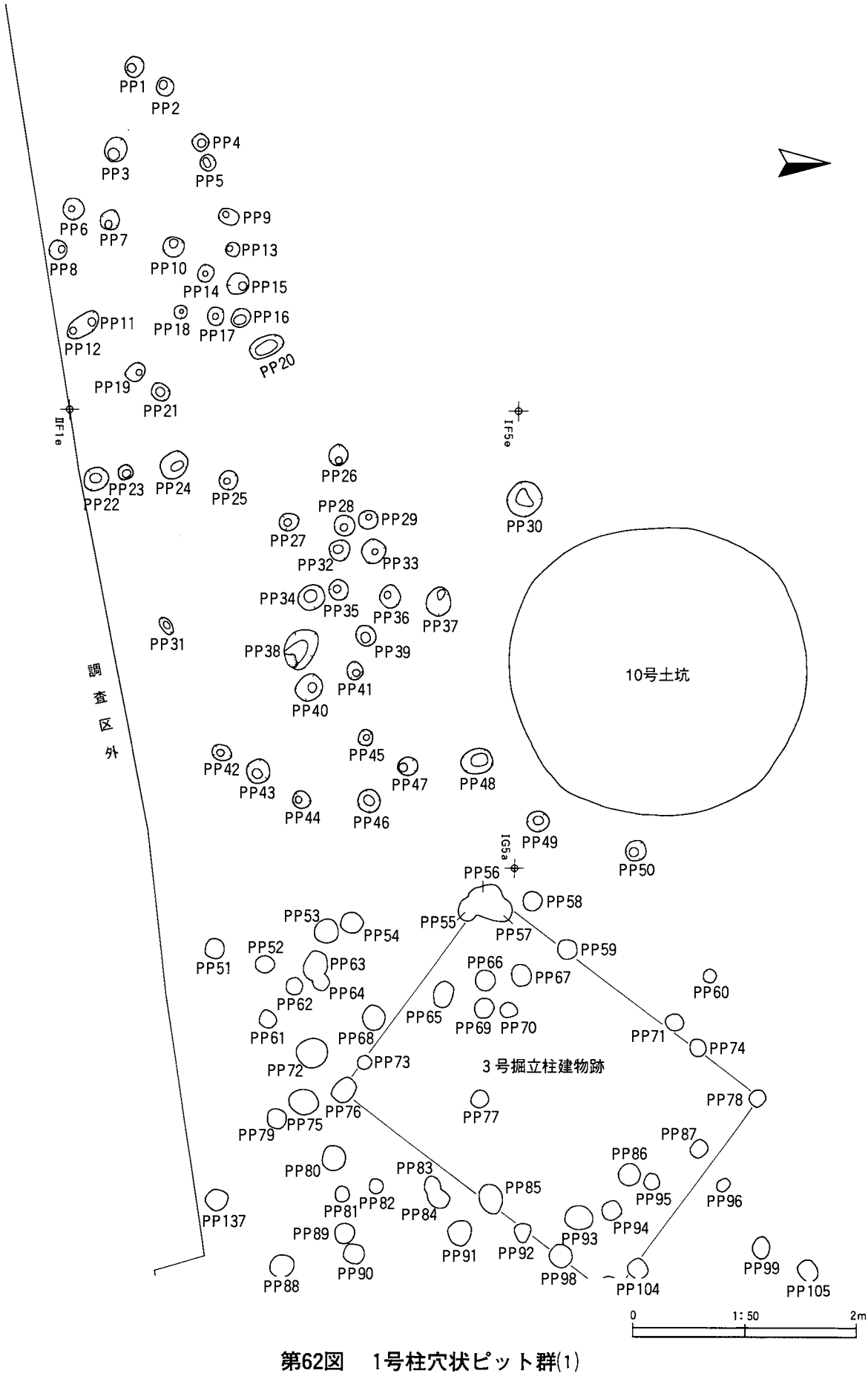
（出土遺物）　なし。

（時代時期）　検出面・埋土から平安時代と考えられる（Ｔｏ－ａ降下以降と思われる）。

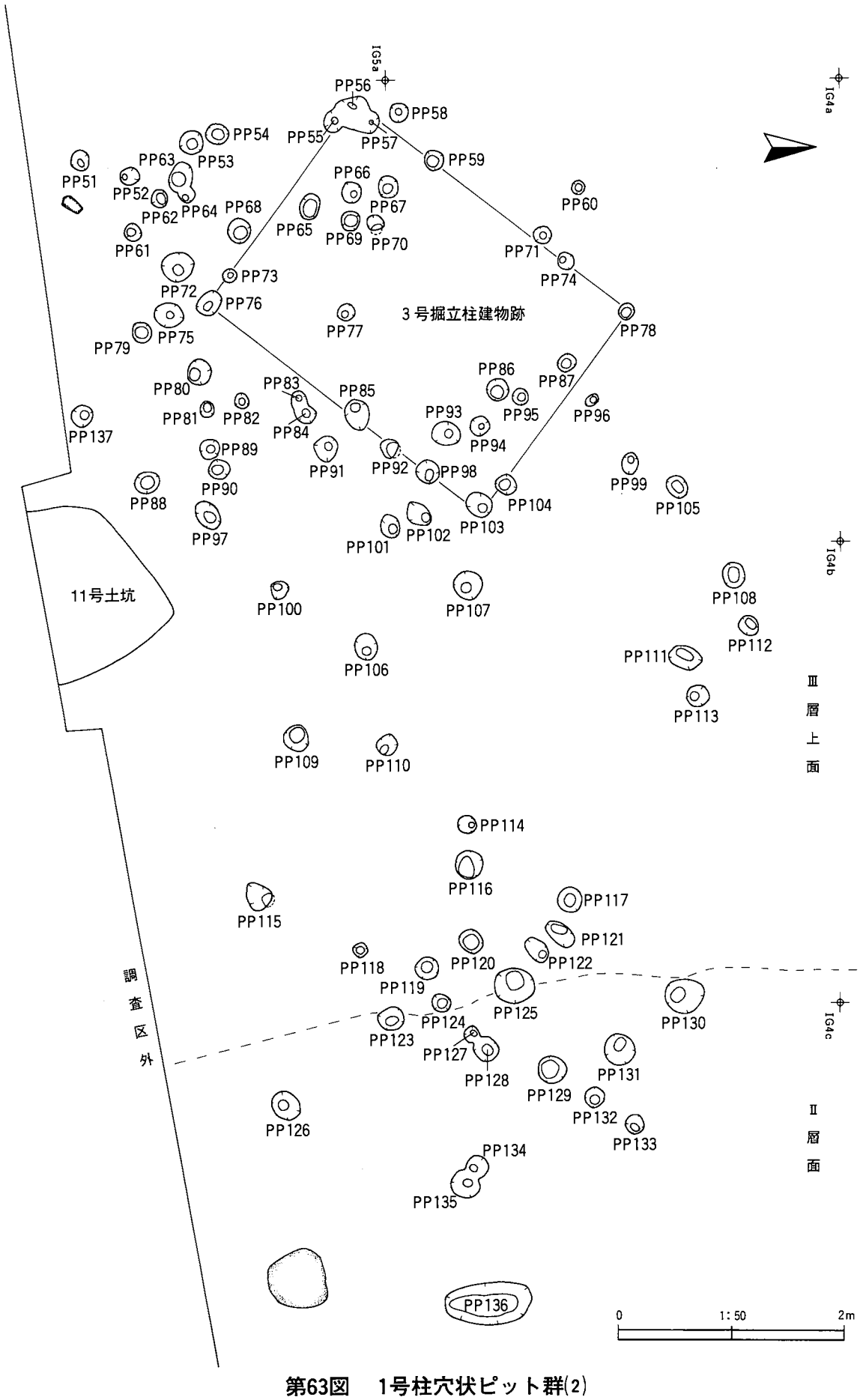
第2表　1号柱穴状ピット群一覧表

番号	開口部径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考	番号	開口部径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
ＰＰ1	18×17	16	148.024		ＰＰ70	15×14	11.0	148.066	
ＰＰ2	16×15	8.8	148.084		ＰＰ71	15×14	9.1	147.979	
ＰＰ3	23×18	18.6	148.057		ＰＰ72	28×25	15.1	148.235	
ＰＰ4	14×14	6.9	148.099		ＰＰ73	13×11	14.5	148.212	
ＰＰ5	14×13	8.7	148.095		ＰＰ74	15×15	9.1	147.974	
ＰＰ6	18×18	20.6	148.081		ＰＰ75	24×20	11.4	148.268	
ＰＰ7	18×16	16.2	148.113		ＰＰ76	23×18	14.2	148.217	
ＰＰ8	16×14	17.6	148.130		ＰＰ77	16×14	14.0	148.090	
ＰＰ9	17×14	20.7	147.986		ＰＰ78	14×13	12.1	147.924	
ＰＰ10	18×17	16.9	148.072		ＰＰ79	19×18	18.3	148.299	
ＰＰ11	直径14	21.5	148.067	12と重複	ＰＰ80	23×19	9.5	148.261	
ＰＰ12	直径14	15.4	148.178	11と重複	ＰＰ81	13×12	6.6	148.280	
ＰＰ13	13×13	9.9	148.089		ＰＰ82	13×13	7.6	148.221	
ＰＰ14	14×12	10.1	148.122		ＰＰ83	直径14	9.8	148.160	84と重複
ＰＰ15	20×18	23.5	147.897		ＰＰ84	直径16	8.9	148.169	83と重複
ＰＰ16	18×14	24.3	147.945		ＰＰ85	27×20	26.1	147.994	
ＰＰ17	16×14	9.4	148.124		ＰＰ86	19×19	22.0	147.929	
ＰＰ18	13×11	8.2	148.245		ＰＰ87	16×13	12.4	147.955	
ＰＰ19	17×14	15.6	148.122		ＰＰ88	23×19	15.9	148.217	
ＰＰ20	31×17	12.5	148.072		ＰＰ89	18×18	13.1	148.227	
ＰＰ21	16×14	14.8	148.186		ＰＰ90	18×18	11.9	148.226	
ＰＰ22	23×19	13.5	148.100		ＰＰ91	23×19	12.5	148.061	
ＰＰ23	12×11	8.0	148.210		ＰＰ92	17×14	13.9	148.090	
ＰＰ24	26×21	22.5	148.059		ＰＰ93	24×21	12.5	148.061	
ＰＰ25	18×16	15.7	148.088		ＰＰ94	18×16	12.3	148.025	
ＰＰ26	18×17	27.8	147.889		ＰＰ95	14×14	7.4	148.025	
ＰＰ27	18×14	13.8	148.087		ＰＰ96	13×9	12.0	147.956	
ＰＰ28	18×17	13.3	148.047		ＰＰ97	26×18	13.3	148.182	
ＰＰ29	20×16	12.0	148.030		ＰＰ98	20×19	10.0	148.120	
ＰＰ30	31×30	13.8	147.908		ＰＰ99	18×14	8.0	148.000	
ＰＰ31	16×9	10.3	148.231		ＰＰ100	15×15	14.8	148.122	
ＰＰ32	18×18	7.9	148.103		ＰＰ101	20×17	15.0	148.094	
ＰＰ33	21×21	25.6	147.918		ＰＰ102	23×17	15.0	148.096	
ＰＰ34	24×20	15.9	148.089		ＰＰ103	22×19	11.5	148.068	
ＰＰ35	17×16	10.1	148.097		ＰＰ104	18×17	6.0	148.096	
ＰＰ36	19×18	26	147.917		ＰＰ105	19×17	8.9	147.991	
ＰＰ37	25×21	26.8	147.872		ＰＰ106	22×18	16.0	148.052	
ＰＰ38	37×37	14.1	148.144		ＰＰ107	25×24	10.3	148.039	
ＰＰ39	19×18	6.3	148.166		ＰＰ108	22×19	8.9	147.991	
ＰＰ40	26×21	21.3	148.034		ＰＰ109	23×23	16.7	148.085	
ＰＰ41	15×13	21.9	147.996		ＰＰ110	18×16	25.3	147.962	
ＰＰ42	17×13	18.9	148.135		ＰＰ111	28×19	16.5	147.990	
ＰＰ43	20×20	18.9	148.135		ＰＰ112	18×18	9.4	148.036	
ＰＰ44	15×14	22.4	148.076		ＰＰ113	19×18	20.5	147.945	
ＰＰ45	14×12	11.9	148.095		ＰＰ114	17×15	16.2	148.022	
ＰＰ49	21×19	17.7	148.048		ＰＰ115	24×22	12.5	148.141	
ＰＰ47	17×15	12.5	148.048		ＰＰ116	25×24	19.8	148.022	
ＰＰ48	28×19	15.3	147.947		ＰＰ117	22×21	21.4	148.042	
ＰＰ49	20×18	18.1	147.911		ＰＰ118	13×13	20.3	148.122	
ＰＰ50	18×17	13.0	147.918		ＰＰ119	20×19	12.2	148.197	
ＰＰ51	17×15	10.4	148.296		ＰＰ120	20×19	17.3	148.135	
ＰＰ52	17×14	17.7	148.198		ＰＰ121	28×21	20.6	148.058	
ＰＰ53	21×20	14.6	148.154		ＰＰ122	24×16	16.3	148.058	
ＰＰ54	20×18	13.6	148.125		ＰＰ123	23×19	14.6	148.201	
ＰＰ55	直径17	25.8	147.909	56・57と重複	ＰＰ124	17×15	24.5	148.083	
ＰＰ56	直径28	19.8	147.970	55・57と重複	ＰＰ125	34×29	31.9	147.995	
ＰＰ57	直径20	13.0	148.015	55・56と重複	ＰＰ126	26×23	20.6	148.261	
ＰＰ58	17×15	16.2	147.936		ＰＰ127	直径14	19.6	148.240	128と重複
ＰＰ59	18×15	11.8	148.000		ＰＰ128	直径21	19.1	148.232	127と重複
ＰＰ60	12×12	9.0	147.970		ＰＰ129	25×24	31.9	148.095	
ＰＰ61	15×14	7.5	148.359		ＰＰ130	34×29	34.7	148.045	
ＰＰ62	14×13	15.0	148.209		ＰＰ131	24×23	34.9	148.056	
ＰＰ63	直径26	19.4	148.149	64と重複	ＰＰ132	17×17	35.6	148.055	
ＰＰ64	直径13	11.1	148.207	63と重複	ＰＰ133	17×17	33.7	148.054	
ＰＰ65	23×17	12.5	148.100		ＰＰ134	直径19	13.3	148.298	135と重複
ＰＰ66	17×17	13.1	148.048		ＰＰ135	直径24	14.4	148.293	134と重複
ＰＰ67	18×17	9.0	148.049		ＰＰ136	77×46	17.9	148.244	
ＰＰ68	22×18	22.3	148.085		ＰＰ137	20×20	20.0	148.299	
ＰＰ69	17×17	10.3	148.095						

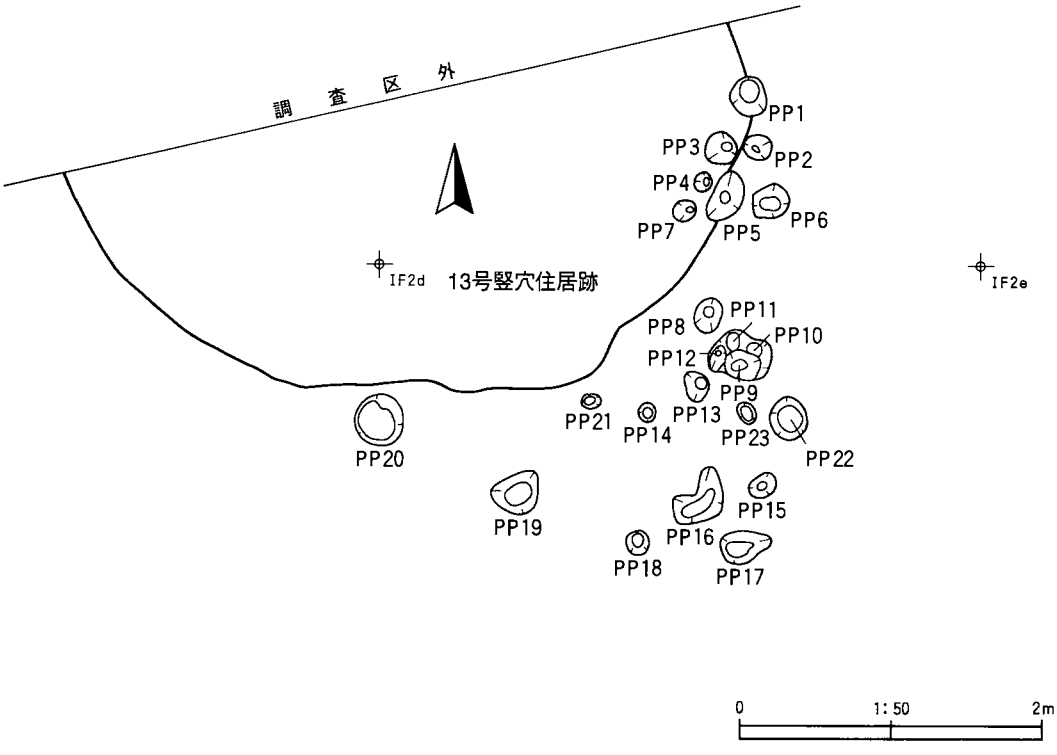
1号柱穴状ピット群一覧表



第62図　1号柱穴状ピット群(1)

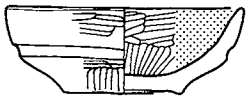


第63図　1号柱穴状ピット群(2)

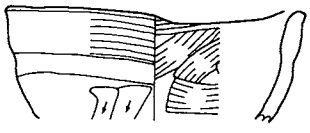


番 号	開口部径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備 考
1	24×24	19.3	147.75	
2	18×18	10.4	147.774	
3	22×21	21.4	147.612	
4	11×13	4.8	147.628	
5	34×20	38.8	147.562	
6	24×25	11.2	147.848	
7	16×14	9.0	147.622	
8	22×17	11.2	147.836	
9	22×18	22.8	147.722	
10	直径10	8.2	147.87	9と重複
11	直径9	19.8	147.754	9と重複
12	直径18	23.9	147.721	9と重複
13	16×20	16.4	147.786	
14	12×14	17.9	147.657	
15	19×14	17.0	147.81	
16	34×16	21.1	147.785	
17	35×20	11.2	147.916	
18	15×14	21.4	147.818	
19	31×31	7.2	147.796	
20	34×34	9.8	147.685	
21	13×8	8.1	147.768	
22	28×24	12.1	147.825	
23	10×14	16.2	147.788	

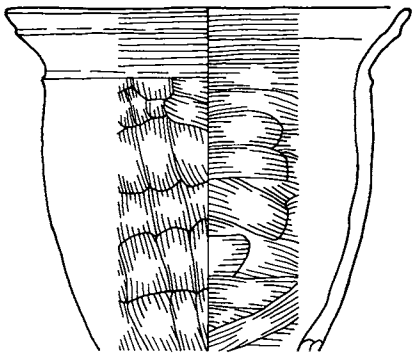
第64図　2号柱穴状ピット群



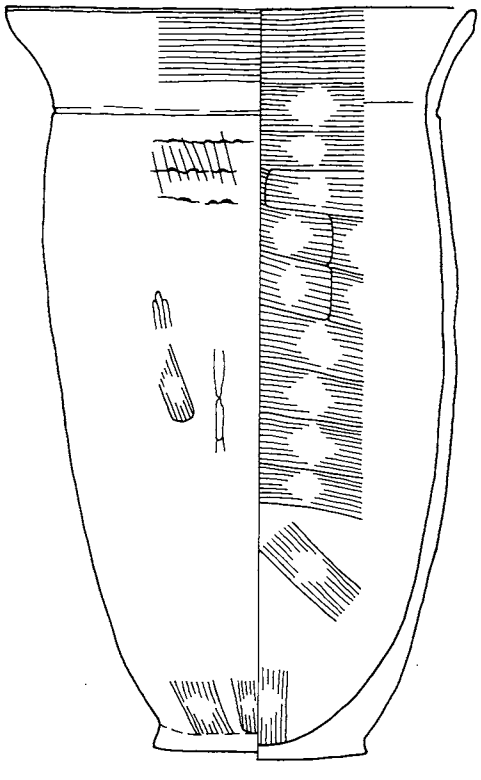
床面　1



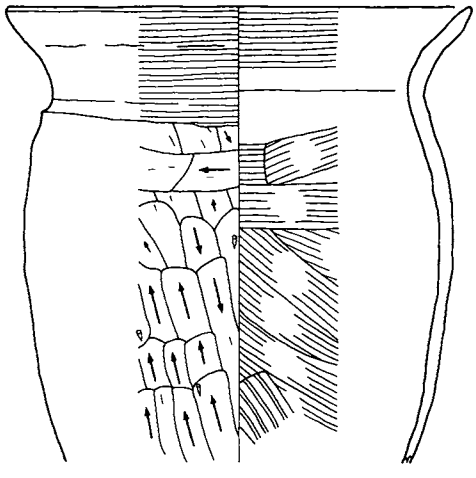
埋土　2



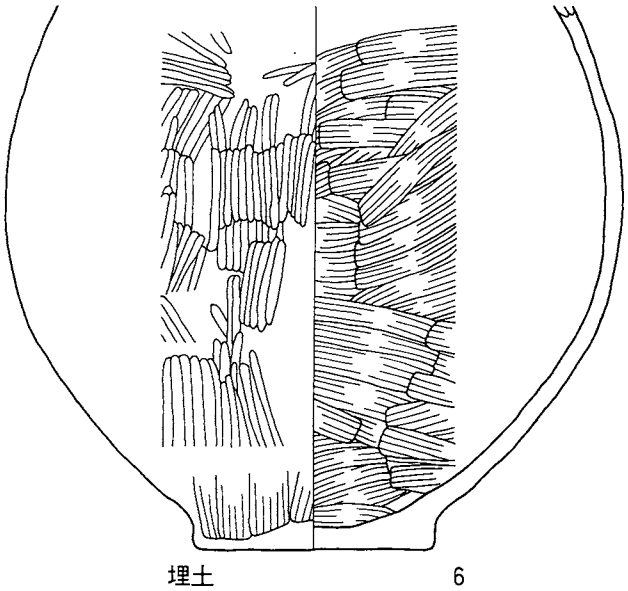
埋土中位　3



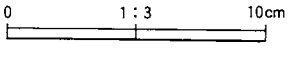
埋土　4



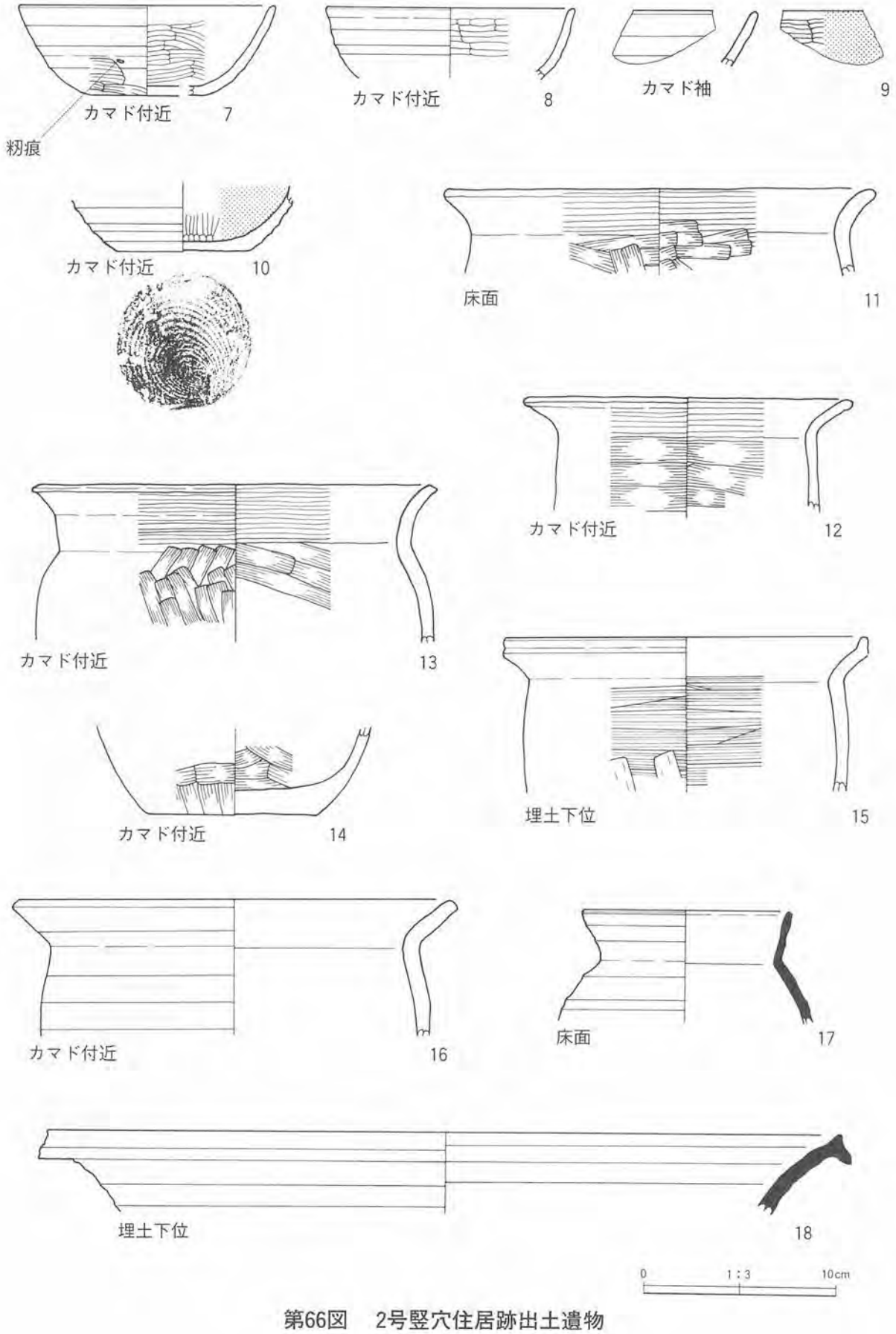
埋土中位　5



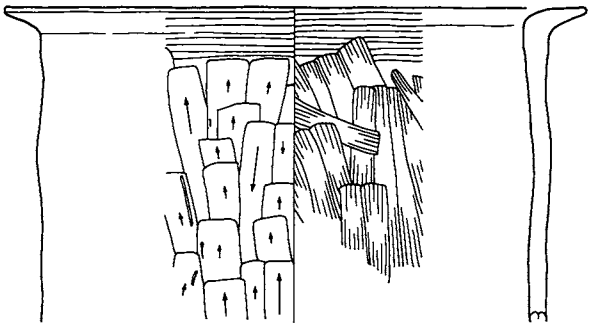
埋土　6

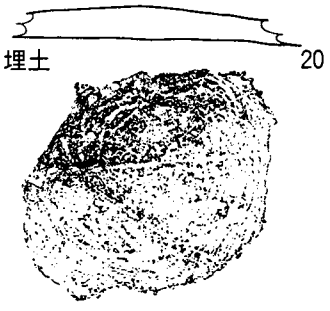


第65図　1号竪穴住居跡出土遺物

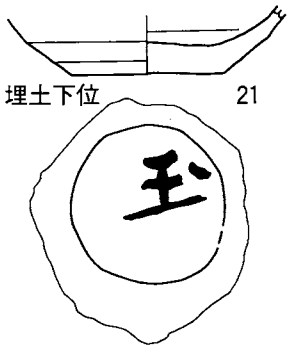


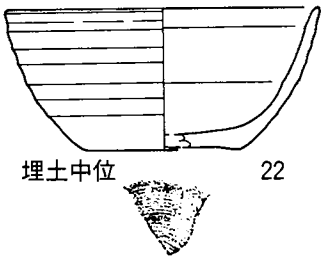
第66図　2号竪穴住居跡出土遺物

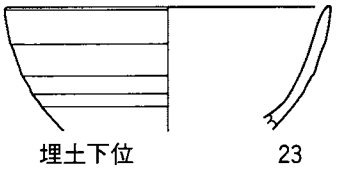


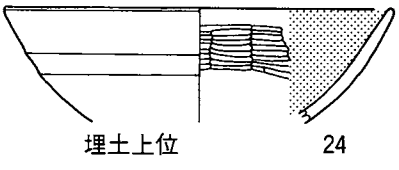


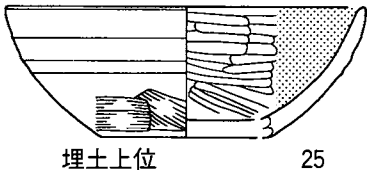
3号住居

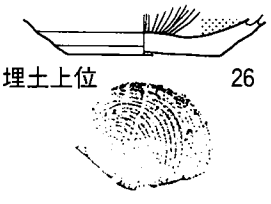


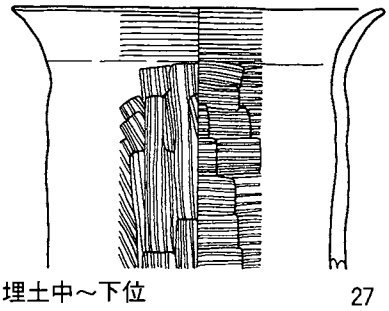


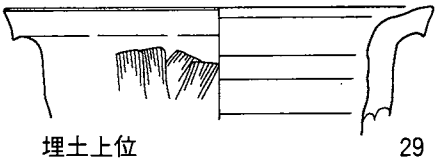


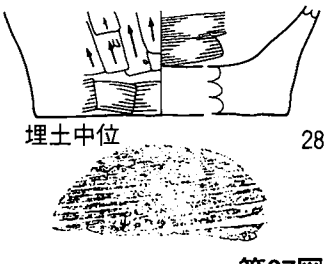


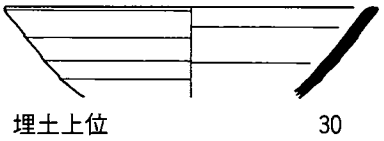


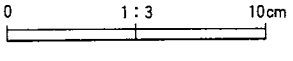




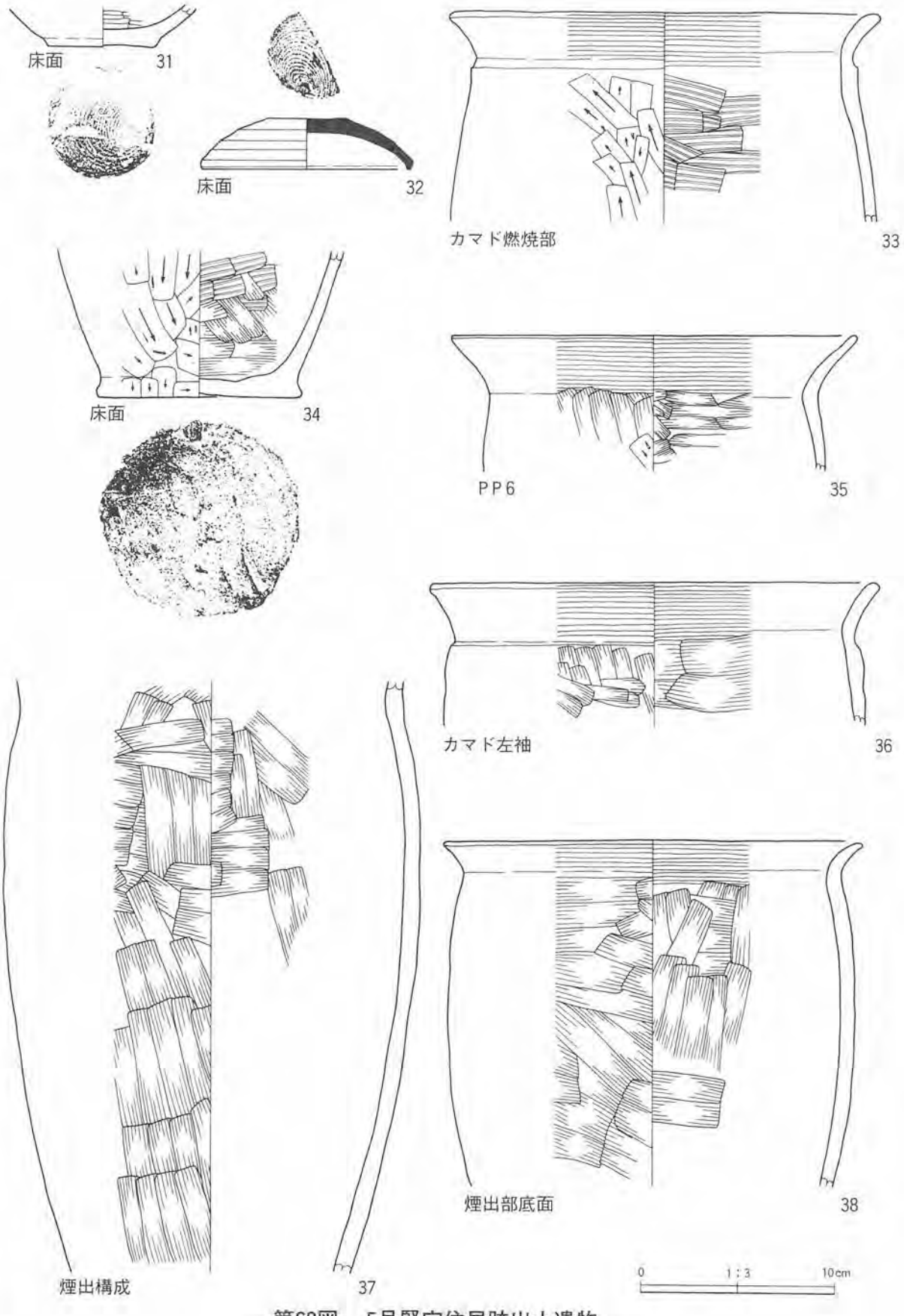




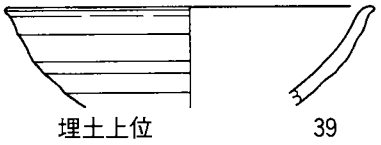




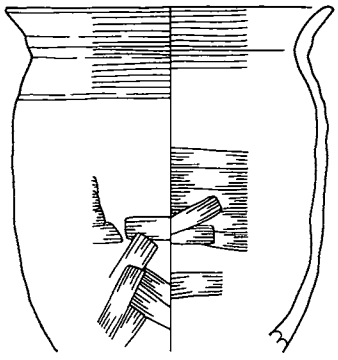
第67図　3・4号竪穴住居跡出土遺物



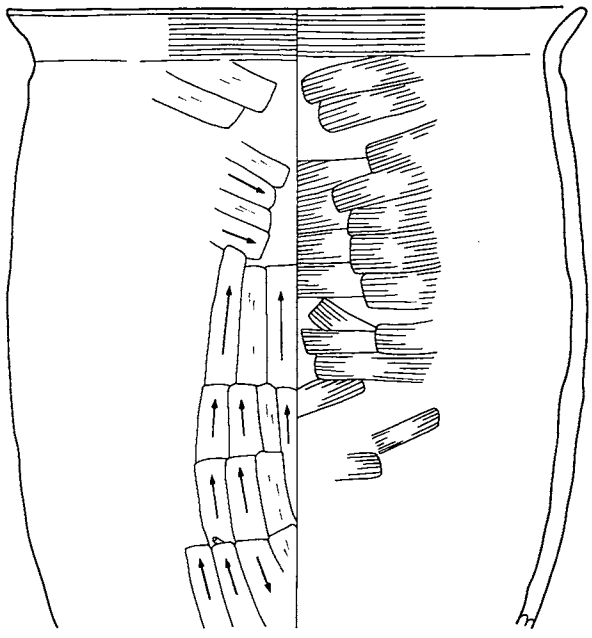
第68図　5号竪穴住居跡出土遺物



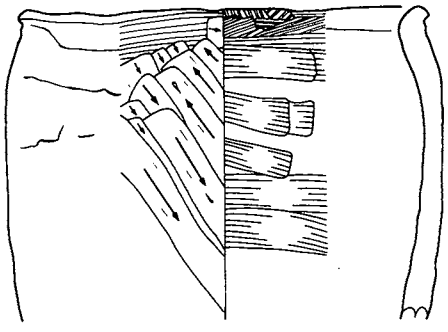
埋土上位　39



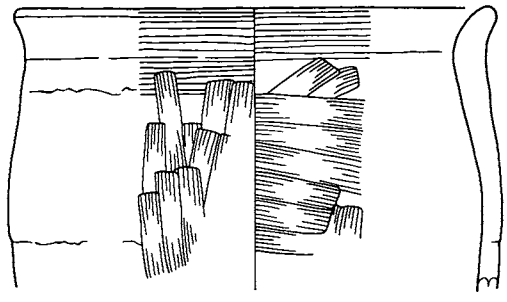
カマド・焼失焼土上面　40



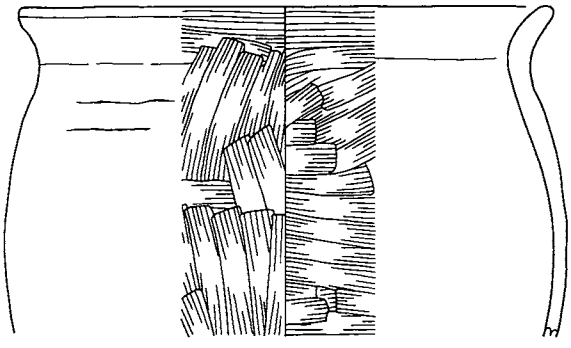
カマド・埋土下位　41



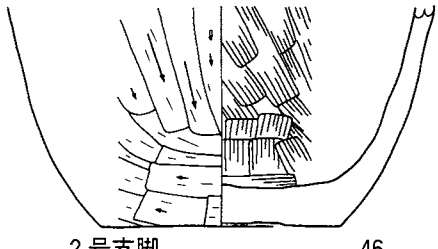
カマド　42



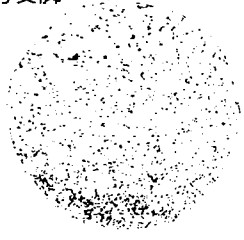
カマド　43

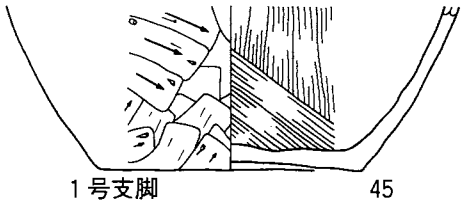


カマド・煙道部埋土　44

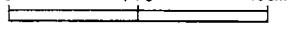


2号支脚　46

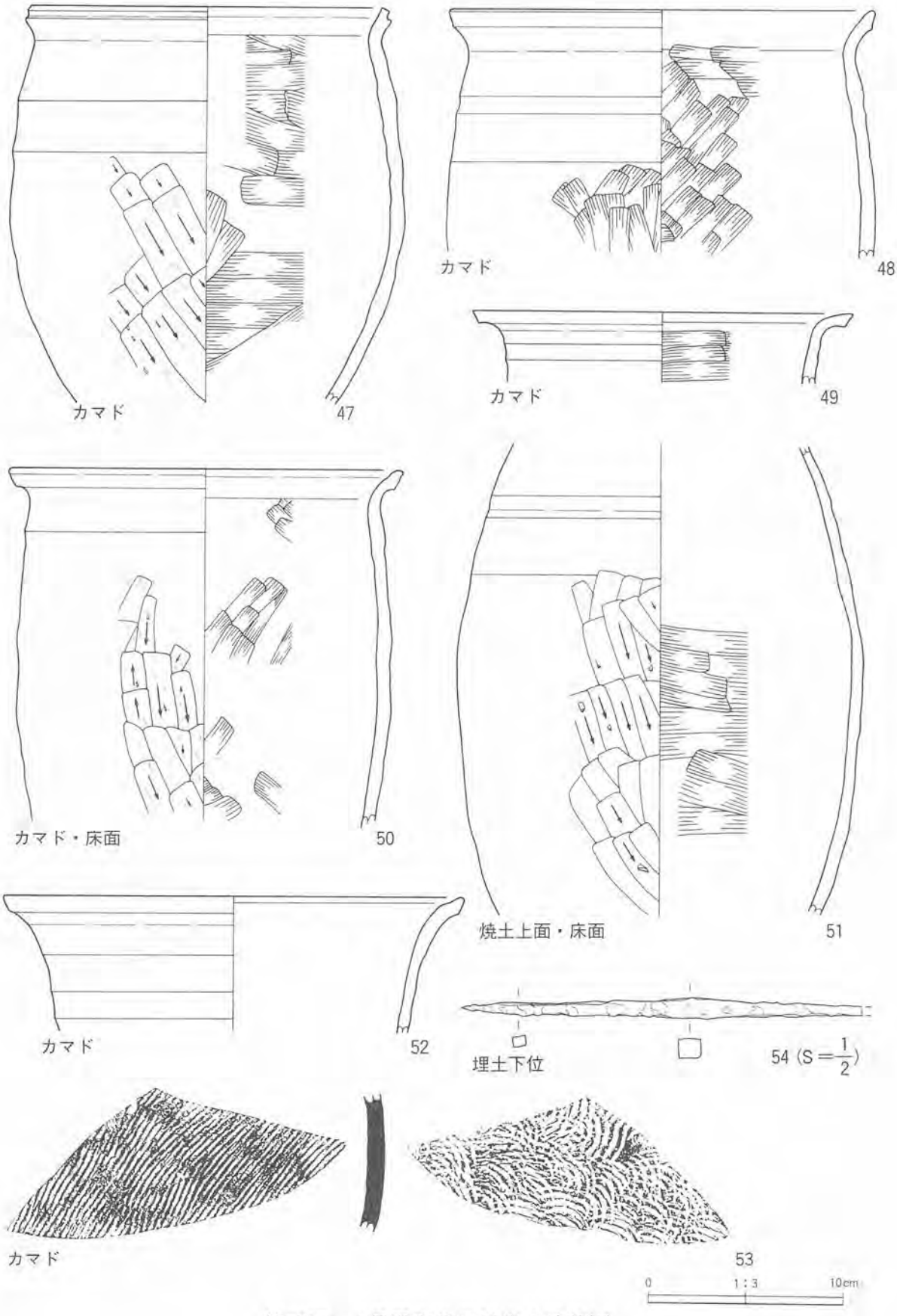




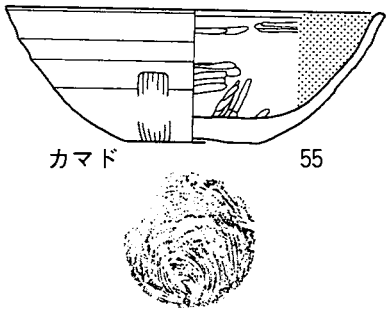
1号支脚　45

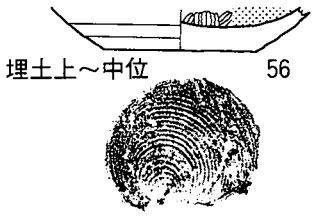


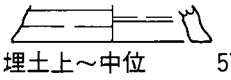
第69図　6号竪穴住居跡出土遺物(1)

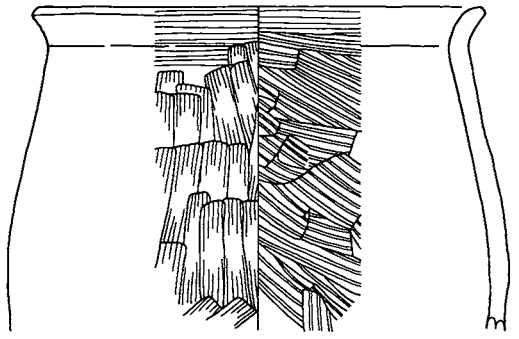


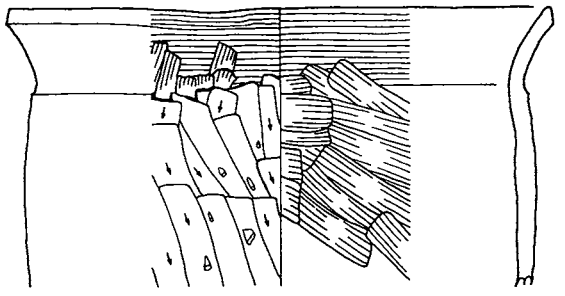
第70図　6号竪穴住居跡出土遺物(2)

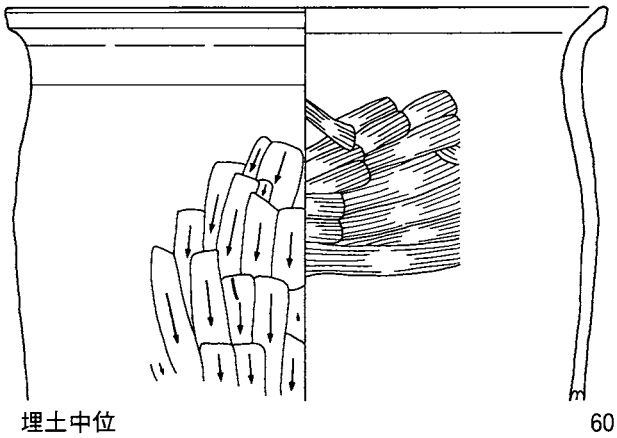


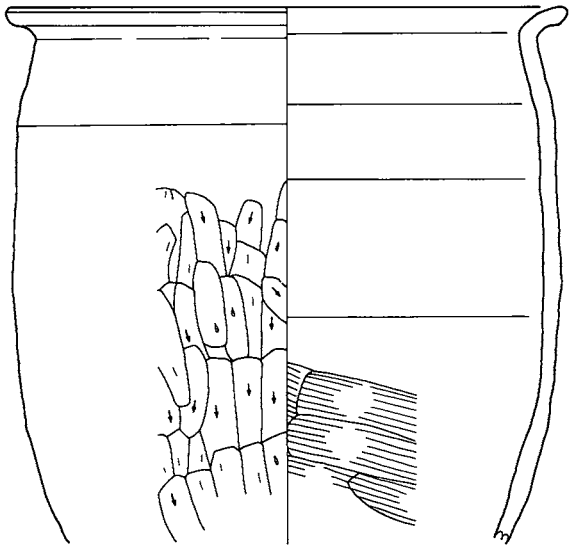


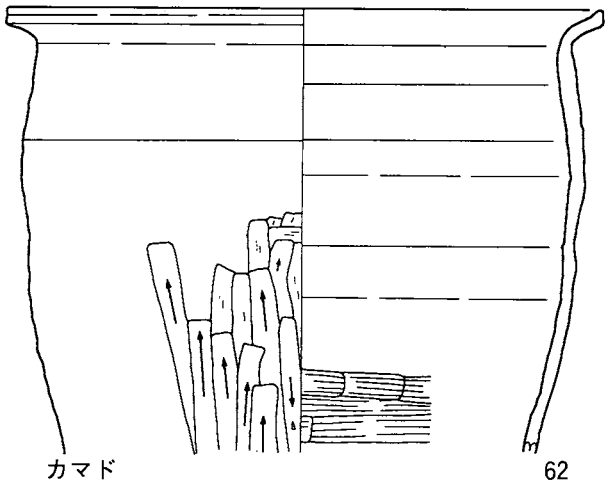


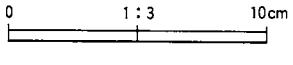




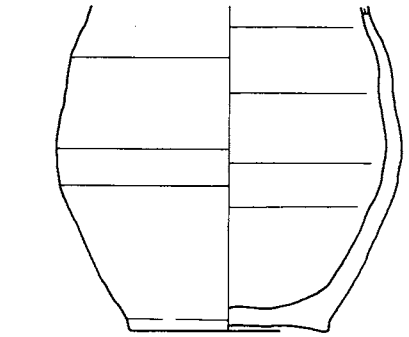




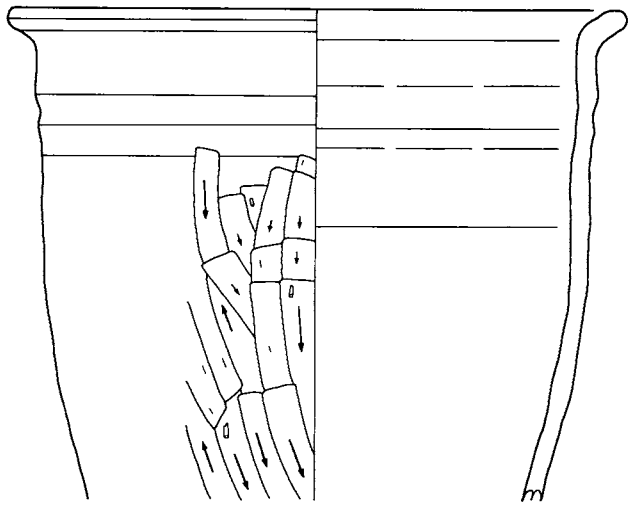




第71図　8号竪穴住居跡出土遺物(1)

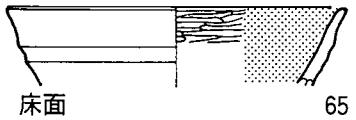


カマド・埋土上～中位　63

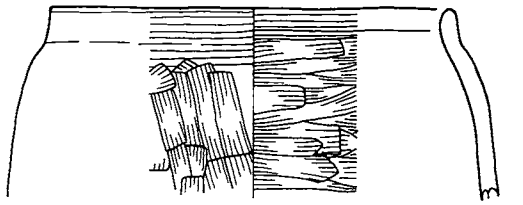


カマド・埋土・中位　64

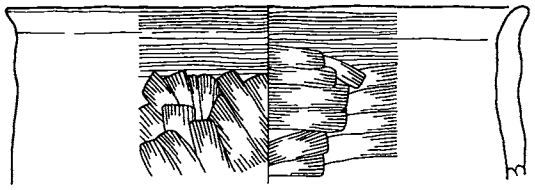
8号住居



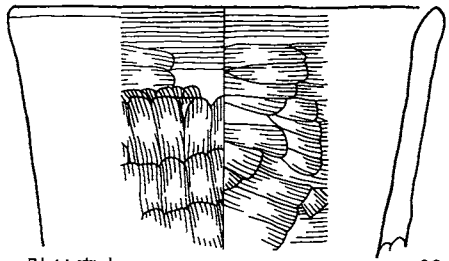
床面　65



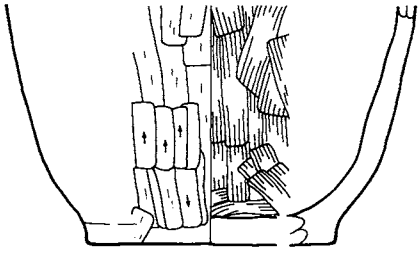
床面　66



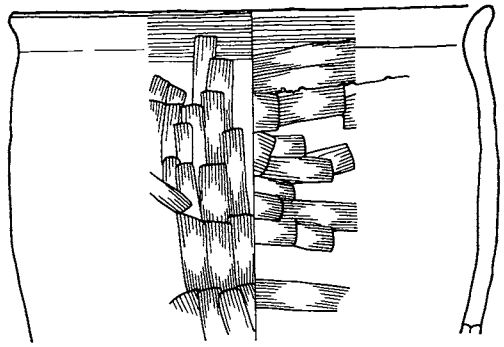
貼り床内　67



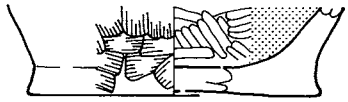
貼り床内　68



煙道埋土内　69

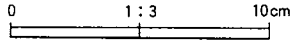


貼り床内　70

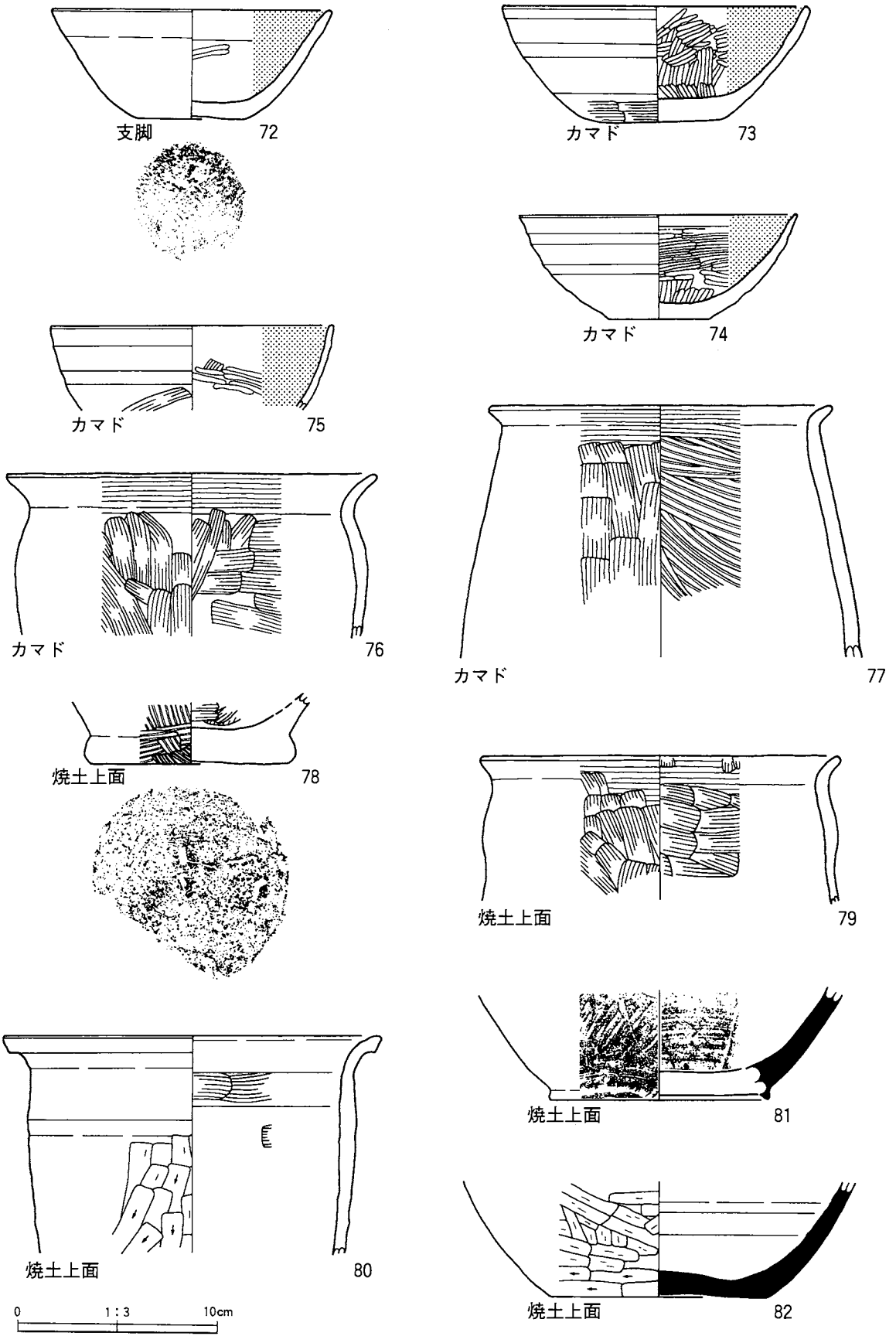


埋土上～中位　71

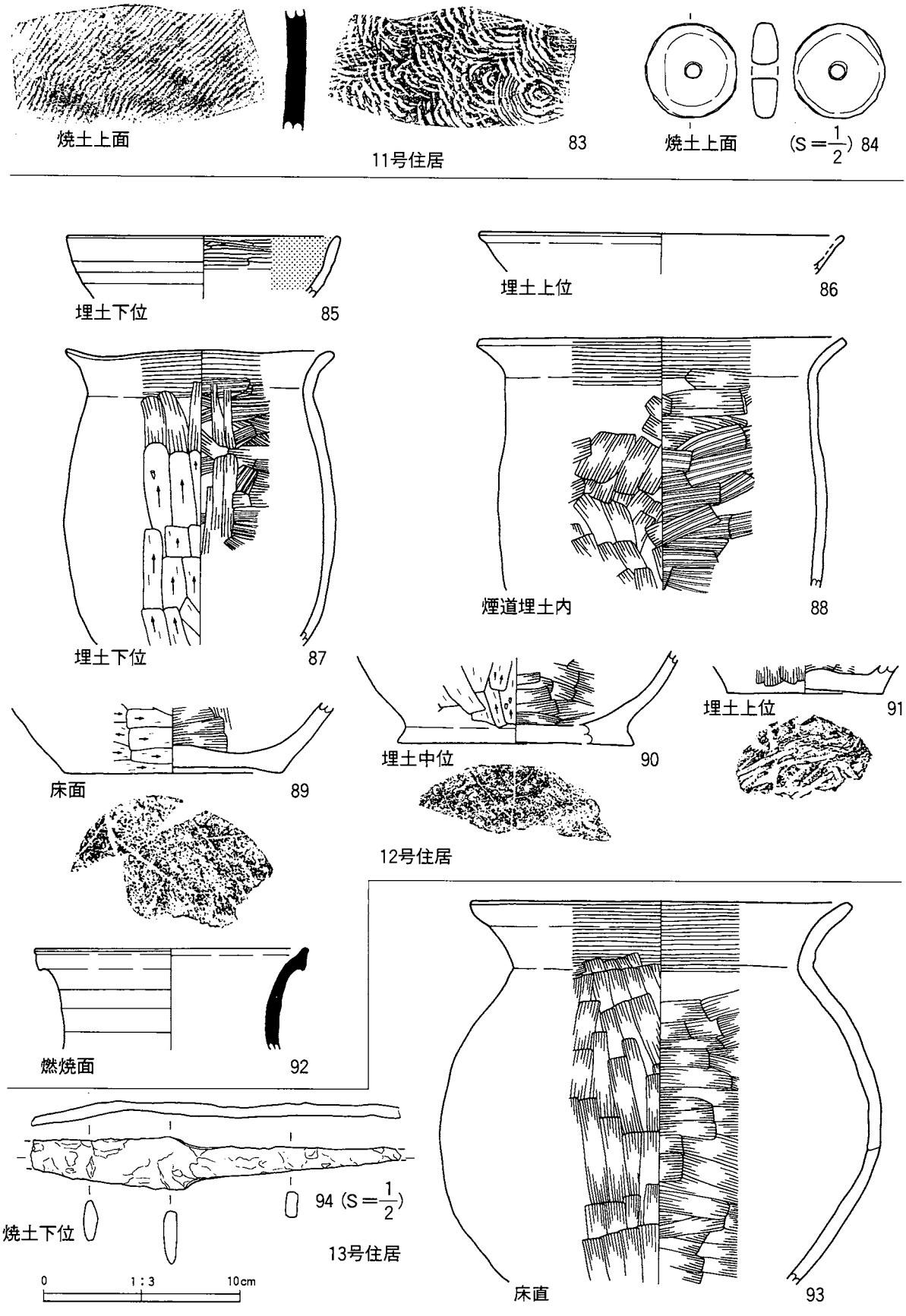
9号住居



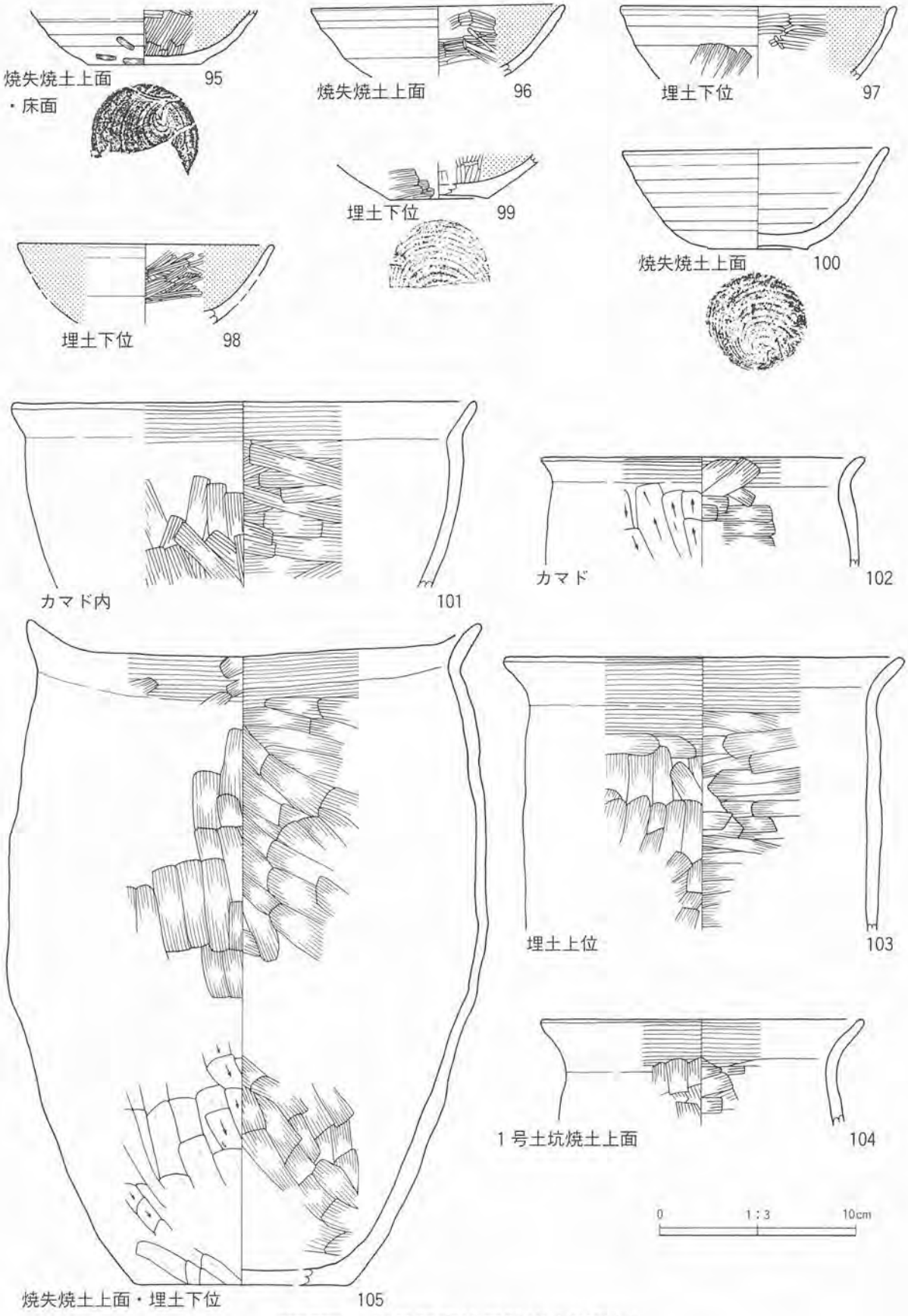
第72図　8(2)・9号竪穴住居跡出土遺物



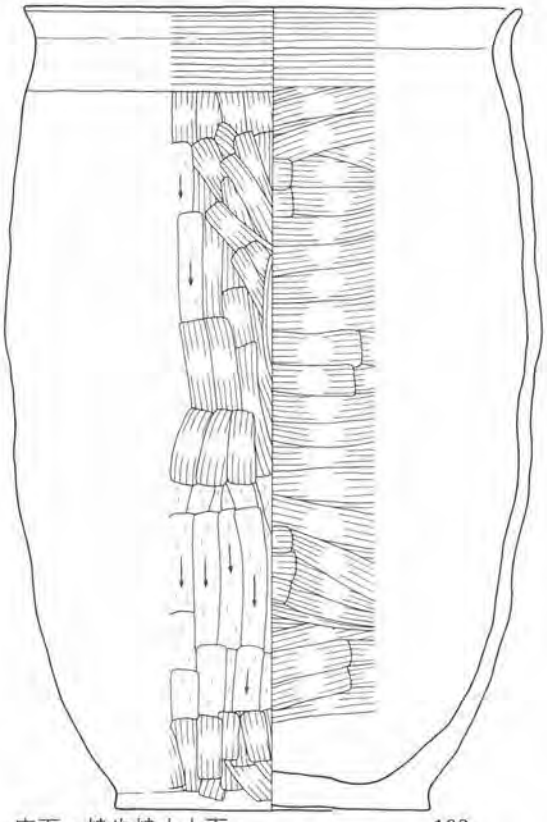
第73図　11号竪穴住居跡出土遺物(1)



第74図　11(2)・12・13号竪穴住居跡出土遺物

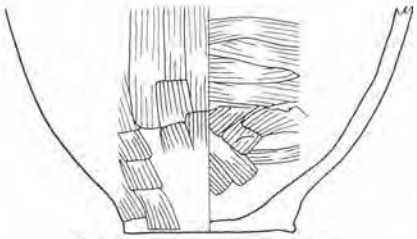


第75図　14号竪穴住居跡出土遺物(1)



床面・焼失焼土上面・
埋土下位

106



焼失焼土上面

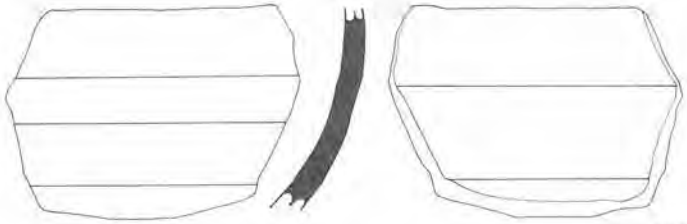
107

焼失焼土上面

108

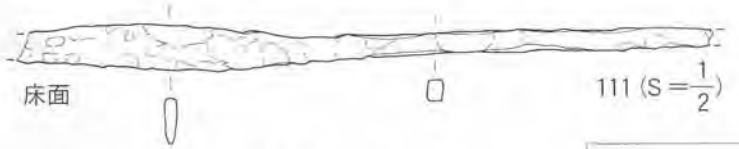
焼失焼土上面

109



埋土下位

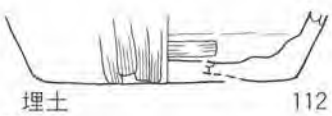
110



床面

111 (S＝1/2)

14号住居



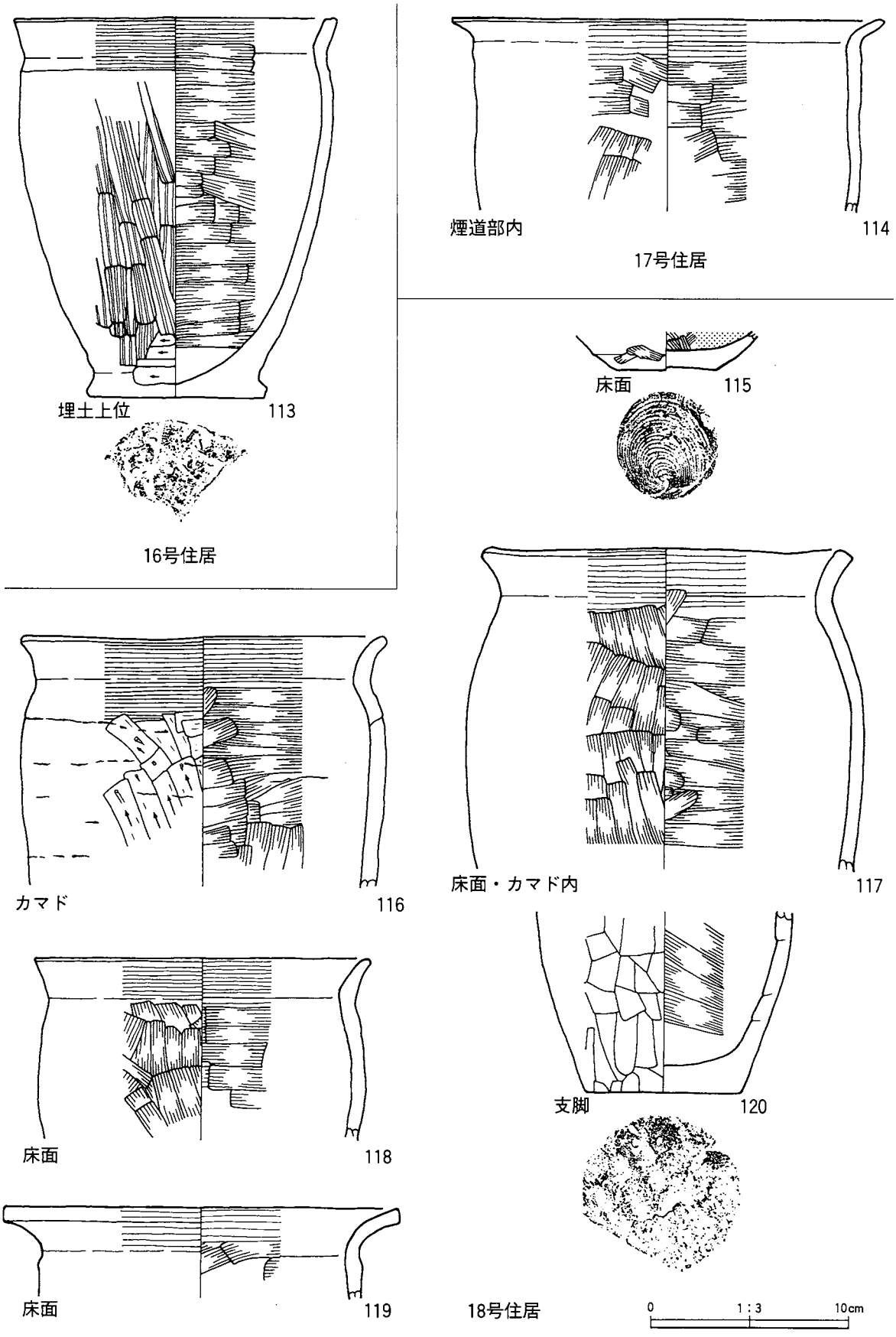
埋土

112

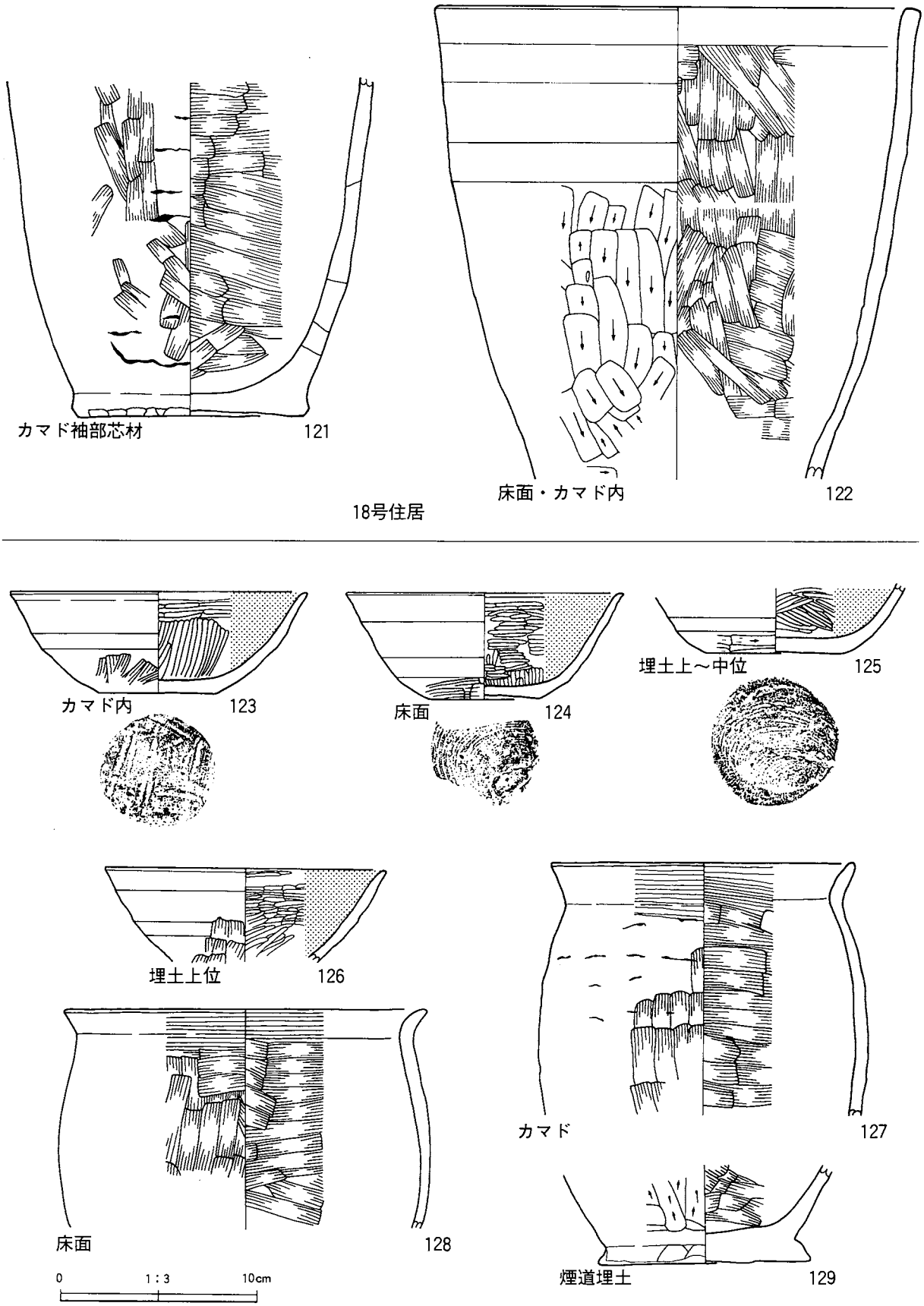
15号住居

0　1：3　10cm

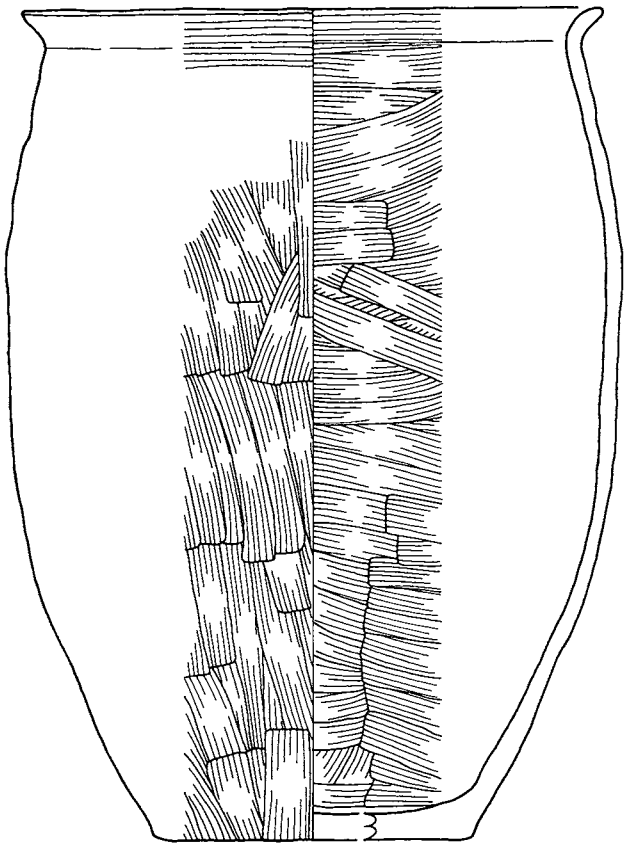
第76図　14(2)・15号竪穴住居跡出土遺物

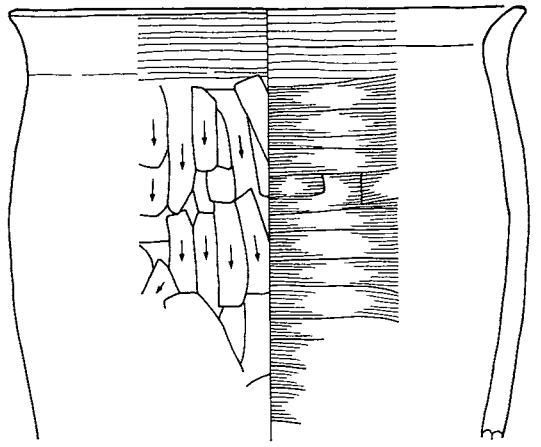


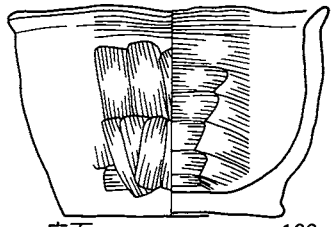
第77図　16・17・18号竪穴住居跡出土遺物(1)

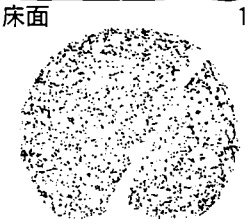


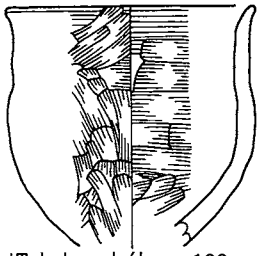
第78図　18(2)・19号竪穴住居跡出土遺物(1)

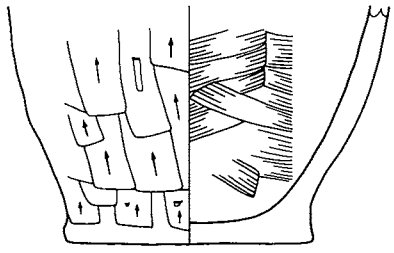


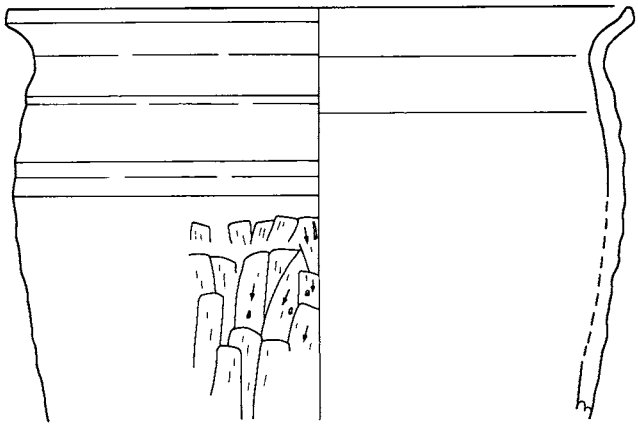


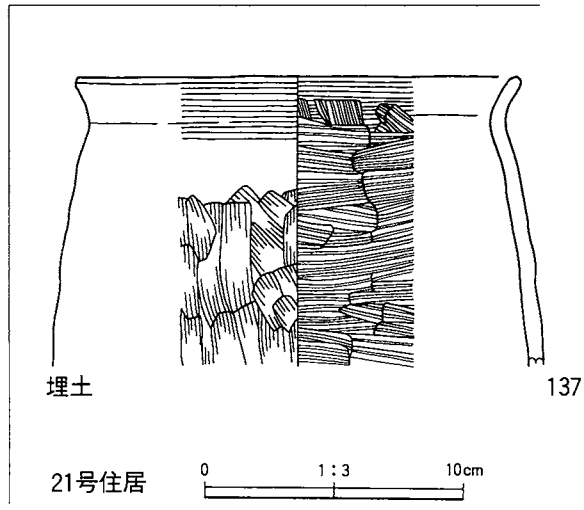




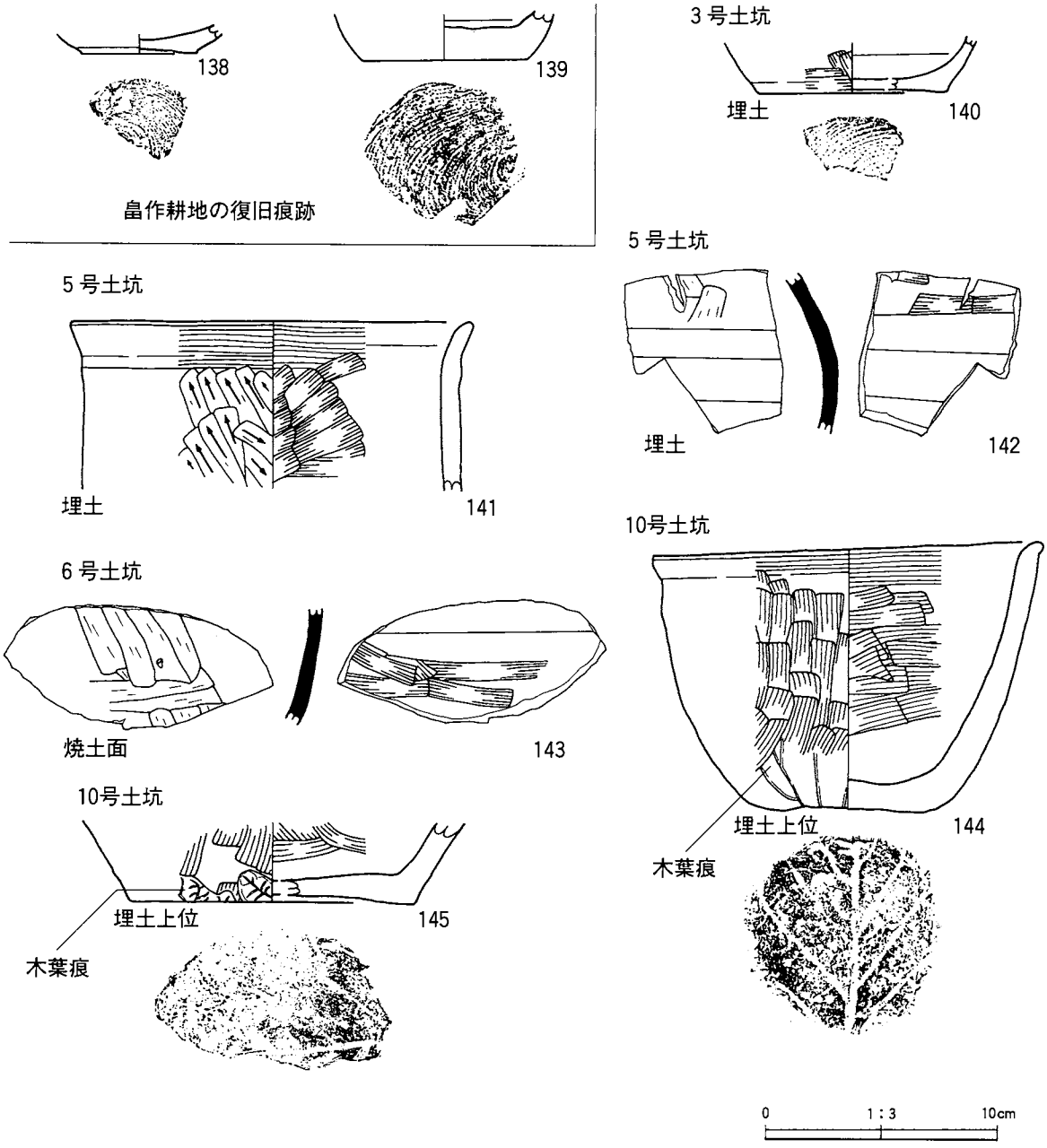








第79図　19(2)・21号竪穴住居跡出土遺物



第80図　畠作耕地の復旧痕跡・土坑出土遺物

Ⅴ　遺構外出土遺物

今回の調査で遺構外の出土遺物は、縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期の土器合わせて約50点、続縄文土器片１点、土師器の坏・甕・須恵器の壷・甕合わせて約大コンテナ１箱である。石器類は石鏃２点、石匙２点である。古銭では、文久永寶（初鋳1863年）１枚、五銭（大正８年製作）１枚が出土した。陶磁器片については近代製作の遺物が４点出土したが割愛した。なお、縄文土器については、古代の遺構内から出土しているものについては、遺構の時期と明らかに異なることから、流れ込みで混入したと考え遺構外として掲載した。

１．土　器（第81・82図・写真図版61・62）

（１）　縄文時代・弥生時代（第81図・写真図版61）

出土した土器片のうち、残存状況・文様・時代に着目して24点を実測掲載した。掲載した遺物は、時代時期・文様等に着目して下記の様に掲載・記載した。

１類　早期の土器（146～149）

古代の竪穴住居跡の貼り床内・遺構確認のための試掘溝設定時に合わせて４点出土した。いずれの土器も貝殻文が施される早期中葉の土器である。147は４本の平行沈線が施され、その上部は斜め左方向からの刺突列が施される。149の部位は尖底部付近である。

２類　前期の土器（150～157）

調査区ＩＢグリッド北側Ⅳ層を中心に出土した。150～157はいずれも胎土に繊維を含む土器である。156・157と比較して150～155は繊維を多く含む。150は表裏縄文を有し、口唇部に原体回転が施される。151は縄文地に３本の平行沈線が施される。151・152・154は単節縄文、153はＲＬＲ縄文が施される。155は底部破片で、底面にＲＬの原体回転？（圧痕か）が認められる。156は原体Ｒの網目状撚糸文が施される。148はＲ及びＬの二つの原体で撚糸文が施される。縄文時代前期初頭～前葉に位置づけられる土器群と思われる。

３類　縄文時代中期の土器（158・159）

158・159の２点出土した。大木８ｂ式に比定される土器と思われる。

４類　縄文時代後期の土器（160～163）

160は折り返し口縁部が施され、刺突と「く」の字状の沈線が施される。縄文時代中期末～後期初頭の土器と思われる。161は縄文時代後期初頭の蛍沢式に比定される土器と思われる。161は原体Ｒの撚糸文が施される。163は貼付瘤を有する土器で、縄文時代後期後葉の土器と思われる。

５類　縄文時代晩期の土器（164・165）

三叉状入組文を持つ、大洞Ｂ式に比定される土器である。

６類　縄文時代の粗製土器（166～168）

粗製の土器を一括した。166・167は、原体Ｒ撚糸文が施される。168は深鉢の底部と思われる。

７類　続縄文土器（169）

本遺跡で１点出土した。口唇部が欠損している。刺突列・縄文が施されている。後北C_2－Ｄに比定される土器である。

（2）　平安時代（土師器・須恵器）

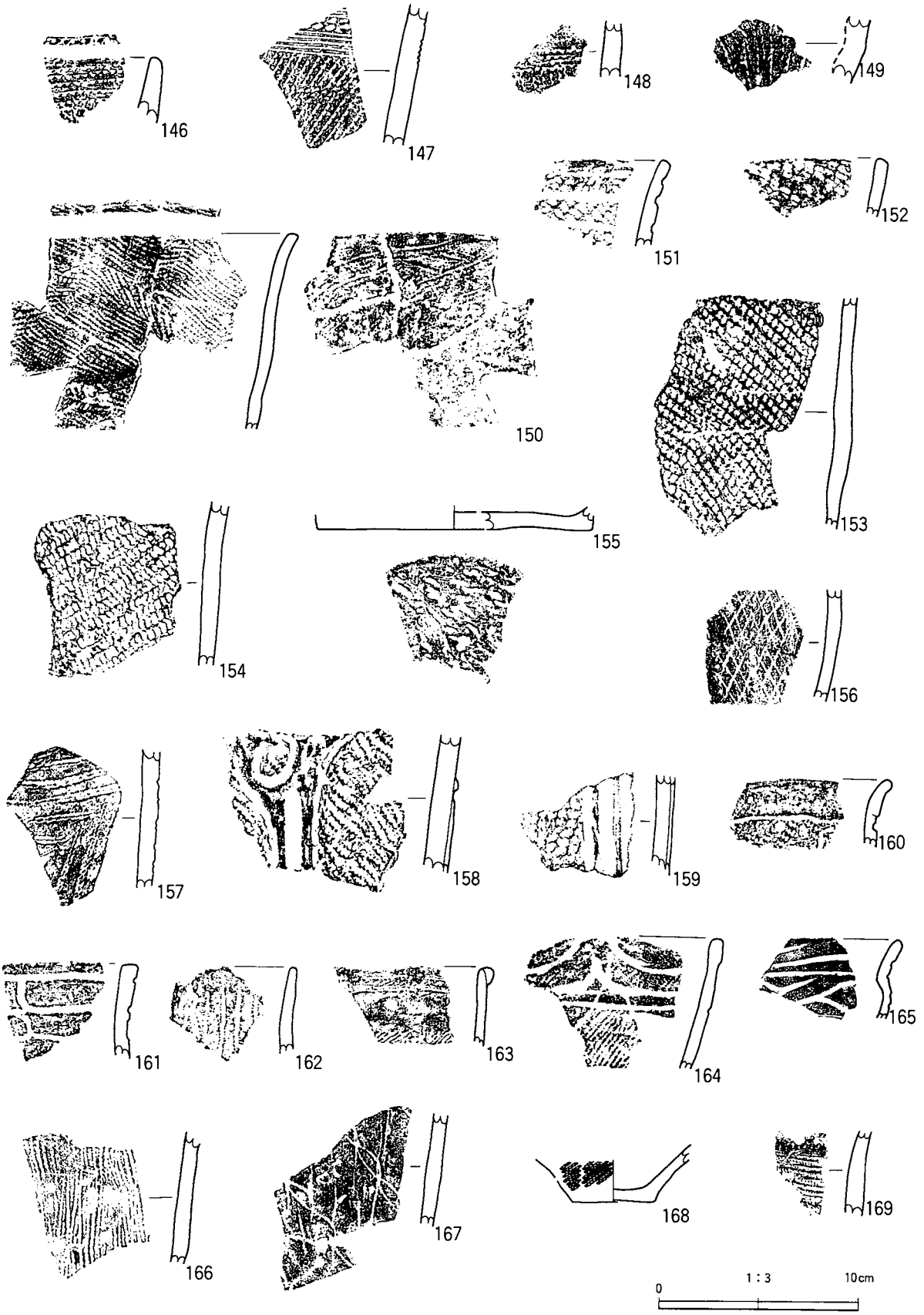
170・171はロクロ成形の土師器の坏である。171は内外面に黒色処理が施され、欠損しているが、高台を持つ。172～174は非ロクロ成形の土師器の甕である。172は内外面に黒色処理が施され、内面はミガキが施される。173は底面にムシロ痕を持つ。174は口縁部ヨコナデ・内外面ナデによる調整が施される。175～177は、ロクロ成形の土師器の甕である。ロクロ成形後、ケズリ・ナデ等の調整が施される。178～182は須恵器の甕・壷類である。178・179は甕・大甕の口縁部と思われる。180広口壺の口縁部である。181は底部に高台を持つ、広口壺もしくは長頸瓶の底部と思われる。182は大甕の胴部と思われる。

2．古銭（第82図・写真図版62）

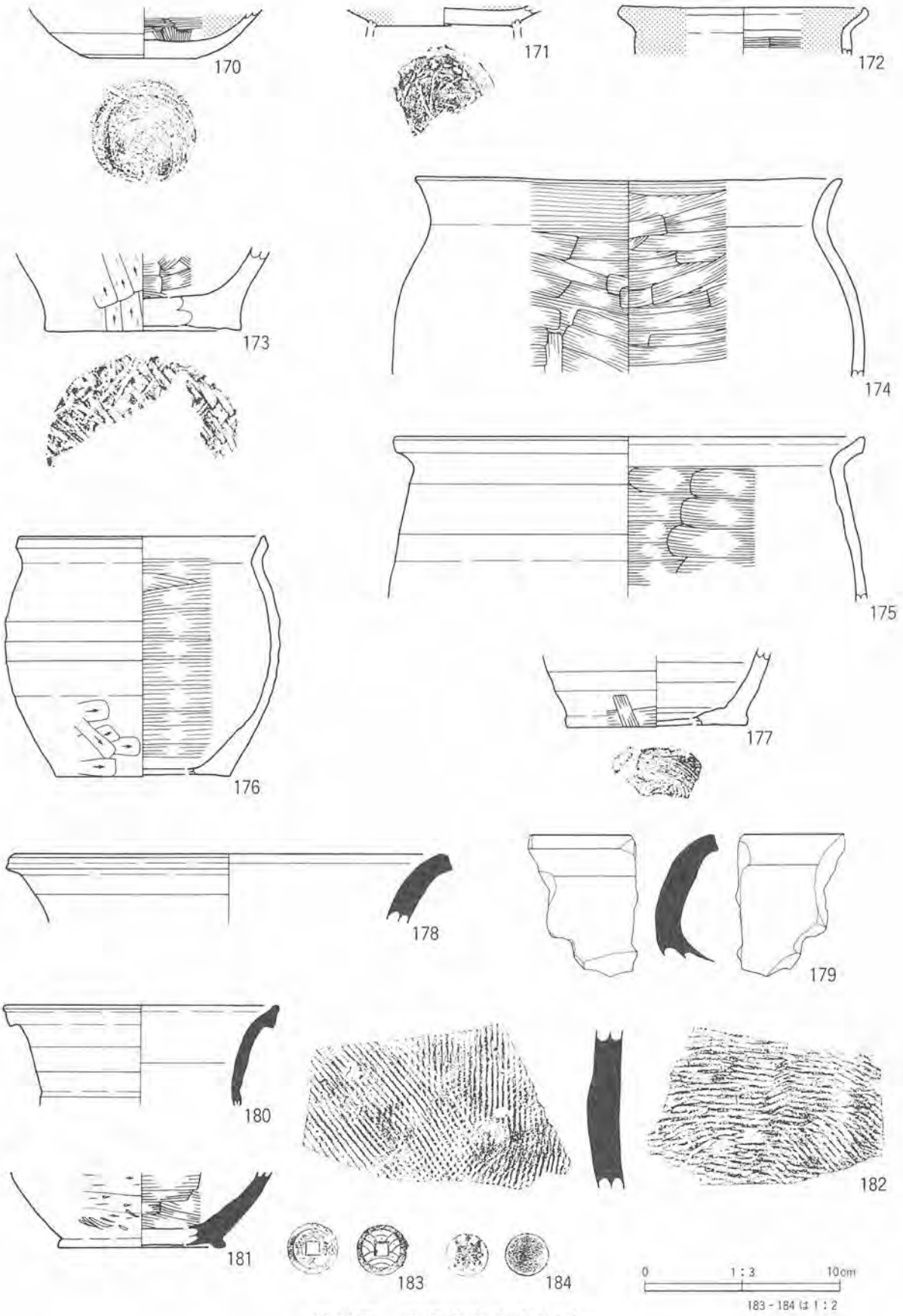
183は、初鋳年代1863年の文久永寶である。185は、大正８年製作の五銭である。

3．石器（第83図・写真図版63）

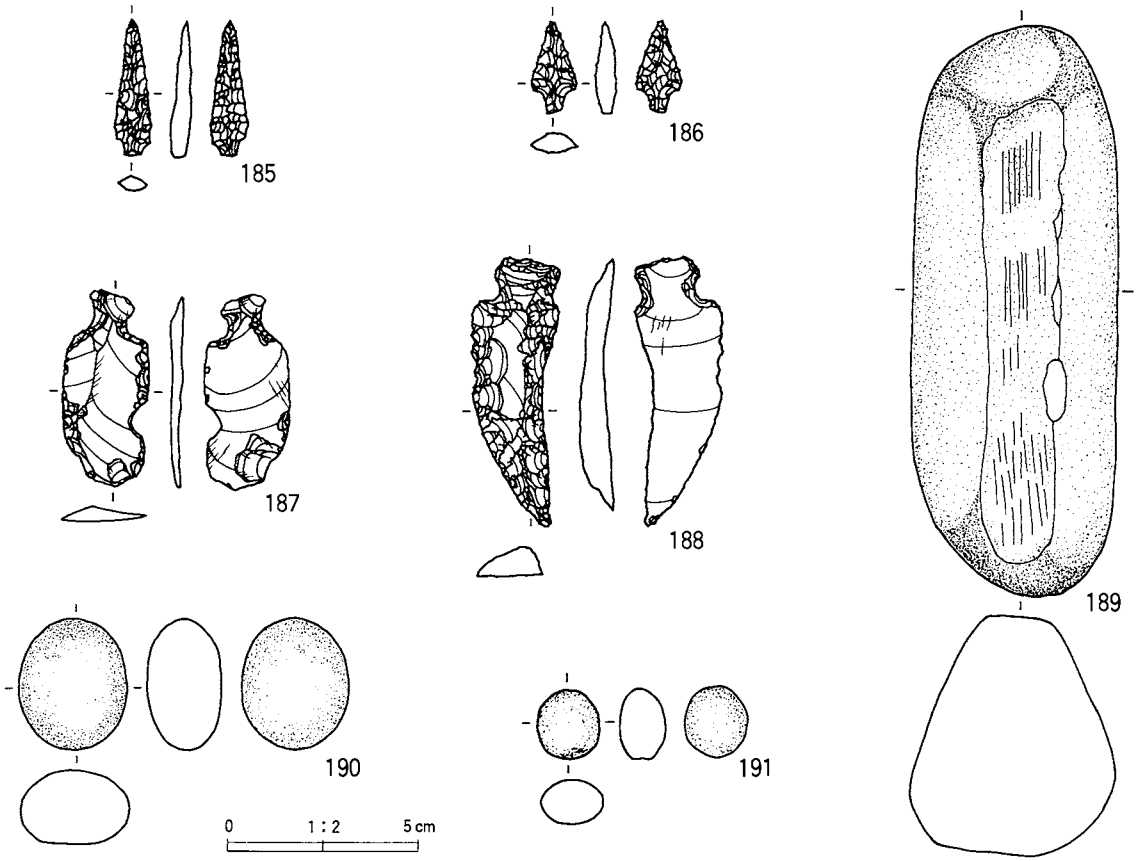
本遺跡から出土した石器は13点である。その中で、いわゆる定型石器と呼ばれるもの、使用痕跡が認められるものを実測掲載した。実測掲載点数は７点である。１・２は基部が有茎の石鏃である。それぞれ、基部が破損している。２については、Ⅳ層面で出土した。187・188は、ツマミが縦に位置する石匙である。187は188と比較すると剝離調整が粗い。共にⅣ層で出土している。189は磨石である。竪穴住居跡の埋土内から出土している。流れ込みによる。185～190については、縄文時代の遺物である。191についは、近代と思われる陶磁器片が出土する撹乱層から出土した碁石？と思われる。



第81図　遺構外出土遺物(1)



第82図　遺構外出土遺物(2)



第83図　遺構外出土遺物(3)

第3表　出土遺物観察表

図版番号	出土地点	種類	器種	部位	内面調整（口縁部）	内面調整（胴部）	外面調整（口縁部）	外面調整（胴部・底部）	口径	底径	器高	分類	備考
1	1号住・床面	土師器	坏	口～底	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ・一部ナデ底面ナデ	(9.0)	(4.5)	3.3	AⅠ	内面黒色処理・体部沈線・底部高台状・海綿骨針含
2	1号住・埋土	土師器	甕OR甑	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(11.5)		(4.3)	ⅢA	海綿骨針含
3	1号住・埋土中位	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(15.6)		(13.1)	AⅠb	海綿骨針含
4	1号住・埋土	土師器	甕	口～底	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ（部分的にミガキ）	18.1	8.2	29.0	AⅠb	海綿骨針含
5	1号住・埋土中位	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ・（一部ハケメ）	ヨコナデ	ケズリ	20.0		(17.5)	AⅠb	
6	1号住・埋土	土師器	甕	胴～底		ナデ		ミガキ・一部底面ナデ		9.2	(21.0)	AⅠa	球胴甕・海綿骨針含
7	2号住・カマド付近	土師器	坏	口～底	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ・回転糸切り後ナデ・体部下ナデ	(13.4)	(6.0)	4.7	AⅡa1	内面非黒色処理・外面に極痕か
8	2号住・カマド付近	土師器	坏	口～胴	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ	(13.0)		(3.7)	AⅡc	内面非黒色処理・体部二次加熱による摩滅か
9	2号住・カマド袖	土師器	坏	口	ミガキ		ロクロ				(2.8)		内面黒色処理
10	2号住・カマド付近	土師器	坏	胴～底		ミガキ		ロクロ・回転糸切り		7.0	(2.6)	AⅡc1	内面黒色処理・海綿骨針含（多）・底面墨書不鮮明
11	2号住・床面	土師器	甕	口～頸	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(22.0)		(4.3)	AⅠd1	海綿骨針含
12	2号住・カマド付近	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(17.0)		(5.8)	AⅠc2	
13	2号住・カマド付近	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(24.0)		(8.1)	AⅠd1	
14	2号住・カマド付近	土師器	甕	底部		ナデ		ナデ・底面木葉痕		8.8	(4.5)		海綿骨針含
15	2号住・埋土下位	土師器	甕	口～胴	ロクロ	カキメ	ロクロ	カキメ・ケズリ	(19.0)		(8.0)	AⅡc2	
16	2号住・カマド付近	土師器	甕	口～胴	ロクロ	ロクロ後ナデか	ロクロ	ロクロ	(23.4)		(7.0)	AⅡb1	ロクロ後ナデ調整か
17	2号住・床面	須恵器	壺	口～胴	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(10.8)		(5.7)	BⅢ	
18	2号住・埋土下位	須恵器	甕	口	ロクロ		ロクロ		(41.6)		(4.2)	BⅢ	
19	3号住・カマド燃焼部	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(22.7)		(12.1)	AⅠd1	海綿骨針含（少）
20	3号住・埋土	土師器	甕	底				底面木葉痕			(1.2)		海綿骨針含
21	4号住・埋土下位	土師器	坏	底		ロクロ		ロクロ・回転糸切り		6.0	(2.2)	AⅢ1	内面非黒色処理・底面墨書「王」・海綿骨針含(多)
22	4号住・埋土中位	土師器	坏	口～底	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ・回転糸切り	(12.2)	(5.9)	5.4	AⅢ1	内面非黒色処理・海綿骨針含
23	4号住・埋土下位	土師器	坏	口・胴	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(12.6)		(4.8)	AⅢ	内面非黒色処理
24	4号住・埋土上位	土師器	坏	口～胴	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ	(15.2)		(4.4)	AⅡc	内面黒色処理・金雲母含
25	4号住・埋土上位	土師器	坏	口～底	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ・体部下半ナデ	(14.1)	(6.6)	5.0	AⅡa1	内面黒色処理・金雲母含
26	4号住・埋土上位	土師器	坏	底		ミガキ		ロクロ・回転糸切り		(6.0)	(1.8)	AⅡc1	内面黒色処理・底面墨書不鮮明
27	4号住・埋土中位～下位	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	(14.4)		(10.0)	AⅠc2	
28	4号住・埋土中位	土師器	甕	底		ナデ		ケズリ・ナデ		(9.8)	(4.1)		
29	4号住・埋土上位	土師器	甕	口～胴	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ後ナデ	(16.5)		(4.2)	AⅡa2	
30	4号住・埋土上位	須恵器	坏	口～胴	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(14.4)		(3.5)	B	
31	5号住・床面	土師器	坏	底		ミガキ		ロクロ・回転糸切り		5.5	(1.9)	AⅡc2	内面非黒色処理・海綿骨針含（少）
32	5号住・床面	須恵器	蓋ORⅢ	口～底	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ・回転糸切り	基部(10.8)	糸切り径(4.2)	2.6	BⅢ	
33	5号住・カマド燃焼部	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ケズリ	(22.3)		(10.9)	AⅠc1	海綿骨針含
34	5号住・床面	土師器	甕	胴～底		ハケメ・ナデ		ケズリ・底面木葉痕					海綿骨針含
35	5号住・PP6埋土	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ・ケズリ	(20.8)		(7.1)	AⅠc1	海綿骨針含
36	5号住・カマド左袖	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(23.0)		(7.3)	AⅠc1	頸部に段を持つ・海綿骨針含
37	5号住・煙出構成	土師器	甕	頸～胴		ナデ		ナデ			(30.6)		内・外面すす付着
38	5号住・煙出部底面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(21.4)		(17.8)	AⅠd1	海綿骨針含・外面すす付着
39	6号住・埋土上位	土師器	坏	口～胴	ロクロ		ロクロ		(14.4)		(3.8)	AⅢ	内面非黒色処理・海綿骨針含
40	6号住・カマド・焼失焼土上面	土師器	甕	口～胴下	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(12.6)		(13.3)	AⅠc2	外面二次加熱による剥落・内面すす付着
41	6号住・カマド・埋土下位	土師器	甕	口～胴下	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(22.2)		(23.8)	AⅠd1	
42	6号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ハケメ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(15.4)		(12.0)	AⅠe2	海綿骨針含・外面すす付着
43	6号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(18.3)		(10.8)	AⅠe2	海綿骨針含
44	6号住・カマド煙道部埋土	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(20.8)		(12.7)	AⅠd1	海綿骨針含
45	6号住・1号支脚	土師器	甕	胴～底		ナデ		ケズリ・底面ケズリ		10.2	(6.3)	AⅡc	
46	6号住・2号支脚	土師器	甕	胴～底		ナデ		ケズリ・底面砂底		9.2	(8.5)		海綿骨針含
47	6号住・カマド	土師器	甕	口～胴下	ロクロ	ロクロ後ナデ	ロクロ	ロクロ後ケズリ	(18.1)		(20.3)	AⅡa2	
48	6号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ロクロ	ロクロ後ナデ	ロクロ	ロクロ後ナデ	(22.0)		(12.7)	AⅡa1	海綿骨針含

図版番号	出土地点	種類	器種	部位	内面調整（口縁部）	内面調整（胴部）	外面調整（口縁部）	外面調整（胴部・底部）	口径	底径	器高	分類	備考
49	6号住・カマド	土師器	甕	口	ロクロ	ナデ	ロクロ	ロクロ	(19.6)		(3.6)	AⅡa2	海綿骨針含（少）
50	6号住・カマド・床面	土師器	甕	口～胴	ロクロ	ロクロ後ナデ	ロクロ	ロクロ後ケズリ	(20.2)		(17.0)	AⅡa1	金雲母少量含・海綿骨針含（少）
51	6号住・焼土上面・床面	土師器	甕	胴		ロクロ後ナデ		ロクロ後ケズリ			(24.2)	AⅡa	
52	6号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(23.8)		(7.0)	AⅡb1	
53	6号住・カマド	須恵器	甕	胴		当て具痕		タタキ			(7.2)	BⅢ	傾き不明
54	6号住埋土下位	鉄器	釘					長さ（14.2）	幅0.7cm	厚さ0.6cm	重さ15.43g		
55	8号住・カマド	土師器	坏	口～底	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ・回転糸切り・体部下ナデ	(14.8)	5.2	5.2	AⅡa2	内面黒色処理・内面二次加熱・底面すす付着
56	8号住・埋土上位～中位	土師器	坏	底		ミガキ		ロクロ・回転糸切り		6.0	(1.6)	AⅡc1	内面黒色処理・海綿骨針含（多）
57	8号住・埋土上位・中位	土師器	高台付坏	高台		ロクロ		ロクロ		(7.8)	(1.4)		
58	8号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ナデ	(17.2)		(12.5)	AⅠd2	内面すす付着・海綿骨針含
59	8号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ・ナデ	(21.2)		(10.7)	AⅠc1	海綿骨針含（少）
60	8号住・埋土中位	土師器	甕	口～胴	ロクロ	ロクロ後ナデ	ロクロ	ロクロ後ケズリ	(23.4)		(15.2)	AⅡa1	
61	8号住・床面・カマド・埋土中位	土師器	甕	口～胴下	ロクロ	ロクロ後ナデ	ロクロ	ロクロ後ケズリ	(21.6)		(20.7)	AⅡa1	
62	8号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ロクロ	ロクロ後ナデ	ロクロ	ロクロ後ケズリ	(23.0)		(16.8)	AⅡa1	海綿骨針含（少）
63	8号住・カマド・埋土上位～中位	土師器	甕	胴～底		ロクロ		ロクロ・回転糸切り		7.8	(12.4)	AⅡb	外面二次加熱による剝落
64	8号住・カマド・埋土中位	土師器	甕	口～胴	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ後ケズリ	(23.4)		(19.0)	AⅡa1	
65	9号住・床面	土師器	坏	口～胴	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ	(13.2)		(3.0)	AⅡc	内面黒色処理・海綿骨針含（少）
66	9号住・床面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(15.8)		(7.4)	AⅠf2	海綿骨針含
67	9号住・貼り床内	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(20.0)		(6.5)	AⅠe1	海綿骨針含
68	9号住・貼り床内	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(16.6)		(9.3)	AⅠe2	海綿骨針含
69	9号住・煙道埋土内	土師器	甕	胴～底		ナデ		ケズリ		(9.8)	(9.3)		
70	9号住・貼り床内	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(18.4)		(12.8)	AⅠd2	海綿骨針含
71	9号住・埋土上～中位	土師器	甕	底		ミガキ		ナデ・底面ケズリ		(11.2)	(3.5)		内面黒色処理
72	11号住・支脚	土師器	坏	口～底	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ・回転糸切り	(14.0)	5.4	5.5	AⅡc2	内面黒色処理・内外面二次加熱による摩滅が著しい
73	11号住・カマド	土師器	坏	口～底	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ・体部下ナデ	15.4	6.2	6.0	AⅡa1	内面黒色処理・内底面に二次加熱・海綿骨針含
74	11号住・カマド	土師器	坏	口～底	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ	13.9	5.0	5.2	AⅡc2	内面黒色処理・底部付近二次加熱？摩滅が著しい
75	11号住・カマド	土師器	坏	口～胴	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ・体部下ナデ	(14.2)		(4.2)	AⅡa	内面黒色処理・海綿骨針含
76	11号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(18.6)		(8.1)	AⅠd2	すす付着
77	11号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ナデ	(17.0)		(12.6)	AⅠd2	海綿骨針含
78	11号住・焼土上面	土師器	甕	底		ナデ		ハケメ・底面砂底		10.0	(3.6)		
79	11号住・焼土上面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(17.8)		(7.2)	AⅠd2	内外面すす付着
80	11号住・焼土上面	土師器	甕	口～胴	ロクロ	ロクロ後ナデ	ロクロ	ロクロ後ケズリ	(18.8)		(10.8)	AⅡa2	
81	11号住・焼土上面	須恵器	甕OR壺	底		ロクロ		ロクロ後タタキ		(10.8)	(5.2)	BⅢ	長頸壺？・高台
82	11号住・焼土上面	須恵器	甕OR壺	底		ロクロ		ロクロ後ケズリ		(11.0)	(5.7)	BⅢ	
83	11号住・焼土上面	須恵器	甕	胴		当て具痕		タタキ			(6.9)	BⅢ	傾き不明
84	11号住・焼土上面	石製品	紡錘車										
85	12号住・埋土下位	土師器	坏	口～胴	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ	(13.8)		(3.2)	AⅡc	内面黒色処理
86	12号住・埋土上位	土師器	坏	口	ロクロ		ロクロ		(18.6)		(1.9)	AⅢ	非内面黒色処理
87	12号住・埋土下位	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ハケメ・ナデ	ヨコナデ	ケズリ・ナデ	(11.8)		(14.9)	AⅠd2	
88	12号住・煙道埋土内	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ハケメ・ナデ	ヨコナデ	ナデ	(18.6)		(12.8)	AⅠc2	
89	12号住・床面	土師器	甕	底		ナデ		ケズリ・底面木葉痕		(11.2)	(3.3)		海綿骨針含
90	12号住・埋土中位	土師器	甕	底		ナデ		ケズリ・底面木葉痕		(13.2)	(4.9)		
91	12号住・埋土上位	土師器	甕？	底		ナデ		ナデ		(8.0)	(1.4)		海綿骨針含（少）
92	12号住・燃焼部	須恵器	長頸瓶？	口	ロクロ		ロクロ		(14.0)		(5.2)	BⅢ	外面自然釉
93	13号住・床直	土師器	甕	口～胴下	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(19.3)		(19.5)	AⅠa	球胴甕・海綿骨針含
94	13号住・焼土下位	鉄器	ヤリカンナ					長さ（12.9）	幅1.8cm	厚さ0.4cm	重さ15.18g		
95	14号住・焼失焼土上面・床面	土師器	坏	胴～底		ミガキ		ロクロ・回転糸切り・体部下ナデ		(5.6)	(2.8)	AⅡc2	内面黒色処理・二次加熱・AⅡa2か
96	14号住・焼失焼土上面	土師器	坏	口～胴	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ	(12.6)		(3.1)	AⅡc	内面黒色処理
97	14号住・埋土下位	土師器	坏	口～胴	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ・回転糸切り・体部ナデ	(14.2)		(3.7)	AⅡa	内面黒色処理

図版番号	出土地点	種類	器種	部位	内面調整（口縁部）	内面調整（胴部）	外面調整（口縁部）	外面調整（胴部・底部）	口径	底径	器高	分類	備考
98	14号住・埋土下位	土師器	坏	口～胴	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ	(13.1)		(4.1)	AⅡa	内外面黒色処理
99	14号住・埋土下位	土師器	坏	底		ミガキ		ロクロ・回転糸切り・体部下ナデ		(5.2)	(1.8)	AⅡa2	内面黒色処理
100	14号住・焼失焼土上面	土師器	坏	口～底	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ回転糸切り	13.5	5.2	5.1	AⅢ1	非内面黒色処理
101	14号住・カマド内	土師器	鍋	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(23.6)		(9.5)	AⅢ	外面すす付着
102	14号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(16.4)		(5.5)	AⅠd2	
103	14号住・埋土上位	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(20.4)		(14.9)	AⅠd1	
104	14号住・1号土坑焼土上面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(16.6)		(5.4)	AⅠd2	
105	14号住・埋土下位・焼失焼土上面	土師器	甕	口～底	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ・ナデ・底面砂底	24.3	(11.2)	33.9	AⅠd1	胎土摩滅著しい
106	14号住・床面・焼失焼土上面・埋土下位	土師器	甕	口～底	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ・ケズリ・底面木葉痕	19.6	(12.2)	31.0	AⅠd1	海綿骨針含（少）
107	14号住・焼失焼土上面	土師器	甕	胴～底		ナデ		ナデ・底面ナデ		6.0	(8.7)		海綿骨針含・調整・胎土から8世紀代
108	14号住・焼失焼土上面	土師器	甕	底		ナデ		ケズリ・底面砂底		(11.6)	(1.7)		
109	14号住・焼失焼土上面	土師器	甕	口～胴	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(13.5)		(7.05)	AⅡb2	海綿骨針含（少）
110	14号住・埋七下位	須恵器	甕	胴		ロクロ		ロクロ			(8.0)	BⅢ	外面自然釉
111	14号住・床面	鉄器	不明					長さ（18.1）cm	幅1.1cm	厚さ0.4cm	重さ20.05g		
112	15号住・埋土	土師器	甕	底		ナデ		ナデ		(10.2)	(2.6)		
113	16号住・埋土上位	土師器	甕	口～底	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ハケメ・ケズリ・底面木葉痕	(16.4)	(8.8)	(19.3)	AⅠb	
114	17号住・煙道部内	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(21.7)		(9.7)	AⅠd1	
115	18号住・床面	土師器	坏	底		ミガキ		ロクロ・回転糸切り・体部下ナデ		5.0	(1.7)	AⅡa1	内面黒色処理・海綿骨針
116	18号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(18.2)		(12.7)	AⅠd2	
117	18号住・カマド内・床面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(17.8)		(16.3)	AⅠd2	
118	18号住・床面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(17.0)		(19.2)	AⅠd2	外面すす付着
119	18号住・床面	土師器	甕	口～頸	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ		(20.0)		(4.5)	AⅠc1	
120	18号住・支脚	土師器	甕	胴～底		ナデ		ケズリ（ナタケズリ？）・底面砂底		8.0	(9.2)		海綿骨針含
121	18号住・カマド袖部芯材	土師器	甕	胴～底		ナデ		ナデ		11.4	(17.3)		海綿骨針含・外面すす付着
122	18号住・床面・カマド内	土師器	甕	口～胴下	ロクロ	ロクロ後ナデ	ロクロ	ロクロ後ケズリ	(24.6)		(24.1)	AⅡa1	
123	19号住・カマド内	土師器	坏	口～底	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ・体部下ナデ・底面ナデ	(15.2)	6.0	5.1	AⅡb1	内面黒色処理・海綿骨針
124	19号住・床面	土師器	坏	口～底	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ・回転糸切り・体部下ナデ	(14.2)	(5.6)	4.5	AⅡa2	内面黒色処理・海綿骨針
125	19号住・埋土上位～中位	土師器	坏	胴～底		ミガキ		ロクロ・回転糸切り・体部下ケズリ		6.6	(3.4)	AⅡa1	内面黒色処理・海綿骨針
126	19号住・埋土上位	土師器	坏	口～胴下	ミガキ	ミガキ	ロクロ	ロクロ・体部ナデ	(14.2)		(4.8)	AⅡa	内面黒色処理・海綿骨針・二次加熱
127	19号住・カマド	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(15.4)		(13.0)	AⅠd2	外面すす付着
128	19号住・床面	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(18.2)		(11.2)	AⅠd2	
129	19号住・煙道埋土	土師器	甕	底		ナデ		ケズリ・底面ケズリ		10.8	(4.6)		
130	19号住・床面・カマド内	土師器	甕	口～底	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ・底面砂底	22.6	(12.4)	32.3	AⅠd1	すす付着
131	19号住・カマド袖部芯材	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(19.6)		(16.7)	AⅠd1	
132	19号住・床面	土師器	小型土器	口～底	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ底面砂底	(12.0)	8.4	8.1		
133	19号住・埋土上位～中位	土師器	小型土器	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(9.6)		(9.3)		海綿骨針含（少）
134	19号住・床面	土師器	甕	胴～底		ナデ		ケズリ		9.6	(9.2)		海綿骨針含（少）
135	19号住・埋土上位～中位	土師器	甕	口	ナデ		ナデ				(4.7)		棒状の工具で外面調整・海綿骨針含
136	19号住・床面・カマド内	土師器	甕	口～胴	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ後ケズリ	(24.0)		(16.0)	AⅡa1	
137	21号住・埋土	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ナデ	(17.2)		(11.2)	AⅠd2	
138	1号畠作耕地復旧痕跡検出面	土師器	坏	底				ロクロ・回転糸切り		(5.0)	(0.8)	AⅡc2	内面非黒色処理か
139	5号畠作耕地復旧痕跡検出面	土師器	甕	底		ロクロ		ロクロ・回転糸切り		(7.0)	(1.9)		海綿骨針含
140	3号土坑埋土	土師器	甕	底		ロクロ後ナデ		ロクロ後ナデ・回転糸切り		(8.2)	(2.2)	AⅡa	海綿骨針含
141	5号土坑埋土	土師器	甕	口～胴	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ケズリ	(17.4)		(7.1)	AⅠd2	海綿骨針含
142	5号土坑埋土	須恵器	甕	肩		ロクロ		ロクロ			(6.9)	BⅢ	
143	6号土坑焼土面	須恵器	甕	胴		ロクロ後ナデ		ロクロ後ケズリ			(5.2)	BⅢ	
144	10号土坑埋土上位	土師器	甕	口～底	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ・底面木葉痕	16.5	7.3	11.7	AⅠe2	すす付着
145	10号土坑埋土上位	土師器	甕	底		ナデ		ナデ・底面木葉痕		(12.4)	(3.5)		海綿骨針含（少）
146	ⅡE2c・To－a面	縄文	深鉢	口		ナデ	貝殻文・口唇貝殻文					1	

図版番号	出土地点	種類	器種	部位	内面調整（口縁部）	内面調整（胴部）	外面調整（口縁部）	外面調整（胴部・底部）	口径	底径	器高	分類	備考
147	ⅡＦ1ｄ・Ⅰ層	縄文	深鉢	胴		ナデ		沈線・貝殻文・刺突				1	
148	14号住・埋土下位	縄文	深鉢	胴		ナデ		貝殻文				1	
149	ⅡＣ2ｅ・Ⅶ層	縄文	深鉢	胴下				貝殻腹縁文				1	底部尖底
150	ⅡＢ4ｄ・Ⅳ層	縄文	深鉢	口～胴	ＲＬ縄文		ＲＬ縄文					2	表裏縄文・繊維含（少）外面すす付着
151	ＩＢ5Ｃ・中掘	縄文	深鉢	口	ナデ		LR縄文・沈線					2	
152	ＩＢ5ｃ・中掘	縄文	深鉢	口	ナデ		ＬＲ縄文					2	繊維含（多）
153	ＩＢ5ｃ・中掘	縄文	深鉢	胴		ナデ		ＲＬＲ縄文				2	繊維含（多）
154	1号住・埋土	縄文	深鉢	胴		ナデ		ＬＲ縄文				2	胎土繊維含（多）
155	ＩＢ5ｄ・Ⅶ層	縄文	深鉢	底				底面ＲＬ縄文原体圧痕ＯＲ回転		(13.6)	(0.7)	2	繊維含（多）
156	ⅡＢ1ｃ・中掘	縄文	深鉢	胴		ナデ		Ｒの網目状撚糸文				2	繊維含（少）
157	ⅡＣ3ｃ・中掘	縄文	深鉢	胴		ナデ		Ｒ・Ｌの撚糸文				2	
158	ＩＦ3ｃ・Ⅲ層	縄文	深鉢	胴		ナデ		隆帯・沈線・ＬＲ縄文			(6.5)	3	
159	ＩＦ3ｃ・Ⅲ層	縄文	深鉢	胴		ナデ		ＲＬＲ縄文・隆帯				3	
160	ＩＤ・ⅡＤ区Ⅱ層上面	縄文	深鉢	口	ナデ		ＬＲ縄文・折り返し口縁部・刺突・沈線					4	
161	4号土坑・埋土	縄文	深鉢	口	ナデ		沈線					4	
162	5号住・埋土	縄文	深鉢	口	ナデ		Ｒ撚糸文					4	
163	9号住・埋土上～中	縄文	深鉢	口	ナデ		櫛・沈線・LR縄文					4	
164	不明	縄文	深鉢	口	ナデ	ナデ		沈線・ＬＲ縄文				5	
165	7号住・煙道埋土	縄文	深鉢	口	ミガキ		沈線					5	
166	12号住・埋土	縄文	深鉢	胴		ナデ		Ｒ撚糸文				6	
167	15号住・床	縄文	深鉢	胴		ナデ		Ｒ撚糸文				6	
168	2号住・埋土上位	縄文	深鉢	底		ナデ		ＲＬ縄文		4.0	(2.1)	6	
169	ⅡＣ3ａ・Ⅱ層上面	続縄文	深鉢	頸		ナデ		刺突・縄文				7	後北Ｃ２－Ｄ式
170	ⅡＥ2ｂ・Ｔｏ－ａ面	土師器	坏	底		ミガキ		ロクロ・回転糸切り		5.4	(2.6)	ＡⅡｃ2	内面黒色処理・海綿骨針
171	ＩＧ4ｃ・Ｔｏ－ａ面	土師器	高台付坏	底		ミガキ		ミガキ・高台跡あり		(7.0)	(0.8)	ＡⅡｃ	内外面黒色処理
172	ＩＤ・ⅡＤ区Ⅱ層上面	土師器	甕	口	ミガキ				(12.6)		(2.5)	ＡＩｃ2	内外面黒色処理・外面調整不鮮明
173	ＯＩ4ｄ・Ｔｏ－ａ上面	土師器	甕	底		ナデ		ケズリ・ムシロ痕		(10.0)	(4.0)		海綿骨針含（少）
174	ＯＩ5ｂ・Ｔｏ－ａ上面	土師器	甕	口	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	(22.0)		(10.2)	ＡＩｄ1	
175	ＩＩＩｃ・Ｔｏ－ａ上面	土師器	甕	口～胴	ロクロ	ロクロ後ナデ	ロクロ	ロクロ	(23.8)		(8.3)	ＡⅡａ1	海綿骨針含（少）
176	11号住・カマド・9号住埋土上位～中位・ＯＩ14ｃ	土師器	甕	口～底	ロクロ	ロクロ後ナデ	ロクロ	ロクロ・ケズリ	(12.7)	(9.0)	12.4	ＡⅡａ2	
177	ＩＢ4ｄ・Ｔｏ－ａ面	土師器	甕	底		ロクロ		ロクロ・回転糸切り・体部下ナデ		(9.2)	(3.7)	ＡⅡａ	
178	ＩＨ1ｄ・Ｔｏ－ａ上面	須恵器	甕	口	ロクロ		ロクロ		(22.0)		(3.6)	ＢⅢ	
179	ＯＩ14ｄ・Ｔｏ－ａ上面	須恵器	甕	口	ロクロ		ロクロ				(7.3)	ＢⅢ	
180	ⅡＥ2ｃ・Ｔｏ－ａ面	須恵器	長頸瓶？	口	ロクロ		ロクロ		(13.2)		(5.2)	ＢⅢ	内面自然釉
181	ⅡＢ4ａ・Ⅱ層	須恵器	長頸瓶？	底		ロクロ後ナデ		ロクロ後ケズリ・高台		(8.6)	(3.9)	ＢⅢ	
182	ＯＩＨ5ｅ・Ｔｏ－ａ面	須恵器	甕	胴		当て具痕		タタキ			(8.2)	ＢⅢ	傾き自信なし
183	ＩＢ5ｅ・撹乱層	古銭	文久永寶								重さ4.07ｇ		
184	ＩＢ5ｅ・撹乱層	古銭	五銭								重さ3.24ｇ		
185	ＩＨ2ｂ・Ｔｏ－ａ上面	石器	石鏃				長さ3.6cm	幅1.0cm	厚さ0.6cm	重さ1.29ｇ	石質安山岩		産地奥羽山脈
186	10号住トレンチ内・Ⅳ層	石器	石鏃				長さ2.45cm	幅1.2cm	厚さ0.5cm	重さ1.18ｇ	石質安山岩		産地奥羽山脈
187	ＩＢ5ｃ・Ⅲ層	石器	石匙				長さ5.15cm	幅2.3cm	厚さ0.4cm	重さ4.5ｇ	石質頁岩		産地北上山地
188	ＩＢ4ｂ・Ⅳ層	石器	石匙				長さ7.1cm	幅2.3cm	厚さ0.9cm	重さ12.1ｇ	石質頁岩		産地北上山地
189	4号住・埋土中位	石器	磨石				長さ15.1cm	幅5.5cm	厚さ6.3cm	重さ767.8ｇ	石質安山岩		産地奥羽山脈
190	2号住・ベルトⅡ層	石器	磨石				長さ3.5cm	幅2.9cm	厚さ2.0cm	重さ27.8ｇ	石質安山岩		産地北上山地
191	ＩＢ5ｅ・撹乱層	石器	碁石？				長さ1.9cm	幅1.7cm	厚さ1.2cm	重さ5.4ｇ	石質頁岩		産地北上山地

Ⅵ　ま　と　め

まとめ（1）遺構

前述した遺構・遺物を中心に項目毎に若干の説明を加えまとめとしたい。

（1）竪穴住居跡

（検出状況と近接する住居）

今回の調査で、21棟の竪穴住居跡が検出された。これらの竪穴住居跡は、Ｔｏ－ａの集中するプランとして、また、土器が集中して出土する場所として確認した。21棟中重複はなかった。重複による時期差を判別する資料は得られなかったが、住居跡間の距離が極端に近いもの（７号と８号・８号と21号・18号と19号・17号と20号）がある。このような位置によっての住居の新旧関係を判別することは困難であった。住居の時期の判別は、Ｔｏ－ａの堆積状況と出土遺物等で、まとめ（３）で総合的に考えてみたい。

（平面形・規模）

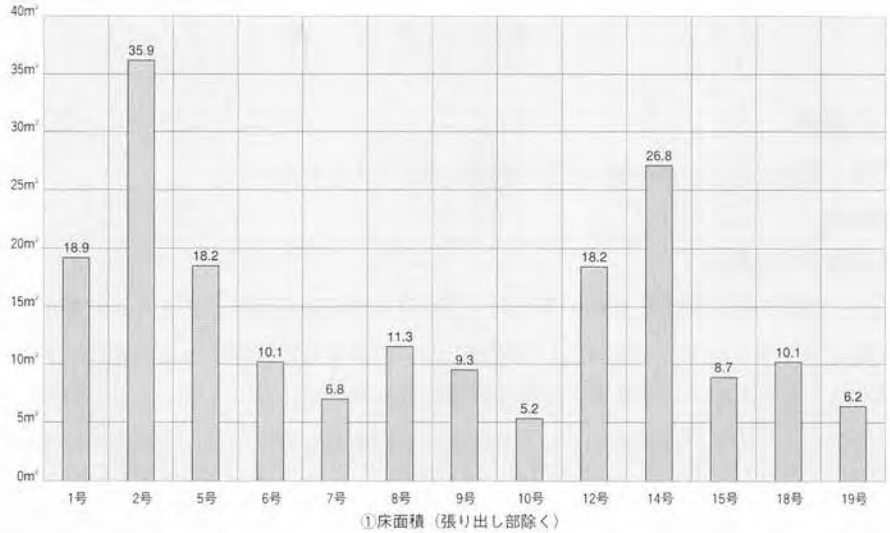
検出された21棟の、平面形については、隅丸方形・方形を基調とする。床面積については、計測可能な13棟について第84図に示した（計測はプラニメーターを使用）。張り出し部を持つ住居については、張り出し部面を含めた面積と張り出し部のみの面積を計測した。なお、１・８・14・15号については、平面形を完全に把握することが出来なかったため推定による。第４表において（　　）で表記した。

前記した表・第84図のグラフを見ると、床面積の広さは、２・14・１・５・12・８・６号の順である。張り出し部を含めた面積として示したものを見ると、14・２・８・５・12・18号の順になる。各住居跡における収容人員数は、面積の広いものが、人員が多いと推測できるが、この推測を想定するのに、

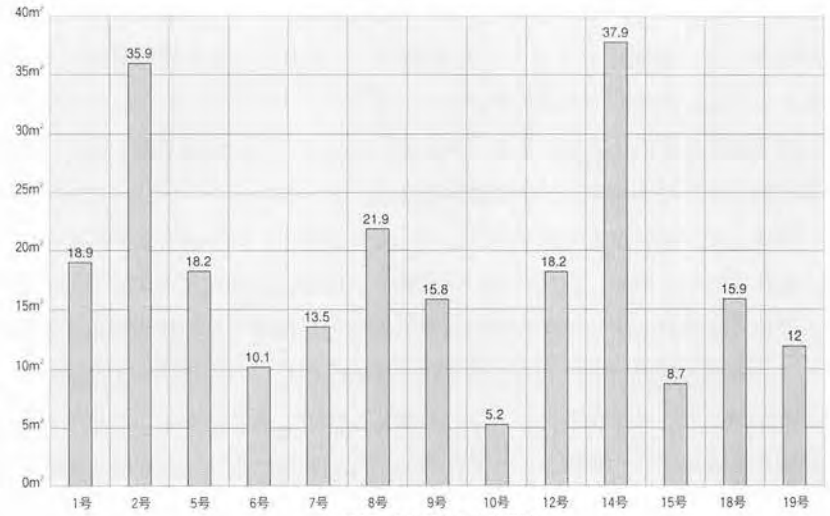
①の床における面積と②の張り出し部を含めた面積のどちらを採用して、推測するかが問題となる。このことは、張り出し部の性格の位置づけによる。張り出し部の性格については張り出し部の項で述べることとして、ここでは、第84図のグラフを参考に①・②の傾向について、若干述べることとする。①については、２・14号が他の住居と比較して、大規模と言えるだろう。他の住居については、18～19㎡の範囲に入るものが、１・５・12号の３つ、10～12㎡の範囲に入るものが６・８・18号の３つ、８～9.9㎡の範囲に入るものが９・15号２つ、６～７㎡の範囲に入るものが７・19号の２つ、６㎡未満のものが10号の１つである。８～20㎡の範囲に入る住居が大半を占める。②については、張り出し部を持つ住居のみに着目すると、14号を除いては、12～22㎡の範囲に入る。なお、各グラフの平均は、①約13.8㎡②約19.5㎡（張り出し部を持つ住居のみ）③約7.7㎡である。

（壁）

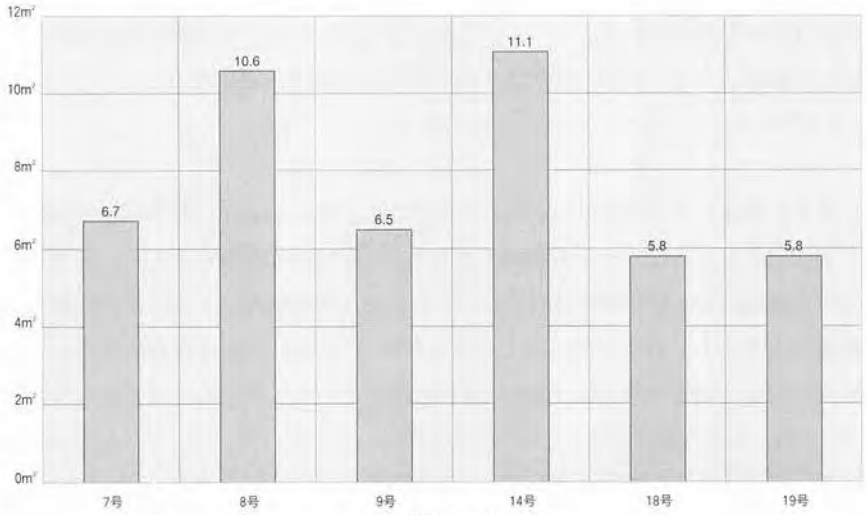
壁の傾きはいずれも外傾しながら立ち上がる。あくまでも主観になるが、外傾・やや外傾・直立ぎみに外傾するものの３つに分けられるだろう。第85図のグラフで、各住居の壁高を示した。壁高は、壁開始部・張り出し部を合わせた検出面から床面の壁高の値を示した。検出時の状況にもよるが、21棟中50㎝以上のものが、12棟と半数以上を占める。壁高が50㎝以上のものの中で、100㎝を越えるものは、９・12号の２棟、70～80㎝の範囲のものが13・20号２棟、60～69㎝の範囲のものが、７・11・14・19号の４棟、50～59㎝の範囲のものが、６・８・16・18の４棟である。50㎝以下のものは、２・４・５・10・15・17号の６棟である。１・３・21号については、畠作耕地の復旧痕跡の撹乱・耕地造成による削平・撹乱を受けていることから、１・３・21号を除いた18棟の平均値は、57㎝である。全体的に見ると、ばらつきがある。規模・気候・地形・地層・上屋構造・時代等が反映すると思われる。９・12号は壁高の規模に対して、床面積はさほど大規模で



①床面積（張り出し部除く）

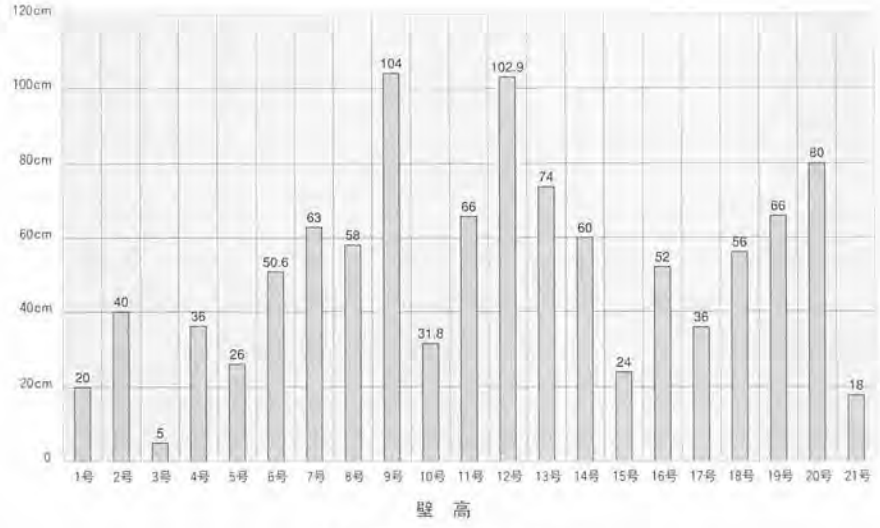


②張り出し部を含めた面積



③張り出し部のみの面積

第84図　床面積・張り出し部面積グラフ



第85図　壁高グラフ

はない。70～80㎝の範囲に入る13・20号は、出土遺物・埋土の状況から、他の住居と比較して、古い時代に属すると思われる。時代が反映しているものであろうか。壁高が浅く、規模も小さいもの（10・15号）もある。生活環境が大きく関係するものと思われる（まとめ(3)参照）。

本遺跡の住居の床面は概ね、Ⅴ層（Ｔｏ－ｃｕ再堆積層）を床とする住居とⅧ層（Ｔｏ－Ｈ）を床とする住居の二つに大別される。Ⅴ層は移植ベラを突き刺しても、崩れない程固い層である。Ⅷ層は粘土質状のローム層である。Ⅴ層は、Ⅷ層と違い、本遺跡全面に存在せず、部分的に存在することから、住居構築時の場所によって、壁高のばらつきが見られるのではないだろうか。床面とⅤ層・Ⅷ層の関係は、床面の項で更に詳しく述べたいと思う。

（床面）

住居の床面は、１～４・６・７・９・11～14号がⅧ層（Ｔｏ－Ｈ）、５・16～19号がⅤ層（Ｔｏ－ｃｕ再堆積層）、８・20号がⅦ層、10・15号がⅢ層、21号がⅣ層をそれぞれ床としている。Ⅴ層・Ⅷ層を床としている住居が多い。Ⅴ層の特徴は、非常に固い層をなしている。また、Ⅷ層は粘土質状のローム層である。この二つの層を床とする住居が多いのは、当地域の地質に関係するのではないだろうか。Ⅰ層～Ⅳ層・Ⅵ層～Ⅶ層は質感は粘性がなく、しまりも無いのに対して、Ⅴ層は固く、Ⅷ層は粘土質状で、固く粘りがあることから、固い床を構築する目的で、前記した層を床とする住居が多いのではないだろうか。Ⅷ層を床とする住居の特徴はⅧ層上面を床としている。

すなわち、住居を構築する際、Ⅷ層の存在を認識しながら、半地下式に下に掘り進めていく作業中にⅧ層に到達した段階で、掘り方をとどめているのではないだろうか。また、Ⅷ層を床とする住居の貼り床は７・９号を除いては、カマド周辺が主で、他の面では部分的に貼り床が施される。このことは、前記した作業中にⅧ層に到達した段階で、床面の凹凸を調整するために窪んだ部分のみに貼り床を施す、簡便的な構築方法が行われたのではないだろうか。Ⅴ層を床にする住居（５・16～19号）は、掘り方を進めていく作業中にⅤ層が部分的に存在することから、Ⅴ層を認識しないで、Ⅴ層に到達した時点で、床として適切な層と認識して、掘り方をとどめたのか、もしくは、掘り進む作業を継続することが困難と考えたのか、二つの可能性が考えられる。なお、本遺跡でⅤ層が存在する場所でⅤ層より下の層で、床面を構築しているのは20号のみで

ある。20号は、他の住居群と比較して、時間的に先行すると判断している。前述した床面と特徴が異なる住居としては、９号が上げられる。９号は２号カマド廃棄後、Ｔｏ－Ｈ上面から約20～30㎝掘り下げて、全面に貼り床を施している。貼り床内には、Ｔｏ－ａ粒・小ブロックが認められることから、Ｔｏ－ａ降下以降に住居を構築したものと推測される。なお、床面にＴｏ－ａが散在して見られる住居は６・８・９・16・18・19号住居である。Ｔｏ－ａ降下後に住居構築したものと思われる。

（柱穴）

個々の住居は床面・張り出し部・住居外と柱穴の位置にバリエーションがある。床面に規則的に配置されるものとして、１・２・５・７号が上げられる。その中で柱穴痕跡が認められる住居は、２・７号である。２号は４本の柱穴が規則的に配置され、４本それぞれに柱穴痕跡が認められる。また、床面積は他の住居群の中でも大規模であり柱穴の開口部径も40㎝を越える。床面積は他の住居の中で１番大きく、柱穴の開口部径が２番目に大きいことから、柱穴の規模と床面積が他の住居より大きいことが分かる。７号は４本の柱穴中１本に柱穴痕跡が認められた。Ｖ字状の柱穴痕跡から、柱構築時に柱を埋め込む先端部を尖らせて、加工を施したことを窺わせる。

張り出し部面に柱穴が確認される住居は、６・８・16・18・19号である。柱穴の配置には、規則性が認められず、柱穴痕跡は認められなかった。張り出し部の性格が上屋構造と関係があることを示唆するものと思われる。住居外に確認されるものは、６～８・12・14・16・18・19号である。その中で配置に規則性が認められる住居が12号のみである。住居を囲うように配置されている。柱穴と住居の位置は、出入り口付近で近接し、東側・南側の住居壁から外柱穴までの距離は１～２ｍである。床面内だけでなく、住居と外柱穴の間にも生活空間があったことを窺わせる。また、壁高が１ｍと他の住居の中で、一番高いことも住居外に柱穴を持つことと関係があるのだろう。

他の住居外に柱穴を持つ住居は、前記したとおり、規則性を持たない。埋土に明確な相違が認められなかったことと、住居に近接していることから、住居と伴うものとして考えた。

（カマド）

本遺跡で、カマドを確認できる住居は15棟である。この15棟のカマドのうち残存状況が良好でない、３・６・７・８号を除いた11形態は次の三つに大別できる。①縦長の角礫・円礫を用いて、床面に埋め込み袖部とし、礫の側部を粘土状の土で覆っている。袖部上部は礫が露出し、礫が露出している部分に天井石を設置したと推測されるもの（２・５・10・11・17号）。②角礫・土器を芯材として、褐色の粘土質状土で全体を覆って、袖部を構築するもの（１・12・14・18・19号）。③褐色の粘土質状の土のみで袖部を構築するもの（９号）。これらのカマドの、天井部は原位置をとどめているものはなく、崩落している。

①の形態は、掘り込み式の煙道を持つものに見られる。カマド本体の下・周辺は床面を掘り下げ、貼り床を施しているものが、ほとんどである。

なお、竪穴住居跡の項で前述しているが、支脚を設置している住居が、６・11・18号の３棟である。坏を使用した住居が11号、甕の底部を使用したものが、６・18号である。６・18号の支脚は砂底をもつ。また、６号については、下面の支脚（１号支脚）の上に土を覆って、上面の支脚（２号支脚）を設置する構築方法を行っている。

カマドの位置は、壁のほぼ中央部のもの（１・10・12・17号）、どちらか一方に寄るもの（２・３・５～９・12・14・19号）・隅に寄るもの（11・18号）がある。カマドの主軸方向は、15棟中東向きが８棟、西向が２棟（うち１棟は１号の奈良時代）、南向きが１棟、北向きが４棟である。平安時代の住居については、主軸

方向が東向きが半数以上を占める。南・西向きは、それぞれ1棟のみの検出である。主に東向きを主軸方向にする傾向があると言える。第86図に各住居の主軸方向を示した。時期における傾向については、まとめ（3）でさらに述べたいと思う。

（煙道部）

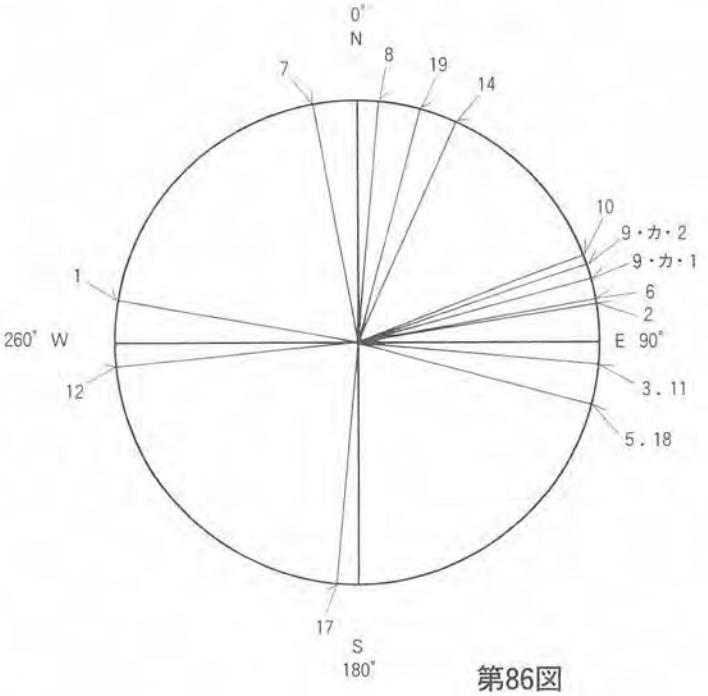
本遺跡で、煙道部が確認できる住居は13棟である。形態は掘り込み式と刳り貫き式である。

掘り込み式（Ⅰ群）については13棟中6棟（2・5・10・11・17号）検出された。側壁に平たい角礫を用いている。側壁部に2枚の礫を重ねて、礫と礫の隙間に粘土を用いて、補強している。また、煙出し部付近に天井石が残存しているものもある（なお、5号については、煙出し付近底面で、甕の口縁部・胴部が確認された。煙を煙出部に導く機能をしていたものと推測される）。

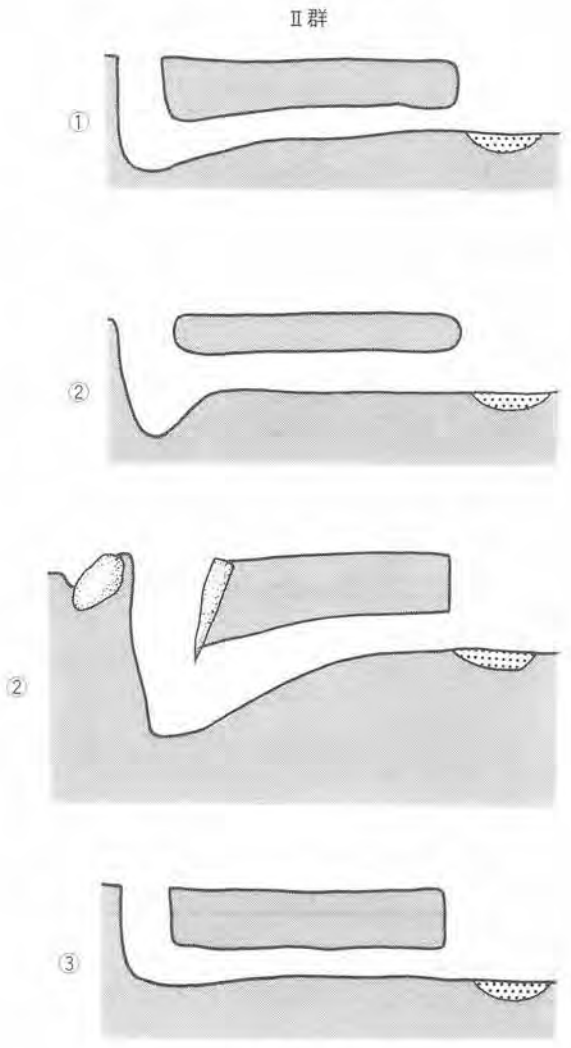
前述した住居の煙道部は、本遺跡では次の①～③に分類される。

①煙出部先端部にストッパー状に平たい角礫を立てて構築されるもの（2・5・11号）。

前記した礫を用いないもの（10・17・18号）のうち、②底面が平坦なもの。③底面が上がり勾配のものの3形態に分類される。①の形態の煙道部は、構築する際地山面を煙道開始部から煙出し部にかけて、平坦もしくは、緩やかな上がり勾配で、地山を掘り込んで構築する。②・③は地山面に沿

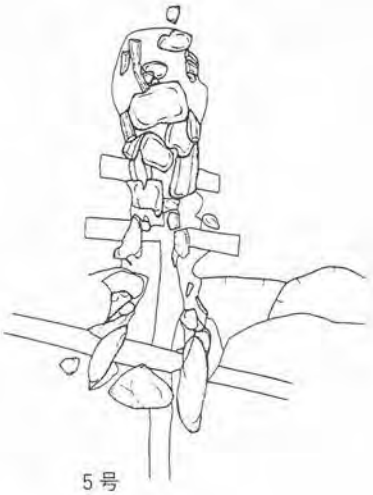


第86図

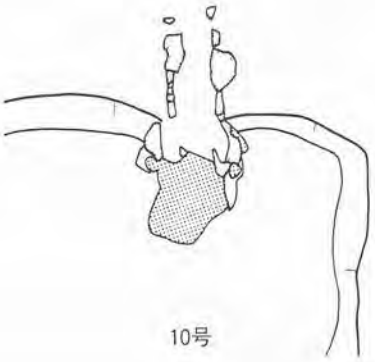


第87図

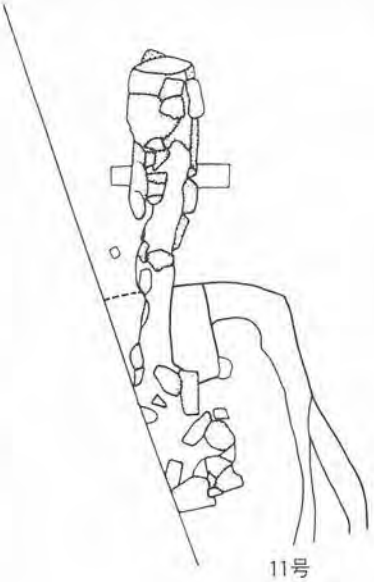
2号



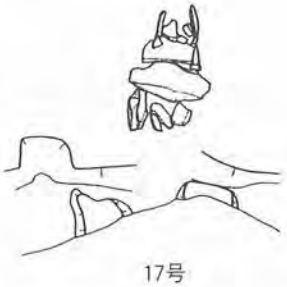
5号



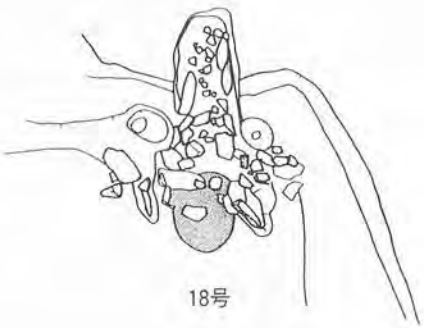
10号



11号

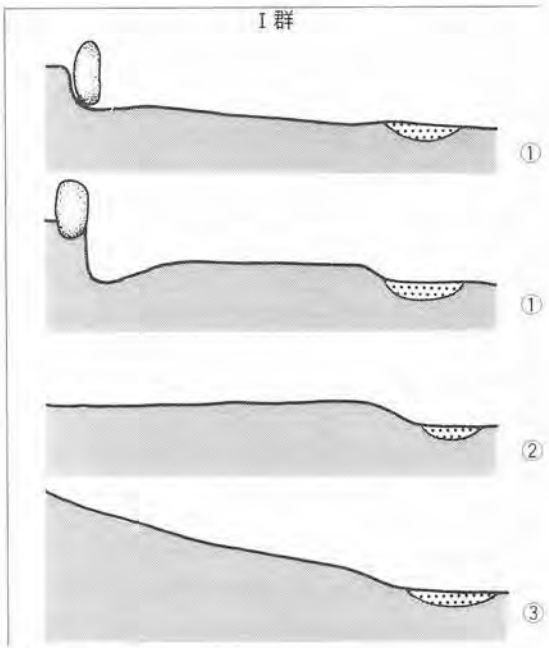


17号

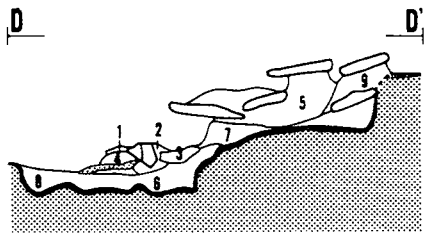


18号

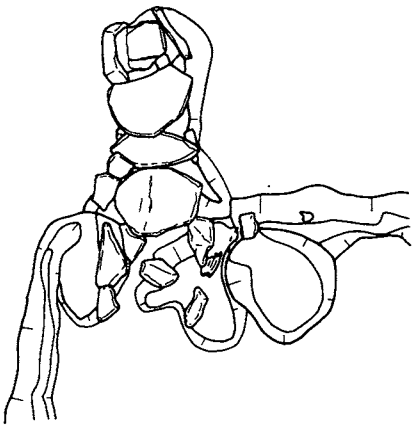
S＝1：50

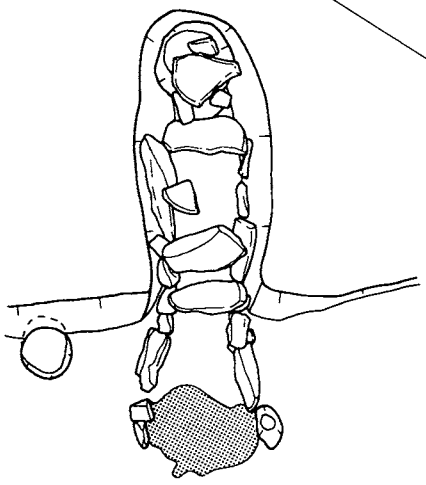


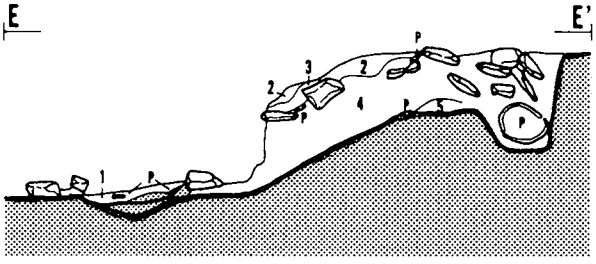
第88図　大向Ⅱ煙道部集成図



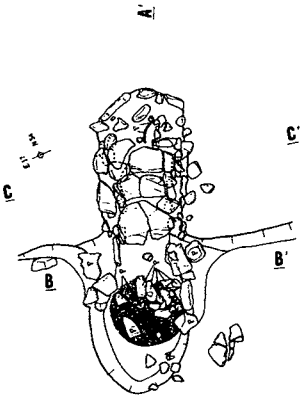
飛鳥台地ＩＤⅢ－１住居

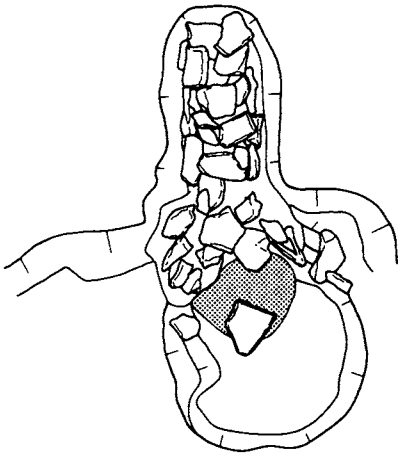


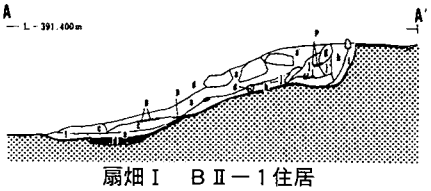




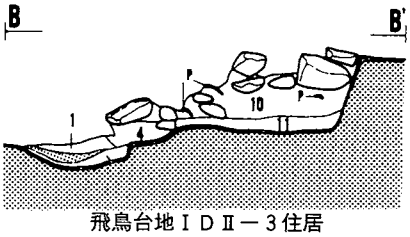
飛鳥台地ＩＧⅢ－５住居







扇畑Ｉ　ＢⅡ－１住居



飛鳥台地ＩＤⅡ－３住居

第89図　本遺跡周辺のＩ群と類似する煙道部集成図

うように、また地山を凹凸に掘り、底面を貼り床状に土を貼って構築した様相がある。この中で②煙道部が平坦なもの（17号）。③上がり勾配のもの（10・18号）に分けられる。

これらの形態と類似する煙道部が検出された遺跡として、本遺跡周辺では、飛鳥台地Ⅰ（浄法寺町）・DⅢ－1・GⅢ－5・DⅡ－3住居、扇畑Ⅰ（安代町）BⅡ－1・DⅠ－1・DⅢ－1・EⅡ－3住居・保土沢遺跡（安代町）5号住居が上げられる。

刳り貫き式（Ⅱ群）については、7棟（1・6・7・9・12・14・19号）検出された。煙道部底面について着目すると、次の3形態に分類される。①緩やかな下り勾配のもの（6・9・12号）。②は①よりややきつい下り勾配で、煙出孔底面付近で更にきつい下り勾配になり、煙出孔ピットを持つもの（1・7・14号）。③ほぼ平坦なもの（19号）の概ね3つの形態に分かれる。

煙出孔に着目すると、7号は煙出孔部分に数十個の加熱を受けた礫が検出された。詳細は不明であるが、煙出孔に付属する機能と思われる。また、14号は側壁に平たい角礫を筒状に構築する方法を行っている。煙出孔側壁部を礫で補強したものを想定させるが、詳細については判断できなかった。

（埋土）

21棟検出されたうち、1・3・21号を除く住居で、To－aの堆積が確認された。ここでは、To－aの堆積状況に着目して、各竪穴住居跡の分類を試みたい。To－aの竪穴住居跡における堆積状況については、当地域（二戸市）周辺の発掘調査報告書及び論考によって、To－a降下前後の堆積状況による時間差が報告されている。これらの報告・論考を参考にし、竪穴住居跡のTo－aの堆積状況で時期差を見いだせればと考えた。

「東北地方北部の遺跡と火山灰の検討」『考古風土記』第8号（高橋與・鈴木・小林1983）において、模式パターン図を用いて、次の様に述べている。「実際の竪穴住居跡の覆土中火山灰の堆積状況は、大きく分けて二つの場合がある。ひとつは竪穴住居跡内に層状に堆積する例、もうひとつは竪穴住居跡内に粒状・ブロック状に混入する例である。この二つの現象の違いは住居廃絶後の経年変化の程度差、住居構築時期の差によって、説明が可能である。前者は廃絶後上屋が腐朽し無くなった状態で火山灰が降下堆積した例、後者は廃絶後上屋が未だ不完全ながら、残存しているか、若しくは遺構が上屋を完全に備えて使用過程にあったか…」としている。前者は、To－a降下以前に構築された、主に奈良時代の竪穴住居跡に見られる。平安時代としては飛鳥台地Ⅰ（浄法寺町）・中曽根Ⅱ（二戸市1978）が上げられる。後者は降下以降に構築された住居に見られる。後者の住居が検出された主な遺跡としては、駒焼場・府金橋（二戸市）・江刺家（九戸村）・扇畑Ⅰ・上の山Ⅶ（安代町）・桂平（浄法寺町）等があげられる。

前記した後者の遺跡群については、10世紀～11世紀としているものが大半で、中には9世紀後半の住居も見られるようだ。また、100棟近い平安時代の住居を確認した飛鳥台地Ⅰ遺跡（浄法寺町）の住居は、層状の堆積・ブロック状の堆積の両方が見られる。報告者の三浦謙一は、層状の堆積について「降下時のプライマリィなものとみるのか、それとも再堆積とみるのかでは、その位置づけがちがってくる。（中略）ただ仮に全部が再堆積として後述するブロック状に含まれる例よりは時間的に先行することは確実であろう」としている。これらのことから、To－aの堆積状況で遺構の新旧関係を把握するのに、おおまかな見方として、To－aレンズ（層状）状堆積＝古、粒・ブロック状堆積＝新という考えが成り立つと思われる。

しかし、奈良時代集落の中曽根Ⅱ遺跡報告者の関豊は、竪穴住居跡の深さの違い・地形・植生の関係、縄文時代の竪穴住居跡・陥し穴にもTo－aの堆積が確認されることから、「はたして竪穴相互の新旧決定のメルクマークとなり得るかどうか疑問である。」としている。To－aレンズ（層状）状堆積＝古、粒・ブロッ

ク状堆積＝新という考えはおおまかな見方として成り立つが、Ｔｏ－ａレンズ（層状）状堆積についても、個々の住居で様相が違う、ブロック状堆積についても同様である。また、本遺跡の地形は、道路をはさんだ西側は安比川で形成される河岸段丘の平坦面が広がる地形に対して、道路をはさんだ東側は丘陵の裾野の緩斜面に立地することから、Ｔｏ－ａの流入状況も異なるだろう。

このことから、Ｔｏ－ａレンズ（層状）状堆積＝古、粒・ブロック状堆積＝新という考えをふまえつつ、住居個々の堆積状況を更に検討し、Ｔｏ－ａ降下のいつ頃、住居が構築または廃絶されたのか考え、出土遺物と検討して、Ｔｏ－ａの堆積状況による新旧関係について考えたい。次に本遺跡住居のＴｏ－ａの堆積状況について述べる。

①埋土上部にレンズ状に層をなして堆積するもの。②検出面から床面もしくは床面直上までレンズ状に層をなして堆積するもの。③埋土上部に粒・ブロック状に堆積するもの。④検出面から床面まで、ブロック状に堆積するものの４つに大別できる。この４つに大別したＴｏ－ａの堆積状況であるが、①・②については、降下による一次堆積か、また、雨水等による２次堆積かによって細分が可能になる。また、③・④についてであるが、周辺の黒色土と混じってブロック状に流れ込んで堆積したものか、人為的な堆積なのかによって、細分が可能になる。①に該当する住居は、７・14号である。②に該当するものは、10・12号である。③については竪穴住居跡の埋土上部で畠作耕地の復旧行為が行われた結果のもの（４号）、前記した行為と関係ないもの（２・11・13・20号）に細分が可能である。④については、自然堆積が認められるもの（９・18・19号）、人為的な堆積状況を呈しているが、判然としないもの（６・15・16号）に細分される。以上４つの大別を各項で二つに分けて、８つの分類が可能になる。①と②の関係は①は住居廃絶後、約80％埋没した後Ｔｏ－ａが層状に堆積した。②は住居が廃絶直後もしくは使用中に堆積したものと思われる（12・10号）。すなわち、①と②のＴｏ－ａの堆積に時間差があり、①が②より時間的に先行することになる。③と④の関係は、③は住居廃絶後約80～90％埋没した後、Ｔｏ－ａ粒・ブロック・Ｔｏ－ａと黒色土の混合土が堆積したもの（13・20号）Ａ。住居廃絶後、50～60％埋没した時点で、上面で畠作耕地ができ、その後の災害で復旧行為が行われたもの（４号）Ｂ。と前記した復旧行為に関係なく、Ｔｏ－ａと黒色土の混合土が上部に堆積したもの（11号）Ｂ。④は住居周辺の火山灰ブロックと黒色土が混在して自然堆積するもの（９・18・19号）Ａと、自然堆積が認められず、人為的な堆積が想定されるが判然としないもの（６・８・15・16・17号）Ｂに分かれる。以上述べたことを新旧関係で示すと次ようになる。

古　①→②→③Ａ→③Ｂ→④　新の順になるだろう。これを住居にあてはめると、①７・14号②12号・10号・③Ａ13・20号・③Ｂ４・11号④の順である。②と④について述べたい。

②については、紀要ＸＸ（能登・中村・菊池2001）で10・12号住の堆積プロセスから、畠作耕地の復旧時期について言及した。そこで、12号のＴｏ－ａ堆積状況をⅠ～Ⅴに分けた（第90図）、発掘調査終了後12号の柱状に保存した断面を町田・新井両氏（火山灰アトラス著者）に実見していただき、ご教授を受けた。その結果Ⅰは降下による堆積を示し、Ⅱ～Ⅴは水成堆積による二次堆積であることが分かった。10号にはⅠは存在せず、Ⅲ～Ⅴに相当する水成堆積である。12号は廃絶後、住居がおおよそ10％埋没した後、Ⅰが降下し、その後降雨による流入によって、連続的にⅡ～Ⅴの４回の堆積が短期間のうちに形成された。それに対し10号は、Ⅱ～Ⅴ相当の水成堆積が直接床面を覆っていることから、住居使用中もしくは廃絶直後にＴｏ－ａ二次堆積物が住居内に流れ込んだと考えられる。このことから、12号が10号より時間的に先行するという結果が導きだされる。なお第90図に示したが、14号の２枚のＴｏ－ａの層状堆積は、下層は一次堆積、上層が二次堆積である。７号については、一次か二次か判然としなかった。このことから、①を含めると、14・７に

ついては、不明だが、新旧関係が古７・14号→12号→10号　新の順になる。④については、９号は廃絶後Ｔｏ－ａとＴｏ－ＮＢを少量含む黒褐色土が10～20％埋没後、Ｔｏ－ａブロックと黒色土が交じった層が、３回以上の堆積が認められる。18号は廃絶後Ｔｏ－ａを少量含む黒褐色土がおおよそ10％埋没後、Ｔｏ－ａのブロックと黒色土が混じった層が弓なりに堆積した後、Ｔｏ－ａを少量含む灰褐色土が堆積し、埋土上部では、灰褐色土に黄褐色土を含む層が堆積する。19号は廃絶後Ｔｏ－ａが少量含む黒褐色土がおおよそ10％埋没後、Ｔｏ－ａブロックと黒色土が混じって、およそ３回以上の堆積が認められる。Ｔｏ－ａの含有量は埋土上部が多い。他の６・15・16号は検出面から床面までＴｏ－ａが粒状・ブロック状に堆積する。

これらの粒・ブロック状の堆積状況から、④については、Ａ自然堆積の様相呈するもの。Ｂ自然堆積か、人為堆積か判然としないものと判別できるが、Ａ・Ｂにおける新旧関係は、Ｔｏ－ａの堆積状況のみでは判断することは出来なかった。前述した通りＴｏ－ａ降下以降の住居と判断できるが、詳細な時期については言及できない。これまで、記述したことを整理すると、古　①→②Ａ→Ｂ→③Ａ→③Ｂ→④　新　という順になる。住居で述べると、

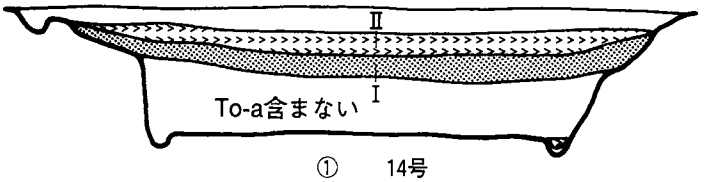
古 ①７・14号→②12号→②10号→③Ａ13・20号→③Ｂ４・11号→④６・８・９・15～17・18・19号 新

前記した新旧関係はあくまでもＴｏ－ａのみに着目したものである。土器に着目すると13号は③に該当するが、床面直上から、８世紀代の遺物が出土していることから、①より時間的に先行する。このことからＴｏ－ａの堆積状況のみで、遺構の新旧関係を把握することは危険であることが分かる。しかし、住居の床面・貼り床のＴｏ－ａの有無。Ｔｏ－ａのブロック状の堆積でも、上部に位置するものか、下部に位置するものかによって、おおまかな新旧関係が読みとれると思われる。ここでは、Ｔｏ－ａの堆積状況の分類とおおまかな時期差を示唆することにとどめて、前述した住居の時期差をふまえつつ、遺物・床面・貼り床内のＴｏ－ａの有無を加味してまとめ（３）で住居の時期について述べたい。

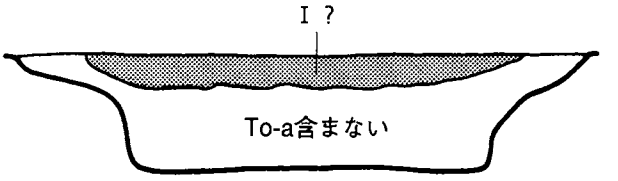
（棚状の張りだし部について）

本遺跡で四壁もしくは三壁が棚状の張り出しを持つ住居が21棟中12棟（可能性として２・６号含）、検出された。この張り出しを持つ住居は、関東地方では多数検出例がみられるようであるが、本県については二戸市の中曽根Ⅱ遺跡（二戸市教育委員会）、寺久保遺跡・上台遺跡（当センター調査）で確認されている（奈良時代）。

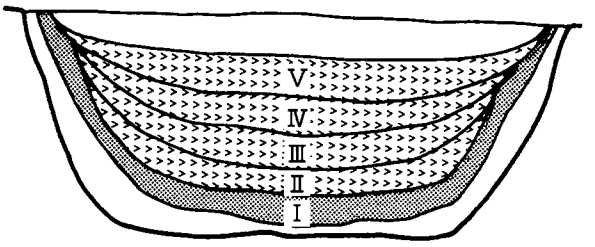
本遺跡の棚状の張り出しを持つ住居の特徴は、大半の住居に共通して底面が張り出し部壁に向かって、ゆるやかに上がり、８・16・18・19号は張り出し部面に柱穴を持つ。また、張り出し部の幅について見ると、10～30㎝が13号・18～20号、30～50㎝が７・８・14号、50～80㎝が16号である。規模から、当時の使用者がベット状の寝起きの施設を目的として、構築した可能性は薄いと考えられる。また、構築方法については、すべての住居も素掘りタイプで、化粧土・盛土による構築方法は行われていない(桐生直彦2001)。それではどのような性格が考えられるだろうか。１つの可能性として、６号・14号の土器の出土状況から推測すると、焼土塊上面に流れ込んだ状態で、土師器の坏・甕が出土している（写真図版47参照）。これらの出土した土器の中で、カマドと床面から出土したものとが接合した（６号遺物番号40・51、14号遺物番号95・106)。このことから、もともと張り出し部面に置いていた土器が、火災時に上屋（土屋根か）が倒れた際、上屋の崩落と共に土器が飛び散り床面に落ちたものと、焼土塊とともに壁際飛び散ったものとに分かれ接合したものと想定される。これらのことから、土器等を置く収納スペースと考えられる。以上述べたことは、あくまでも推測で、積極的に断定することはできない。しかし、他の張り出し部を持つ住居の報告例の中で、上台遺跡報告者の丸山は、第７号竪穴住居跡の張り出し部から、土師器２点が出土していることと、床面北隅際か



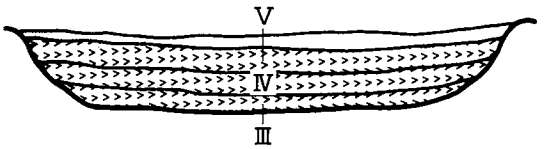
①　14号



①　7号



②A　12号

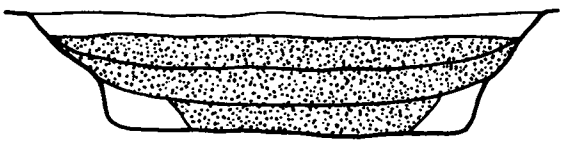


②B　10号

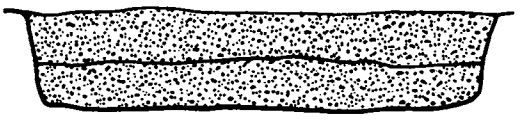
③A　13号・20号

③B　11号

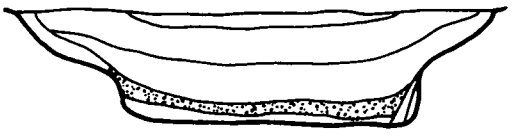
③B　2・4号



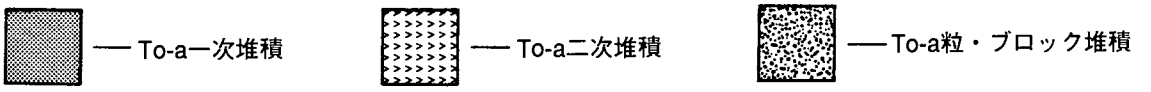
④A　9・19号



④B　6・8・16・17号



④A　18号



第90図　各住居のTo-a堆積模式図

らほぼ完形の土師器甕３点が出土した状況が、「あたかも同張り出し部から落下したような状態を呈している」と述べ棚状の施設であった可能性が高いと推測をしている。

前記した他の性格については、張り出し部面に柱穴を持つ住居（６・８・16・18～20号）が存在することから、上屋構造との関係が示唆される。類例が今のところ、岩手県内では二戸市のみで確認されることから、地域性も考えられるだろう。今後の発掘調査で、類例が増え、詳細な性格が明らかになることを期待する。

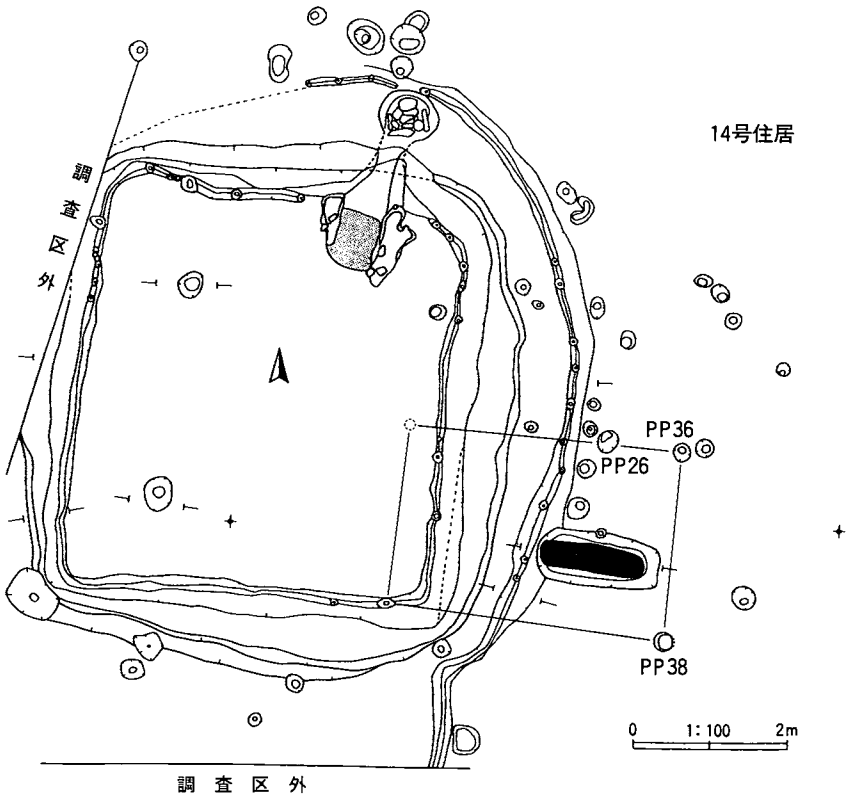
（焼土塊・炭化材が検出された住居）

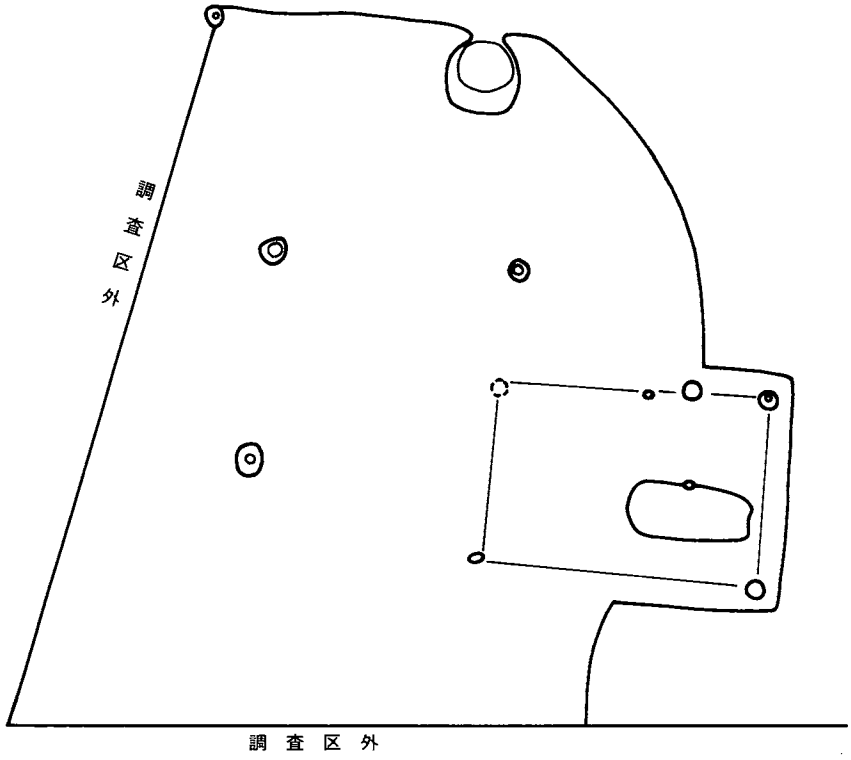
21棟検出された住居のうち、焼土塊が床面・床直で確認されたもの合わせて10棟検出された。この10棟はそれぞれ様相が異なっている。この10棟の住居の検出状況については、①焼土塊が床面より高い位置で、部分的に確認されるもの（８・９・11・16号）、②炭化材のみが床面より高い位置で確認されるもの（12号）、③焼土塊が床面より高く、床面中央部で確認されるもの（７号）、④焼土塊・炭化材が床面より高く、壁際に確認されるもの（６号）、⑤床面もしくは床面直上・張り出し部面に①～③と比較して、焼土塊の規模が大きく、焼成が良好なもの（13号）⑥床面もしくは床面直上に炭化材・焼土が確認され、炭化材上部には焼土塊が確認される住居（14・20号）の５つの特徴がある。この５つの特徴は、様々な要因によるものと思われるが、焼土・炭化材検出＝焼失住居とは言えないだろう。①～③については、７号のカマドがなく、遺物がほとんど出土せず、焼土塊が確認されるものと、８号のカマド周辺に礫と焼土塊が確認されるものは、住居廃絶との関係を示唆するものと思われる。①～③の項目については当時の人々の何かを目的とした行為が含まれる可能性があるものと、流れ込みの二つの可能性が考えられる。焼失に伴う焼土塊・炭化材という可能性は薄いという印象を持つ。

④・⑤・⑥については、④は焼土塊・炭化材が床面より高い位置にあることから、流れ込みによるものと考えられるが、炭化材の量、焼土塊の焼成から、焼失住居の可能性が考えられる。⑤は床面・張り出し部面に燃焼した部分が確認されることから、流れ込みによるものではなく、焼失によるものと思われる。⑥は焼土・炭化材が床面に確認されることから、焼失住居と見て良いだろう。上屋構造は土屋根の可能性が考えられる。

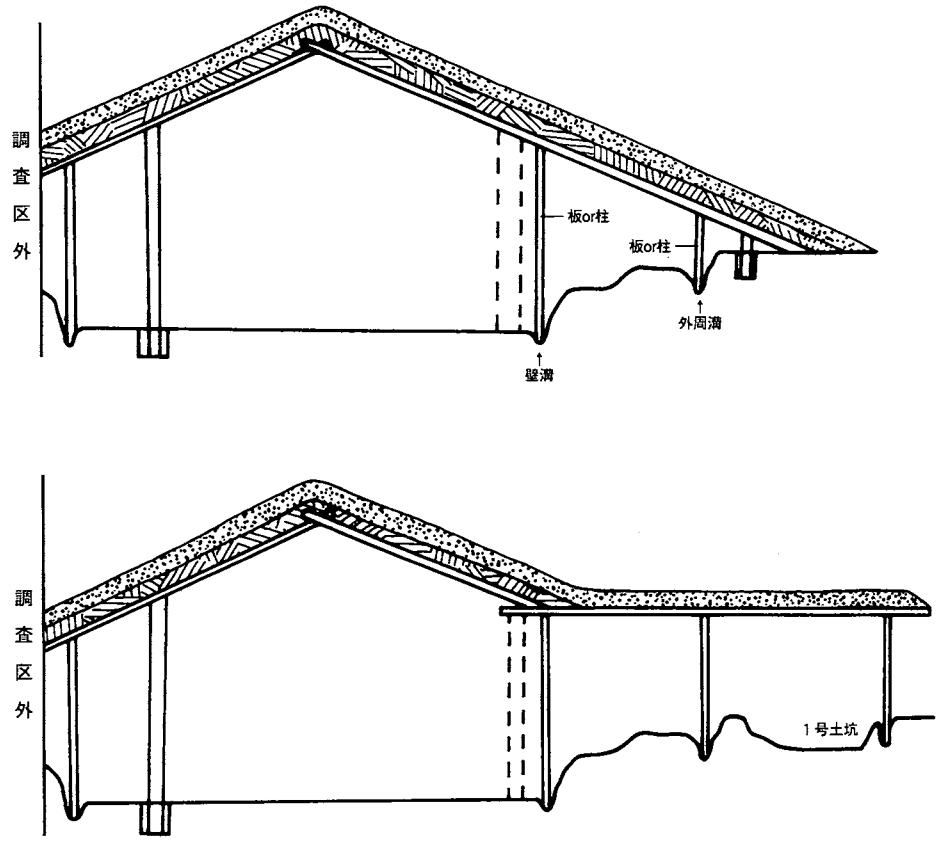
（外周溝）

本遺跡で外周溝を伴う住居が２棟検出された（９・14号）。本県の古代の住居跡で初めての事例となる。外周溝を伴う遺跡としては、青森県の津軽地方を中心とした青森市　朝日山（３）、浪岡町　野尻（１）・（２）・（３）・（４）、五所川原市　隠川（４）等が上げられる。これらの遺跡の外周溝は掘立柱建物跡とセットと考えられ、性格については、住居内の雨水流入を防ぐ、排水施設と考えられている（木村2000）。前記した遺跡群の外周溝と本遺構の外周溝を比較すると、①住居跡から１ｍ以上離れて位置するのに対して、本遺構は１ｍ未満で住居に近接する。②外周溝幅は50～150㎝に対して本遺構は10～20㎝と狭い。③土坑を伴うものの、底面に柱穴が伴わない例が多いのに対して、本遺構は柱穴が伴う。④平面形はＵ字状を呈するものが多く、カマド設置壁面が開口するのに対して、本遺構の平面形は９号についてはＪ字状、14号は煙出孔付近で途切れる。⑤深さは20～50㎝が大半であるのに対して、９号は20㎝未満、14号は20㎝前後である。以上形状・規模を５つの項目で比較した結果、津軽地方で検出される外周溝とは異なる。性格についても前記してあるが、津軽地方の外周溝は、排水施設が指摘されているが、本遺構は排水施設とは異なる。その理由は、本遺跡の地質と関係がある。本遺跡の基本土層はⅦ層（Ｔｏ－Ｈ）を除いて、粒子の細かいシルト層とＴｏ－ｃｕ・Ｔｏ－ＮＢの軽石層から構成されていることから、浸透性が高い地質である。野外調査中に豪雨の翌日竪穴住居跡のシートをはがして、床面を確認すると雨水はほとんどたまっていたことはない。ま





第91図　14号住居上屋想定図平面



1号土坑とセットの想定図

第92図　14号住居上屋想定図　断面

た、②・④・⑤の規模・形状の点から排水機能としての性格の位置づけには無理がある。

それでは、本住居に伴う外周溝と称した溝状の遺構はどのような機能をしていたのであろうか。野尻遺跡・朝日山遺跡を担当した、青森県埋蔵文化財調査センター職員の木村・中嶋両氏に、実測図・写真を実見していただきご教示を賜った。なお、執筆者は存じなかったが、木村氏は、岩手日報の本遺跡の記事に興味をもたれ調査終了後、発掘現場まで足を運び、14号の外周溝を実見していただいた。

両氏も野尻・朝日山遺跡と性格が異なることを指摘し、上屋構造と関係があるのではないかという見解を示した。

そこで、執筆者は、14号住居の1号土坑周辺の柱穴の配置から、第91図に示した出入り口部の上屋構造を想定した、また、柱穴の配置・外周溝・壁溝の位置関係から、第92図で上屋の想定を示した。焼失状況から土屋根・カヤで構成されるものと思われる。外周溝の性格については、上屋構造に伴う柱穴・及び板？を用いていた痕跡と推測する。9号については、上屋を想定させる資料に欠き、想定は試みなかった。なお、外周溝の位置は、地形的に高い部分に位置し、板材をたてて雨水の流入を防いだ可能性が示唆される。

（出入り口）

出入り口と思われる施設が、21棟中４棟（５・12・14・18）確認された。個々の住居の特徴は、５号は、東壁に位置し、柱穴間にスロープ状の傾斜が認められた。12号は、北壁に位置し、柱穴間の床面を高く盛り上げた部分に、小ピットが付属する。壁高が１ｍを越えることから、はしご等の登り降りの施設が存在したものと思われる。14号は外周溝南東側に方形の土坑が存在する。土坑内の焼土塊・炭化材の検出状況から、上屋が存在したことを窺わせる。また、土坑周辺のピットから、第91・92図の復元想定図の出入り口の施設が想定される。18号は東壁に位置し、柱穴２基が張り出し角に位置する。張り出し部に接する床面は、他の床面より非常に固く、貼り床が施されている。前述した４棟の出入り口のうち、３棟（５・14・18号）は住居の東壁に位置する傾向がある。

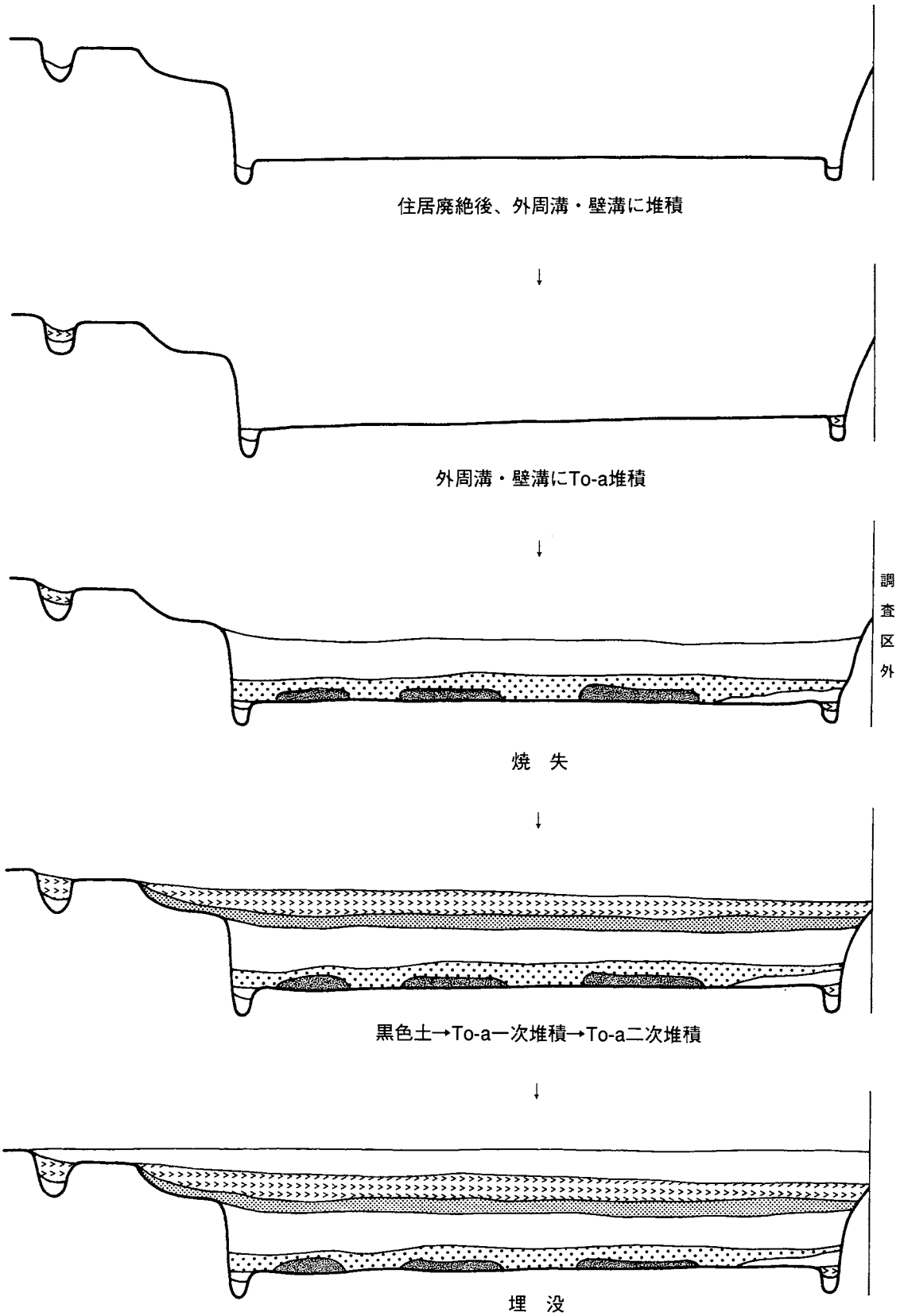
（14号竪穴住居跡のＴｏ－ａの堆積状況・焼失状況について）

14号については、遺構の項でも述べているが、精査時に焼失における焼土塊・炭化材を除去した後、床面の検出時に南西側の壁溝からＴｏ－ａの堆積が確認された。このＴｏ－ａは、水成堆積によるものである。

おそらく住居使用中もしくは廃絶直後に壁溝に黒色土が堆積し、その後Ｔｏ－ａが二次堆積したと思われる。これと同時期に外周溝にも、壁溝と同類の堆積状況が形成されたのであろう。その後、住居は焼失され、焼失後黒色土が堆積し、Ｉが降下（第90図Ｉ）したものと思われる。

このことから、壁溝・外周溝に堆積したＴｏ－ａが第90図Ｉ以前に降下していた可能性が考えられる。この考えが可能であると上屋の構造に疑問点が生じる。第91・92図で上屋構造を想定したが、この想定された状態で、焼失されたと考えれば、外周溝・壁溝にＴｏ－ａが堆積する余地はない。前述したＴｏ－ａが堆積する可能性を考える上で上屋構造をもう一度想定し直さなければいけないのかもしれないが、１つの可能性として住居使用中・もしくは住居が廃絶直後に上屋が腐って、もしくは壊れるなどして、その部分にＴｏ－ａが流入した可能性が考えられる。

これらのことから、積極的な断言は出来ないが（Ｔｏ－ａの堆積が雨水等による二次堆積によるもので、Ｉ降下以後、埋土の割れ目、炭化材の隙間から、Ｔｏ－ａが流入した可能性も否定できない）、14号竪穴住居跡のＴｏ－ａ堆積状況については、Ｔｏ－ａがＩ以前に降下し、数回のユニットがあった可能性を示唆する資料と言えるのではないだろうか。



第93図　14号住居・To-a堆積・焼失過程想定模式図

第4表　竪穴住居跡一覧表

遺構名	平面形	規模壁開始部(m)	張り出し部含む(m)	壁高(cm)	床　面	柱　穴	外柱穴	埋土	焼土・炭化材	カマド	煙道部	出入り口	土坑	時代
1号竪穴住居跡	隅丸方形	(4.9)×4.45	—	20	Ⅷ層・To-a無し	床4	—	黒褐色土	—	②・西	Ⅱ群②？	—	有	Ⅰ群
2号竪穴住居跡	隅丸方形	6.5×6.2	—	24	Ⅷ層・To-a無し	床4	—	③A	—	①・東	Ⅰ群①	—	—	Ⅳ群
3号竪穴住居跡	方形	—	—	5	Ⅷ層・To-a無し	床2	—	黒褐色土	—	—・東	—	—	—	不明
4号竪穴住居跡	隅丸方形？	—	—	36	Ⅷ層・To-a無し	—	—	③A	—	—	—	—	—	Ⅱ群
5号竪穴住居跡	方形	4.7×4.6	—	26	Ⅴ層・To-aごく少量	床5	—	To-a粒ごく少量	—	①・東	Ⅰ群①	東壁に位置	有	Ⅳ群
6号竪穴住居跡	方形	3.75×3.6	—	50.6	Ⅷ層・To-a有	床1・壁2・張1	5	④B	④	②？・東	Ⅱ群①	—	—	Ⅴ群
7号竪穴住居跡	方形	3.4×2.95	4.3×3.65	63	Ⅷ層・To-a無し	床4・張2	—	①	—	—・北	Ⅱ群②	—	—	Ⅱ群
8号竪穴住居跡	方形	3.95×3.9	4.85×(4.35)	58	Ⅶ層・To-a有	床9・壁5・張7	3	④B	①	—・北	—	—	—	Ⅴ群
9号竪穴住居跡	方形	3.6×3.5	南北軸4.5	104	Ⅷ層・To-a有	10？	3？	④A	①	③・東	Ⅱ群③か	—	—	Ⅴ群
10号竪穴住居跡	方形	2.81×2.52	—	31.8	Ⅲ層・To-a無し	—	—	②B	—	①・東	Ⅰ群③	—	—	Ⅲ群
11号竪穴住居跡	方形？	—	—	66	Ⅷ層・To-a無し	—	—	③A	①	②・東	Ⅰ群①	—	—	Ⅳ群
12号竪穴住居跡	方形	5.75×5.45	—	102.9	Ⅷ層・To-aごく少量	床10	15	②A	②	②・西	Ⅱ群①	北壁に位置	—	Ⅱ群
13号竪穴住居跡	方形？	—	—	74	Ⅷ層上面・To-a無し	—	—	③A	⑤	—	—	—	—	Ⅰ群
14号竪穴住居跡	方形	5.92×5.6	6.56×(6.45)	60	Ⅷ層・To-a無し	床3	35？	①	⑥	②・北	Ⅱ群②	東壁に位置	—	Ⅱ群
15号竪穴住居跡	歪な方形	3.9×(3.0)	—	24	Ⅲ層・To-a有	—	—	④B	—	—	—	—	—	Ⅴ群
16号竪穴住居跡	方形？	—	—	52	Ⅴ層・To-a有	床1・張3	2	④B	①	—	—	—	—	Ⅴ層
17号竪穴住居跡	方形？	—	—	36	Ⅴ層・To-a有	床3・壁1	—	④B	—	—・南	Ⅰ群②	—	—	Ⅴ群
18号竪穴住居跡	方形	3.5×3.5	4.37×4.35	56	Ⅴ層・To-a有	床1・張21	7	④A	—	②？・東	Ⅰ群③	東壁に位置	—	Ⅴ群
19号竪穴住居跡	方形	3.36×2.95	3.7×3.7	66	Ⅴ層・To-a有	壁1・張5	3	④A	—	②・北	Ⅱ群③	—	—	Ⅴ群
20号竪穴住居跡	方形？	—	—	80	Ⅶ層・To-a無し	張4	—	③A	⑥	—	—	—	—	Ⅱ群
21号竪穴住居跡	方形？	—	—	18	Ⅳ層・To-a無し	—	—	黒褐色土	—	—	—	—	—	不明

（2）住居状遺構

1棟のみの検出である。遺構の項で前記してあるが、調査前の現況は、安比川の浸食・耕作時による削平により、Ⅰ層を除去するとＴｏ－Ｈ層が露出する状態で、壁を確認するのみである。部分的に貼り床が施されており、形状は方形を呈することから、検出状況と考え合わせて小規模な竪穴住居跡の可能性も考えられる。

（3）掘立柱建物跡

3棟検出した。3棟の掘立柱建物跡の時代時期は、1号は土師器甕の小片がPP10から出土していることから、古代の可能性が考えられる。2号については、時代を決定づける資料に欠き不明である。3号は野外調査では把握できず、室内整理において把握出来たものである。周辺に検出された柱穴状ピット群と埋土・規模・形状は同類のものである。埋土からＴｏ－ａ降下以降の建物と思われる。これらの建物は、小規模な小屋的な様相を呈している。畠作耕地・竪穴住居跡・土坑等の遺構群との関係があると思われるが、資料に欠き、詳細を明らかにする事は出来なかった。

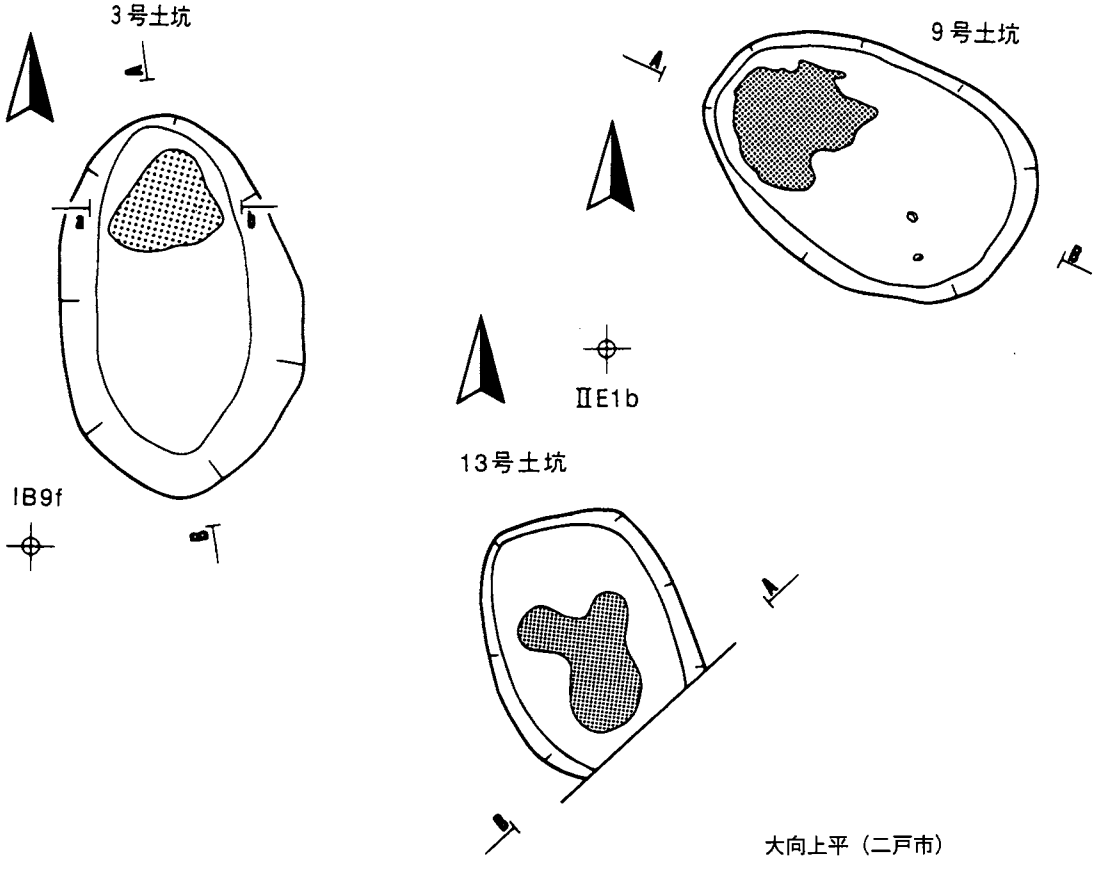
（4）土坑

11基検出された。11基の土坑の時代時期については、1号が検出状況（Ⅶ層で検出）から縄文時代。2号が検出状況（Ⅳ層で検出）から、おそらく平安時代以前。3～11号については、検出状況・埋土にＴｏ－ａを含むこと・出土遺物から平安時代に属する遺構と考えられる。遺物が出土していない土坑については、詳細な時代区分は判断できなかったが、11号は遺物番号144の印象から、10世紀後半代と考えられる。

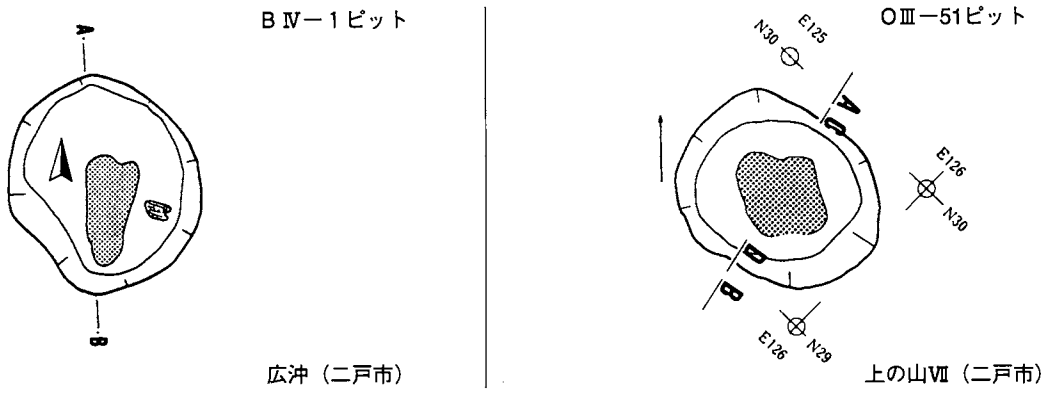
これらの土坑の中で、共通点が見られるのが、4～9号土坑の底面に焼土を伴う土坑である。これらの土坑は、検出時竪穴住居跡と同様Ｔｏ－ａのまとまりとして確認された。半切して掘り下げを進めていくと、底面にＴｏ－ａが認められることから、掘りすぎてしまったものもあった（6・7・9号）。このことから明確な形状を把握することが、出来ないものもあったが、これらの土坑で焼土を伴う以外に共通してるの点は、埋土・底面にＴｏ－ａが認められること、深さが5～15cmと浅いこと、8号を除いては焼成が良好であることが上げられる。焼成が良好なことを考えると、あるものを一定の場所で焼いていたことは明白で、そのあるものについては、判断する資料に欠き、不明である。

位置ついて見ると、4号を除くと畠作耕地・住居に近接した場所に位置する。時代時期については、埋土・底面にＴｏ－ａが認められることから、Ｔｏ－ａ降下以降の土坑と考えられる。

本遺跡周辺で、平安時代の底面に焼土を伴う点で、類似する遺構が確認されている遺跡は、大向上平（二戸市）、中曽根Ⅱ（二戸市1978）、上の山Ⅶ・広沖（二戸市）で、近年は、米沢（二戸市・平成14年報告予定）も同様の土坑が検出されている。中でも大向上平遺跡（本遺跡から北東約1㎞に位置し、本遺跡と同時代の畠作耕地の復旧痕跡・住居等の遺構が検出され、同台地上に立地する）では前記した土坑が8基検出され、住居に点在するような在り方を呈し、深さは20～50cmと本遺跡より深い。報告者の中村は「ムロなどの貯蔵用の穴」を示唆している。大向上平遺跡の土坑と本遺跡の土坑の類似点は、住居・畠作耕地に近い場所で検出されていることである。土坑の深さを考えると、中村が示唆した「貯蔵用の穴」とは、考えにくい。畠作耕地・住居に点在して、検出されることから、前記した遺構等と考え合わせて、今後の発掘調査で事例が増え、性格等が位置づけられればと思う。



第94図　本遺跡周辺の平安時代の焼土を伴う土坑集成図(1)



第94図 (2)

（5）畝間状遺構と畠作耕地の復旧痕跡

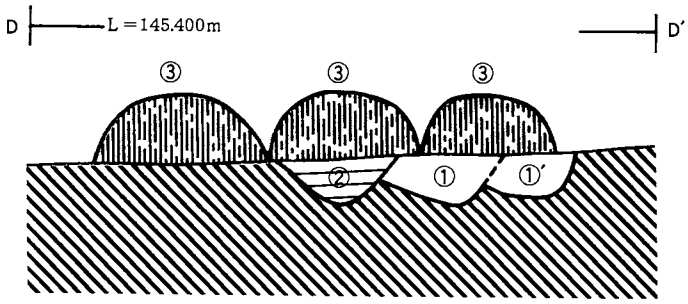
本遺跡で検出された畝間状遺構および畠作耕地の復旧痕跡は合計10カ所で、約450㎡の面積で検出された。畠作耕地の復旧痕跡について、当初は畝間状遺構と考えていたが、大向上平遺跡で検出された「畝間状遺構」と本遺跡の「畝間状遺構」を検証した結果、火山災害による畠作耕地の「復旧痕跡」と判断した（能登・中村・菊池・岩埋文紀要2000・2001)。その判断材料は、１～３号「畠作耕地の復旧痕跡」を調査した平成11年度調査で、Ｔｏ－ａの水成堆積が、本来水平な堆積状況を示すはずが、傾いて確認されるもの、水成堆積したものに黒色土粒・ブロックが混ざるもの、水成堆積したものを黒色土が切る状態のもの、本来水成堆積したものが、固結してブロックで認められるものがあり、明らかに人為的に攪乱された土壌堆積の様相を呈していた。

この人為的な火山ブロックの連続する帯の性格を示す良好な断面資料が第53図Ｄ－Ｄ′セクションから得られた。第95図をみると①・①′畠作耕地を覆った火山灰を鋤き込んで耕地を復旧した後に、②再び畠作耕地がつくられた。②がＴｏ－ａの二次堆積により、耕地が覆われ、③更に再び畠作耕地がつくられた。③の断面は、上位の畠の畝が細かく砕かれた火山灰によって灰色がかっており、カマボコ状を呈している。このことから、「畝間状遺構」と判断した火山灰のブロックの帯は①・①′・②が平面プランで確認されたことであった。この①・①′の火山灰の帯は、南北方向に軸を取る傾向がある。

４～７号畠作耕地の復旧痕跡は、１～３号と比較して、Ｔｏ－ａの量が多くない、そのため、遺構の項で前述してある通り、検出時に帯のプランを確認するが、降雨により再度検出作業を行っていく段階で、プランが不明瞭になった（５・６号)。５・６号と比較して、４・７号については、明瞭にプランが把握出来た。断面観察では、４・５・７号はＴｏ－ａが水成堆積したと思われる固結した火山灰ブロックが黒色土と入り混じった状況のもの水成堆積が傾くもの、などが観察された。６号の検出状況については、平面プランで、①黒色土のプラン②Ｔｏ－ａブロックのプラン③黒色土とＴｏ－ａの混合土プランの３タイプが確認された（60・61図)。②・③のプランは、断面の観察から、「復旧痕跡」と判断した。①のプランについては、断面観察から②・③より上位にあり、第95図で示した断面と様相が似通っていることから「畝間状遺構」と考えた。②・③の復旧後、畠作耕地がつくられたと思われる。

なお、これらとは埋土の様相が異なり、掘り方も認められる溝状の遺構が検出された。前述した遺構群が検出されていることから、畠作耕地と関係があると考え、「復旧痕跡」とは埋土・検出状況の様相が異なることから「畝間状遺構」と命名した。

「畠作耕地の復旧痕跡」については、火山災害による復旧に伴って痕跡が認められたことから、Ｔｏ－ａ降下以降の遺構であることは明白である。１・３号についても、Ｔｏ－ａの粒状の堆積からＴｏ－ａ降下以降と考えられる。これらの遺構群はほぼ同時期もしくは近接した時期の遺構と考えられるが、これらの遺構の「復旧行為」の時期、又これらの畠作耕地に従事していたと考えられる人々が居住していた住居については、まとめ（３）で述べたい。



第95図　畠作耕地の復旧痕跡断面模式図

（６）柱穴状ピット群

150基の柱穴状ピットを検出した。埋土にはＴｏ－ａが含まれており、Ｔｏ－ａ降下以降の遺構と推定される。これらの柱穴状ピットの中から、３号掘立柱建物跡を把握したが、他のピット群にも掘立柱建物跡を構成するものや、畠作耕地・竪穴住居跡・土坑と関連のある遺構と思われるが、資料に欠き詳細は不明である。

まとめ（2）遺物

本遺跡から出土した遺物は、大コンテナで約7箱である。うちほとんどが、奈良・平安時代の竪穴住居跡からの出土で、約90％以上を占める。この他に遺構内外から縄文土器・続縄文土器・石器・鉄製品・石製品・古銭が出土した。

縄文土器・石器等については、遺構外出土遺物の項で述べているので、ここでは土師器・須恵器を中心とした分類を試みた。本遺跡の土師器・須恵器の特徴・傾向が読みとれればと思う。

（1） 土器の分類

ここでは、各器種の焼成技法で酸化焔焼成（土師器）か還元焔焼成（須恵器）かにより大別し、更に各器種ごとに分類基準を設定した。

坏については、ロクロ成形・非ロクロ成形と内面黒色処理の有無・ロクロ成形後の再調整等が分類基準となっている。甕については、成形技法（ロクロ成形か非ロクロ成形）によって大別し、本遺跡から出土遺物は破片資料が多いことから、口縁部に着目し、それを分類基準にし、更に器形（球胴甕か長胴甕か）・調整技法にも着目し、以下の通りに分類した。

（坏） 遺構内外含め、36点について分類した。

A群 （土師器）

Ⅰ類 非ロクロ成形

1点のみの出土である（1）。内面は黒色処理でミガキの調整により、外面は口縁部ヨコナデ、体部中から下はケズリによる調整が施され、体部に沈線状の溝と底面に高台状のつくりが施されている。

Ⅱ類 ロクロ成形後、内面にヘラミガキまたは黒色処理が施されるもの。

a種－回転糸切り後、体部付近から下端に再調整が施されているもの

b種－回転糸切り後、体部付近から下端および底面に再調整が施されているもの

c種－回転糸切り後、再調整されていないもの

（底径が5.7cm以上のもの1、未満のもの2）

Ⅲ類 ロクロ成形後、内面にヘラミガキまたは黒色処理が施されないもので、ロクロ痕以外の調整を持たないもの （反転実測を含め底径が平均値が5.7cm（A群Ⅰ類は除いて）であったことから、以上のもの1、未満のもの2として分類した）。

B群 須恵器

（甕）遺構内外を含め、96点について分類した。

A群 土師器

Ⅰ類 ロクロ成形されていないもの

a種－球胴形

b種－口縁部・頸部に明瞭な段を有し、体部外面にハケメ・ミガキ等の丁寧な調整が施されるもの

c種－口縁部が外反するもの（「く」の字状に）、また、b種と比較すると明瞭ではないが、頸部に段を有するもの

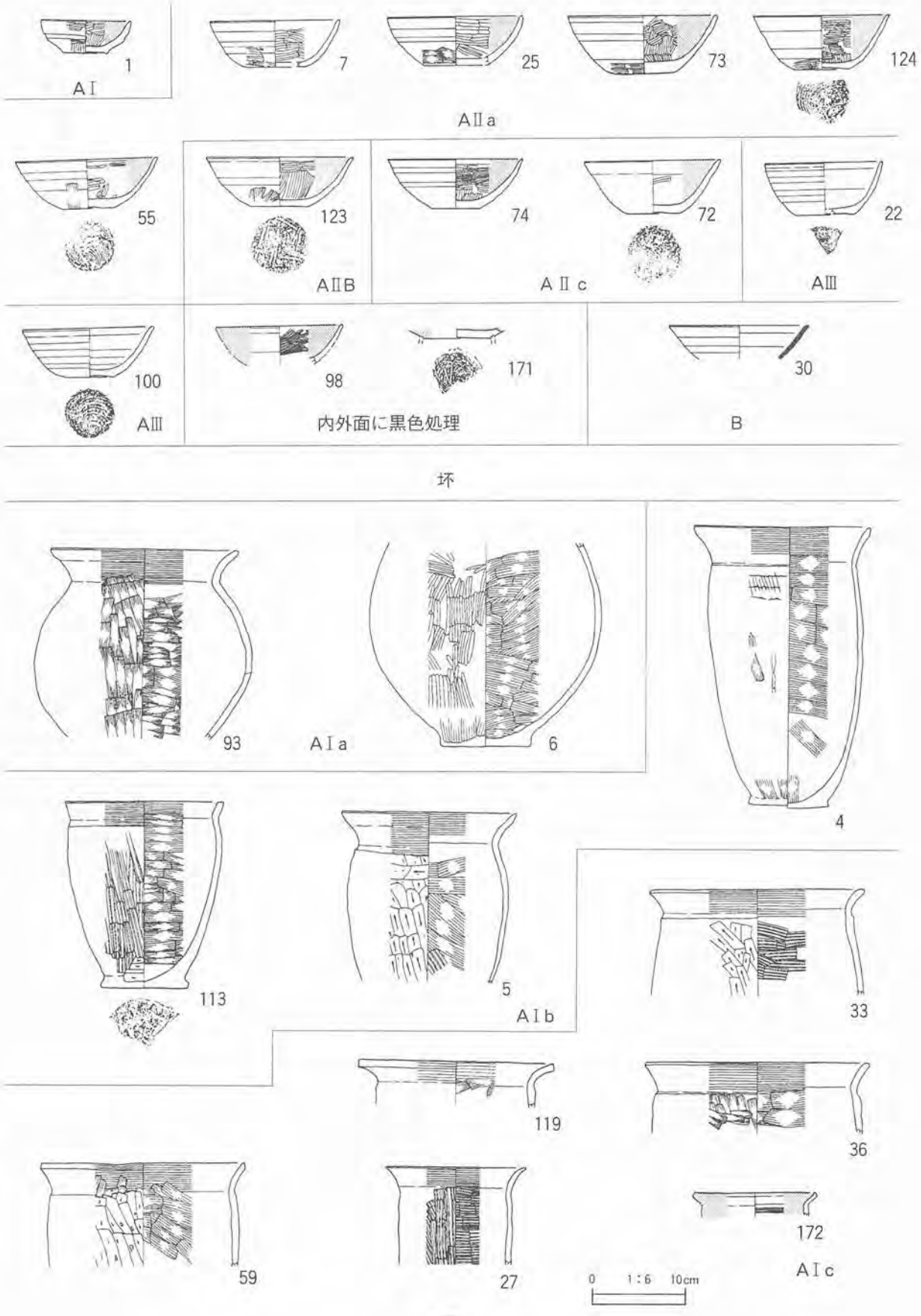
d種－口縁部が短く外反するもの

e種－口縁部が極端に短く直線的もしくはやや外反するもの

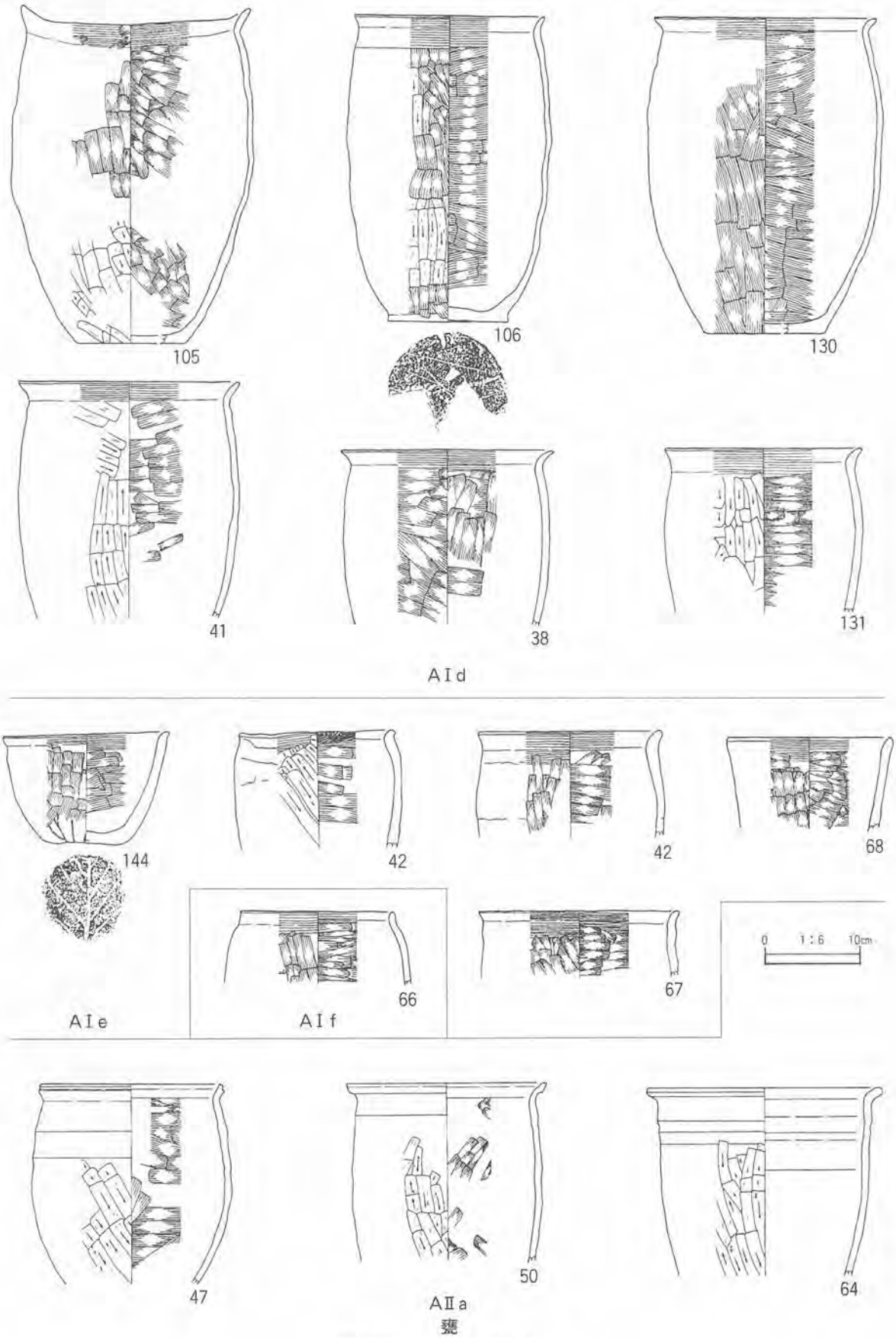
ｆ種－口縁部が内湾するもの
（反転実測を含め、口径が19.1㎝以上のもの１、未満のもの２）

Ⅱ類　ロクロ成形されているもの
ａ種－ロクロ成形後、胴部の内外面にヘラケズリ・ヘラナデ等の調整がみられるもの
ｂ種－ロクロ痕のみを有するもの
ｃ種－内外面にカキメ痕を有するもの
Ｂ群－須恵器
（口径が19.2㎝以上のもの１、未満のもの２）

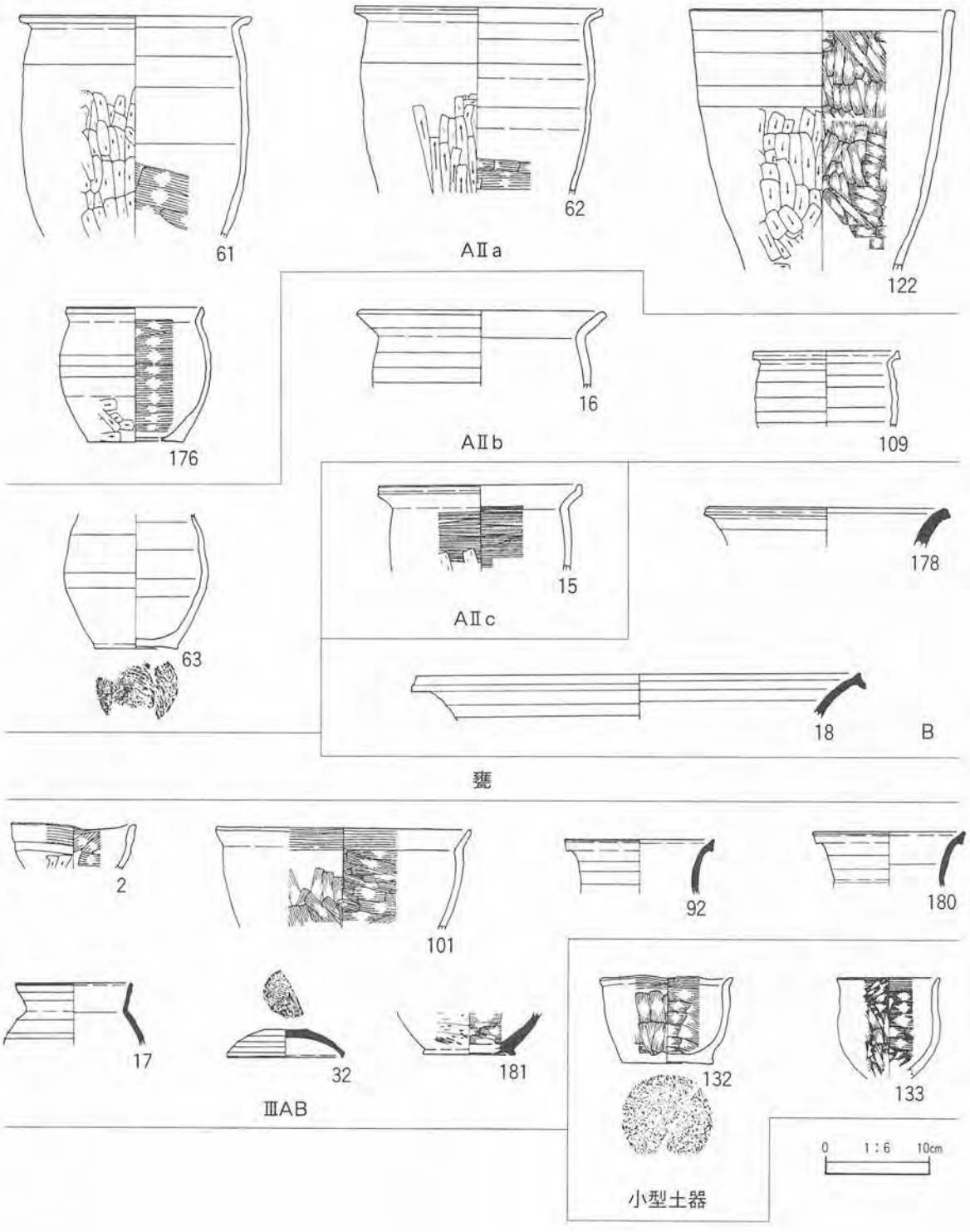
Ⅲ類　（甑？・壺・蓋・鍋類）　遺構内外含め甑１点・壺５点・蓋１点・鍋１点出土した。
Ａ群－土師器
Ｂ群－須恵器
（小型土器）19号竪穴住居跡から２点出土。
底部破片資料の中にも小型土器と思われるものがあるが、本報告書では、口縁部から胴部下半まで残存しているもの２点を小型土器とした。
本遺跡から出土した土師器・須恵器それぞれの個数は、土師器の坏35点・甕97点・甑１点・鍋１点、須恵器の坏１点・甕２点・壺３点・蓋１点である（未掲載は含まない）。
前記した分類に基づいて、各図・グラフ・表を含めながら、器種ごとに若干の説明を加えたいと思う。
坏について
第96～98図は上記した遺物の分類したものを集成したものである。Ａ群Ⅰ類（奈良時代）を除いて、述べてみたい。Ａ群Ⅱ類ａ～ｃの器形は、全体的に丸味を呈し、口縁部から底部については、直線的なものも見られるが、大半はなめらかな器形である。Ａ郡Ⅲ類は、Ａ郡Ⅱ類ａ・Ａ郡Ⅱ類ｂ・Ａ郡Ⅱ類ｃ（以下ＡⅢ・ＡⅡａと略す）と比較して、底部から口縁部にかけて直線的な傾向が見られる。また第99図で、各分類した口径と底径をグラフとして示した。欠損により不明なものは含んでいない。口径については、ＡⅡａについては13.3～15.5㎝、ＡⅡｃについては、13.4～15.2㎝に範囲に入る。ＡⅢについては18.5㎝と鉢形を思わせるものあるが、他12～15㎝に範囲に入る。底径については、ＡⅡａは4.9～5.5㎝、ＡⅡｃは5.0～7.0㎝、ＡⅢは5.３～5.9㎝の範囲に入る。
本遺跡で出土した土師器の坏35点のうち口径・底径・器高が残存している11点（反転実測を含む）について、第100図で口径と器高・口径と底径についてそれぞれの分布を示した。口径・底径については前述したとおりで、器高についてみると、4.7～6.5㎝の範囲に入る。
甕について
ＡＩａ・ｂは、頸部に明瞭な段を有し、調整方法も丁寧な８世紀代の土器に位置づけられる。ＡＩｃは、頸部付近にＡＩｂほど明瞭ではないが、段を有するものがあり、口縁部が「く」の字状に外反する。口唇部は、尖りぎみの特徴をもつものもある。ＡＩｃは、破片資料がほとんどで、全体器形を把握することは、出来なかったが残存している資料から、胴部中央付近から頸部にかけてやや内湾し、頸部で外反するものと、胴部中央付近から頸部にかけてほぼ直線で頸部で外反するものの二つに大別される。
ＡＩｄは底部から胴部にかけて外傾し、胴部はゆるやかに頸部にかけて内湾する特徴を持つ。ＡＩｅは、


1
AⅠ
7
25
73
124
AⅡa
55
123
AⅡB
74
72
AⅡc
22
AⅢ
100
AⅢ
98
171
内外面に黒色処理
30
B
坏
93
AⅠa
6
4
113
5
AⅠb
33
119
36
59
27
172
AⅠc
0 1:6 10cm
甕

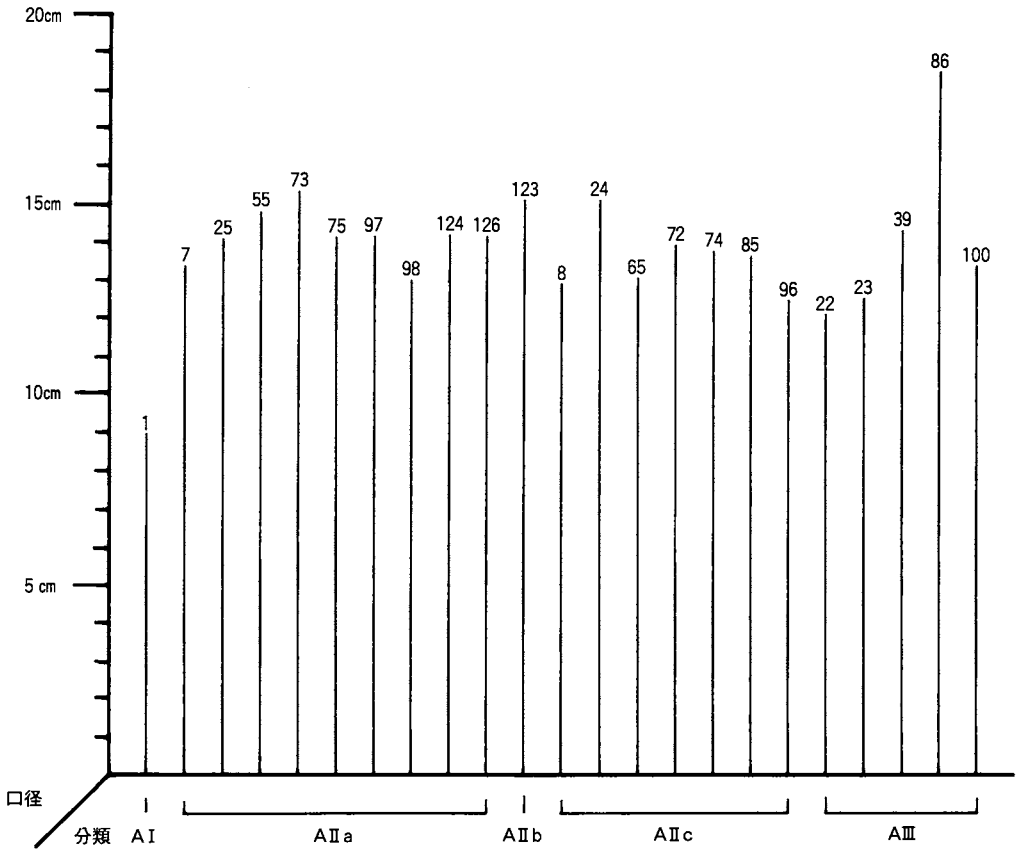
第96図　土器集成図


105
106
130
41
38
131
AId
144
42
42
68
66
67
0 1:6 10cm
AIe
AIf
47
50
64
AIIa
甕

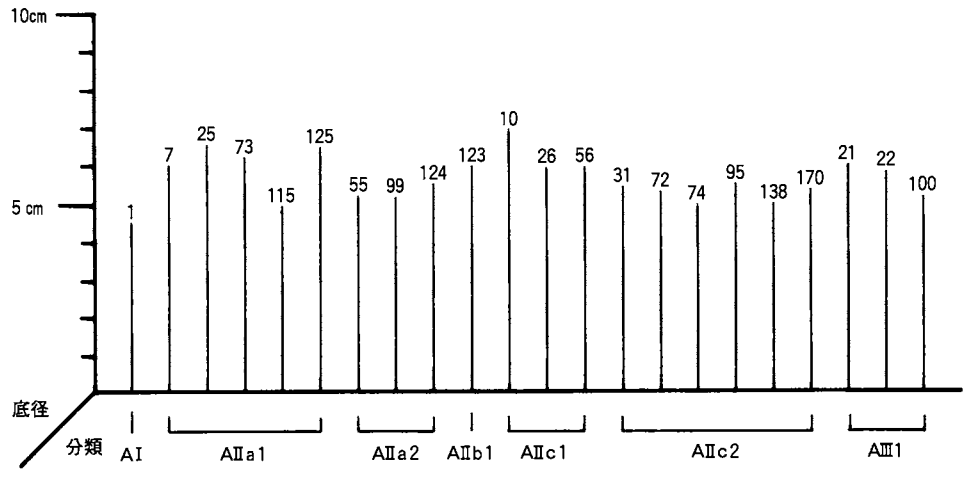
第97図　土 器 集 成 図


61
62
AIIa
122
176
16
AIIb
109
15
AIIc
178
63
18
B
甕
2
101
92
180
17
32
181
IIIAB
132
133
0 1:6 10cm
小型土器

第98図　土 器 集 成 図

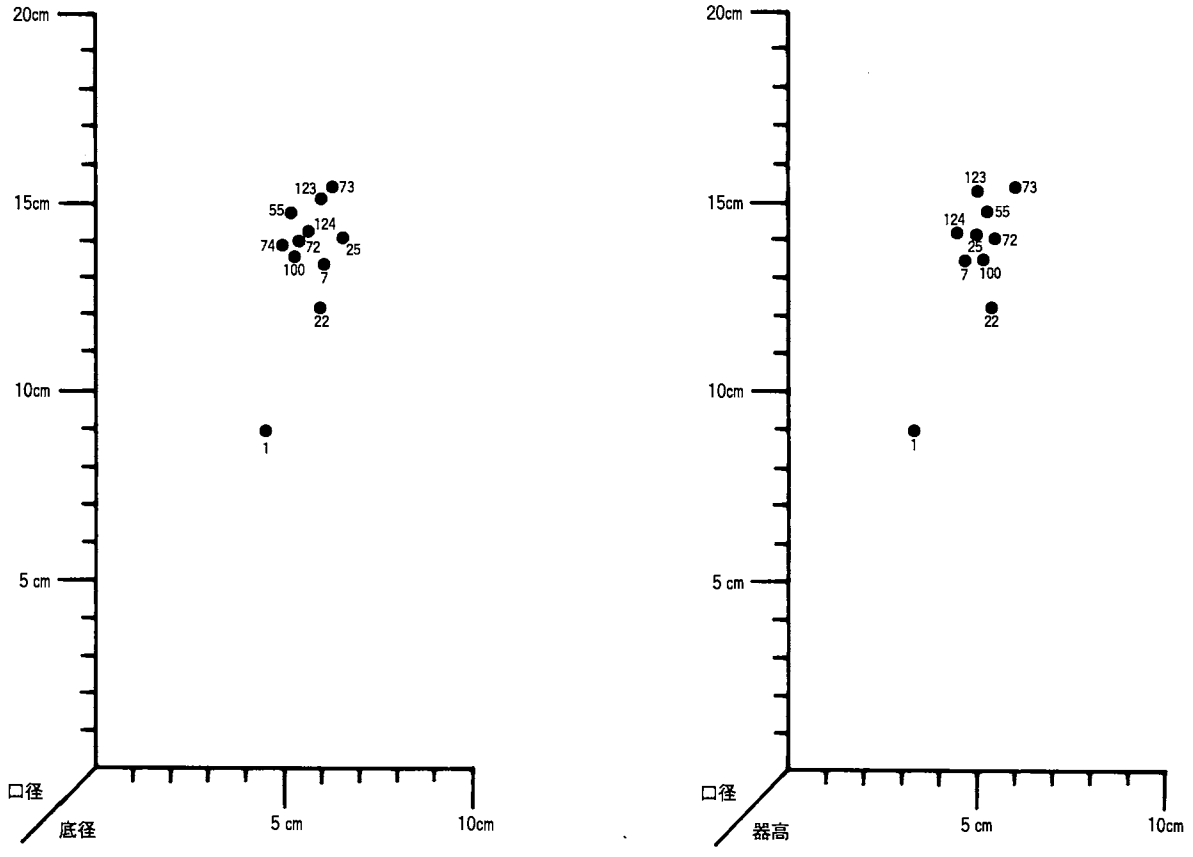

20cm
15cm
10cm
5 cm
口径
分類
AI
AIIa
AIIb
AIIc
AIII
1
7
25
55
73
75
97
98
124
126
123
8
24
65
72
74
85
96
22
23
39
86
100

坏 口 径

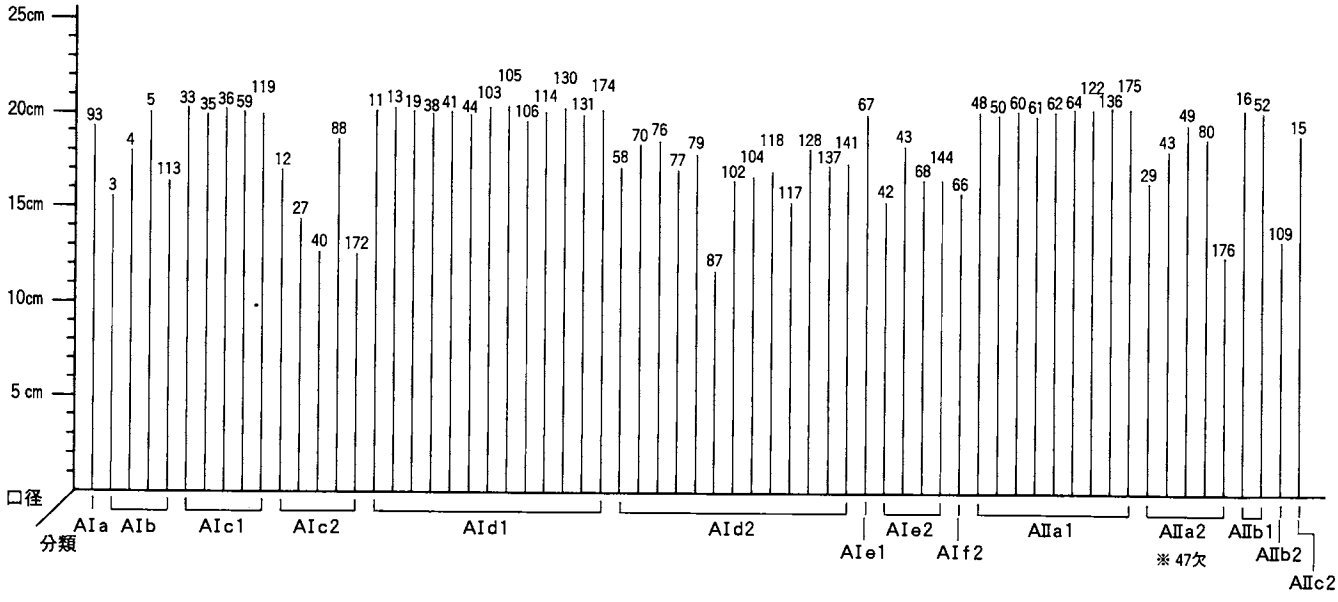

10cm
5 cm
底径
分類
AI
AIIa1
AIIa2
AIIb1
AIIc1
AIIc2
AIII1
1
7
25
73
115
125
55
99
124
123
10
26
56
31
72
74
95
138
170
21
22
100

坏 低 径

第99図



坏 法 量 分 布 図



甕　　口 径

47次 47=18.1
※ 116次 116=18.2
127次 127=15.4

第100図

口縁部が極端に短く、胴部から頸部にかけて、ほぼ直線で、口縁部はわずかに外反する。42は、頸部付近で内湾し、口縁部で若干外反する。ＡＩｆは66の１点のみの出土である。

ＡⅡａは前記したＡＩｄの器形のものと、底部から胴部付近にかけて外反し、胴部付近からゆるやかに、もしくは、直線的に立ち上がるものとがある。122はＡⅡａの中で特種で、頸部から口縁部にかけて外反せず、直線的な立ち上がりを持つ特徴がある。

前記した甕類のＡＩａ・ｂを除いた口径の平均値は（平安時代のみ）、ＡＩｃ～ｆが19.1・ＡⅡａ～ｃが19.2と差はみられなかった。分類したものを更にＡＩｃ～ｆ非ロクロの甕で19.1以上のもの１、未満のもの２・ＡⅡａ～ｃが19.2以上のもの１、未満のもの２とした。第100図で分類別に口径をグラフで示した。グラフを見ると、各分類の中でもばらつきがあるが、ＡＩｅ１・２については、他の分類した口径と比較して、小さい傾向が伺える。

（竪穴住居跡から出土した土器について）

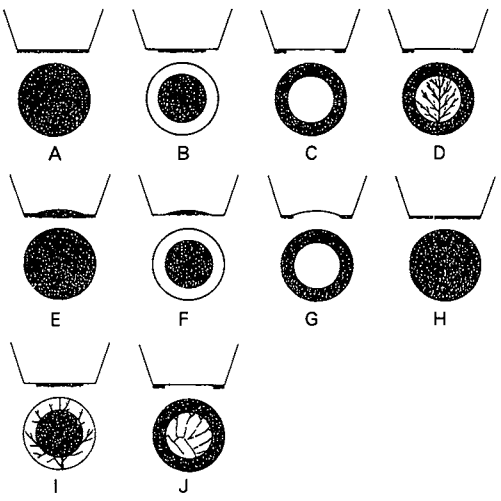
前記した分類基準に従って、竪穴住居跡の遺物の出土状況を表６に示した。これは、本報告書に掲載したもので、不掲載遺物は含まれていない。坏については、全体的に見ると、４号竪穴住居跡を除いては、出土個数は甕と比べて少ない。各竪穴住居跡の坏の出土量を見ると、４号竪穴住居跡が７個体・14号竪穴住居跡が６個体・２・11・19号竪穴住居跡４個体の順である（19号の４個体のうち埋土上位からの出土が２点）。竪穴住居跡から出土した坏の成形技法について見ると、ロクロ成形後、再調整されているものと、されていないものが混在して出土する傾向がある。

甕については竪穴住居跡の出土状況を全体的に見ると、ＡＩ（非ロクロ成形）・ＡⅡ（ロクロ成形）が共伴して出土している傾向がある。更に各竪穴住居跡のＡＩとＡⅡの土器の比率を全体的に見ると、ＡＩの甕が割合の多い傾向が見られる。逆の傾向では、８号竪穴住居跡がＡＩの甕が２個体に対してＡⅡが４個体、６号竪穴住居跡はＡＩが５個体に対してＡⅡが６個体という竪穴住居跡もある。９号竪穴住居跡ついては、ＡＩの甕のみで口縁部が極端に短いＡＩｅ・ｆ類が出土している。形態から駒焼場遺跡（二戸市）ⅡＤ・ⅡＥ類に属されるだろう。この形態は甕形土器の最終末とされている。６号竪穴住居跡でも、同類の土器が出土しているが、ＡⅡの甕も供伴している。これらの土器群から竪穴住居跡の年代を検討したいと思うが、分類した土器が各竪穴住居跡に混在して出土しているものがあり、土器のみで竪穴住居跡の時期差を見いだすのは困難と考えた。ここでは、土器の全体的な特徴・傾向・各竪穴住居跡から出土した土器の傾向について述べることにとどめ、各竪穴住居跡にＴｏ－ａが介在してくることから、Ｔｏ－ａの堆積状況と考え合わせて、まとめ（３）で竪穴住居跡の時期について考えてみたい。

第5表　土器分類表

	坏										甕																小型土器	砂底	分類外
	A群									B	A													B	A	B			
	Ⅰ	Ⅱ						Ⅲ			Ⅰ									Ⅱ					Ⅲ	Ⅲ			
		a1	a2	b1	c1	c2	c	a	1	2	a	b	c1	c2	d1	d2	e1	e2	F2	a1	a2	b1	b2	c					
1号竪穴住居跡	1										1	3																	甑？1
2号竪穴住居跡		1			1		1							1	2						1		1	1		2			坏1・甕底1
3号竪穴住居跡															1														甕底1
4号竪穴住居跡		1			1		1		3		1				1						1								甕底1
5号竪穴住居跡						1							3		1											1			甕胴1・甕底1
6号竪穴住居跡									1					1	2			2		2	2	1		1		1		1	甕底2・甕胴1
7号竪穴住居跡																													
8号竪穴住居跡			1		1								1			1				4									高台1・胴1
9号竪穴住居跡							1									1	1	1	1										甕底2
10号竪穴住居跡																													
11号竪穴住居跡		1				2		1								3					1				1	2		1	石製紡錘車1
12号竪穴住居跡							1		1					1		1										1			甕底3
13号竪穴住居跡											1																		鉄製品1
14号竪穴住居跡			1			1	1	2		1					3	2						1			1	1		2	鉄製品1・甕底2
15号竪穴住居跡																													甕底1
16号竪穴住居跡												1																	
17号竪穴住居跡															1														
18号竪穴住居跡			1										1			3				1								1	甕底2
19号竪穴住居跡		1	1	1				1							2	2				1							2		甕底2・甕口1
20号竪穴住居跡																													
21号竪穴住居跡																1													

（砂底土器について）

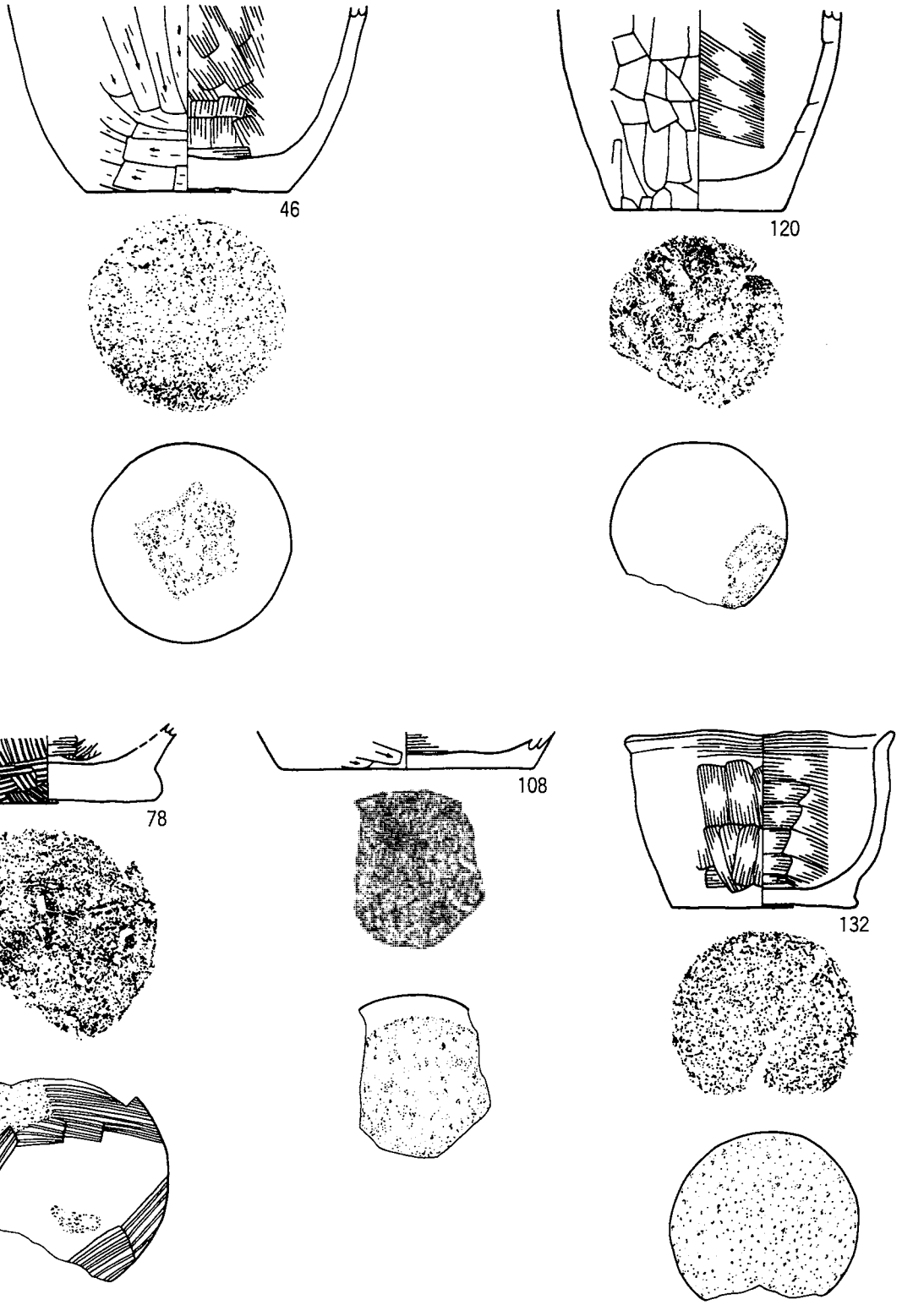


櫻田氏の「砂底」土器模式図

第101図

本遺跡でも、「北緯40度から41度の米代川・安比川・馬淵川・岩木川流域に集中して分布する」とされる（櫻田：1993）砂底土器が出土した。本遺跡は、安比川右岸に立地していることから、櫻田氏が示した分布域に入る。氏の「砂底土器一覧表」によると、岩手県内で砂底土器が出土している遺跡は、九戸村（江刺家）・二戸市（府金橋）・浄法寺町（飛鳥台地Ⅰ・桂平・五庵Ⅰ・Ⅲ・田余内Ⅰ・広沖）・安代町（上ノ山Ⅶ）・旧江釣子村（下谷地A）の10ヶ所を上げている。当センターの近年の発掘調査では、花巻市（石持Ⅰ）・二戸市（大向上平）等で散見される。

本遺跡から出土した砂底土器は遺構内外合わせて10点である（内掲載7点）。これら10点について氏のA～Jの10通りに分けた砂粒付着パターン模式図と比較して特徴を示したい。46は6号竪穴住居跡2号支脚である。底部縁2㎝程度内に粒径1㎜～2㎜の砂粒が集中して付着している。Bタイプに属す。78は11号竪穴住居跡焼失焼土上面から出土した。底部縁約1㎝の幅で粒径1㎜～1.5㎜程度の砂粒が部分的に付着し、中央部付近にも部分的に付着する。砂粒付着後、ハケメによる調整が施される。105は14号竪穴住居跡から出



第102図　砂 底 土 器

土した、口縁部から底部まで残存している甕である。底面の残存状況はわずかで、全容を明らかにできないが、粒径1㎜～3㎜の砂粒がまばらに付着する（Aタイプ？）。108は14号竪穴住居跡の焼失焼土上面から出土した底部破片である。底部縁0.9㎝程度内に粒径0.2㎜～1㎜の細かい砂粒がまばらに付着する。Bタイプに属す。120は、18号竪穴住居跡の支脚として使用された土器である。器面は、土器成型の粘土状態時に粘土が乾燥して固くなった段階で、ナタケズリによる調整を施したと思われる。底面は粒径1～1.5㎜程度粗い砂粒が部分的に付着する。砂粒付着後、ケズリによる調整が施される。130は19号竪穴住居跡から出土した土器である。口縁部から底部まで残存している。底面の残存状況は約5分の1程度であるが、0.2㎜程度の細かい砂粒がほぼ全面に付着する。Aタイプに属す。132は、19号竪穴住居跡から出土した小型土器である。粒径0.2～1㎜程度の砂粒が付着する。Aタイプに属す。

以上のことから、Aタイプに属するものが、105？・130・132、Bタイプに属するものが、46・108である。78・120につては、部分的に付着するもので、氏の砂粒付着パターンに属さないものである（78はBタイプ？）。不掲載遺物の3点について見ると、（遺構外2点・18号竪穴住居跡カマド1点）遺構外のものについては、それぞれBタイプとCタイプに属する。Bタイプは粒径1㎜程度砂粒が付着し、底部縁が1㎝程度の幅でナデによる調整が施され、砂の付着が剝がれたものと思われる。Cタイプは粒径1㎜程度の砂粒がまばらに付着する。18号竪穴住居跡カマドから出土した遺物は、Aタイプに属し、粒径は1～2㎜の粗い砂粒が付着する。中央部は砂粒付着後、ケズリによる調整が施される。不掲載遺物も合わせて、氏のタイプ別の個数は、Aタイプ4点・Bタイプ3点・Cタイプ1点・その他2点となる。

本遺跡から出土した砂底土器は、非ロクロ成形の土師器の甕・小型土器に認められる。ロクロ成形土師器の坏・甕・須恵器には認められなかった。10点の砂底土器の中で支脚として使用されたものは2点である。

櫻田氏は、「古代律令政府は、中央集権確立のため東方地方の「蝦夷」を「帰属」させ、国郡制を敷くことを目的に拠点となる城柵を各地に築いているが、「砂底」土器を出土する遺跡が集中する北緯40度以北には城柵が築かれていないことに注目する必要がある。」とし、砂底土器が出土した分布圏について、「この分布圏には自己を主張し、領域をまもって生活した人々が存在したと考えられる。」と述べている。

氏の考えと合わせて、本遺跡について考えてみると、十和田a降下火山灰による二次災害により、被災にあった当時の人々が、耕地を他の地域にもとめず復旧行為を行ったことは、自分の土地に土着して、領域を守って生活していたと考えることができるだろう。

（墨書土器について）

本遺跡から遺物番号10・21・26の3点出土した。すべて、竪穴住居跡からの出土で、土師器ロクロ成形の坏の回転糸切り痕のある底面に記されている。うち10・26は、肉眼による観察で文字が不鮮明なため、図示しなかった。21の墨書文字は「玉」と記されている。「玉」という文字についての類例は、本県内遺跡では、見いだすことは出来なかった。多賀城跡から「玉」ではないが、「王」の墨書土器が出土している。城柵から出土したことを考えると、身分を意味するものと思われる。本遺跡の「玉」については、何を意味するものか判断出来なかった。

（いわゆるムシロ底の土器について）

本遺跡においても、ムシロ底の土器が1点（173）出土した。この種の土器は、近年稲野彰子氏によって、集成が行われている（稲野1995）。それによると、東北地方では、3種5類の編物・織物痕が存在し、時期は概ね平安時代に属す。3種はA・B・Cに分けられ、A種をタタミに類似、B種をアンギンに類似、C種

をスダレ・タワラに類似としている。氏は「A種は東北地方の広い範囲に分布する。タタミが各地の貴族階級や中央の出先機関によって、使用されたことが想像される」として、B・C種については、「B種・C種は津軽地方を中心に分布」としている。本遺跡で出土したムシロ底は、タテ材約6.0㎜、ヨコ材約0.35㎜編み物で、氏のC種に類すると思われる。また、氏の「繊維圧痕一覧表」の中で岩手県内の遺跡では、大曲（石鳥谷町）・下谷地A・金成・森下・岩崎台地（北上市）5遺跡で出土しているが、すべて、A種であった。津軽地方を中心にB・C種が多いことから、当地域は津軽地方との交流・影響があったことを窺わせる遺物である。

まとめ（3）総括

1．古代集落の様相

ここでは、前述した遺構・遺物の項と考え合わせて竪穴住居跡の時期について述べ、集落の様相について考えたい。

21棟検出された竪穴住居跡を、まとめ(1)・(2)から考え合わせて下記の時期に分類した。

Ⅰ群　8世紀代の遺物が出土する竪穴住居跡

床面・床面直上から、8世紀代の遺物が出土した住居。1・13号竪穴住居跡である。カマドは西向き刳り貫き式である。

Ⅱ群　To－a降下以前に構築されたと推測される住居。4・7・12・14・20号竪穴住居跡

To－aが層状堆積の様相を呈するもの。埋土下部にTo－aが含まれず、床面・貼り床にもTo－aが認められない住居。

4号については、床面にTo－aが認められなかったこと、坏の個数が21棟中1番多く形態が直線的に立ち上がることから、14号より時間的に先行するものと思われる。八木光則編年G期（9世紀後半代）と思われる。14号は坏の出土量が後述する埋土にTo－aがブロック状に堆積する住居より比較的多いが、甕形土器の様相は、埋土にブロック状の堆積を示す住居の土器群と類似する（AⅠd）。9世紀後半～10世紀前半代としたい。

12号は出土遺物が少なく、詳細な時期を判別することは出来なかった。To－aの堆積状況から、To－aの降下に近い時期に廃絶された住居と考えられる。7・20号についても、時期を判別する資料に欠く。To－aの堆積状況のみに着目して考えると、12号より時間的に先行し、4・14号と同時期もしくは、時間的に先行する可能性が考えられる（Ⅰ群の可能性も含まれる）。

Ⅲ群　To－a降下以前・降下中に構築されたと推測される住居。10号竪穴住居跡

10号はTo－aの二次堆積が直接床面を覆っていることから、前記した時期に該期することは確実であろう。

Ⅳ群　To－a降下直後及び以降に構築されたと推測され、出土遺物、To－aの堆積状況、床面・貼り床のTo－aの有無から10世紀前半と推定される住居

2・5・11号竪穴住居跡。2号のTo－aの堆積状況は、埋土上位はTo－aのブロック・下位は少量のTo－a粒を含み、床面にTo－aは認められなかった。遺物は比較的坏の出土量が多い。5号はTo－aはごく少量の粒で、床面には若干であるが、To－aが認められた。坏1点のみの出土であるが、甕形土器は、AⅠbより明瞭ではないが、段を有し、口縁部「く」の字状に外反するものが比較的多く見られる。11号は、遺物に関しては14号と同類と思われる。埋土のTo－aの堆積状況は、埋土上部にTo－aと黒色土

と混合土が堆積する。Ｔｏ－ａが降下し土壌化したものが、堆積したものと推測できる。埋土下部にＴｏ－ａが認められず、床面にも認められなかった。降下以前とも考えられるが、煙道部の形態から本群とした。後述する住居群よりは時間的に先行することは確実であろう。

Ｖ群　Ｔｏ－ａ降下以降に構築されたと推測され、前記した群より時間的に先行しない。Ｔｏ－ａの堆積状況は、第90図④に属し、床面・貼り床にＴｏ－ａが認められる住居。６・８・９・15・16・17・18・19号竪穴住居跡

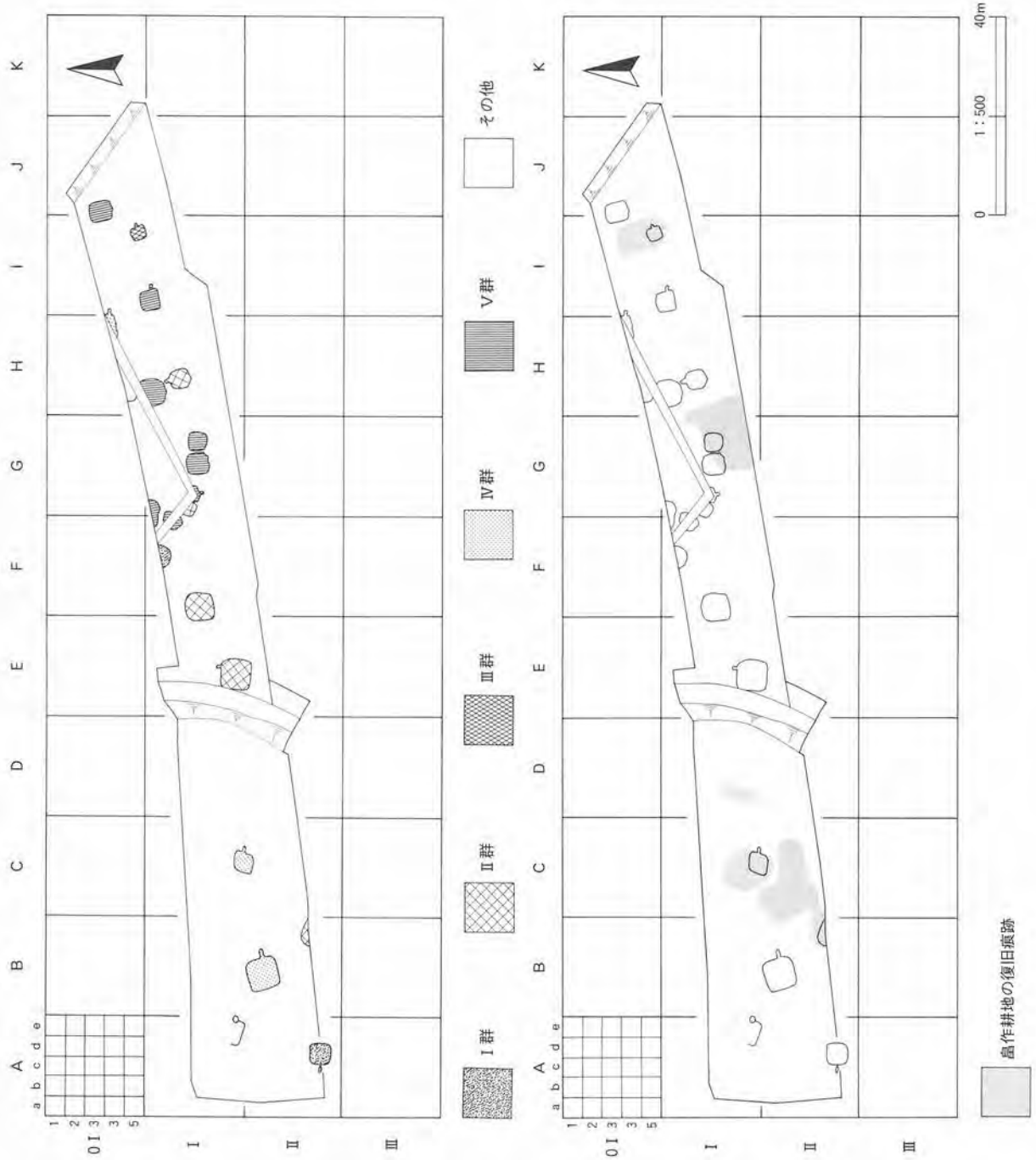
甕形土器最終末の印象を持つ９号については、出土遺物は少ないが土器の印象から、八木光則編年Ｊ期（11世紀）の様相を窺わせる。

その他　上述以外のもので、削平・撹乱等により、全容が明らかでない住居である。３・21号竪穴住居跡

以上21棟の竪穴住居跡をⅠ～Ⅴ群とそれに属さないものをその他としたが、問題点もある。Ⅱ～Ⅴ群については、Ｔｏ－ａ堆積状況と床面・貼り床のＴｏ－ａの有無によって判別してきたが、微量なＴｏ－ａについて認識が出来ていたかどうかという点である。もう一つは、白頭山火山灰を認識出来なかった点である。竪穴住居跡の埋土に白頭山火山灰と思われるものはないと思っていたが、執筆者の誤認で見逃していた可能性は否めない。飛鳥台地Ⅰ遺跡・桂平遺跡（浄法寺町）では白頭山火山灰を認識して、竪穴住居跡の時期の分類を行っているが、当遺跡についても、白頭山火山灰を視野に入れた分類を行なえたのではと考えている。

上記した群事のカマドについて見てみると、Ⅰ群を除いてⅡ群～Ⅴ群・その他について見てみると、Ⅱ群は、カマドは２棟北向き刳り貫き式・１棟は西向き刳り貫き式である。北向き２棟については、Ｔｏ－ａの堆積状況は①Ａに属す。Ⅲ群～Ⅳ群は、カマド東向きの掘り込み式である。Ⅴ群は、３棟東向き１うち１棟は掘り込み式、２棟は刳り貫き式、２棟北向き１棟不明・１棟刳り貫き式である。１棟南向き、掘り込み式である。これらのことから、平安時代のＴｏ－ａ降下以前の住居は、カマドは北向き・西向きで、刳り貫き式であるが、Ｔｏ－ａ降下中・降下以降の10世紀前半は、東向きの掘り込み式に移行する傾向が窺える。Ｔｏ－ａ降下以降のカマドの向きは、東向き・北向き・南向きとバリエーションがあるが、掘り込み式から刳り貫き式に移行する傾向が窺える。

上記した分類から、畠作耕地の「復旧行為」を行った人々が居住していた住居を推測したい。この推測を行う上で、いつ「復旧行為」が行われたかが、問題になる。上述した畠作耕地の「復旧時期」について、10・12号住居のＴｏ－ａの堆積プロセスから考えてみたい（第90図参照）。12号は住居廃絶後、約10％埋没が始まってから、Ⅰ層（Ｔｏ－ａ降下）堆積後、短期間に連続的にⅡ～Ⅴ層が二次堆積した。10号については、Ⅰ層がなく、Ⅲ～Ⅴ層の水成堆積が直接住居の床面を短期間のうちに覆っていた。10号住居の様相は、カマドを有する点を除いては、小規模で掘り込みも浅く、柱穴を持たず、貼り床も施されていないなど極めて粗雑な様相を呈していることから、他の住居と比較して、長期間使用する目的で構築されたとは思えない。畠作耕地の断面図第95図から、①′とした火山灰は一次堆積の様相を呈し、②は水成堆積である。耕地の復旧が行われた時期も第95図①′＝第90図Ⅰ層、第95図②＝第90図Ⅱ層と考えたい。この考えから10号住居は、Ⅰ層降下後、火山噴火による被災後にはじまった二次災害の最中に短期間に構築され、復旧を目的とした炊き出しなどの仮設的な復旧小屋だったのではないだろうか。すなわち、このことから火山災害による畠作耕地の復旧は被災直後で雨水などによる二次災害が続く中と考えられる。なお、10号住居の最上部を埋めているⅡ層上面は、耕地と思われる土壌撹乱を受けている。その後も襲ってきた二次堆積の火山灰は、その後の耕作の継続にともなって土壌化されていったのだろう。その時には、役目を果たした10号住居はすでに耕作土下


A B C D E F G H I J K
a b c d e
1 2 3 3 5
0 I
I
II
III
I群
II群
III群
IV群
V群
その他
畠作耕地の復旧痕跡
0
1:500
40m

第103図

に埋もれていたことになる（能登・中村・菊池2000・2001）。

10号住居を取り上げて、Ｔｏ－ａが降下した直後に「復旧行為」を行ったと推測した。この時期にあてはまる住居が10号以外に復旧行為を行った人々及びその直後に居住を継続した人々の住居の可能性がある。Ⅰ・Ⅱ群はＴｏ－ａ降下以前に構築された住居であるから、選択肢からはずれ、Ⅳ・Ⅴ群の住居の可能性が考えられる。Ⅳ・Ⅴ群の中で、検出状況から畠作耕地と同一面で検出した住居は、８・11・15・16号が上げられるが確証はない。消去法によって考えると、様々な住居の想定が可能になり、説得力に欠ける。畠作耕地の復旧痕跡が被災後早急に着手されたと考えて、Ⅲ・Ⅳ群の住居が相当すると考えたい。

２．おわりに

大向Ⅱ遺跡周辺の当時の集落面積はおおよそ540,000㎡になると予想される（大向上平遺跡含む）。大向上平遺跡では5,000㎡、今回の調査で約4,000㎡であるから発掘範囲は想定される全面積の約1.8％になる。それは、遺跡のほんの一部にすぎないが、平安時代の集落として、10世紀前半から10世紀後半にわたって継続する農耕地を備えた集落であったことが、明らかになった。さらに当時の人々の火山災害による耕地復旧を行った生活の一端を明らかに出来たことは、貴重な成果資料と言えよう。また、類例は少ないが張り出し部を持つ住居は、当地域の地域性が窺えるものと思われる。

最後に私事で大変恐縮ではあるが、大向Ⅱ遺跡の発掘調査を通して、多くの人々との「出逢い」があった。励まし、ご助言、ご指導いただいた方々、また、大向Ⅱ遺跡を発掘調査した年は、記録的な猛暑の中で、野外調査に参加していただいた野外作業員、土器実測・トレース等期間内の終了を目指して一生懸命作業していただいた室内作業員に改めて感謝を申し上げたい。

（参考・引用文献）

高橋與・鈴木・小林（1983）「東北地方北部の遺跡と火山灰の検討」『考古風土記』第８号

八木光則（1992）「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」第18回古代城柵官検討会資料集

櫻田　隆（1993）「『砂底』土器考」『翔古論聚－久保哲三先生追悼論文集－』

稲野彰子（1995）「いわゆるムシロ底について」『第10号北上市立博物館研究報告』

二戸市教育委員会（1978）『中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

二戸市教育委員会（1981）『中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター（1983）『府金橋遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第72集

（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター（1986）『桂平遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第110集

（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター（1986）『広沖遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第111集

（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター（1983）『上の山Ⅶ遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第60集

（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター（1984）『江刺家遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第70集

（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター（1988）『飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第120集

（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター（1999）『芋田Ⅱ発掘調査報告書』文化財調査報告書第304集

（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター（2000）『大向上平発掘調査報告書』文化財調査報告書第355集

（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター（2000）『上台遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第344集

（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター（1988）『皀角子久保Ⅳ遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第129集

（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター（1981）『扇畑Ⅰ遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第17集

日本考古学協会鹿児島大会資料集第一集（2000）『はたけの考古学』

米沢容一（2000）「「タナ」状の施設から棚状施設へ」『土壁第４号』

桐生直彦（2001）「竈をもつ竪穴建物跡にみられる棚状施設の研究」

町田・新井『火山灰アトラス』（1992）

町田・他『火山の自然史』（1998）

能登・中村・菊池（2000）「十和田ａ火山灰による災害と復旧－いわゆる畝間状遺構の再考－」『紀要ＸＩＸ』

能登・中村・菊池（2001）「十和田ａ降下火山灰による災害と復旧－復旧の着手時期についての詳細分析－」『紀要ＸＸ』

青森県教育委員会（1992）『朝日山Ⅱ遺跡』文化財調査報告書第152集

青森県教育委員会（1996）『野尻(4)遺跡Ⅰ』文化財調査報告書第186集

青森県教育委員会（1996）『野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡』文化財調査報告書第186 集

青森県教育委員会（1998）『野尻（１）遺跡Ⅰ』文化財調査報告書第234 集

第24回古代城柵官検討会資料集（1998）「東方地方の古代集落」

木村　高（2000）「津軽地方における平安時代の住居跡」『考古学ジャーナル８月号』

大向Ⅱ遺跡の畝間状遺構に関する自然科学調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大向Ⅱ遺跡は安比川右岸の台地上に立地する平安時代の遺跡であり、これまでの発掘調査で住居跡や畑跡が検出されている。今回の発掘調査区でも竪穴住居跡のほか、それに囲まれた畝間状遺構が検出されている。畝間状遺構は黒色土上面において、十和田ａテフラ（Ｔｏ－ａ）が溝状に何十条にもわたって連続して確認されており、その状態から十和田ａテフラ（Ｔｏ－ａ）が何度か畑の畝を覆った時の復旧の痕跡と考えられている。

今回の分析調査では、畝間状遺構を構成する堆積物の状態および栽培植物の種類に関する情報を得ることを目的として、軟Ｘ線写真撮影観察と植物珪酸体分析を実施する。

１．試料

試料は、発掘調査時に平面プランにおいて比較的明確に復旧痕が確認された２カ所の地点の壁面から採取された。ただし、壁面では平面プランで確認された畝状の構造がはっきりとしなかった。

Ａ地点は十和田ａテフラの前後層から約40㎝の柱状試料が２本に分けて採取された。十和田ａテフラの下位は、黒色腐植質土壌（黒ボク土）からなる。十和田ａテフラは下部が成層しており葉理状の構造が認められる。上部は擾乱作用が及んでおり、腐植の集積も確認される。この上位は擾乱作用の及んだ暗褐色の腐植質シルト・細粒砂からなり、上部ほど擾乱作用の影響が顕著である。試料は連続

Ｂ地点は十和田ａテフラのプライマリーな堆積は認められず、降灰後に畑を修復したことによると考えられる黒ボク土とＴｏ－ａの混在する堆積物が確認される。本堆積物は擾乱作用が及んでおり、腐植の集積も進んでいる。分析試料は本堆積物から約20㎝の柱状試料として採取された。

分析は、軟Ｘ線写真撮影観察がＡ地点の柱状試料について実施する。植物珪酸体分析はＡ地点の十和田ａ直下層準とＢ地点の堆積物について実施した。

２．分析方法

(1) 軟Ｘ線写真撮影観察

土層断面より採取したブロック状の試料から幅７㎝、長さ20㎝、厚さ１㎝の板状の試料をプラスチックケース内に分離、成形して軟Ｘ線写真の撮影を行った。撮影はニッテツ・ファインプロダクツ釜石文化財保存処理センターの協力を得た。

(2) 植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250KHz、１分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を含む組織片について、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸

体の出現傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

3．結果

(1) 軟X線写真撮影観察

A地点の軟X線写真撮影観察結果を図版2に示す。写真の中央が2本に分けて採取された柱状試料の境界に相当する。下位の柱状試料の最下部から上位約10cmが黒色土に相当し、その上位約7cmが十和田aテフラに相当する。その上位と、上位の柱状試料が暗褐色土壌からなる。

黒色土は中粒砂が混じる細粒砂・シルトからなり、下部で粗く、上部で細かくなる。擾乱作用によって形成されたとみられるペッドは下部で顕著でなく、上部で顕著である。上部のペッドは大きさ3～5mm程度で比較的揃っている。縦方向・横方向の細かな植物根が認められるが、この密度も上部で若干高くなる。

十和田aテフラは、下位より、比較的明瞭な層理構造が確認される中粒～細粒砂、葉理構造を持つ粘土・シルト・微粒砂の細粒砕屑物とからなる。中粒～細粒部分および細粒部分の下部は比較的葉理構造が明瞭に残っており、堆積時の状態が比較的良好に保存されている。これに対して、細粒部上部は著しく擾乱されており、葉理構造はほとんど認められない。ペッド比較的発達し、5mm前後で比較的揃っている。本テフラ層中には上位層から伸びる植物根が認められ、それにより葉理構造は寸断されている。

暗褐色土は細礫～粗粒砂大の岩片が混じる有機質に富んだ細粒砂・シルト・粘土からなる。本堆積物には上位から下位までペッドが確認されるが、上位の柱状試料底から約7cmの層準を境として、粒径や構造に多少の違いが認められる。

下部は中粒～細粒砂とシルトからなる。ペッドが発達している。ペッドは副次的な形成過程が窺え、1～2mm程度のペッドが集合体となって、さらに大きな径5～7mm程度、最大1.5cm程度の塊状ペッドを形成している。各ペッドは孔隙によりほぼ囲まれており、部分的に接するだけである。配向性はランダムであり、粒団の間を縫うように草本植物の根が認められる。このような構造は畑作土で認められる構造と同様である。また、下部の最下部に粗粒砂や細礫が集中する状況が見られるが、これは堆積物の攪乱を示唆している。

上部は下部に比較して砕屑物の粒径が小さくなる。ペッドの発達状況は下部と基本的には同様であるが、くずれている状況が窺える。また、層準によっては細礫が水平方向に連続して配列する葉理状の構造が認められる。このような構造は、本来存在した発達する粒団が経年変化の過程で上位から崩れてきている可能性を示しており、葉理状の構造は遺構機能時に土壌を掘り返し、埋め戻している可能性を示唆する。

表1　各地点の植物珪酸体分析結果

種類 ＼ 地点名 試料番号	A地点 2	B地点 1
イネ科葉部短細胞珪酸体		
タケ亜科	18	11
ヨシ属	27	33
ウシクサ族ススキ属	80	61
イチゴツナギ亜科	7	21
不明キビ型	52	69
不明ヒゲシバ型	10	11
不明ダンチク型	14	8
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
タケ亜科	51	74
ヨシ属	20	19
ウシクサ族	19	45
不明	57	48
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	208	214
イネ科葉身機動細胞珪酸体	147	186
総　計	355	400

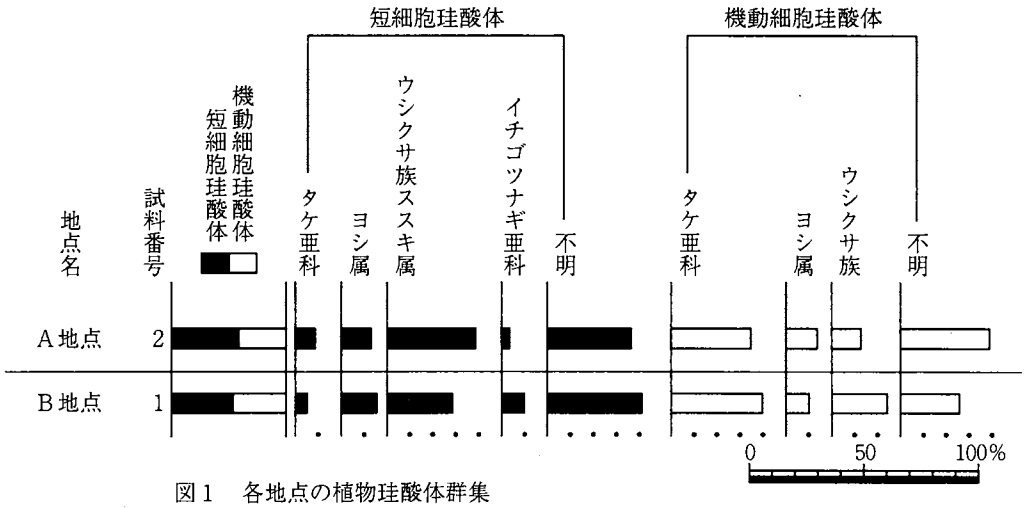


図1　各地点の植物珪酸体群集
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表1・図1に示す。各試料では植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）の見られるものが多い。A・B地点の各試料からは、イネやムギ類などの栽培植物に由来する植物珪酸体が全く検出されない。検出される種類および出現率は同様であり、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などである。この中では、ススキ属の短細胞珪酸体およびタケ亜科の機動細胞珪酸体の産出が目立つ。

4．考察

畝間状遺構の復旧痕が明瞭に確認されたA地点の堆積物は、上記したように下位より黒ボク土、十和田aテフラ、暗褐色土に区分される。このうち、黒ボク土は軟X線写真をみると、中粒砂が混じる細粒砂・シルトからなり、下部から上部にかけて粒径が細かくなる傾向を示した。擾乱作用によって形成されたとみられるペッド（集合体）は下部でも認められたが、その状態は崩れているものが多かった。逆に十和田a直下では大きさ3～5㎜程度で比較的揃ったペッドが形成されている。このようなペッドの成因としては霜柱や乾燥など自然条件に起因する場合と、耕作などの人為的作用に起因する場合とがある。今回の場合、遺跡の立地を考えると自然条件に起因する可能性も充分あるが、粒団の大きさが揃っていることから、人為的な擾乱作用の影響が考えられる。本層準が発掘調査時に畝間状遺構が確認される層準に相当することからも、テフラ降灰直前の耕作を裏づける結果といえる。

十和田aテフラは、比較的明瞭な層理構造が確認される中粒～細粒砂、葉理構造を持つシルト～微粒砂の細粒砕屑物の順に堆積している。このような分級状況は火山降灰時に形成された可能性と、本地点まで火砕流が及んでいるとすれば、その際に形成された構造の可能性とが考えられる。この点については調査区内のテフラの堆積状況を含めて総合的に評価するようにしたい。

テフラ上部の細粒部の上部は著しい擾乱が及んでいた。ペッド構造が比較的発達しており、各ペッドの大きさも5㎜前後と比較的揃っていた。このような構造は、テフラの上位に堆積する暗褐色土でも認められ、連続した構造として捉えられる。このような構造は下記よるように人為的な擾乱により形成されたものと考えられ、テフラ堆積後に起こった土地条件の変化を示しているものと推定される。

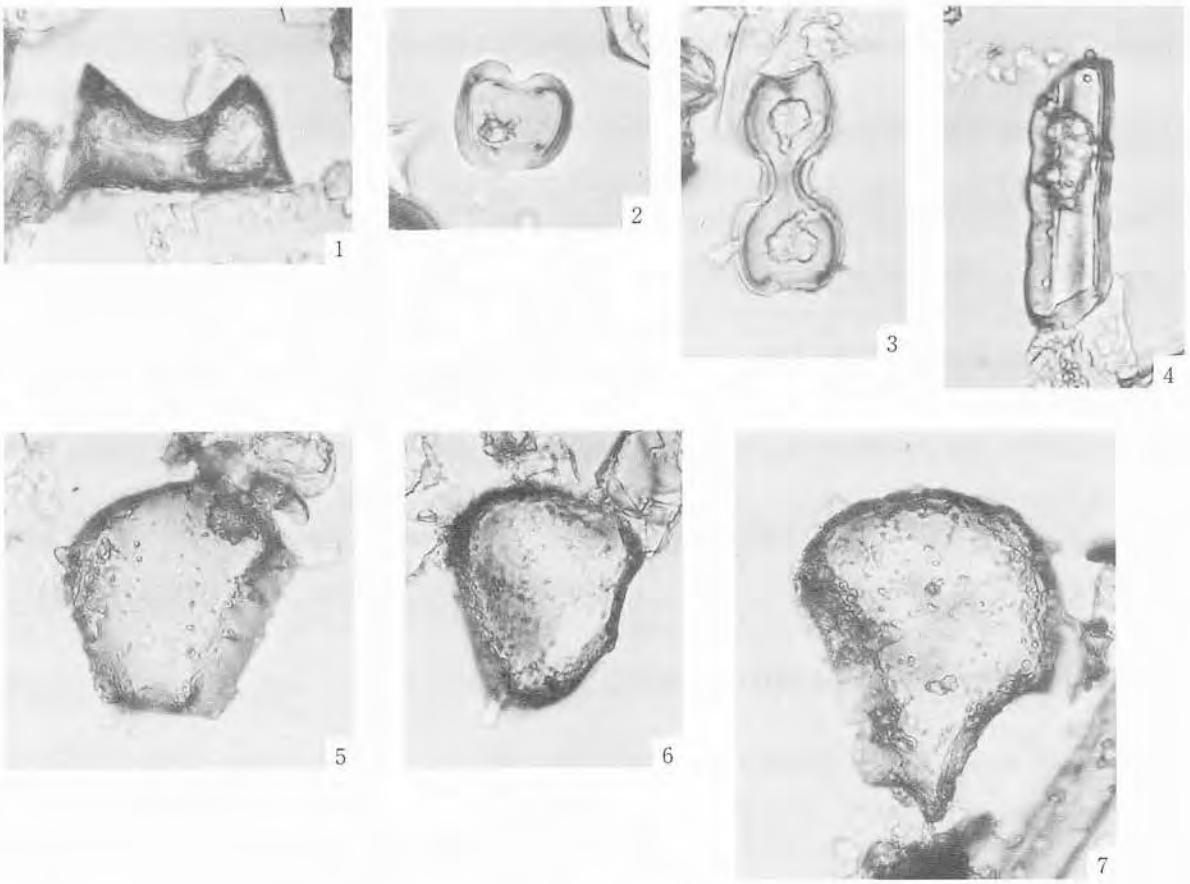
テフラ上位の暗褐色土は細礫～粗粒砂大の岩片が混じる有機質に富んだ細粒砂・シルト・粘土からなり、ペッドが発達していた。このペッドは、上記したように副次的な形成過程が窺えるものであった。このようなペッドの形成過程は、一度の擾乱作用では起こり得ないもので、擾乱作用の影響が長期にわたって及んでいたことを示唆するものである。本層下部では粗粒砂や細礫が集中する層準が認められたが、このような構造も土壌の掘り起こしなどによって生じた分級状態を示している可能性が強い。また、堆積物中に認められた植物根の形状は草本植物に由来するものであるが、当時のもの以外に上位層からのびる植物根も含まれている可能性がある。このような状況は砕屑物の粒径が小さくなるが、今回の試料中の暗褐色土上部でも同様である。したがって、少なくとも試料が採取された層準における土壌擾乱作用は同様な作用が継続していたことが窺える。土地利用状況が大きく変化することはなかったと考えられる。

一方、A地点の十和田aテフラ直下黒色土中の植物珪酸体組成と、B地点のテフラ堆積後の復旧時に形成された土壌中の植物珪酸体組成は同様な組成を示した。タケ亜科が卓越し、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属を含む）を伴う組成を示した。栽培種のイネやムギ類などのイネ科穀物に由来する植物珪酸体は全く検出されなかった。このような傾向は、昨年度調査時に実施した植物珪酸体分析の結果と同様である。上記したように耕作土であった可能性が強いことから、この作土層で栽培されていた植物の種類はイネ科以外の作物の可能性が強く、根菜類、豆類、野菜類などの畑作物が栽培されていたのかもしれない。この点については、作土層が多孔質で土壌中に酸素が通りやすく、好気的状態にあるため花粉や種実遺体は分解・消失してしまっているため、住居址から出土する炭化物や嫌気的な堆積物について分析を実施することで、当時の作物に関して間接的に検討することが必要と考える。

引用文献

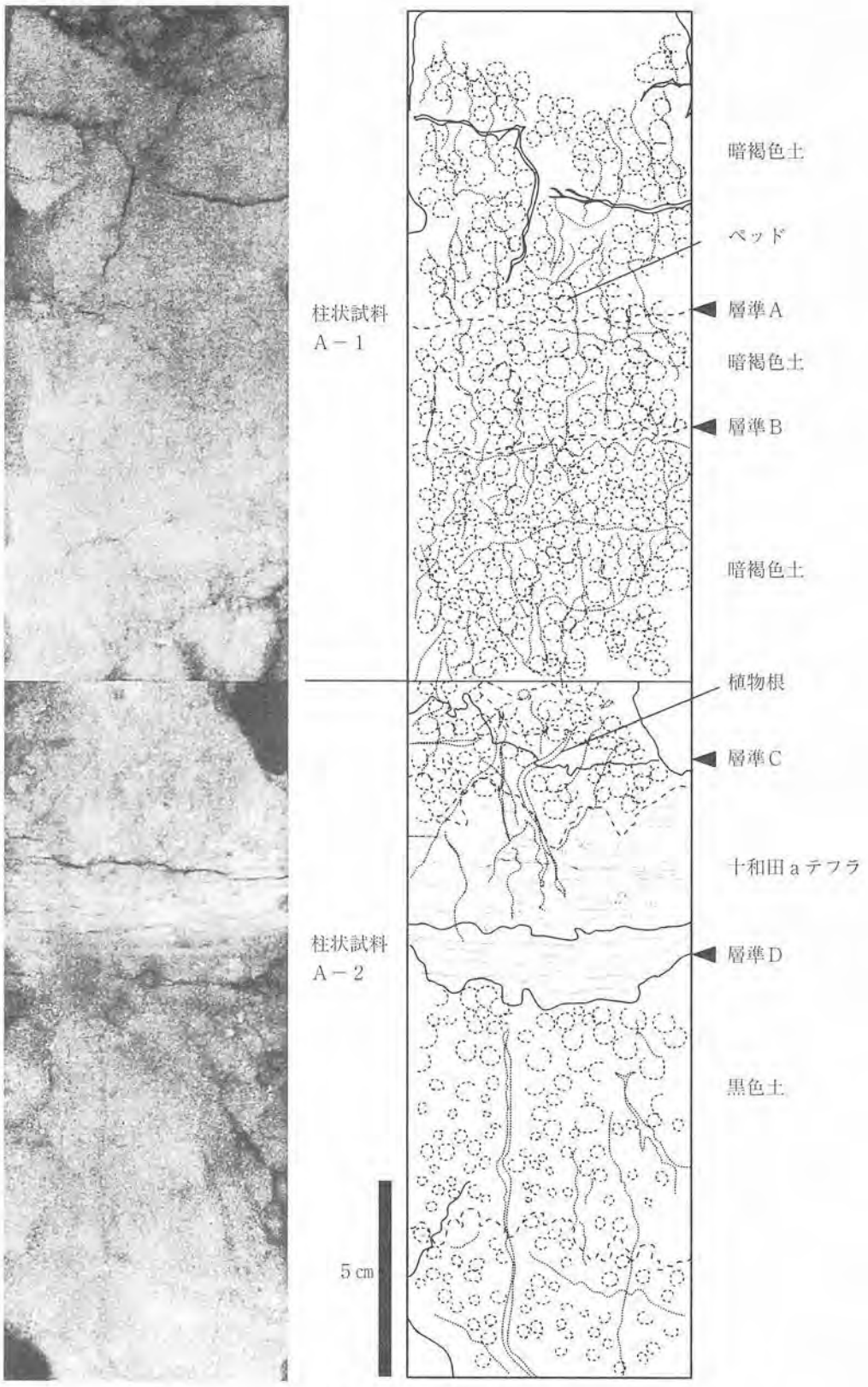
近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25、p.31－64。

図版１　植物珪酸体



１．タケ亜科短細胞珪酸体（Ｂ地点；１）
２．ヨシ属短細胞珪酸体（Ａ地点；２）
３．ススキ属短細胞珪酸体（Ａ地点；２）
４．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（Ｂ地点；１）
５．タケ亜科機動細胞珪酸体（Ｂ地点；１）
６．ウシクサ族機動細胞珪酸体（Ｂ地点；１）
７．ヨシ属機動細胞珪酸体（Ａ地点；２）

図版２　軟Ｘ線写真



Ａ地点

大向Ⅱ遺跡の畑作物に関する自然科学調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大向Ⅱ遺跡は、安比川右岸の台地上に立地し、今回の発掘調査で古代の住居跡と畑跡が検出されている。畑跡は、十和田ａテフラ（Ｔｏ－ａ）の降灰後に、修復されている様子が観察された。

今回の分析調査では、Ｔｏ－ａ降灰前後の畑作物に関する情報を得るために、花粉分析と植物珪酸体分析、種実遺体同定を実施する。

１．試料

調査対象は、調査区壁面に見られた畑跡（畝および畝間）である。この畑跡では、Ｔｏ－ａ降灰以前の畝間と降灰後に畑を修復した跡と見られる黒ボク土と、Ｔｏ－ａの混在する部分が隣接して観察された。

分析試料は、畑耕作土を中心に採取された土壌試料４点である。（表１）。そのうち花粉分析では２点、植物珪酸体分析では４点、種実遺体同定では２点を選択した。

表１　畑跡の分析試料

試料番号	採取層位	備　考	調査項目		
			花	ＰＯ	種
1	Ｔｏ－ａ直上	Ｔｏ－ａ降灰以後の耕作土層		●	
2	Ｔｏ－ａ直下	畑耕土	●	●	
3	Ｔｏ－ａ層	Ｔｏ－ａと耕土の混合層	●	●	●
4	畑の下位層	畑作以前の黒ボク土層		●	
		合　計	2	4	1

２．分析方法

(1)　花粉分析

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

(2)　植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250KHz、１分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を含む組織片について、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

(3)　種実遺体同定

試料322ｇを秤量し、数％の水酸化ナトリウム水溶液に浸して放置し、試料を泥化させる。0.5㎜の篩を通

して水洗させたあと、残渣を集める。2～3日間自然乾燥させた後、その中から同定可能な植物遺体を抽出・同定する。

3．結果

(1) 花粉分析

各試料からは、花粉化石が全く検出されない。試料中には、10μm程度の微細な炭化物片が見られるに過ぎない。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表2に示す。いずれの試料とも植物珪酸体が検出されるものの、試料番号4を除いて検出個数が少ない。

イネやムギ類などの栽培植物に由来する植物珪酸体は、To－a降灰前後の畑跡から全く検出されない。検出される種類はタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などである。この中で、畑試料（試料番号1・2・3）では、ヨシ属あるいはススキ属の短細胞珪酸体およびタケ亜科の機動細胞珪酸体の産出が目立つ。試料番号4では、ヨシ属（短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体）およびタケ亜科の機動細胞珪酸体の産出が目立つ。

表2　畑跡の植物珪酸体分析結果

種類 ＼ 遺物番号	To-a直上 1	To-a直下 2	3	畑の下位 4
イネ科葉部短細胞珪酸体				
タケ亜科クマザサ属	3	－	－	2
タケ亜科	6	1	2	28
ヨシ属	13	17	9	95
ウシクサ族ススキ属	9	5	11	23
イチゴツナギ亜科	10	2	3	5
不明キビ型	13	11	4	25
不明ヒゲシバ型	7	5	5	21
不明ダンチク型	7	6	3	22
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
タケ亜科クマザサ属	7	4	－	5
タケ亜科	21	30	13	43
ヨシ属	6	10	2	46
ウシクサ族	3	3	3	18
不明	15	24	6	37
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	68	47	37	221
イネ科葉身機動細胞珪酸体	52	71	24	149
総計	120	118	61	370

(3) 種実遺体同定

同定可能な種実遺体は検出されなかった。炭化物は非常に少なく、数ミリ以下の微細なものがほとんどである。また、残渣の大部分は、十和田Aテフラに由来する軽石や火山ガラス、鉱物などの砂粒である。

4．考察

今回の調査では、To－a降灰以前の畝間、および降灰後に修復したとみられる畑跡の土壌からは、イネやムギ類などのイネ科穀物、あるいはソバなどの畑作物に由来する植物珪酸体や花粉化石、種実遺体が全く検出されなかった。そのため、今回の結果から見る限り、イネ科穀物やソバなどの栽培は考えにくい。ただし、畝立てされていることを考慮すれば、根菜類、豆類、野菜類など畝立てが必要な畑作物が栽培されたのかもしれない。今後さらに、同様な遺構を対象とした調査を進め、資料を蓄積し検討することが望まれる。

なお、土壌はいわゆる黒ボク土と似ており、多孔質で土壌中に酸素が通りやすく、好気的状態にあるために有機物が分解しやすいと考えられる。そのため、有機物で構成される花粉化石や種実遺体は、畑耕土に取り込まれたとしても、現在までに分解・消失してしまったと思われる。

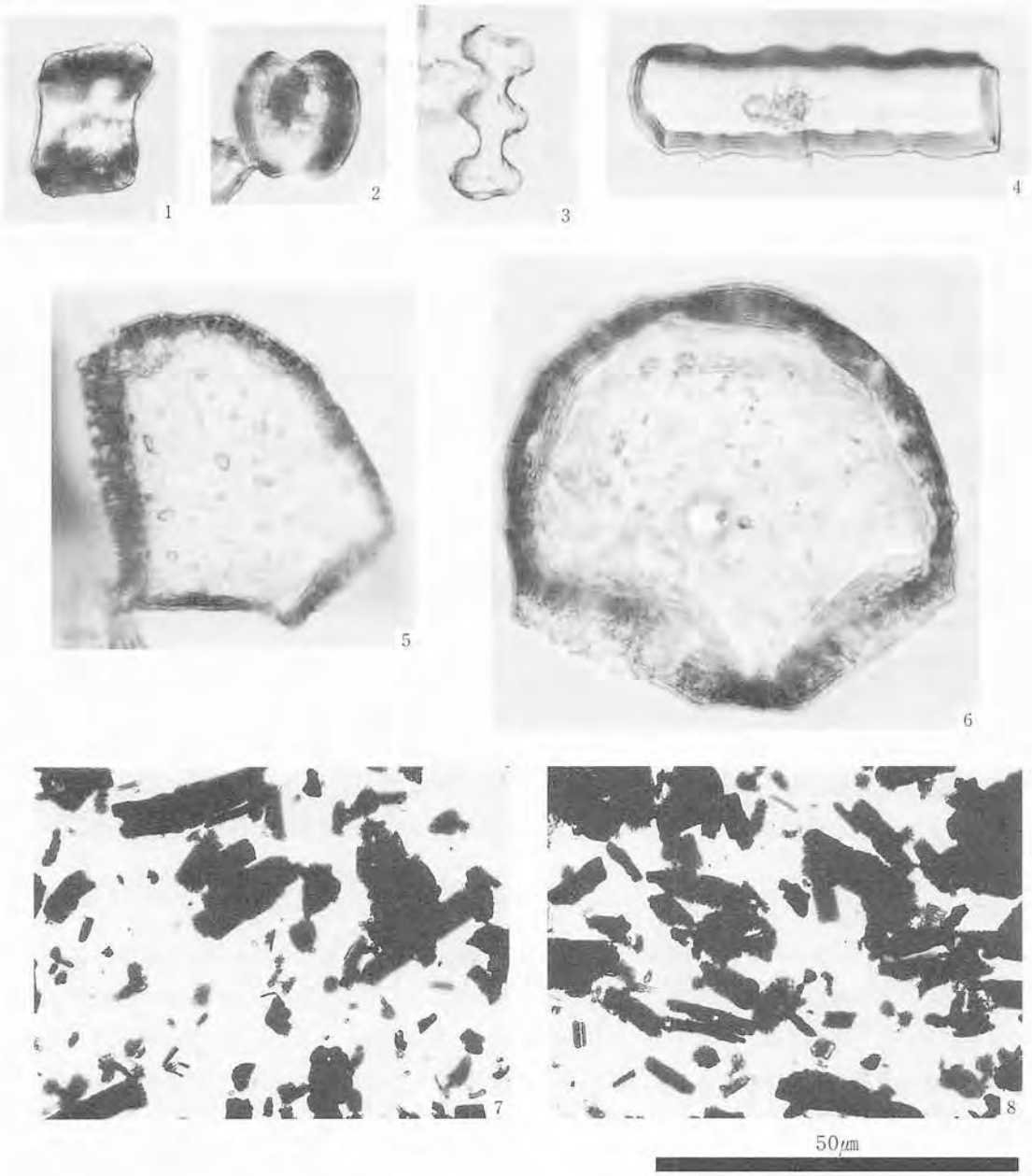
また、畑が構築される以前の土層（試料番号4）の植物珪酸体の産状から、本地点および周辺ではヨシ属

やタケ亜科などのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。畑耕土でも同様な種類が検出され、畑構築後にもイネ科植物が生育していたと考えられる。

引用文献

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25、p.31－64。

図版1　植物珪酸体・花粉分析プレパラート内の状況



1．タケ亜科短細胞珪酸体（試料番号4）
2．ヨシ属短細胞珪酸体（試料番号2）
3．ススキ属短細胞珪酸体（試料番号4）
4．イチゴツナギ亜科（試料番号1）
5．クマザサ属機動細胞珪酸体（試料番号4）
6．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（試料番号1）
7．花粉分析プレパラート内の状況写真（試料番号2）
8．花粉分析プレパラート内の状況写真（試料番号3）

写　真　図　版

遺跡全景（平成12年度調査区）

5号竪穴住居跡カマド全景

写真図版1　遺跡全景・遺構

14号竪穴住居跡焼失状況

14号竪穴住居跡全景（南から）

写真図版２　14号竪穴住居跡

12号竪穴住居跡埋土（南から）

10号竪穴住居跡埋土（西から）

写真図版 3　十和田 a 降下火山灰堆積状況

12号竪穴住居跡煙道部十和田 a 降下火山灰堆積状況（南から）

5 号畠作耕地の復旧痕跡検出状況（北西から）

写真図版 4　遺　構

遺跡遠景（西から）

遺跡全景（平成11年度調査区）

写真図版5　空 中 写 真

遺跡遠景（北から）

遺跡全景（平成12年度調査区）

写真図版6　空 中 写 真

C地点基本層序（南から）

B地点基本層序（南から）

写真図版7　基 本 層 序

調査前風景（平成12年度調査区　東から）

調査前風景（平成12年度調査区　東から）

写真図版８　調査前風景

全　景

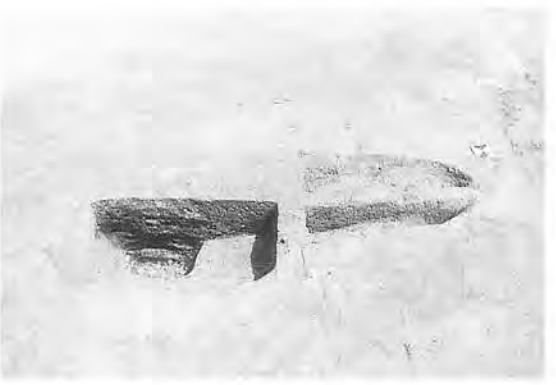
埋　土

カマド検出状況

カマド崩落土除去後

写真図版９　１号竪穴住居跡(1)

1号住居カマド断面



1号住居煙道部断面

1号住居煙道部全景

1号住居1号土坑全景

2号住居全景

写真図版10　1号竪穴住居跡(2)・2号竪穴住居跡(1)

埋　土

カマド全景

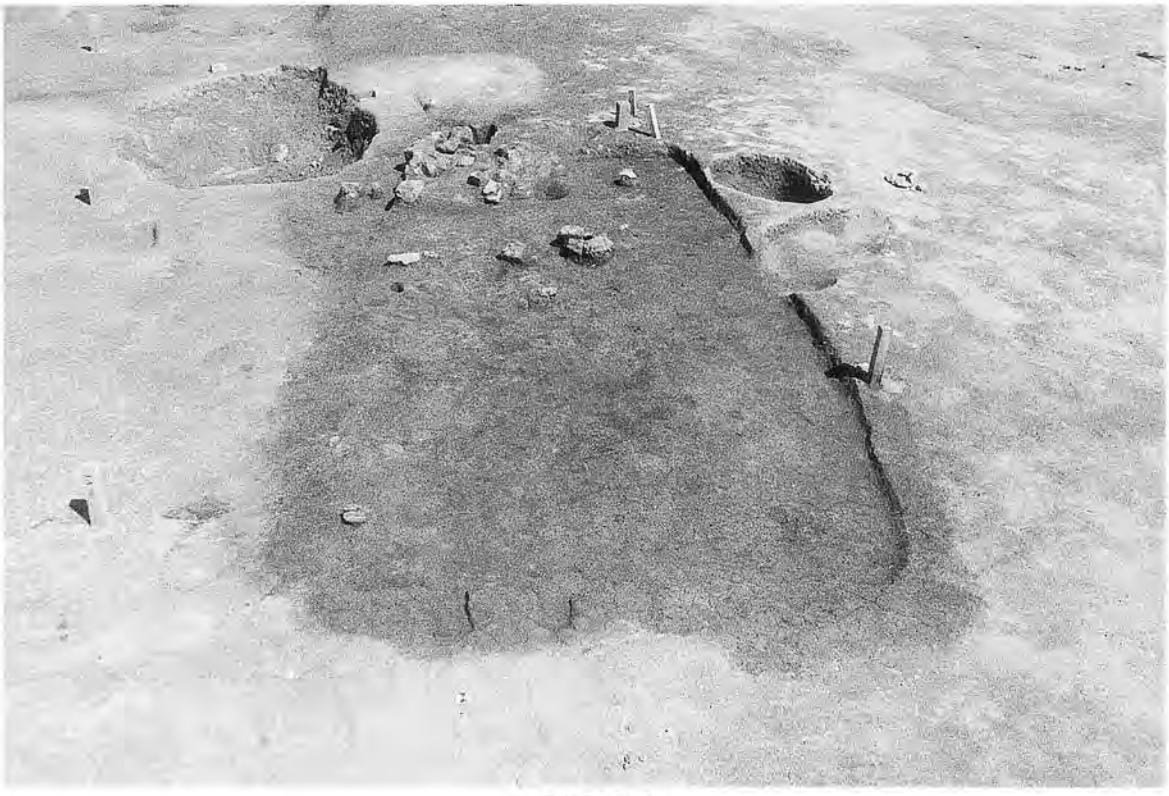
煙道部断面

煙道部断面

写真図版11　2号竪穴住居跡(2)

2号住居ＰＰ４埋土

2号住居溝状遺構埋土



3号住居全景

3号住居カマド全景

3号住居カマド断面（東から）

写真図版12　2号竪穴住居跡(3)・3号竪穴住居跡

全　景

埋　土

写真図版13　4号竪穴住居跡

全　景

埋　土

カマド全景

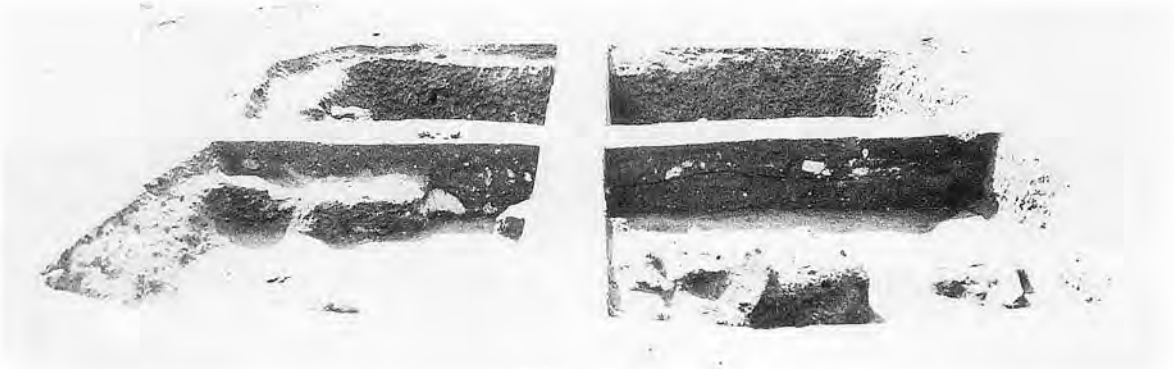
煙道部断面

写真図版14　5号竪穴住居跡(1)

5号住居カマド全景

5号住居煙道部土器出土状況

6号住居焼土塊・炭化材検出状況



6号住居埋土

写真図版15　5号竪穴住居跡(2)・6号竪穴住居跡(1)

全　景

カマド断面

支脚検出状況

燃焼部断面

ＰＰ４埋土

写真図版16　６号竪穴住居跡(2)

全　景

埋　土

PP1埋土

燃焼部断面

写真図版17　7号竪穴住居跡(1)

7号住居煙出孔検出状況

7号住居煙道部全景

8号住居全景

8号住居埋土

写真図版18　7号竪穴住居跡(2)・8号竪穴住居跡(1)

8号住居焼土塊・礫検出状況

8号住居カマド全景

8号住居カマド断面（南から）

8号住居カマド断面（北から）

9号住居全景

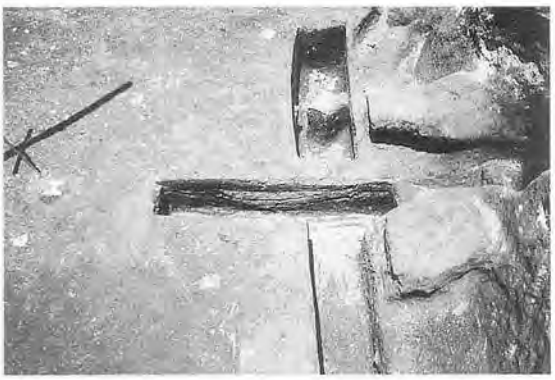
写真図版19　8号竪穴住居跡(2)・9号竪穴住居跡(1)

埋　土

全　景

カマド全景

カマド断面



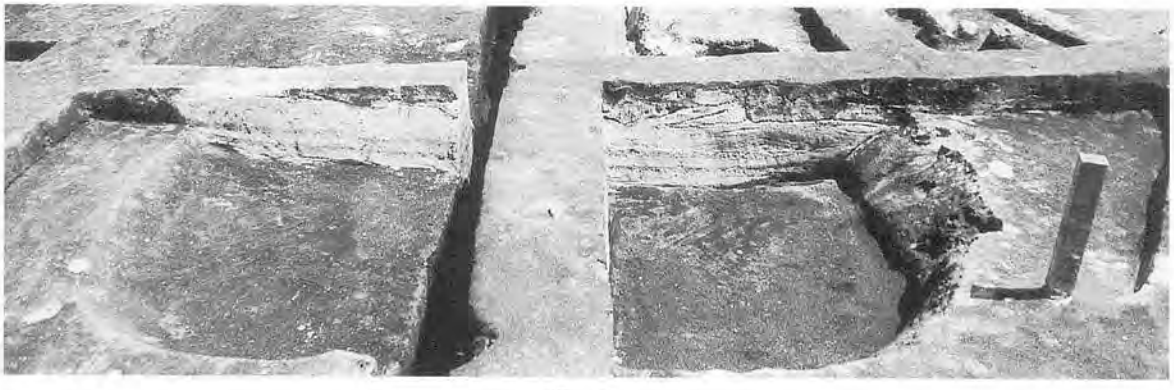
燃焼部断面

1号煙道断面

外周溝埋土

写真図版20　9号竪穴住居跡(2)

全　景



埋　土

カマド断面

煙道部断面

写真図版21　10号竪穴住居跡

全　景

埋　土

煙道部全景

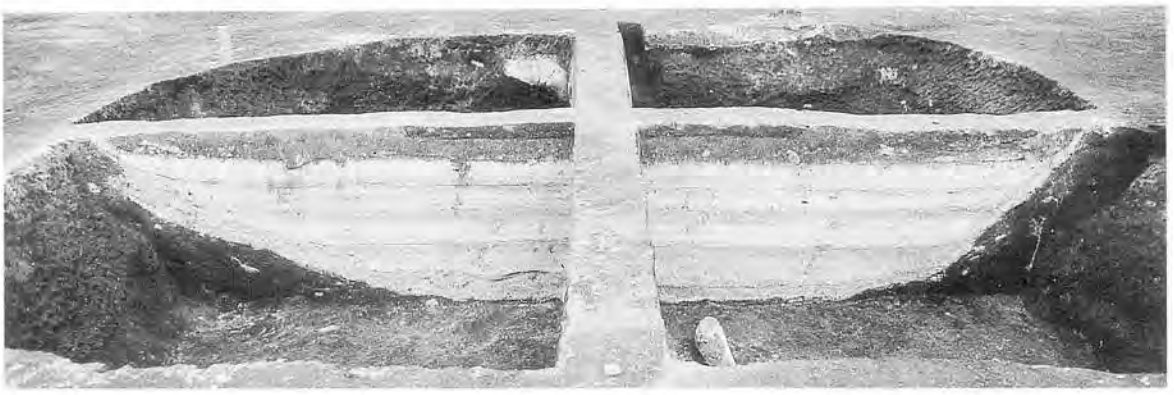
カマド断面

写真図版22　11号竪穴住居跡

全　景

全　景（外柱穴）

写真図版23　12号竪穴住居跡(1)



埋　土（西から）

カマド全景

煙道部断面

カマド断面

燃焼部断面

PP2全景

PP1全景

写真図版24　12号竪穴住居跡(2)

全　景

焼土塊検出状況・埋土

写真図版25　13号竪穴住居跡

炭化材検出状況

全　景

写真図版26　14号竪穴住居跡(1)

埋　土

カマド全景

燃焼部断面

煙出孔検出状況

煙出孔断面

外周溝埋土

外周溝（南から）

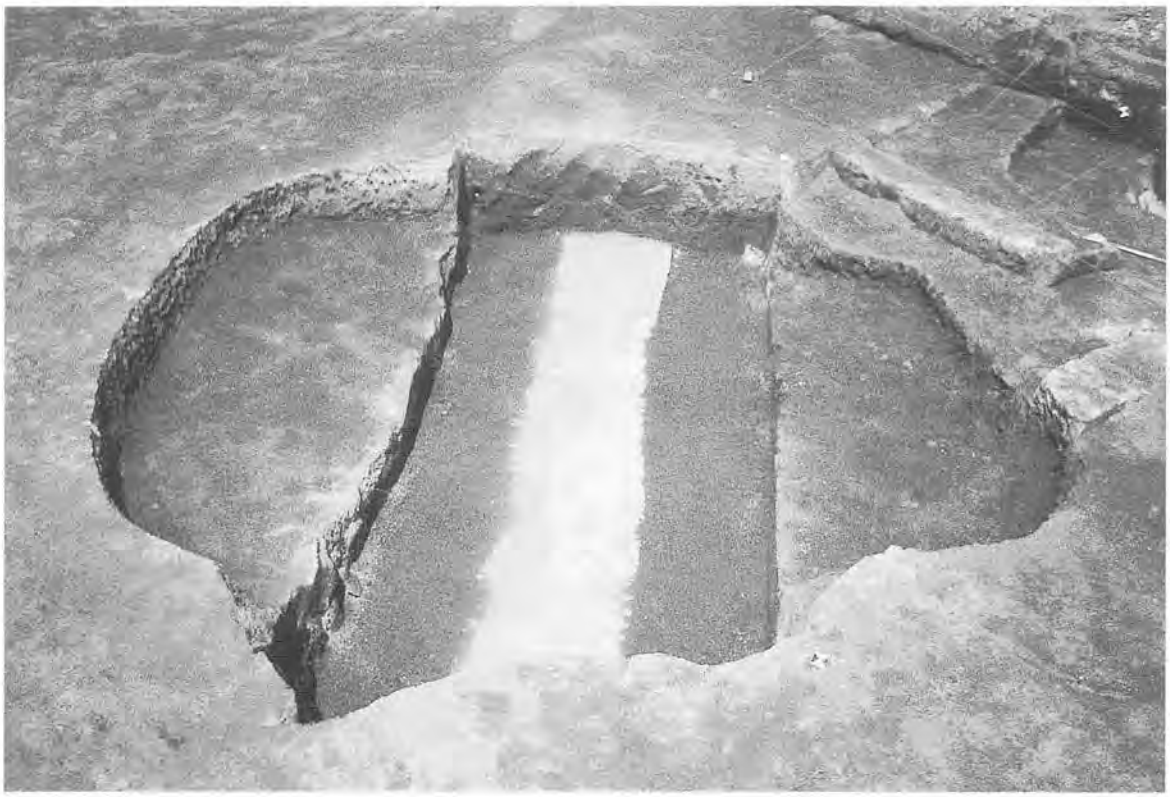
写真図版27　14号竪穴住居跡(2)

14号住居外周溝（北から）

14号住居壁際焼土塊・土器出土状況

14号住居１号土坑全景

14号住居１号土坑埋土

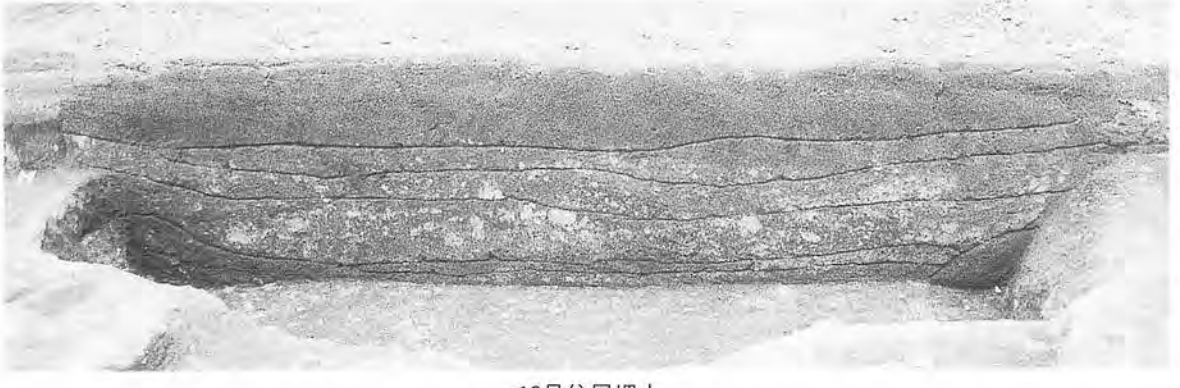


15号住居全景

写真図版28　14号竪穴住居跡(3)・15号竪穴住居跡(1)

15号住居埋土

16号住居全景



16号住居埋土

写真図版29　15号竪穴住居跡(2)・16号竪穴住居跡

全　景

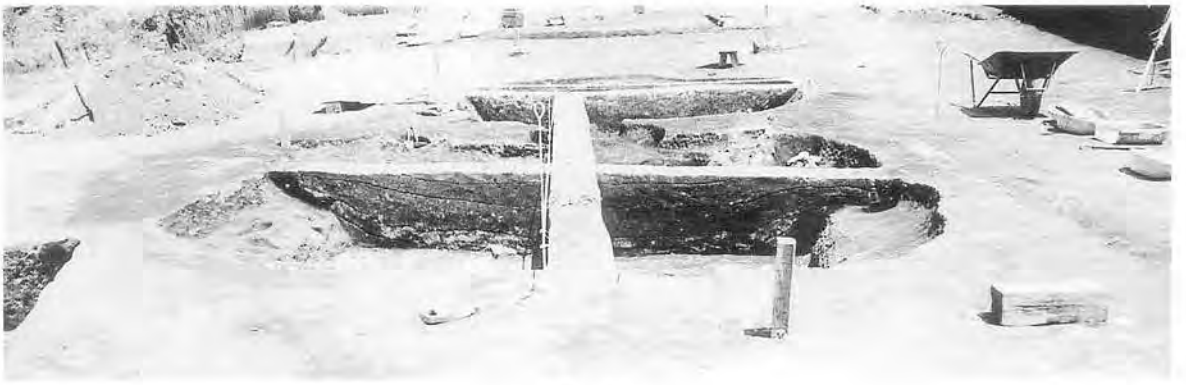
煙道部全景

煙道部断面

カマド断面

写真図版30　17号竪穴住居跡

全　景



埋　土

カマド断面

煙道部・燃焼部断面

写真図版31　18号竪穴住居跡

全　景

埋　土

カマド全景

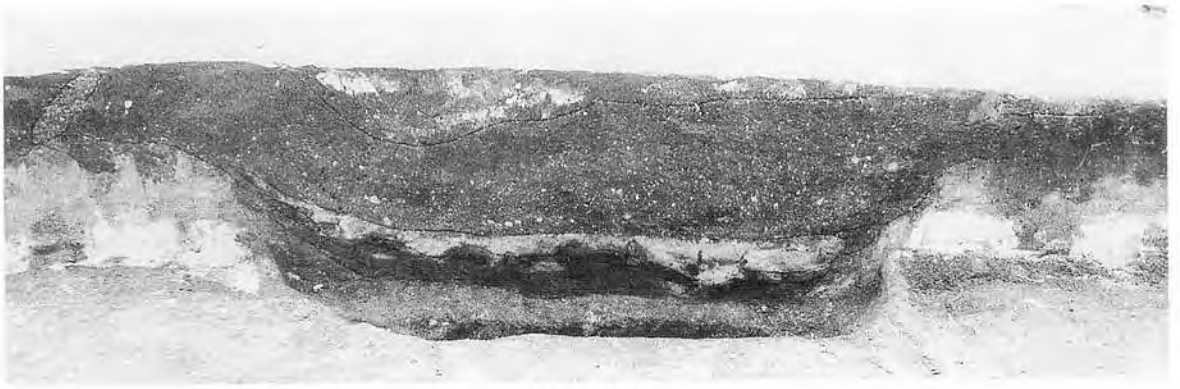
カマド断面

写真図版32　19号竪穴住居跡(1)

19号住居煙道部断面

20号住居焼失状況

20号住居全景



20号住居埋土

写真図版33　19号竪穴住居跡(2)・20号竪穴住居跡

18・19号住居全景

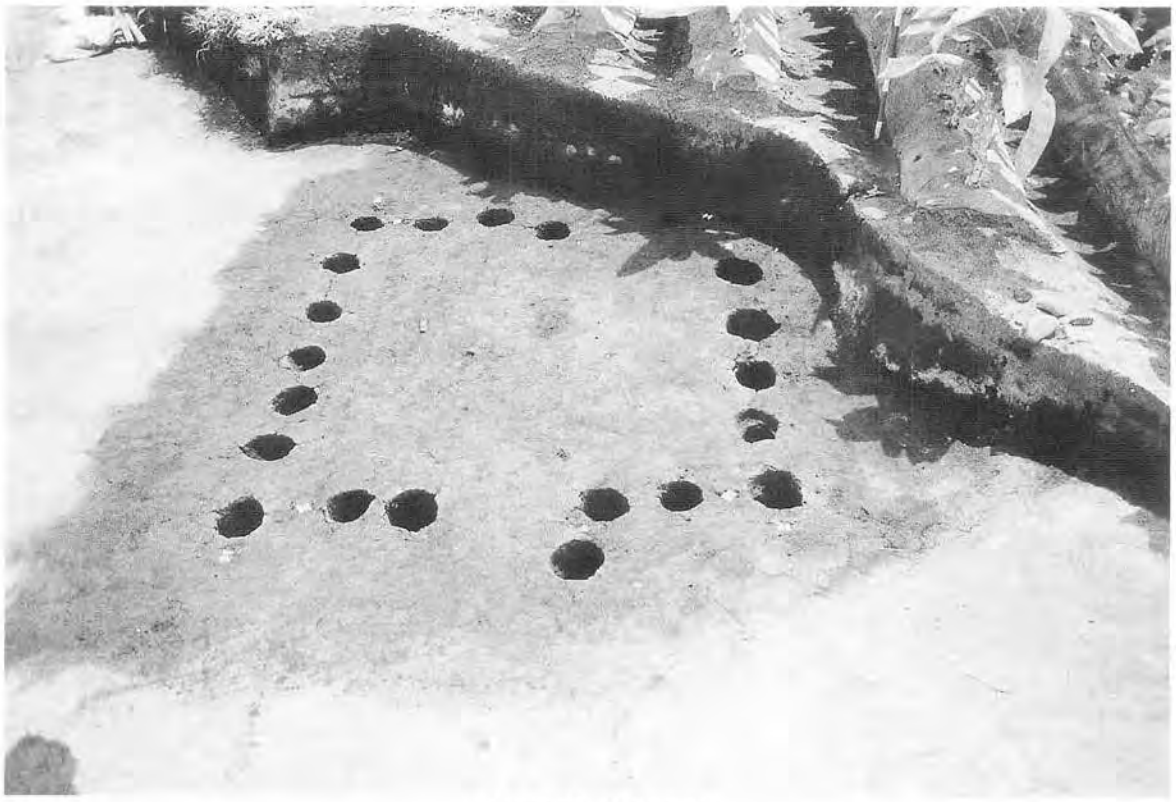
21号住居全景

写真図版34　18・19・21号竪穴住居跡

全　景

写真図版35　1号住居状遺構

1号掘立柱建物跡全景（北西から）



2号掘立柱建物跡全景

写真図版36　1・2号掘立柱建物跡

1号土坑全景

1号土坑埋土

2号土坑全景

2号土坑埋土

3号土坑全景

3号土坑埋土

4号土坑全景

4号土坑埋土

写真図版37　土坑(1)

4 号土坑焼土断面

5 号土坑全景

5 号土坑焼土断面

6 号土坑全景

6 号土坑焼土断面

7 号土坑全景

7 号土坑焼土断面

写真図版38　土坑(2)

8号土坑全景

8号土坑埋土

9号土坑全景

9号土坑埋土

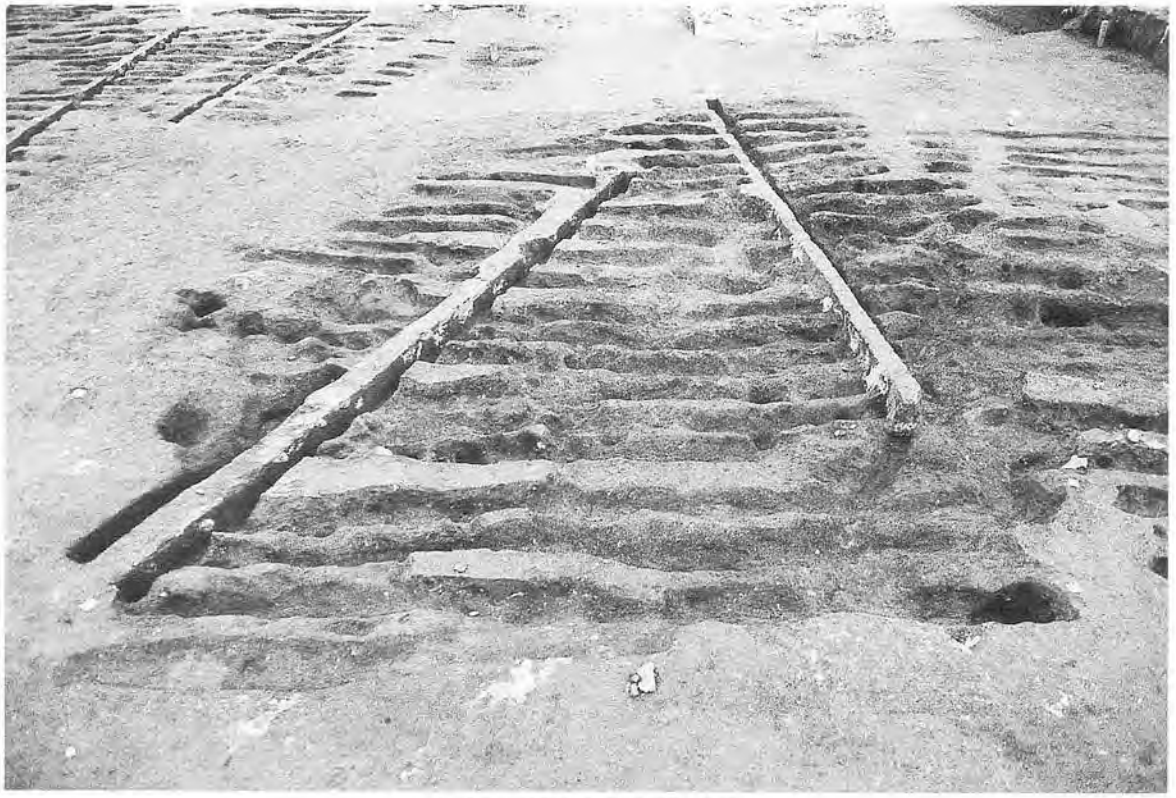
10号土坑全景

10号土坑埋土

11号土坑全景

写真図版39　土坑(3)

1～3号畠作耕地の復旧痕跡空中写真



2号畠作耕地の復旧痕跡近景

写真図版40　1～3号畠作耕地の復旧痕跡

2号復旧痕跡断面

2号復旧痕跡断面

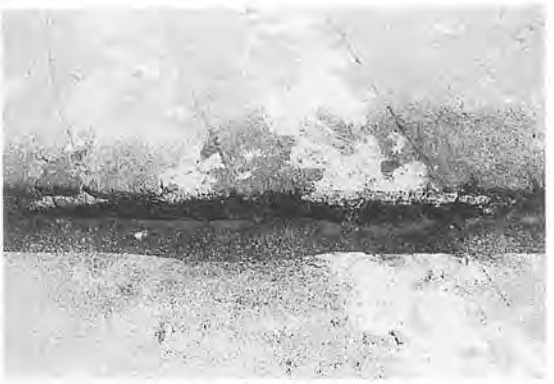
1号復旧痕跡断面

1号復旧痕跡断面

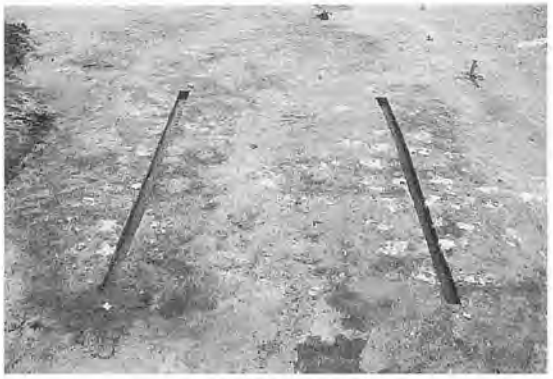
5号畠作耕地の復旧痕跡検出状況

写真図版41　1・2・5号畠作耕地の復旧痕跡

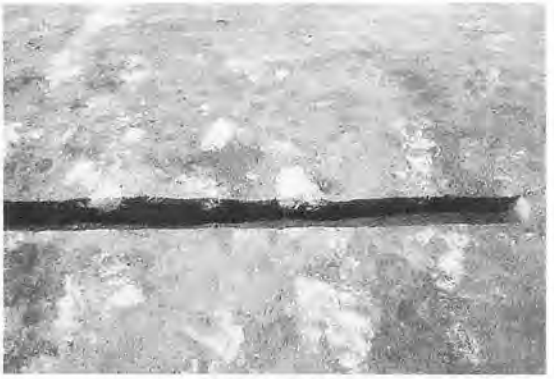
5 号復旧痕跡断面



5 号復旧痕跡断面



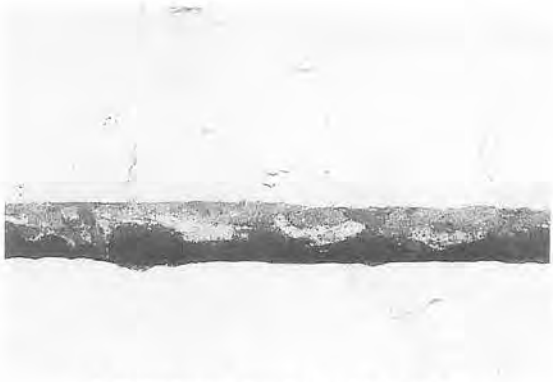
4 号復旧痕跡全景



4 号復旧痕跡断面

2 号畝間状遺構・6・7 号畠作耕地の復旧痕跡

写真図版42　2 号畝間状遺構・4 ～ 7 号畠作耕地の復旧痕跡



2 号畝間状遺構・6 号復旧痕跡断面

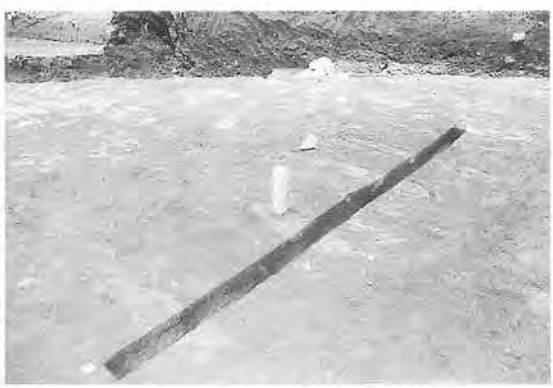
3 号畝間状遺構・7 号復旧痕跡検出状況

7 号復旧痕跡断面

1 号畝間状遺構全景

1 号畝間状遺構埋土

3 号畝間状遺構全景



3 号畝間状遺構埋土

第95図写真

写真図版43　1 ～ 3 号畝間状遺構・6 ・ 7 号畠作耕地の復旧痕跡

全　景（北から）

全　景（北から）

写真図版44　1号柱穴状ピット群

1号柱穴状ピット群全景（東から）

2号柱穴状ピット群全景

写真図版45　1・2号柱穴状ピット群

現地説明会

写真図版46　作 業 風 景

1号住居床面

13号住居床面

14号住居焼土塊

プラントオパール

写真図版47　出土遺物状況・プラントオパール

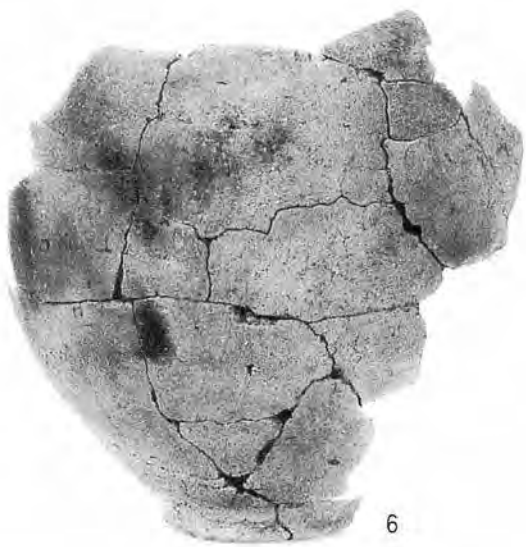
1

2

3

4

5


6

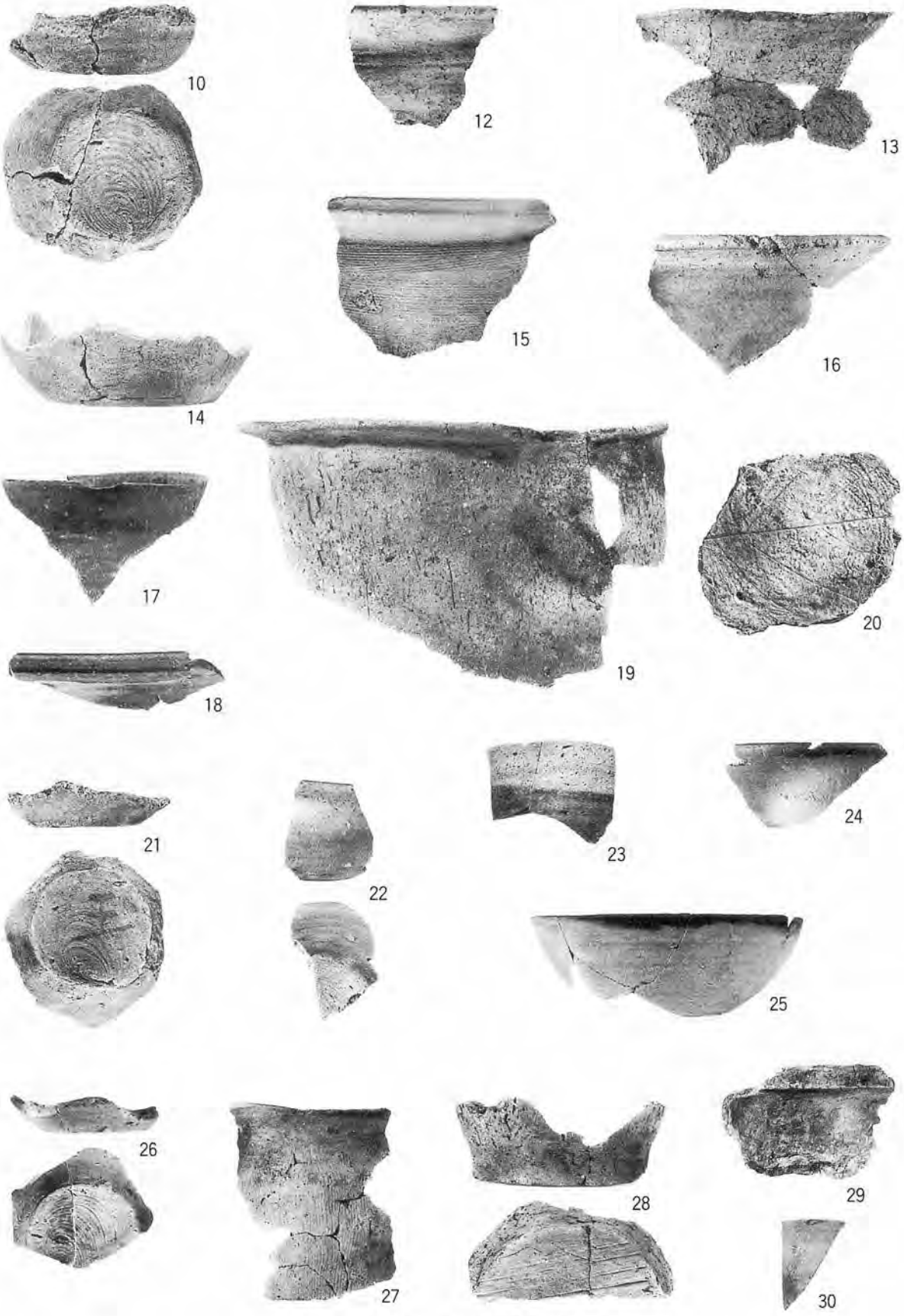
7

8

9

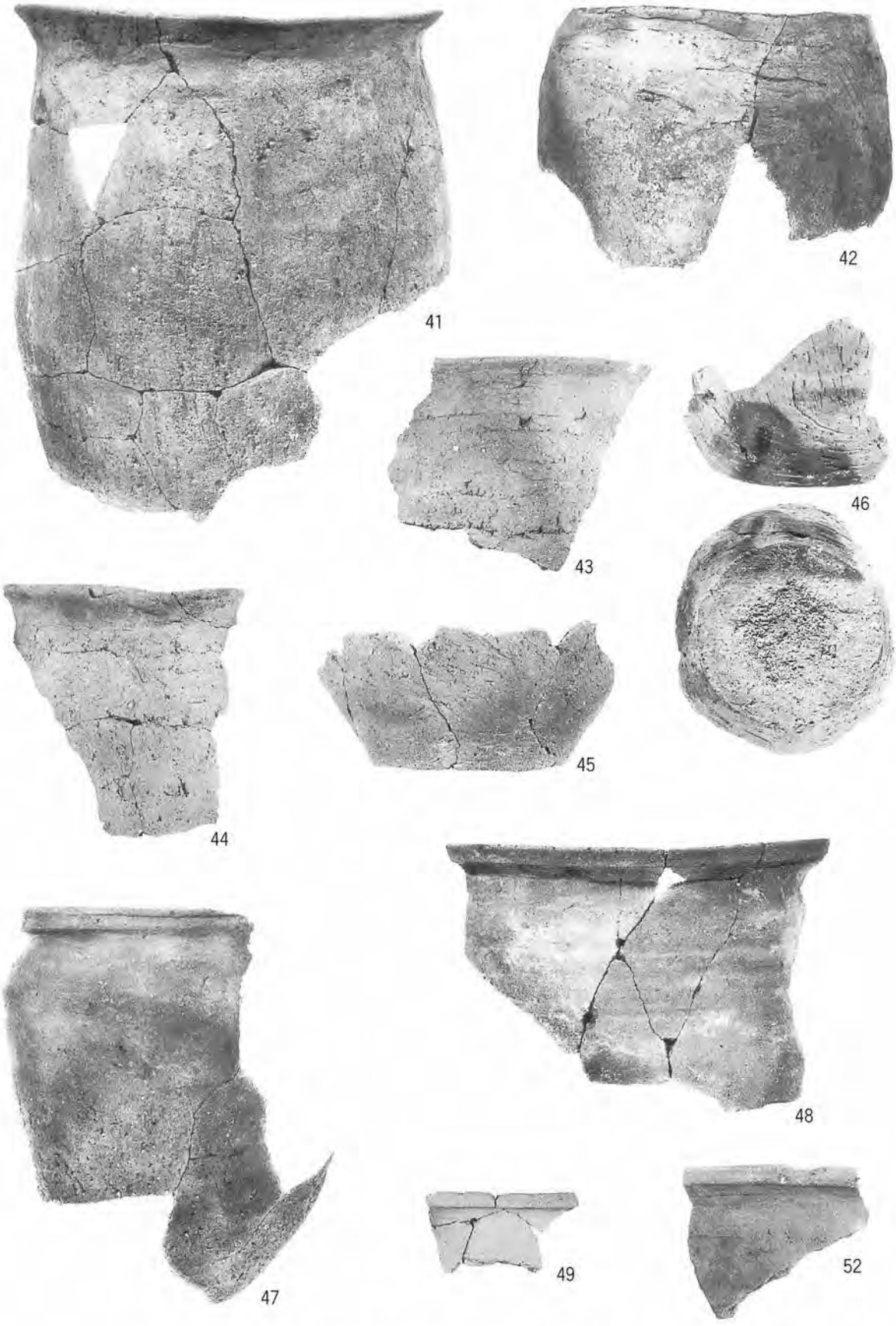
11

写真図版48　遺構内出土遺物(1)

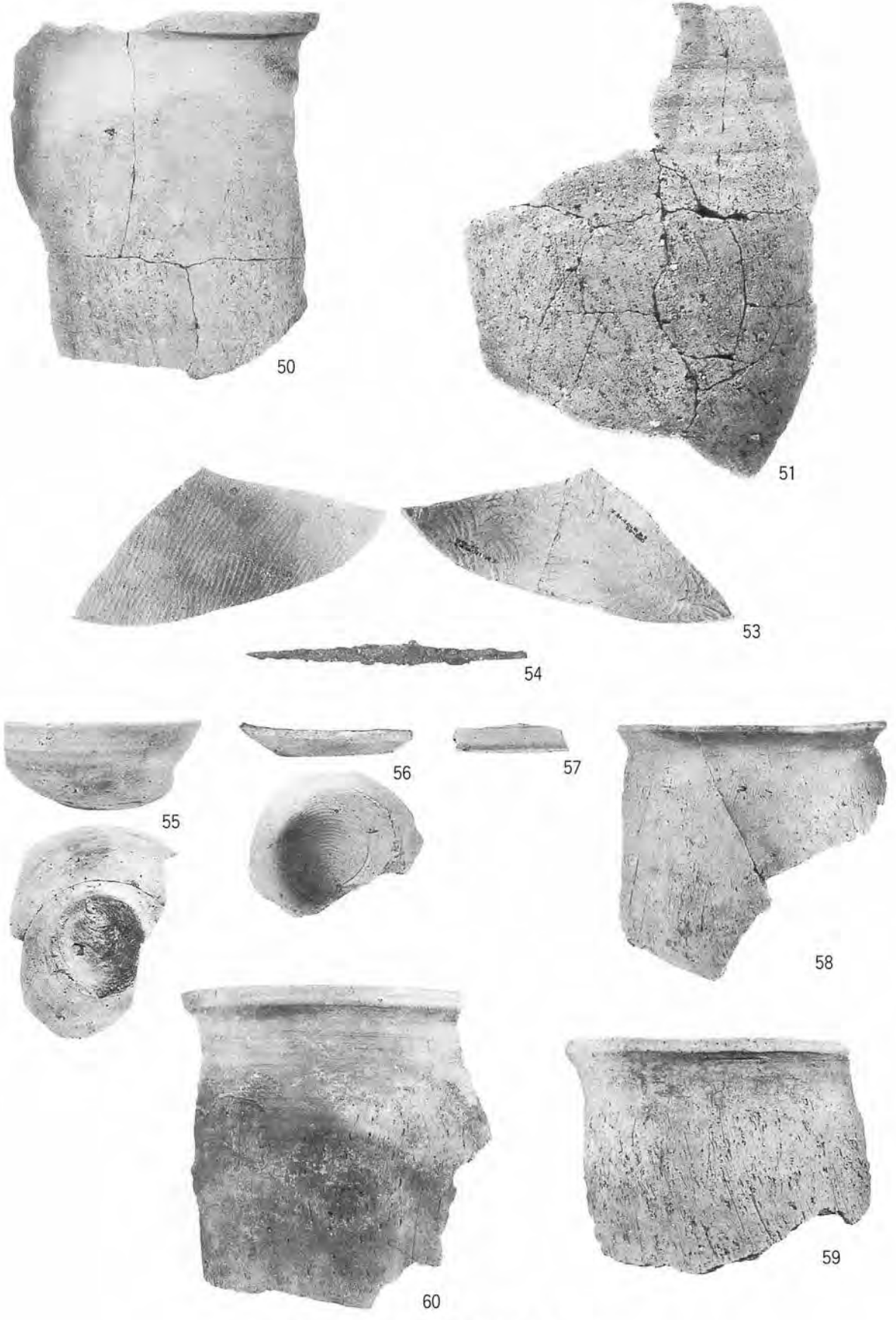


写真図版49　遺構内出土遺物(2)

写真図版50　遺構内出土遺物(3)

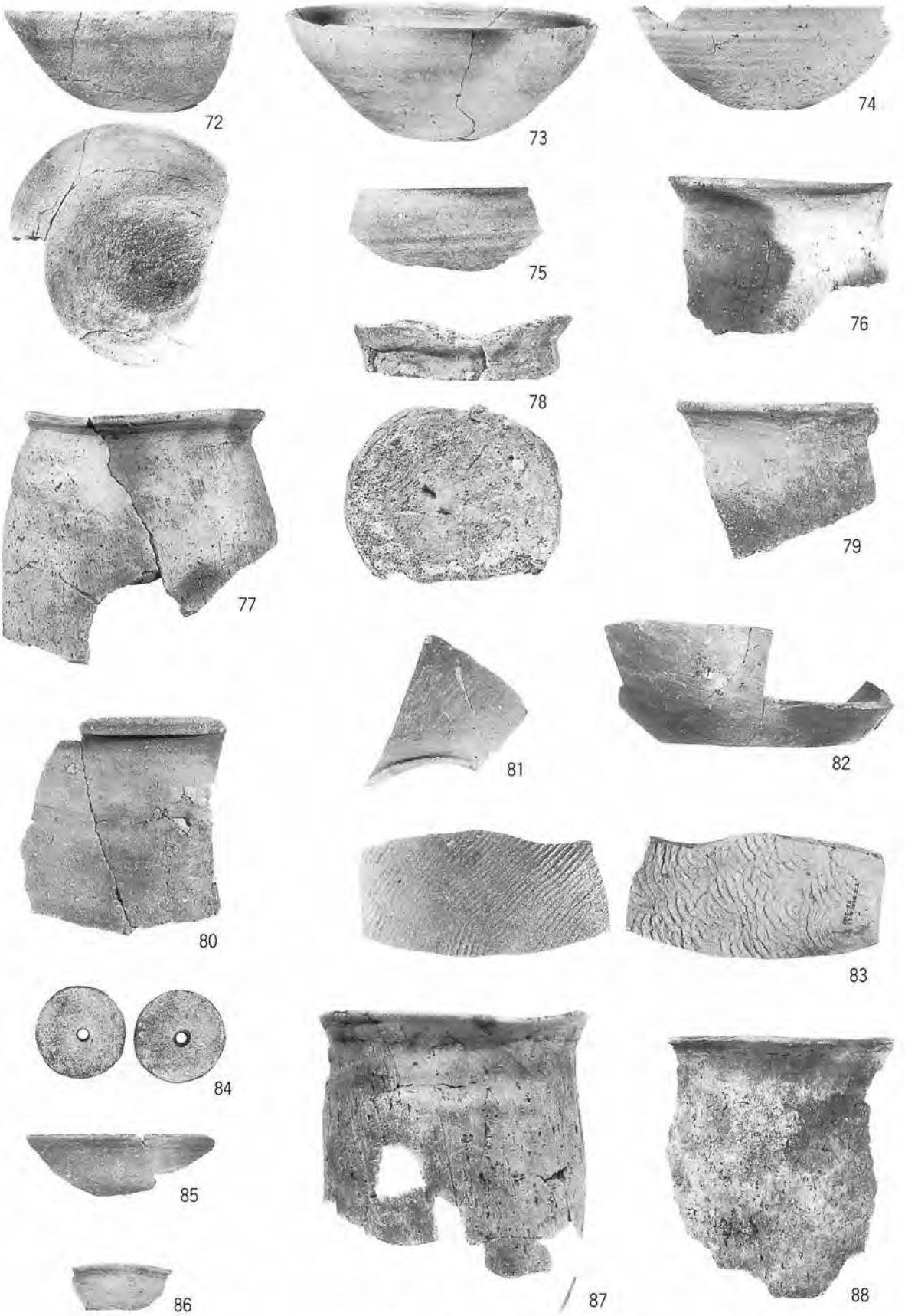


写真図版51　遺構内出土遺物(4)

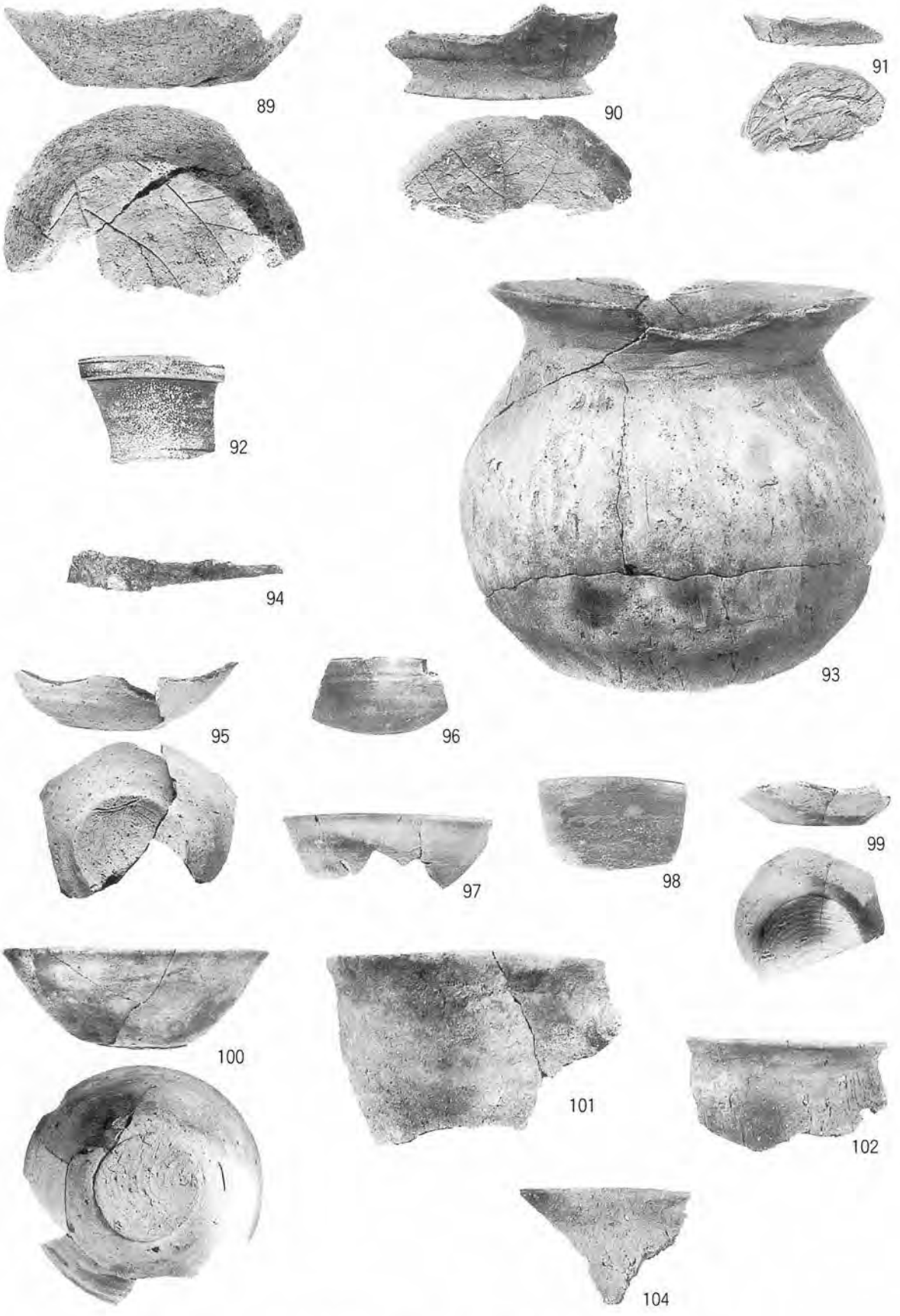


写真図版52　遺構内出土遺物(5)

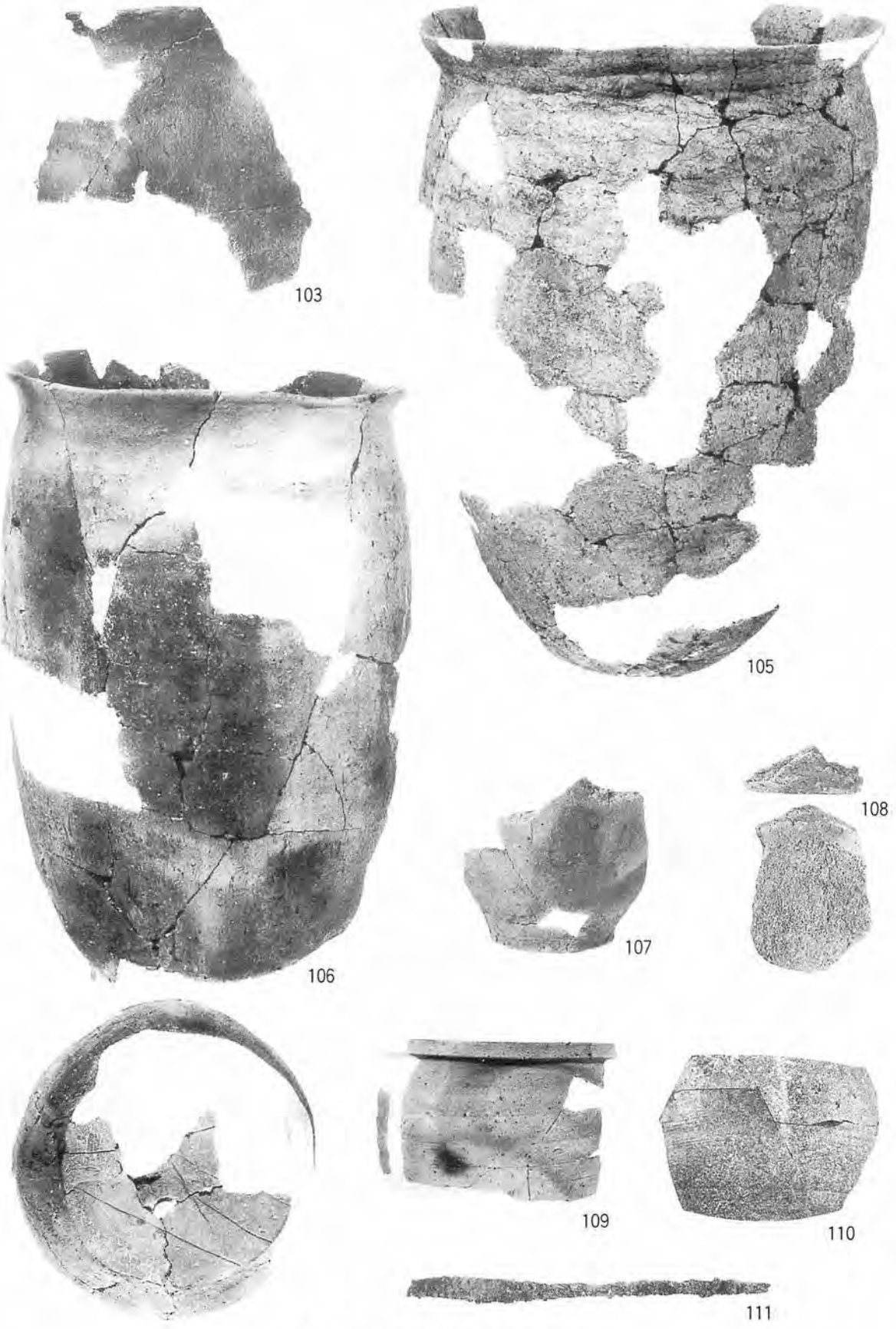
写真図版53　遺構内出土遺物(6)



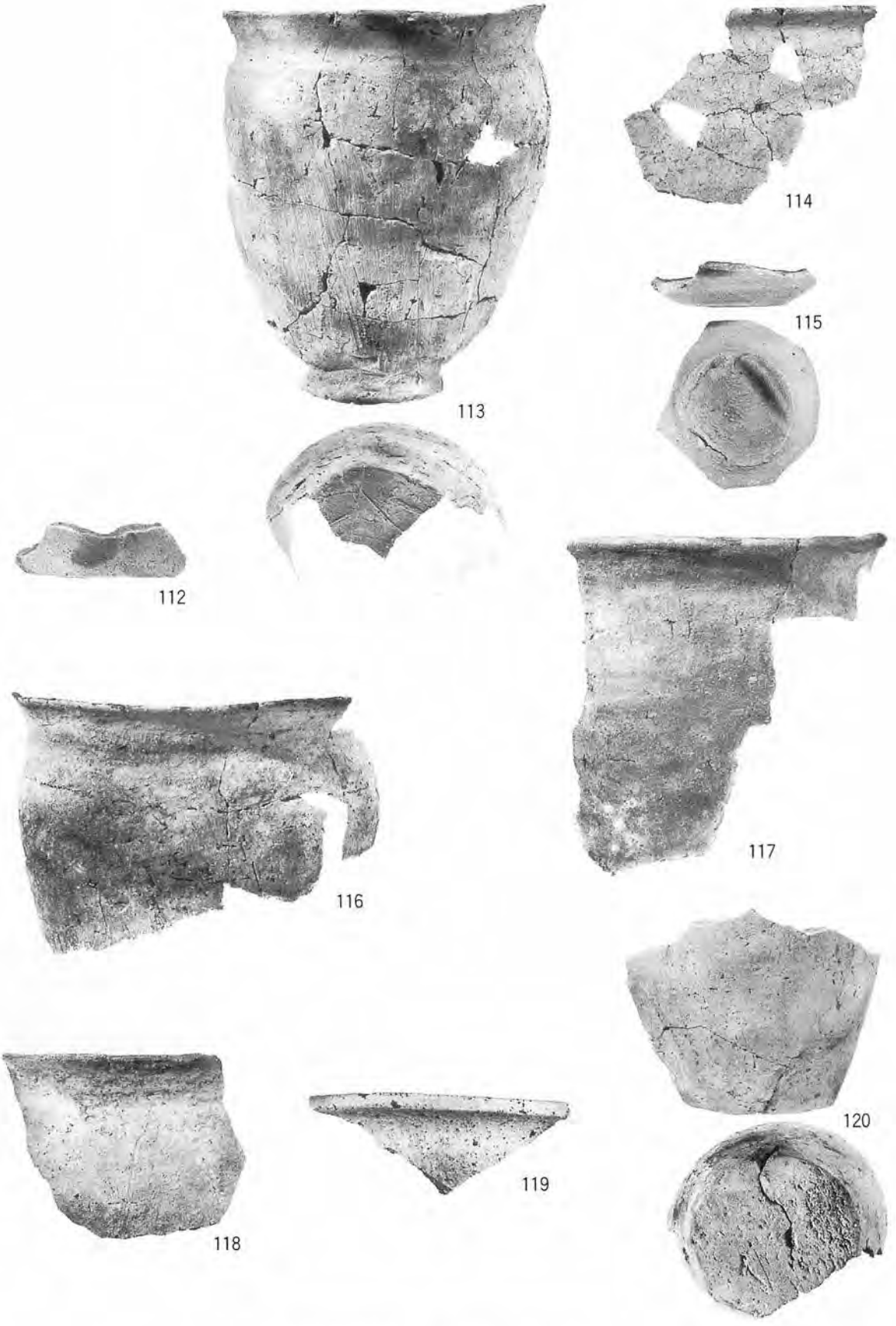
写真図版54　遺構内出土遺物(7)



写真図版55　遺構内出土遺物(8)



写真図版56　遺構内出土遺物(9)



写真図版57　遺構内出土遺物(10)

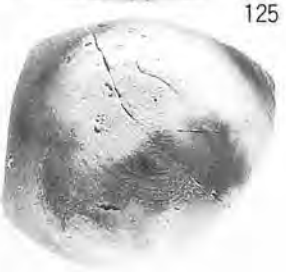
121

122

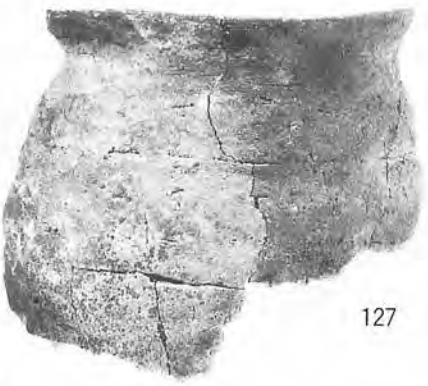
123

124

125



126


127

128

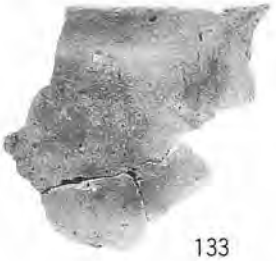
129

写真図版58　遺構内出土遺物(11)

130

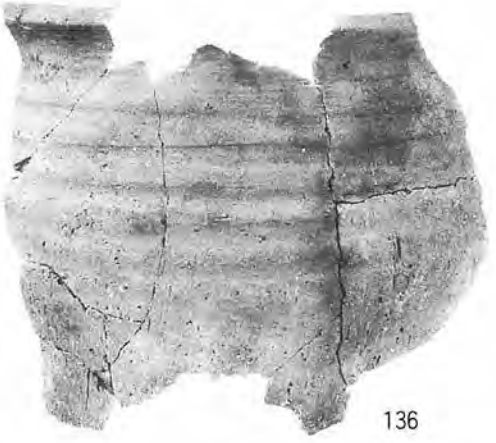
131

132


133

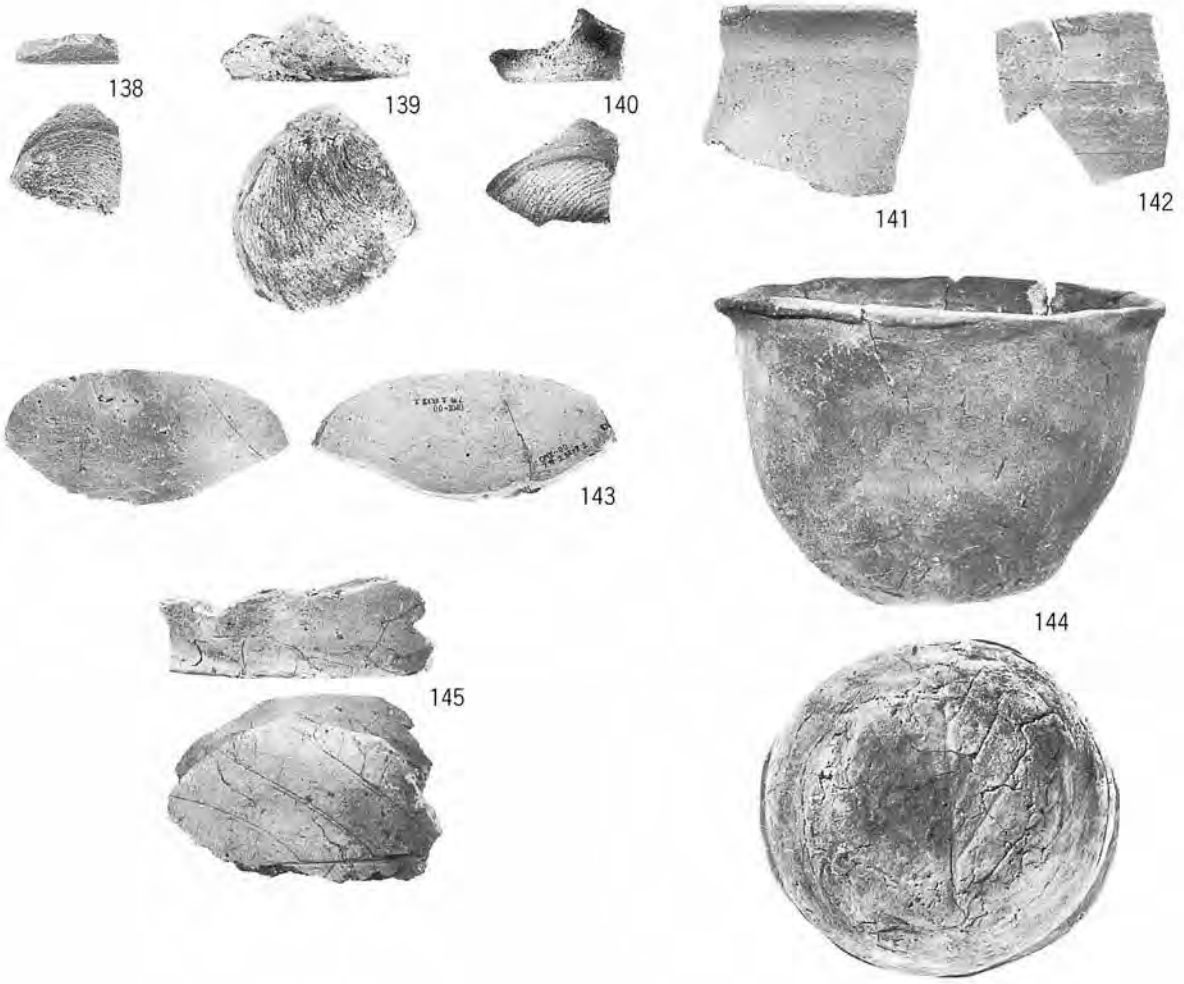
134

135

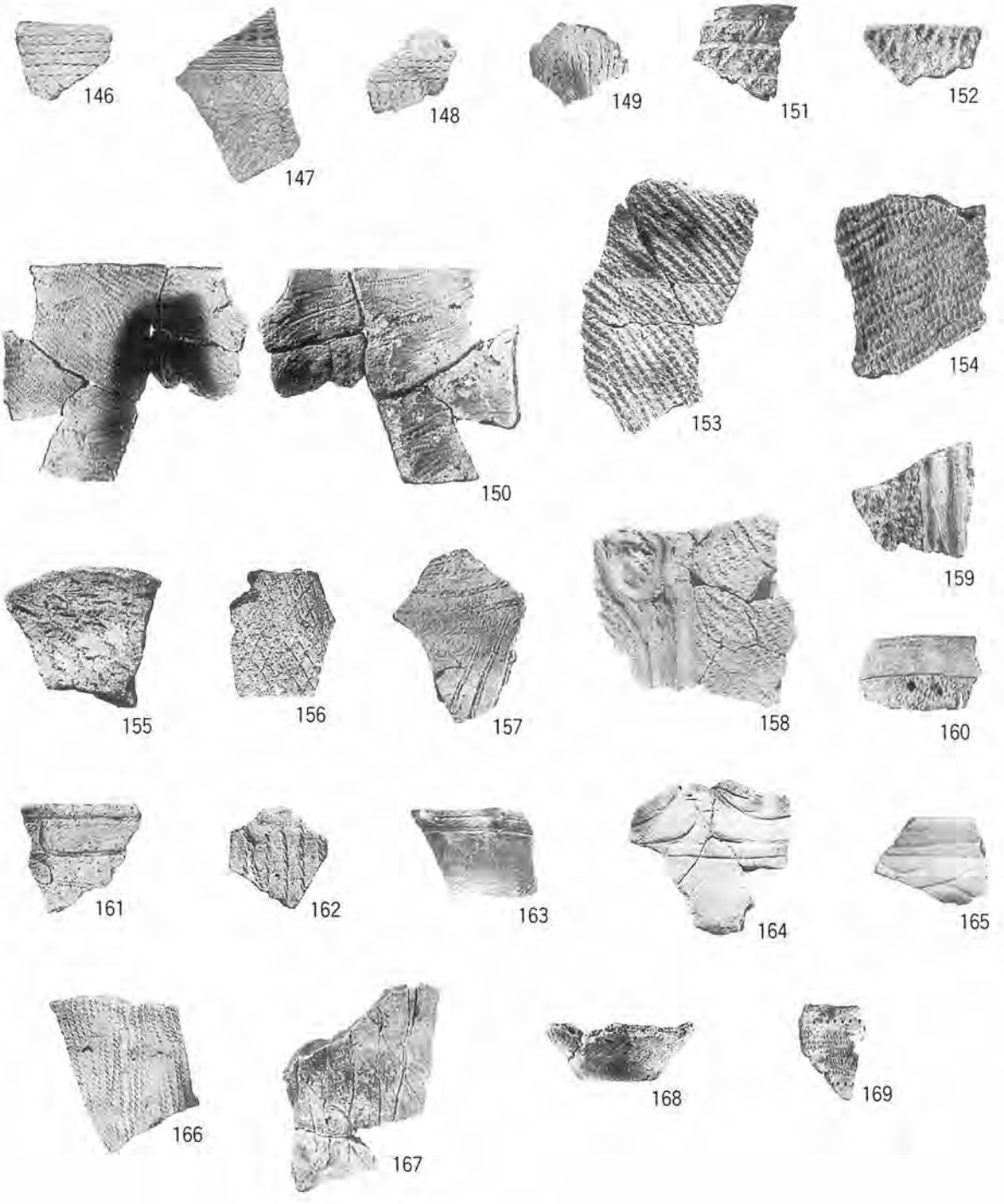

136

137

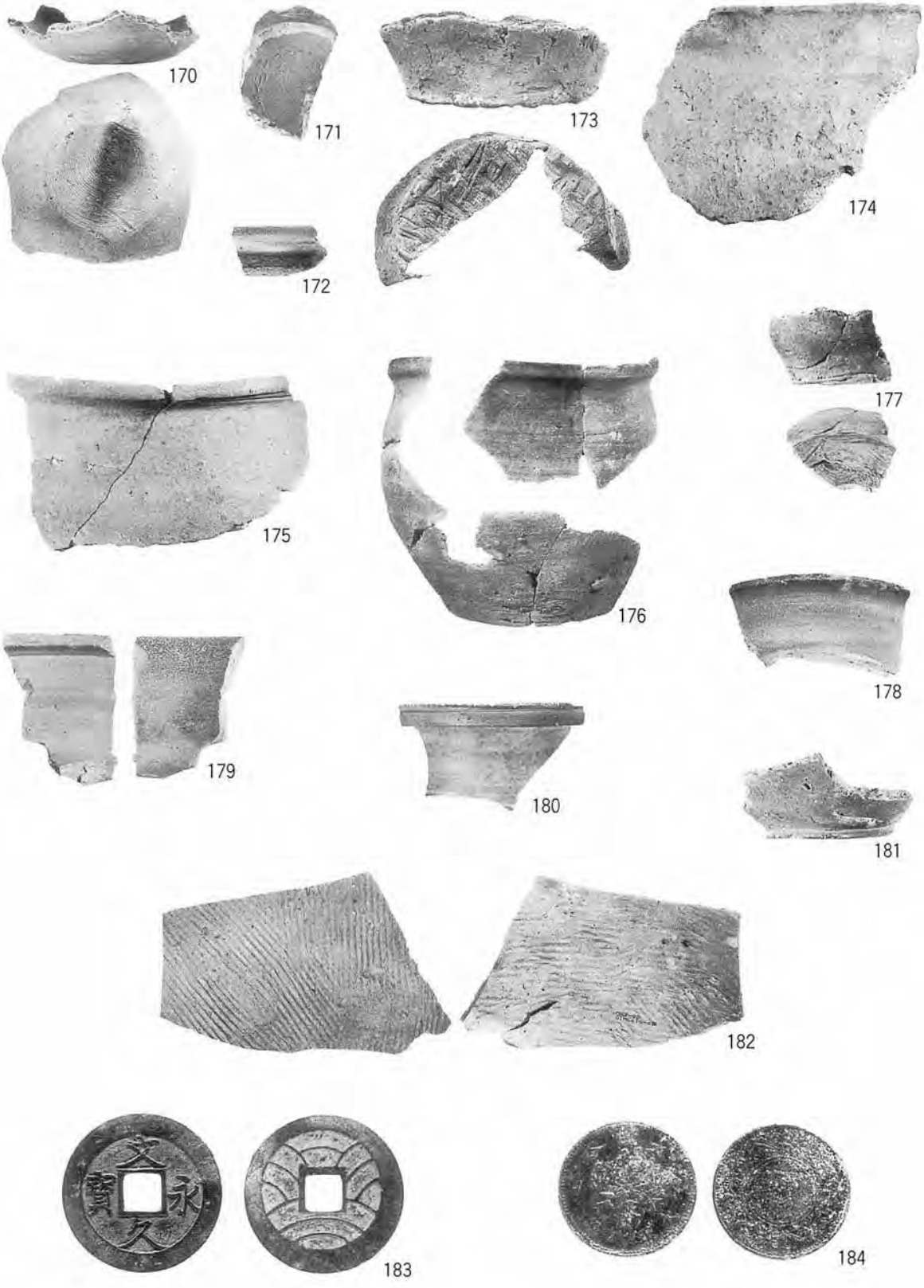
写真図版59　遺構内出土遺物(12)



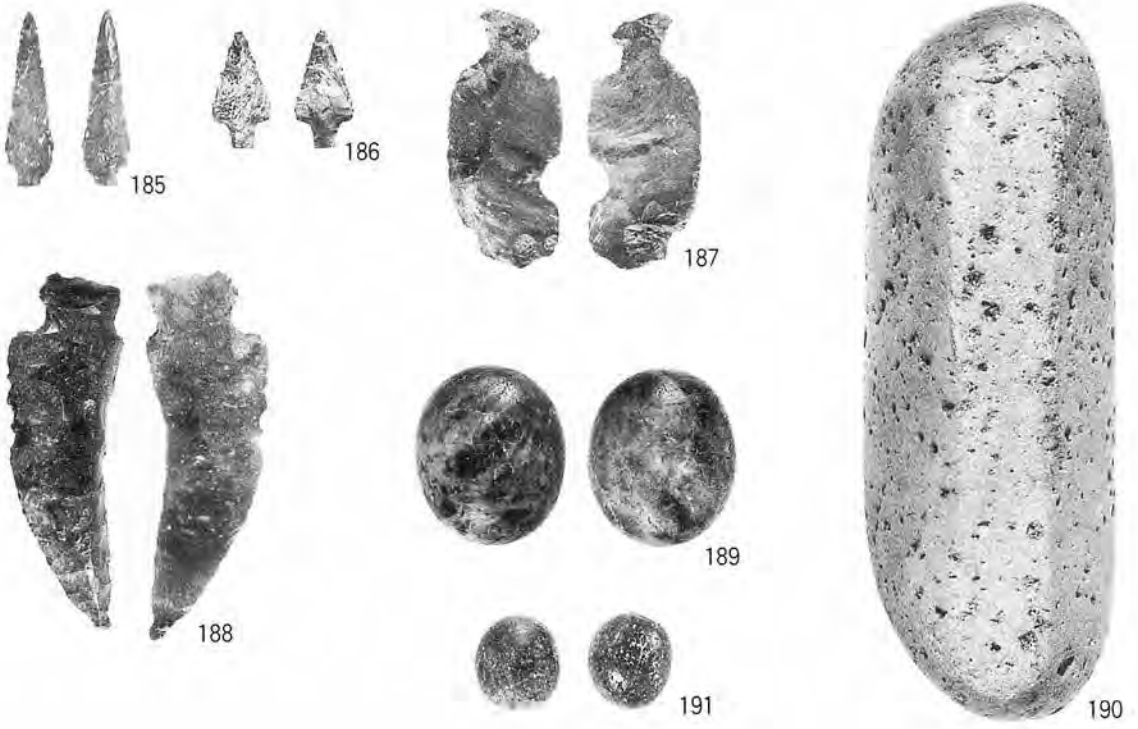
写真図版60　遺構内出土遺物(13)



写真図版61　遺構外出土遺物(1)



写真図版62　遺構外出土遺物(2)



写真図版63　石　器

報告書抄録

ふりがな	おおむかいにいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	大向Ⅱ遺跡発掘調査報告書
副書名	主要地方道二戸安代線建設に伴う緊急発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第378集
編著者名	菊池貴広
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　　TEL　019（638）9001
発行年月日	西暦　　年　月　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おおむかいに 大向Ⅱ遺跡	にのへしたどり 二戸市似鳥 あざたなかつぼ 字田中坪13－1	03213	JF18-1149	40度 13分 43秒	141度 13分 58秒	1999. 6.1～8.31 2000 4.12～6.21	4,030㎡	「主要地方道二戸安代線建設」

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大向Ⅱ遺跡	集落跡 農耕地	縄文時代 奈良時代 平安時代 時代時期不明	土坑　1基 竪穴住居跡　2棟 竪穴住居跡　19棟 掘立柱建物跡　2棟 土坑　10基 畝間状遺構及び畠作耕地の復旧痕跡　約450㎡ 柱穴状ピット　150基 掘立柱建物跡　1棟	縄文土器（早～晩期） 続縄文土器 土師器・須恵器 鉄製品（刀子・ヤリカンナ等） 石器（石鏃・石匙・紡錘車等） 大コンテナ7箱	外周溝及び棚状の張りだし部を持つ竪穴住居跡及び焼失住居跡。竪穴住居跡の埋土に含まれる十和田a降下火山灰堆積状況の中に一次堆積（降下堆積）が認められる住居が存在する。 畠作耕地を十和田a降下火山灰による災害後に復旧した痕跡が確認された。

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所　長　伊藤民也

副所長　高橋正儀

〔管理課〕

管理課長	韮沢正吾
管理課長補佐	山崎善光
〃	山岸直美
主査	立花多加志
嘱託	高橋照雄
〃	佐々木光重
〃	加藤美代子
〃	湯沢邦子

〔調査第一課〕

調査第一課長	佐々木勝
課長補佐	佐々木清文
〃	高橋義介
文化財専門員	小山内透
文化財調査員	田中迪
〃	飯森秀文
〃	赤石登
〃	吉田充
〃	亀大二郎
〃	小原眞一
〃	佐々木信一
〃	小笠原健一郎
〃	金野進
〃	小松則也
〃	岩渕計
〃	鳥居達人
〃	金子昭彦
〃	羽柴直人
〃	千葉正彦
〃	長村克稔
〃	星幸文
〃	佐藤あき子
〃	菊池貴広
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	村木敬
〃	北村忠昭
〃	高瀬克範
〃	丸山浩治
〃	島原弘征
〃	中村絵美
期限付調査員	小林弘卓
〃	江藤敦
〃	菊池賢
〃	井上信介
〃	川又晋
〃	吉田真由美
〃	坂部恵造
〃	木村ひかり

〔調査第二課〕

調査第二課長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
文化財専門員	金子佐知子
文化財調査員	阿部眞澄
〃	飯坂一重
〃	阿部徹
〃	濱田宏
〃	安藤由紀夫
〃	高木晃
〃	佐藤淳一
〃	星雅之
〃	菅原靖男
〃	半澤武彦
〃	杉沢昭太郎
〃	溜浩二郎
〃	中村直美
〃	西澤正晴
〃	八木勝枝
〃	(阿部勝則)
期限付調査員	吉川徹
〃	北田勲
〃	吉田里和
〃	原美津子
〃	齋藤麻紀子
〃	駒木野智寛

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第387集

大向Ⅱ遺跡発掘調査報告報

主要地方道二戸安代線建設に伴う緊急発掘調査

印　刷　　平成14年１月23日
発　行　　平成14年１月30日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話　(019)638-9001・9002
FAX　(019)638-8563

印　刷　株式会社富士屋印刷所
〒020-0841　盛岡市羽場13－30－10
電話　(019)637-6391

©(財)岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター　2002